
夢現に舞う

雪原歌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢現に舞う

【Nコード】

N7364Q

【作者名】

雪原歌乃

【あらすじ】

思わぬ偶然から鬼王に見初められてしまった、少女・美咲。だがそれは、遙か過去から定められていた必然だった。断ち切る事は不可能とされる呪いの連鎖、美咲の周囲で渦巻く陰謀、そして、美青年能力者・南條との出会い……。それぞれに課せられた宿命は……？（PG12指定）

序章（前書き）

『夢現に舞う』は現代日本を舞台にした和風幻想です。

恋愛要素は濃い目で、異性同士の抱擁とキス、場合によっては性行為を仄めかすシーンがございます為、PG12指定とさせて頂いております。

また、戦闘シーンもありますので、流血、暴力等の残虐な描写も所々に出て参ります。

苦手だと思われる方は、御覧頂かない事を御覧頂かない事を強くお勧め致します。

では、大丈夫な方は是非とも御覧下さいませ。

序章

まるで、取り残されたように立ち続ける桜の木。

その姿はどことなく淋しさを感じさせるが、それでも、花の時期には生き続けている証として、薄紅の花弁を満開にさせる。

ある日の昼下がり、桜の木の前に幼い少女が現れた。

年の頃は五歳ほどであろうか。

艶々と輝く癖のない漆黒の髪は肩より長めで、幼子らしい丸みのある顔の中には、くりくりした茶味を帯びた双眸と小さな鼻、桜の花弁と同色の唇が添えられている。

少女——美咲は好奇心旺盛な瞳を一杯に開きながら、幹の周辺をゆつくりと歩き回っていたが、ふと、ある場所でピタリと足を止めた。

「——なんだろう……？」

美咲は怪訝に思いながら、幹の一点に視線を集中させる。

そこには、赤茶けた小さな紙がひっそりと貼られている。

紙の中には、一面を埋め尽くすように黒い蛇のような物がびつしりと書かれていた。

美咲は益々困惑した。

この紙は、どうして桜の木に貼られているのであろう。そして何より、紙の中に書かれているのは何なのか——

暫しの間、美咲は考え込むも、幼過ぎる彼女には、黒蛇の意味はおろか、紙が貼ってある理由すら分かるはずがない。

「おじいちゃんとおばあちゃんなら、わかるかなあ……？」

美咲は独りごちると、踵を返してその場を去ろうとした。

「……デ……」

空耳であろうか。

どこからともなく声が聴こえてきたような気がした。

美咲は再び振り返るが、そこには先ほどと変わらず、桜の木から花弁をはらはらと舞い躍らせているだけである。

美咲は小首を傾げながら、気のせいだろうと思おうとしたのだが。

『……オイデ……』

今度ははつきりと聴こえた。

美咲はコクリと息を呑み、ゆっくりとした足取りで桜に近付く。はつきりとした確信はない。それでも、声は桜の中から聴こえてきているのだと思った。

「サクラさん、あなたがあたしをよんだの？」

桜に向かい、美咲は訊ねた。

答えは返ってこない。その代わり、幹の向こう側から呻きに近い声が聴こえる。

『……ワタシヲ……ココカラ……カイホウ……』

言っている意味が理解出来ず、美咲は困惑した。

「ねえ、どうしたいの？」

美咲は重ねて訊ねるも、桜はただ、同じ言葉を繰り返すのみであった。

（でも、すぐくるしそう……）

そう思いながら、何気なく、桜の幹に貼られている紙を見つめる。

（……アノカタヲ……トキハナテ……）

今度は桜からではなく、美咲の中から別の声が響いてくる。

美咲の全身がカタカタと震え出した。

絶対にカイホウはいけない。頭では警鐘が鳴り続けているのに、その意識とは裏腹に手が紙へと伸びている。

「や……、やだよお……」

美咲は必死で抵抗を試みるも、別の力が働いているのか、全く歯が立たない。

美咲の手は、とうとう紙を剥がしてしまっていた。

剥がれた紙は手を離れ、薄紅の花弁と一緒に風に乘って地上へ落ちてゆく。

瞬きをする間もないほどであったと思う。しかし、美咲にはそれが、スローモーションの映像を見ているかのように、ゆったりとした物に映っていた。

紙を剥がしてからは、一気に声が止んだ。

辺りの光景も、特に変わり映えはない。

やはり、ただの思い過ぎだったのかも知れない。

美咲はホッと胸を撫で下ろすと、地面に落ちた紙を手に取り、それをスカートのポケットに無造作に入れて、今度こそその場から離れた。

その日の夜、美咲は夕飯と風呂を済ませると、いつもと同じく、九時には布団に就いた。

美咲は現在、両親の仕事の都合で親元を離れ、祖父母の住む大きな家に身を寄せている。

両親と離れ離れの暮らしに不安がないわけではないが、自分を可愛がってくれる優しい祖父母の存在が、幼い美咲の心を癒してくれた。

どれほどの時間が経過したであろうか。

気が付くと、美咲は昼間に訪れた桜の木の前に立っていた。

辺りはしんと静まり返り、月も星も出ていない夜空の下は、暗黒の闇と化している。

いつの間にここへ来たのか、美咲には全く身に覚えがない。しかも、自分の格好を改めて見てみると、就寝時にいつも着ているお気に入りのパジャマに、足は裸足のままであった。

（はやく、かえらないと……。おじいちゃんとおばあちゃんが、しんぱいしちゃう……）

美咲はそう思ったが、足が竦んで動かない。

背中を流れる汗を感じながら桜の木を見つめていると、幹の中心から白い手が生えてきた。

「ひっ……！」

悲鳴にならない悲鳴を上げ、美咲は身体をカタカタと震わせた。

（こわいよ……！ おじいちゃん……、おばあちゃん……、おとうさん……、おかあさん……！ たすけて……！）

心の中で祈るような気持ちで、必死に大好きな者に呼びかける。

そうしている間にも、手はするすると伸び、全身が徐々に幹に浮き出たかと思うと、とうとうそれは、美咲の前へ姿を現した。

（——ヒト……？）

美咲は息を呑んだ。

そこにいたのは、父親と同年代の男であった。

腰まで流れる銀色の髪に、満月を彷彿させる金の相貌、肌は透き通るように白く、全体的にほっそりとした体型をしている。

傍から見たら綺麗な男だ。しかし、あまりに人間離れた美しさは、かえって美咲の恐怖心を煽ってしまった。

「何故、そんなに怯える？」

男は言う、その白い手で美咲に触れた。

朝晩はまだ冷えるとはいえ、真冬ほどの極寒ではないのだが、男の手は凍えるほど冷たい。

（いや……）

美咲は逃れようとするも、やはり、先ほど同様、足は全く言う事を利かない。

そんな美咲を、男は少し淋しげに見つめる。

「——やはり、お前は私を忘れてしまっているのだな……。私は、眠りに就いている間も、片時もお前を忘れた事などないのに……」

（なにを……、いつてるの……？）

頬に男の冷たさを感じながら、美咲は考える。

言っている事に全ては理解出来ないが、それでも、青年の言葉に何かしら意味があるであろう事は、美咲も何となく分かった。

（このヒトは、あたしをしってるんだ。でも、あたしは……）

美咲は男を見上げると、男は小さく笑みながら言った。

「お前はまだ、私を想い出せずにいるようだ。だが、いずれ、私の事を想い出すであろう。——そう、数え年で十七になる頃に。今の私も完全ではない。お前が復活を遂げた時こそ、私は更なる靈力を手に入れられるのだよ。」

それまでは、静かにお前を見ていよう。ただ、お前を横取りしようとする者がいるのであれば……、私は、そいつを消す」

最後の『消す』という言葉を口にした瞬間、男の瞳がギラリと光った。

美咲の全身が凍り付いた。同時に、言いようのない不安が美咲を襲う。

（こわい……！ こわいよ……！）

幼い少女は、恐怖に堪え切れずにその場にしゃがみ込んだ。

目を閉じ、耳を塞ぎ、目の前の 世界 から必死で逃れようとする。

悪い夢なら、早く醒めて欲しい——

そう、切実に願いながら。

「……き、美咲！」

夢と現の境界線を彷徨っている中で、自分の名を必死で呼ぶ声が聴こえてきた。

未だ閉じたままの瞼には、微かではあるが先ほどとは対照的な光を感じる。

美咲はゆつくりと瞳を開いた。

「大丈夫かい？ だいぶうなされていたようだけど……」

仰向けの美咲を、祖父母が心配そうに窺っている。

「——おじいちゃん……、おばあちゃん……」

大好きな祖父母の顔を目にした途端、美咲は飛び起きて祖母に抱き付くと、声を上げて泣き出した。

「よしよし。怖い夢を見てしまったんだねえ」

わんわんと泣きじゃくる孫を、祖母は優しく抱き、祖父は皺だら

けの手で髪を撫でた。

あの男とは違う、生きている人間の仄かな温もり。それを感じられるだけで、美咲の恐怖心は少しずつ消えていった。そして、祖父母は夢について深く追求してこなかった。

幼子にこれ以上、怖い事を想い出させたくないという、二人の精一杯の気遣いだったのであろう。

あの日を境に、美咲は男の夢を何度も見るようになっていた。

銀の髪の怖い男と、自分の中から聴こえてくる不気味な声。

あの男が何を望んでいるのか、そして、声は自分に何を伝えようとしているのか、美咲には全く分からない。

ただ、声とは別のもう一人の自分は、それに応えてはならないと訴え続けている。

なら、眠らなければ良い。寝なければ、夢を見る事もなくなるのだから。

幼い美咲はそう思い立ったが、布団に入ると、嫌でも眠りに堕ちてしまう。そして、またしても夢を見てしまう。

美咲の体力は、極限に達していた。

眠っていなくても、夢を見ずとも、美咲の脳裏には、あの男と声がかびり付いた錆のように剥がれない。

いつまで堪え続けなければならないのか。

美咲は、部屋の片隅で縮こまりながら過ごす日々を繰り返していた。

二週間後、美咲の両親である藍田貴あいだたかおと理美さとしが祖母の家を訪れて来た。

「おとうさん！ おかあさん！」

美咲は二人の姿を見るなり、嬉しそうに声を張り上げて駆け寄った。

両親との再会は、実に半年振り。

美咲の喜びもひとしおである。

「元気だったか？」

貴雄は、無邪気にピョンピョン飛び跳ねている美咲の頭を撫でる。

「うんっ！ あたし、ちゃんとよいこにしていたよ！」

「そうか。偉いぞ！」

貴雄は美咲にニッコリと微笑むと、今度は祖父——貴雄にとって
は父親——に向き直り、笑顔を消した。

「父さん、例の件ですが……」

「ああ。そうだな」

祖父の表情も、貴雄に釣られたかのように、少しばかり陰しくな
っている。

そんな二人を美咲は不安げに見比べていたら、理美が彼女の前に
しゃがみ込んだ。

「みいちゃん、お祖父ちゃんとお父さんは大事なお話があるの。」

「そうだ！ これからお母さんと一緒にお散歩に行こう！」

「うんっ！ おかあさんといくっ！」

理美の言葉に、美咲は無邪気に頷いた。

ふと、貴雄と祖父母を見ると、三人は既に、美咲達に背を向けて
家の奥へと入って行く。

美咲はそれが少しばかり不思議に思えたが、理美と一緒に過ごせ
る喜びの方が大きかったため、それ以上は深く考える事はなかった。

貴雄と理美は、それから三日ほど祖父母の家に滞在していたが、
帰る日になってから、自分達と共に、美咲も連れ帰ると言ってくれ
た。

やっと、両親と普通の暮らしが出来る。

美咲は心の底から喜んでいた。

祖父母もちろん好きだが、やはり、自分を手塩にかけて育てて
くれた両親の側にいる方が、何倍も安心出来るのである。

そして、両親と共に家に戻ったのを機に、美咲はあの夢を見る事

はなくなった。

あの夢に出てきた男は誰だったのか、声は何だったのか、気にならないと言えば嘘になる。

しかし、平穏な暮らしが戻るのであれば、そんな事はどうでも良くなっていた。

歳月は緩やかに流れていった。

そのうち、美咲はあの男と声、そして夢自体も殆ど忘れてしまっていた。

第一章 第一節

月明かり一つない闇夜の中に、桜の木がひっそりと立っていた。花の時はとつくに過ぎていたが、その桜の木は、未だに薄紅の花弁を一面に咲かせている。

この場所は、おぼろげにはあるが記憶にある。

幼い頃に身を寄せていた祖父母の近所で、彼女はここへ来た事があった。

その時、まだ五歳だった藍田美咲は 何か に呼ばれた。

妖しいほど美しい男の声と、自分の中から聴こえた女の声。

二つの 声 に導かれるように、美咲はあの時、桜の幹に貼られていた紙を剥がしてしまったのだが、それが全ての始まりだった。

美咲は繰り返し、同じ夢を見るようになっていた。

その夢では、必ず、幹から湧き出るように男が姿を現す。

癖のない背中まで流れる銀髪と、透き通るように白い肌、月を彷彿させる金の双眸が印象的だった。

美しい男だった。だが、人間離れた美しさは美咲を恐怖に陥れた。そして、夢で男に逢うたびに、彼女の中でもう一人の 自分 と葛藤を続けていた。

近寄りたくなどないのに、もう一人の 自分 は男を求めている。もう一人の 自分 に、どれほど苦しめられたか分からない。しかし、夢に翻弄される最中、両親の貴雄と理美が美咲を迎えに来てからは夢を見る事もなくなった。

そこで、美咲もすっかり安堵していた。

もう、夢に苦しめられる事はない。あの男の事も、綺麗さっぱり忘れてしまおう。そう思っていたのに、何故、今頃になって、また同じ光景が目の前に現れたのだろう。

（これは、夢だよ……？）

夢にしてはあまりにもリアルであるが、まさか、知らぬ間にこの

場所に瞬間移動するという非現実的な事も有り得ないから、やはりここは、間違いなく夢の中であろう。

（また、あの人が……？）

美咲は固唾を呑んで木の幹を睨む。本当は、すぐにでもこの場から逃げ出してしまいたかったが、足が棒になってしまったかのように全く動かない。

美咲の額から、一筋の汗が流れ落ちた。

と、その時であつた。

幹の中心部が不自然に盛り上がり、たちまちのうちにそこから男が姿を現した。男は美咲と目が合うなり、口許を綻ばせた。

男は美咲との再会を喜んでるようにも感じるが、美咲は嬉しいという想いなど微塵も感じていない。それどころか、幼い頃と同様、男の妖艶な微笑に寒気を感じた。

「久しいな」

男はそう言うと、美咲に向けて手を伸ばしてきた。

美咲は身動きはおろか、声を発する事も出来ず、その場に立ち尽くしたまま頬に触れられてしまう。

男の手は、あの頃と変わらず体温が感じられない。幽霊か、はたまた、美咲とは違う人種なのか。

だが、今の美咲にとっては、そんな事はどうでも良かった。男が誰であろうと関係ない。とにかく、この場から離れてしまいたい。

（これは夢なんだ。現実の世界にいる私が目を覚ませば、ここからも解放されるんだ！ お願いだから、早く目を覚ましてよ……！）

美咲は、安らかな眠りに就いているであろう現の自分に、強く願う。

明けない夜はない。だから、この悪夢からも抜け出せるはずだ。

美咲はそう思いながら、じつと恐怖に堪え続けた。

ピピピピピ……！

突然、けたたましい電子音が鳴り出した。

美咲は心臓が飛び上がり、驚き、ハッと目を覚ました。どうやら、音の発信源はベッドの上に置かれた携帯電話のようである。

美咲は携帯電話に手を伸ばすと、それを掴んでアラームを止めた。部屋は静けさを取り戻した。

全身は湧き出た汗でじっとりと湿っており、どれほど夢にうなされていたのかが自分でも分かった。

（やっと、解放された……）

美咲は仰向けになったまま、ぼんやりと天井を見つめた。

この家に戻って来てからは夢を見る事が全くなり、夢の事など忘れていた。それなのに、何故、今頃になってあの夢を見てしまったのか。

夢の中とは言え、男の声も、あの冷たい手の感触もしつかりと残っている。

たかが夢だと思いたいが、桜から呼ばれ、自分の中から聴こえたもう一つの 声 の事も考えると、単純に片付けられるような問題でもなさそうである。

それに、貴雄が本家に現れ、自分の父親——つまり、美咲の祖父——に見せた表情。普段は優しい父親だけに、子供心にも不安を感じてしまった。

それからすぐに、理美が美咲を散歩に誘ってくれたお陰で、あの日の事も忘れたつもりでいたが、心のどこかでは、男と 声 の存在が引っかかり続けていた。

理美と散歩へ出かけている間、貴雄と祖父の間ではどんな遣り取りがなされていたのか。そして、一時的に夢を見なくなったのは何故なのか。

（思い過ぎだと思いたい、けど……）

考えれば考えるほど、数々の疑念が生まれる。

祖父と貴雄は、必ず何か知っている。知っていながら、美咲には

何も話そうとしなかった。

（一体、私に何を隠していたんだろ？）

二人が隠している事を知りたいと思う。その半面で、全てを知ってしまったら、この平和が音を立てて崩れてしまうのではないかという恐怖もあった。

「無理に知る必要はないんだ、きっと……」

美咲はそう自分に言い聞かせると、のろのろとベッドから起き出した。

時間は刻々と過ぎていく。まず、今すべき事をしなくてはならない、と美咲は思った。

学校へ行く仕度を終え、朝食も済ませて外に出ると、朝から太陽が眩く輝いていた。

五月も半ばに入っている。今日のように天気の良い日中は汗ばむほどで、半袖で過ごすのが丁度良いのではと思う。

（とうとう夏か……）

燦々と降り注ぐ太陽の下、美咲はうんざりとばかりに溜め息を吐く。

美咲は夏があまり好きではない。冬であれば、厚着さえすれば寒さを凌ぐ事が出来るが、夏に至っては、どんなに薄着をしても暑さからは解放されない。

（ああ……。何だかだるいわ……）

そんな事を思いながら歩いていたら、美咲はふと、自分の前を歩いている女性に視線が釘付けとなってしまった。

年は二十歳前後で、美咲の予想が正しければ、彼女は学生であろう。見た目は至って普通であるはずなのに、何故か彼女に違和感のようなものを感じてしまった。

美咲は怪訝に思いつつ、しかし殆ど無意識に、一定の距離を保ちながら彼女に着いて行く。

（私、何をしてるの……？）

訳も分からず、彼女を追う自分を訝しく思った。

彼女が気になる理由は分からない。しかし、彼女を無視してしまつたら、何か善からぬ事が起きてしまいそんな予感も否めなかつた。

最寄りの駅まで、後、数百メートルまで近付いた。

ところが、駅への道は真つ直ぐなはずなのに、彼女は十字路へ差しかかると右へ曲がつて行つてしまつた。

（あれ？ 駅に行くんじゃないかなかつたんだ……）

美咲は一瞬、後を追うのを躊躇つた。

このまま追い続けたら、遅刻どころでは済まされない。酷く怒られる事はないかも知れないが、生真面目な美咲は、遅刻をする事に抵抗を覚えている。

（でも、今はそんな事を言つてらんない）

グズグズと悩んでいるうちにも、彼女との距離は確実に広がつていた。

（どうする、私？）

心の中で自分に問いかけた時だつた。

突然、何者かが美咲の肩を強く掴んできた。

「……………」

美咲は危うく悲鳴を上げそうになつたが、自分の存在を彼女に気付かれては不味いと咄嗟に考え、出かつた声を呑み込んだ。

（誰……？）

美咲は驚かされた事を恨めしく思いながら、肩を掴んできた者の正体を見極めようと、足を止めて振り返る。

そこにいたのは、二十代後半ほどの青年であつた。

癖の殆どない漆黒の髪と、深みを帯びた鳶色の双眸。

手足も日本人とは思えぬほど長く、異性に無頓着な美咲も、目の前の青年に心を奪われかけてしまつた。

だが、それもほんの一瞬の事だつた。

「お前、何をしていた？」

眉一つ動かさず、青年が美咲に訊ねてきた。

「前の女の後ろをコソコソ着け回して、一体何を考えているんだ？」

「な、何って……」

美咲は答えに窮した。

言うまでもなく、美咲は単純に彼女が気になっただけである。しかし、それよりも、どうしてこの人に、女性を追う理由を話さなくちゃなんないのよ、という疑問が浮かんた。

「——あなた、あの人の知り合いですか？」

今度は美咲が逆に訊き返した。

「別に。あの女は赤の他人だ」

「——はい？」

青年のあつさりとした返答に、美咲は今度は呆氣に取られて口をポカンと開けてしまった。

（赤の他人、って……。じゃあ、何だってそんなに彼女を気にするのよ？ ——まさか……）

「俺はストーカーじゃない」

美咲の心のうちを読んだように、青年はきっぱりと言い放った。

「な、何で……？」

青年はそれには答えず、代わりに自分の顔を人差し指で指した。

美咲の考えている事は全て顔に出ている、と言わんばかりだ。

「勝手に人の心を読まないで下さい！」

全てを丸裸にされたような恥ずかしさが込み上げ、美咲は自らの身体を抱き締めながら青年を睨んだ。

「そんなにムキになるな」

青年はわざとらしく肩を竦めて見せると、「それよりも」と続けた。

「お前も、あの女を追っていたんじゃないか？」

「——えっ？」

青年に改めて訊かれ、美咲は、視線を再び彼女の方へと向けた。彼女との距離は、また更に広がっている。このままでは確実に見

失ってしまうだろう。

（でも、学校が……）

美咲は腕時計を気にしながら、少しばかり考え込んだ。

「別に無理して追う必要もないんじゃないか？」

美咲の気持ちを察したのか、それとも単なる気紛れのつもりか、青年は言った。

「あの女を追っても、お前には良い事など一つもない。——それに……」

青年は最後の言葉を吞み込んだ。まるで、全てを告げるのを躊躇うような、そんな感じだった。

（何なの一体……？）

そう思っている間に、青年は美咲から離れて彼女の後を追って行った。

「あつ、待って下さい！」

気付くと、美咲は青年に駆け寄っていた。

「私も行きます」

美咲の言葉に、青年はわずかに目を見開いたように感じた。

「本気か？」

「はい」

美咲が頷くと、青年は深い溜め息を吐いた。

「——分かった。好きにしろ。ただし……」

青年は美咲を一瞥すると、強い口調で告げた。

「この先何があつたとしても、俺はお前を守り切れる保障はない、と考えておけ」

「——どういう意味ですか？」

青年に訊ねるも、それ以上は何も言わなかった。ただ、ほんの一瞬间、美咲を憐れむような視線を向けると、今度こそ黙って彼女を追った。

どれほど歩き続けただろうか。

（あれ？ この辺は……）

美咲は辺りを見回した。そこは民家も疎らな田園地帯だ。しかし、それだけであれば、美咲もここまで反応を示したりしない。

（まさか、こんな所に来てしまうなんて……）

美咲は逸る鼓動を感じながら、それでも青年と並んで歩き続ける。本音を言えば、このまま逃げ出してしまいたかったが、彼女を追うと決めたのは誰でもない自分自身である。

（まさか、この人も分かっていた、とか……？）

表情一つ変えず彼女を追う青年を一瞥して、美咲は思った。

「怖いのか？」

美咲の不安が伝わったのか、青年が訊ねてきた。

「だから俺はあれほど念を押したというのに……」

呆れたような青年の言葉に、美咲はムツとして「違います！」と、心にもない事を言ってしまった。

「怖くなんてありません！——ただ、ちょっとだけ、ここには嫌な想い出があるだけで……」

美咲の言いかけた言葉を、青年はどう捉えたのであろうか。微苦笑を浮かべながら、「見た目に似合わず気は強いな」と言った。

「それって褒めてるんですか？ それとも、貶されてるんですか？」

「さあな」

美咲の問いに、青年は曖昧に答える。

「とにかく、これからは少し黙っている」

青年の命令口調は、一々美咲の癪に障る。美咲は眉を顰めながらも、それでも青年に言われるがまま口を閉ざした。

一方、彼女は美咲達の存在に未だに気付いていないのか、こちらを振り返る事もなく歩き続けている。

（どこまで、行くんだろ……？）

青年の隣で、美咲は息をコクリと呑んだ。

と、そんな事を思っている間にも、彼女はそのまま、桜の木が立っている小さな空き地へと足を踏み入れて行った。

（ここは……！）

全身が凍り付かんばかりに緊張し、何度も味わった事のある異質な感じが美咲を戦慄させた。

（嫌だ……！ これ以上は……！）

美咲は無意識に、青年の腕にしがみ付いていた。足が竦み、このまま立ち止まってしまいそうになったが、青年は一向に足を止める気配がない。かと言って、強がり言い放ってしまった以上、行きたくない、とは今更告げられない。

美咲は青年に引かれるように歩いた。

ここの桜は朽ちる事を知らないのか、未だに薄紅の花弁を満開にさせている。それが余計に不気味さを感じさせた。

やがて、彼女は桜の前で足を止めた。同時に、青年と美咲も少し離れた場所で立ち止まった。

これから起こるであろう事は、繰り返し夢に見てきたのだから安易に想像が付く。木から青白い手が伸びたかと思うと、夢と同じように幹が不自然に歪み、そこから人が這い出てきた。

（やっぱり……）

思った通り、姿を現したのは、長い銀の髪と金の双眸を持つ美貌の男であった。

それを目の当たりにした瞬間、美咲の恐怖は限界に達した。青年にしがみ付く手にも更に力が入り、もう、立っているのがやっこの状態であった。

ふと、男が美咲と青年を一瞥した。男は美咲に向けて口の端を上げると、今度は目の前の彼女に視線を移して、自分の元へと引き寄せようとする。

彼女はまるで操り人形に成り果てたかのように、男に身を委ねようとしていた。

（だっ、駄目っ……！）

彼女に向けて叫ぼうとするが、全く声を発する事が出来ない。

男が何をしようとしているのかは分からない。それでも、これか

ら先の悪い予感だけは決して否めなかった。

「お前はここにいろ」

恐怖心に支配されている美咲に、青年は小声で言うと、腕に絡められた美咲の両手をそつと解いて男の元へと歩み寄った。

美咲は辛うじて立っていたが、身体中の震えは留まる所を知らない。

（あの人、大丈夫なの……？）

青年の印象は最悪であっても、心のどこかで彼を案じている自分がある。美咲は祈るような気持ちで、遠巻きに青年を見つめていた。そんな美咲に見守られながら、青年は彼女の背後まで近付くと、ピタリと足を止めた。

「おやおや」

眉一つ動かさず、男は青年に言った。

「お前のような男を呼んだ覚えはなかったのだが、まあ良い。——あの娘を、我が元へ連れて来てくれたのだからな」

「勘違いするな」

男の言葉に、青年は静かに否定する。

「あの娘が俺と共にいるのは単なる偶然だ。寧ろ、連れて来る事に多少なりとも抵抗を感じたほどだ。

本来の目的はこの女だ。また、お前の力で妖鬼まじつを放ち、意識を失った娘達をここへ誘き寄せていたのだろう。

お前に施された封印は十年前に解かれている。しかし、それでもまだ、この桜の呪縛からは完全に逃れられていない。だから、お前はこの場所を離れる事など出来やしない。——そう。あの娘を得られるまではな」

そこまで言うと、青年は振り返って美咲を見つめた。無表情に見えるのに、心なしかその瞳は哀しげに映った。

（どうして私をそんな目で……？ それに、『あの娘を得る』って一体……？）

青年の視線を受けながら、美咲は怪訝に思った。

「それで、お前は私をどうするつもりだ？」

独り悩む美咲を余所に、男は青年に訊ねた。

青年は顎を擦りながら考える仕草を見せると、はっきりと答えた。
「今すぐに闇に葬ってしまいたいのは山々だ。しかし、俺にはまだそれだけの力がない。だからと言って、悠長にもしていられないがな。」

タイムリミットは六カ月。それを過ぎる前に、必ずお前を倒せる力を手に入れる」

「ほう。見た目に似合わず威勢はいいな」

青年の言葉に満足したように、男は口許に笑みを浮かべた。

「強い者は好きだ。上辺だけの力だけではなく、内面的なものもな。十年前にも、お前と同じように男がここへ来たが、私を一目見ただけで萎縮していたな。だが、お前は十分に私を期待させてくれる。本当に楽しみだよ。お前が強くなつて、私の前に現れるのが」

男はそう言うのと、目の前の彼女の身体に手を翳した。途端に、彼女がその場に崩れ落ちた。

「……………」

美咲は目と口を同時に大きく開いた。

嫌な予感が的中した。そう思ったのだが、男の口からは意外な言葉が出てきた。

「今回は、あれに免じてこの娘を解放してやろう。だが……………」

男の金の瞳が鋭い光を放った。

「あれは、いずれ必ず私の元へ呼び寄せる」

男は美咲を一瞥すると、背を向け、そのまま桜の木に吸い込まれるように、スウツと姿を消してしまった。

男が消えた途端、美咲も呪縛から解き放たれたように我に返った。美咲は、青年と倒れた彼女の元へ駆け寄ると、彼女の前に跪いた。

「しっかりして下さい！」

上半身を抱き起こし、何度も身体を揺さぶりながら声をかけた。
「大丈夫だ」

動揺している美咲とは対照的に、青年は至って冷静であった。

「彼女は気を失ってるだけだ。彼女の中からも、妖鬼の気は完全に消え失せている」

「はあ……」

美咲はどう反応して良いのか分からず、曖昧に返答するのが精一杯であった。

「ただ、彼女をこのままにしておくわけにもいかんな」

青年はそう言うと、美咲から彼女を奪うように抱き上げた。

何も知らない彼女は、青年の腕の中で安らかな寝顔を見せている。その姿を見ていると、何も知らずに操られ、こんな場所へと引き寄せられた彼女があまりにも憐れだ。

（でも、私も何がなんだか……）

美咲は目だけを動かし、盗み見るように青年を仰いだ。

「何か言いたそうだな」

自分の事など全く見ていないと思っていたのに、青年は視線に勘付いていたらしい。

「気になる事があるなら訊け。答えてやる」

先ほども思ったが、何という上から目線な言い方だろうか。確かに相手は、美咲よりも年上である事は一目瞭然だが、相手が誰であれ、こんな無礼な態度を取られたりしたら気分が悪い。

美咲はムツとしつつ、それでも、何も知らないままにいる事も不服に思え、青年を軽く睨みながらゆっくりと口を開いた。

「訊きたい事だらけなんですが……」

「構わない。言ってみろ」

「まず、さっきの銀色の髪の男の人。あの人は何者なんですか？」

「何だお前、そんな事も知らないのか？」

またしても、馬鹿にしたような口調で返される。

美咲は自分の中で、苛々のゲージが再び上がるのを感じた。

「知らないわけじゃありません！ ただ、あの人がどんな人なのかを知らないだけです！」

ムキになるのは子供じみている。美咲もそれは分かっていたが、一度湧き上がった感情は抑えられず、つい、口調を荒らげてしまった。

興奮している美咲に対し、青年は呆れたように苦笑を浮かべた。
「なるほど。お前はどうかやら、自分の父親から何にも聞かされていないらしいな。——まあ、知らない方が幸せなのだろうと思ったからだろうが……」

答えるどころか、独りでブツブツと何やら呟いている。

「質問に答えて下さい！」

美咲の剣幕に、青年はわざとらしく首を竦めた。

「分かった。ちゃんと答える。だがその前に、彼女を元の場所に帰してやらないとな」

そう言つと、青年は腕の中の彼女に視線を移した。

「あ……」

青年に言われ、美咲も彼女の存在に気付いた。

「確かに、このままにしちやいけませんよね」

「そういう事だ」

青年は頷くと、踵を返して歩こうとした。

「ちよつと待って！」

歩きかけた青年を、美咲が声を上げて引き止めた。

「どうした？ 質問なら、後で幾らでも受けると言つたはずだが？」

「いえ。そうじゃなくて……」

美咲は眠り続ける彼女に視線を向けた。

「もし、途中でこの人が目を覚ましたりしたら、一体どう説明するんですか？ だって、彼女にはここまで来るまでの記憶はないんですよ？ ——多分、不審者扱いされると思いますけど……」

「その時はその時だ」

美咲の心配を余所に、青年は悩む様子もなくきつぱりと答えた。
「ここまで言い切られると、何も返す言葉が見付からない。

（まあ、この人の見た目はそれなりだし、抱かれて悪い気にはなら

ないと思っけど……)

そんな事を考えている間にも、青年は脇目も振らずに歩き出していた。

美咲も慌ててそれを追おうとしたが、一瞬、桜の木を振り返った。男の姿は消えている。しかし、美咲に向けられた視線、背筋を凍らせんばかりの微笑みは、どこまでも付き纏っているように感じていた。

第一章 第二節

あれから彼女は、無事に家族の元へと送り届けられた。

不審そうにしていた彼女の母親に対し、青年は、「駅で突然倒れてしまいましたので」などと胡散臭い嘘を真顔で言つてのけた。だが、その母親が嘘を見抜けないほどのお人好しなのか、それとも娘を送ってくれた青年が相当な美形だったのが功を奏したのか、存外すんなりと納得してくれた。

更には深々と礼を述べられてしまい、隣にいた美咲は居た堪れない気持ちになった。飄々としている男の代わりとばかりに、心の中で、母親と彼女に何度も謝罪した。

（何で私が、ここまで氣イ遣わないといけないのよ……）

美咲は青年を恨めしく思いながら睨んだ。

「着いたぞ」

青年に声をかけられ、美咲はハッと我に返った。

どこをどう歩いたのか、二人は二階建てのアパートの前まで来ていた。

築十年は優に超えているのか、外装は辺りが煤けたようになっており、お世辞にも、綺麗ですね、とは言い難い。

「あそこが俺の部屋だ」

青年は二階の一番奥を指で指し示した。

「外ではゆっくり話せないからな」

そう言うと、再び歩き出した。

美咲も後を追おうとして、ふと、一人暮らしであろう青年の部屋に気安く入って良いのだろうかという不安が脳裏を過ぎり、ピタリと足を止めた。

（やっぱ、見ず知らずの男の人の部屋に入るのはヤバイよ、うん……）

美咲が独りで考えを巡らせていたら、青年は意味深な視線を投げ

かけてきた。

「お前、期待してるのか？」

「だっ、誰が期待なんてするもんですかっ！」

青年の言葉に、美咲は声を荒らげた。

すると、青年はニヤリと口の端を上げて美咲に顔を近付けてきた。

「な、何ですか……？」

美咲が後ずさると、青年もそれに着いて来る。

異性にはとんと疎い美咲でも、この青年の端正な顔が目の前にあると思うと、心臓が破裂しそうなほど緊張する。

「まま……、待って！」

美咲は寸での所で青年の身体を押し退けた。

「わわわ……、私にも心の準備つてものが……！ それにっ！ 私はあなたをまだ知りませんし……！ それにそれに……！」

言っている事が支離滅裂だ。美咲も自覚があつたが、それほど青年の行動に動揺を隠せずにいるのである。

と、その時だった。

「……ククッ……」

突然、青年から忍び笑いが漏れ出した。

（な、何……？）

美咲は怪訝に思いながら、眉を顰めて青年を見つめた。

「——冗談だ」

笑いながら、男は言った。

「しかし、これぐらいの事で動揺するようじゃ、お前、いつか絶対に悪い男に騙されるぞ？」

青年の言葉に美咲は呆気にと取られていたが、からかわれた事が分かったと、彼女の中で怒りが沸々と湧き上がってきた。

「ほら、行くぞ」

怒りに震えている美咲を気にする様子もなく、青年は背を向けて歩き出した。

（……んの野郎……！）

怒鳴りつけてやりたい衝動に駆られたが、そんな事をしたら、果たしても青年を喜ばせるであろう事は美咲も安易に想像出来た。

美咲は強く奥歯を噛み締め、青年の背中を睨み付けながらその後ろを追って行った。

中に入ると、まずは狭い台所が目についた。その奥に六畳ほどの和室があり、いかにも独身男性向けの作りになっている、というのが美咲の正直な感想であった。

「適当に上がって座っている」

先に中に上がった青年が、奥の和室を指差しながら、玄関先で立っている美咲を促す。

「あ、はい。お邪魔、します」

美咲は戸惑いながら挨拶すると、靴を脱いで上がり、台所を経由して部屋へと入った。

和室の中心には、木製のテーブルと座布団が二つ置かれている。

美咲はそれを流し見ながら、どこに座ったら良いのかで躊躇いつつ、かと言って、ただ突っ立っているのもどうかと思い、手近な場所へ正座した。

その間、青年は台所で冷蔵庫の開け閉めをしながら、何やら作業をしている。時折、ガラスの擦れる音がカチャカチャと響いた。

「待たせたな」

作業を終えた青年は、琥珀色の液体を満たしたコップを二つ持ってきた。一つは美咲の前へ置き、もう一つは、自分の手に持ったまま胡坐を掻いた。

「こんなもんしかないが、遠慮せずに呑め」

「はあ……」

美咲は困惑しつつ、だが、喉が渴いていたのも本当だったので、青年の好意を有り難く受け止めながら、コップを手にして口を付けた。仄かに苦味を感じる琥珀色の液体——烏龍茶は、喉にじんわりと染み渡り、潤いを取り戻してくれた。

美咲はそれを三分の一ほど呑むと、居住まいを正して切り出した。
「あの、先ほどの質問ですが……」

「ああ。そうだったな」

青年は烏龍茶を口に含んで呑み込むと、ゆったりとした口調で話し始めた。

「まず、さっきの銀髪の男。あれは鬼王おにおうと言って、その名の通り、鬼を統べる長だ。だが、鬼と言っても、お前達が想像するような角や牙を持った化け物ではない。死んだ人間の怨みの塊——つまり、怨霊だ。ただ、鬼王は例外だ。

奴は心の底から 死にたい、消えてしまいたい と考える人間の弱みに付け込み、妖鬼を取り憑かせる。特に、穢れを知らない乙女を好き好んでいるから、ああやって、自分の元へおびき寄せてはその生気を食らう。

だが、奴の弱点は、遙か昔に施された封印によって、あの桜から離れられないという事だ。今また、その封印は解かれてしまったが、それも完全なものではない。——奴は、更なる力を求め、自分の封印を解いた娘を求めている……」

そこまで言うと、彼は、フウと小さく溜め息を吐いた。

（まだ、続きがありそうだけど……）

美咲はそう思い、辛抱強くその先の言葉を待ち続けるが、青年はなかなか口を開かない。

静まり返る部屋。そんな重苦しい空間とは対照的に、窓の外からは雀の愛らしい囀りが耳に響く。

いつまでこの沈黙が続くのだろう。そう思っていた時だった。

「——お前」

美咲をジッと見つめながら、彼がやっと口を開いた。

「これから言う事を、どうか、心を落ち着けて聞いて欲しい。——いいか？」

「え……？ あ、はい」

今までの態度とは一変し、懇願するような青年の物言いに、美咲

は少々戸惑いつつも頷く。同時に息を呑んだ。

青年は思案に耽るように目を閉じていたが、やがて、意を決したように口を開いた。

「今、俺は鬼王が欲している娘がいると言ったが、それは……、お前の事だ」

「え……？」

一瞬、何を言われたのか理解が出来なかった。

「あの……、冗談、ですよ……？」

聞き違いであって欲しいと思いながら、訊ね返す。しかし、そんなものも虚しく、青年はゆっくりと横に首を振った。

「今言った事は真実だ。そして、お前の父親もそれを知っていた。多分、お前は無意識のうちに、あの桜の木に貼られていた封印の札を剥がしてしまっただろう。もちろん、そんな事ぐらいで、鬼王はお前を求めたりはしない。

この際だからはっきり言うが、お前の中には強い霊力が眠っている。それが如何ほどのものか、俺でもよく分かる。お前自身は気付いていないようだがな。——そして、お前の持つ力。それは鬼王にとっても最大の活力になる。

お前を得、力を増大させてしまつては手遅れになる。俺だけではない。どんなに強い霊力を持った能力者でも、奴を食い止める事は出来ないだろう」

言いくそうにしていた割りには、淡々と語っている。

だが、当の美咲は穏やかでいられるはずもなかった。

鬼王の封印を解いてしまったという事実。今まで忘れていたが、美咲は彼の話を聞いていて、フツと想い出した。

いつも繰り返し見ていた夢。そして、自分の中にいる、もう一人の自分 の存在——

あの日、桜に呼ばれて剥がしてしまった紙。青年の話が真実であれば、あれが鬼王の封印だったのだ。

（私は……、何て事を……）

美咲は無意識に自らの身体を抱き締めていた。

貴雄と理美が祖父母の家——本家を訪れて来た日、貴雄は険しい表情を祖父に向けていたのを想い出した。

（やっぱり、お祖父ちゃんもお父さんも知っていたんだ……。それだけじゃない。もしかしたら、お祖母ちゃんもお母さんも知っていたのかも知れない……！）

過ぎ去り日の、周りの大人たちのぎこちない態度を改めて想い出し、美咲は複雑な心境であった。しかし、封印を解いてしまった美咲を責める者はなく、それどころか、美咲の窺い知れぬ所で何らかの行動を起こしていたのだらうと思うと、心の底から申し訳ない気持ちで一杯になる。

「——訊いても、いいですか……？」

自らの身体を抱き締めたまま、美咲は努めて冷静を装いながら言った。

青年は無表情のまま、「ああ」と頷く。

「万一、鬼王が私を得たとしたら、私は、どうなるんですか……？」

美咲の問いに、青年は顎を擦りながら考えるような仕草を見せる。分からない——と言うよりも、答えて良いものかどうか、と思索しているように見受けられる。

「知っておいた方が、かえってお前のためになるかも知れない」

青年は小さく息を吐くと、烏龍茶で口を湿らせて続けた。

「お前に限らず、鬼王が娘を得る——それは即ち、生贄になるという事だ。鬼王はそうやって、太古から力を増大させてきた」

予想はしていたものの、彼の言葉に、心臓が抉られるような苦しさを覚えた。

選ばれてしまった自分。無意識だったとは言え、封印を解いてしまったがために、だ。いや、もしかしたら、あの封印を解く事自体も美咲に課せられた宿命だったのかも知れない。

不意に自身に嫌悪感が募った。

（なら、私が生贄になる前に消えてしまえば……）

そう思った時だった。

「変な事は考えるな」

美咲の心を読んだように、青年は鋭い言葉を投げかけてきた。

「さっきも言ったはずだ。鬼王は、死にたい、消えてしまいたい」と考えた者に付け入ると。お前も、もちろん俺も決して例外ではない。

怖い気持ちは分かる。寧ろ、怖くないと思う方がどうかしている。だが、鬼王に勝てないという可能性はゼロではないと俺は信じている。

俺もお前の力になってやる。タイムリミット——つまり、お前が十六の誕生日を迎える十一月十一日までに、奴を封じられるほどの力を付けられればいい」

彼の強い言葉に、美咲は目を瞠った。

「あの……」

「何だ？」

「あなたは、何でもそこまでして……？　そもそも、私とあなたは赤の他人なのに……」

美咲の問いに、彼は「それは正論だな」と答えた。

「だが、俺とお前は決して他人とは言い切れない。実は、俺の亡くなった親父とお前の親父さん——貴雄さんは従兄弟だったからな」

「えっ！　そうなんですか？」

この青年との意外な繋がりに驚きを隠せず、美咲は思わず声を上げてしまった。

その反応は青年の満足を刺激したのか、先ほどとは打って変わり、嬉しそうに笑んでいる。

「無理はない。直接関わりがあつたのは俺の親父と貴雄さんだけだ。俺だって、お前の親父さんは顔を知っている程度だったしな。それに……」

青年はふと、言葉を切った。

何を言おうとしていたのか、美咲は気になったが、青年は、「あ

れは、こいつに関係ないか……」と独りごちて貴雄と青年の父親の
関係についての話題を中断させた。

「とにかく、お前の親父さんとは疎遠だったんだが、ある時、どう
やって調べたのか、お前の親父さんがここを訪れて来た。

よほど切迫していたんだろうな。俺の顔を見るなり、『娘を鬼王
から守って欲しい』と言ってきた。

貴雄さんが言いたい事は分かったが、俺は面倒な事は嫌いだし、
あの人の娘を守るという義理もないだろうと思っていた。だが、鬼
王に選ばれた娘が気になったのも本音だ。だから、お前には悪いと
思ったが、しばらくの間、お前の事も観察させて貰った」

青年はそこまで言うのと、美咲を真っ直ぐに見つめた。

「あの人の娘だから、もつと淑やかなのを想像していたのに、見事
に予想を裏切ってくれたな」

青年の言葉に、美咲はムツと口を尖らせた。

「——それって、私を馬鹿にしてるんですか？」

青年はニヤリと口の端を上げると、「いや」と小さく否定した。

「馬鹿にしているつもりはない。寧ろ感心してるほどだ。ただ、あ
の場所に行った途端、さすがに怖くなったのか、怯えたように俺に
しがみ付いていたのは面白かったけどな」

「あ、あれは……」

青年に言われ、美咲は顔から火が出そうなほど恥ずかしさが込み
上げた。冷静になって考えると、初対面の人間、しかも異性にしが
み付いてしまうとは、状況がどうあれ、実に大胆不敵な行動であっ
た。

（やっぱ、馬鹿にされてるとしか思えないんだけど……）

制服のスカートを握り締めながら俯いていると、青年はそつと、
美咲の頭に触れてきた。

予想外の青年の行動に、美咲は俯きながら目を見開く。

「俺もちよつと言葉が過ぎたな」

青年は静かに言った。

「だが、本当にお前を馬鹿になんてしていない。それよりも、よくあの場で堪え抜いたな。普通なら、怖くなって即座に逃げ帰っている所だろうに」

「それは、単に足が竦んでしまっただけで……」

青年の思わぬ優しい言葉に、美咲はつい、本音を漏らしてしまった。

「そうか」

青年は短く答えると、不意に何かを思い出したかのように美咲の頭から手を離し、その場から立ち上がる。そして、棚の引き出しからメモ帳とペンを取り出して再び座り、テーブルの上で何やら力リと書き始めた。

（何しているんだろ……？）

美咲は顔を上げ、不思議に思いながら青年の行動を見つめていた。

「これを」

青年は書く作業を終えると、メモ用紙を一枚剥いで美咲に渡してきた。

美咲は首を傾げてそれを眺めた。

「何かあったら、ここに連絡しろ」

青年の言葉で察した。どうやらこれは、青年の携帯番号とメールアドレスらしい。

「あ、ありがとうございます」

美咲は礼を言うと、再びメモに視線を落とした。

その時、携帯番号とアドレスの後に、青年の名前と思しきものが書かれているのにも気付いた。そこにあったのは、南條和海という四文字である。

「あの、質問ばかりですみませんが……」

美咲は男の前にメモを差し出して、名前の部分を指差した。

「これ、何て読むんでしょうか？」

「ん？ ああ、それは なんじょうかずみ。俺の名前だ」

（なんじょう、かずみ……）

美咲は心の中で、教わったばかりの名前を繰り返しながら、食い入るようにメモを見つめた。

青年の見た目通り、綺麗な名前だ。彼——南條さんの両親は、よっぽどロマンティストなんだろうな、とも。

「あの……。な、南條……。さん」

さすがに下の名前では呼べないと思い、苗字を口にしてみたが、それすらも抵抗を感じてしまい、少々どもってしまった。

だが、当の南條は意に介した様子もなさそうであった。

「どうした？」

「いえ……。あ、これから、宜しく願います……」

何を言うかで悩んだ挙げ句、結局、当たり障りのない挨拶のみになってしまった。

「ああ。こちらこそ」

南條もまた、社交辞令のように返してきた。

その後は、互に残った烏龍茶を飲み干し、一頻り話をしてから、美咲から南條に暇を告げた。

結局、美咲は学校へ行くタイミングを失い、そのままサボる事となってしまった。

第二章 第一節

美咲を送り届けたのは午後五時過ぎ、陽が西へ傾きかけた頃だった。

最初は断られたものの、いつ、どこで彼女が狙われるとも限らない。今の所、妖鬼の気配は感じないが、用心に越した事はない。

再び帰路に付いた南條は、歩きながら夕焼けを仰ぎ見る。

美しくもあり、残酷でもある鮮やかな夕景。それを見ていると、過ぎ去った幼い頃を想い出す。

和海少年の父親が妖鬼狩りに出ると言い出したのは、同じように夕陽が眩しい日だった。

父親は、母親と和海少年に笑顔を見せると、颯爽とした足取りで夕焼けの中を歩いて行った。

（ぜったいに、わるいやつをやっつけてかえてくる。だって、おとうさんはつよいんだもん）

遅く広い父親の背中を見送りながら、和海少年は思った。

しかし、幾ら待てども父親は帰って来なかった。ただ、壁にかかった時計の針の音だけが、やけに煩く耳に鳴り響いていたのを憶えている。

そのうち、和海少年は待ち草臥れて眠ってしまったが、母親は一睡もせず父親を待っていたらしかった。

そして翌朝、父親は、物言わぬ姿で自宅へ戻って来た。同じ能力者であった藍田貴雄に、横抱きにされて。

父親の顔は血の気を完全に失っており、既に魂が抜け落ちてしまっていた事が窺えた。

母親は変わり果てた夫の姿を見るなり、子供の前であるにも拘わらず、悲鳴を上げるように泣き崩れた。

和海少年は何が起こったのか分からず、母親の隣でぼんやりと立ち尽くしていた。

そんな親子の姿をどう思っていたのだろうか。貴雄は父親を抱いたまま、何とも言い難い表情で交互に二人を見つめた。

「――申し訳、ございません……」

どちらにともなく貴雄がポツリと呟いた。

「彼は、私を庇って命を落とされてしまった……。私が、もっとしつかりしてさえいれば……」

貴雄はその場に座り込むと、父親をゆっくりと床に下ろした。

母親は父親が下ろされるなり、自分の夫を強く抱き締めて何度も父親の名を呼んでいた。

（どうして、おかあさんはないてるの……？）

和海少年の目には、父親が眠っているようにしか見えなかった。

もう少し待てば、必ず目を覚ますに違いない、と和海少年は思っていた。

その後、貴雄と母親との間にどんな遣り取りがあったのかは憶えていない。いや、無意識のうちに忘れてしまいたいと思っていたのだろう。

葬儀、火葬が全て終わると、和海少年もさすがに父親の死を実感出来た。

茶毘に付された父親は驚くほど小さく感じた。

怖いとは思わなかった。ただ、時が流れるにつれ、父親を死に追いついた貴雄への嫌悪感だけが心の中に渦巻き続けた。

父親の死から二十年後、それまで音信不通となっていた貴雄が南條の前へ現れた。

忘れかけていた憎悪の念が沸々と湧き起こった。

「何なんですか、今頃？」

愛想笑いを向けるどころか、寧ろ冷ややかに貴雄に訊ねた。

貴雄は一瞬、そんな南條に尻込みしかけていたが、逃げるわけにはいかないと思い直したらしく、意を決したように口を開いた。

「和海君、頼みがある」

貴雄の表情は、何かに追い詰められているように切羽詰まっていた。

南條が怪訝に思っていると、貴雄は「実は」と話し始めた。

「俺の娘が、鬼王に選ばれてしまった……。娘は、五歳の頃に封印を破ってしまい……。本来であれば、俺が娘を守るべきだろうが、俺には、守れるほどの力がない。

だが、和海君なら、博和さんの息子である君ならば、必ず娘を守り切れる。君の持つ霊力は、鬼王に対抗出来る唯一のものだから……」

「——随分と勝手な事を」

いつもはあまり感情を表に出す事はないが、その時ばかりは露骨に顔を顰めた。

「俺の親父は、あなたに殺されたも同然だ。もちろん、あなたが手を下したとは思っていませんが、それでも、あなたと関わってしまったがために、親父は命を落としたんです。

俺は過去を綺麗に洗い流せるほど出来た人間じゃありません。だから、今でもあなたを恨んでいる。お袋に関しては、俺よりも恨みが深いです。

それに、あなたは俺を随分と買い被っているようだが、俺は、親父ほどの霊力はない。未だに師の下で修行中の身なんですから」

南條は正直な気持ちを貴雄に述べた。父親の事を別にしても、どのみち、南條は自分の事だけで頭が一杯であつた。

「——君しか、いないんだよ……」

絞り出すように、貴雄が言った。

「博和さんに関しては、許して貰おうとは思っていない。寧ろ、一生涯恨んでくれても構わない。だが、娘は別だ。娘は俺と妻の唯一の宝だ。これを失ったら……」

お願いだ！ 娘を助けてくれ！ 娘さえ守ってくれるのなら、俺は君に、出来る限りの事は何でもしよう！」

貴雄はそこまで言うと、南條の前で土下座した。

まさか、貴雄にこんな行動に出られるとは予想だにもしていなかった。南條も困惑を隠せずにいた。

「貴雄さん……。どうか、頭を上げて下さい」

さすがに南條も居た堪れない気持ちになった。貴雄を宥め、どうにか顔を上げさせようと思うのだが、貴雄は一向に、床から額を離そうとしない。

和海君が縦に首を振るまでは帰らない、と貴雄は全身で訴え続けていた。

南條は小さな溜め息を吐いた。この調子では、どうにか追い帰したとしても、また何度でも頭を下げに来るに違いない。

「——分かりました」

不承不承ではあったが南條は頷いた。同時に、貴雄はゆっくりと頭をもたげて南條を見上げた。

「——本当かい……？」

念を押すように貴雄に訊ねられると、南條は「ええ」と答えた。

「ただし、先ほども言いましたが、俺はまだ修行中の身です。——絶対とはお約束出来ませんが、出来る限りの事はさせて頂きます」

南條の言葉が本当に嬉しかったのである。先ほどとは打って変わり、貴雄は満面の笑みを見せた。

貴雄が自分の元を訪れて来た翌日から、南條は貴雄から預かった写真を頼りに、彼の娘——美咲を探し出した。そして、彼女を見付けてからは、気配を悟られぬように見張っていた。

父親公認とは言え、十代の若い娘をストーカーしているようで気分が悪かったが、だからと言って、いきなり美咲の前に出て行くのも十分に妖し過ぎる。

一方、美咲はよほど鈍いのか、南條の存在に気付く様子は全くな

かった。それはそれで、かえって心配になっちゃったのも南條の
本心であつたが。

美咲をひっそりと追いつけて数日が経過してから、偶然にも、美
咲の前に妖鬼に取り憑かれた一人の女を目撃した。しかも、美咲
も彼女が気になったようで、随分と下手な追跡をしていた。

それを見た瞬間、南條は自分から苦笑が漏れ出てしまった。同時
に、これは美咲に接する好機だとも思い、半ば美咲を驚かすつもり
で声をかけてみたのだった。

話しかけた後の美咲の反応は予想通りであつたが、貴雄と違い、
意外な気の強さも垣間見せた。

だが、さすがにあの桜の木近くまで行つた時は、顔面蒼白にし
て怯えていた。このまま、美咲はその場に倒れてしまうのではと思
えるほどに。

それからほどなくして、幹から湧き出るように鬼王が姿を現した。
背中まで流れる銀色の髪に、妖しく光る金色の瞳。一瞬、女かと思
紛うほどの美しい顔立ちをしていた。

南條は努めて冷静を装っていたが、鬼王の存在感に気圧されてい
た。

鬼王と対峙し、終始怯えていたという貴雄の気持ち、その時ば
かりはさすがに理解した。

だが、物怖じしてばかりはいられない。貴雄と約束した以上、あ
まり気が進まないとは言え、美咲を守るという使命を全うしないと
いけないのだ。それに、鬼王の霊力を少しでも阻止するためにも、
易々と生贄など出してはならない。

（鬼王を完全復活させて堪るか）

南條は無意識に拳を握り締め、強く思った。
と、その時だった。

プルルルル……プルルルル……

ジープのポケットに入れていた携帯電話が鳴り響いた。

南條は、まさか、と思いながら携帯を取り出して着信を確認する。だが、表示されていた名前は、先ほど登録したばかりの美咲ではなかった。

（あいつか）

電話の相手が分かった南條は、面倒臭いと思いつつ電話に出た。

「はい」

『あつ、南條さん！ 俺ですよ！ 俺俺！』

まるで、年寄りを騙す振り込み詐欺のような口振りで、電話の向こうの者が 俺 を連呼する。

名乗りもしない見えぬ相手に対し、南條は眉を顰めた。

「何だ？ 『金を貸せ』という用件なら、如何なる理由があっても絶対に聞かないぞ」

南條の突き放すような言い方に、電話の向こうの相手は、『違いますって！』と、今にも泣き出しそうな声を出す。

『そりゃあ俺は年中金欠ですけど、人に泣き付くような真似なんて絶対にしませんって！ それぐらい、南條さんだって分かってるでしょう？』

「俺 をしつこく連呼するからだ。誤解されたくないなら、まずは先に名乗れ。—— 瀧村」

南條が相手の苗字を強調して言うと、相手の青年——たきむらまさみち瀧村雅通は、わざとらしく声を裏返した。

『何だ、俺だってちゃんと分かってんじゃないですか！ 南條さん、人が悪過ぎますよー！』

ただでさえ地声も大きいというのに、更に声を上げるものだから、南條は携帯を耳からわずかに離して苦い表情を浮かべた。

「で、結局何の用なんだ？」

南條が問うと、雅通は『どうでした？』と逆に訊ねてきた。

『藍田美咲、今日はどうだったかなあつて』

「—— お前に一々報告しないといけないのか？」

『いや、だって俺も気になってしまつて。それに、幾ら頼んでも南條さん、藍田美咲の事を教えてくれなかったじゃないですか』

「――教えたら、お前はとうするつもりだったんだ？」

『えっ！ そりゃあ……』

雅通の慌てふためいたような態度に、南條から深い溜め息が出た。

「お前の場合、下心が見え見えだ。だから教えなかったのもある」

『ちよつ、ちよつとつ！ それはあんまりですよ！』

南條の冷やかな言葉に雅通は声を大にして否定していたが、これではかえって凶星だと認めているようなものだ。

「用はそれだけか？ 俺も疲れている。そろそろ切るぞ」

南條が携帯を耳から話そうとした時、電話の向こうから『ああっ！ 待つて下さい！』と制止する声が飛び込んできた。

『用事は別にあるんですっ！ 実はついさっき、妖鬼の気を感じたんです。で、気になって行つてみると結構な数がウジャウジャいたので、これは、南條さんにも知らせた方が良いかなあ、と思……』

「それを早く言え」

雅通が言い終える前に、南條はピシヤリとそれを遮った。同時に、疲れがどつと押し寄せ、とうとうその場に屈み込んでしまった。

「それで、場所はどこなんだ？」

雅通に教わつた場所へ到着したのは、連絡を受けてから二十分弱ほど経つてからだつた。

そこは何かの会社なのだろうか。二階建てで、かなりの歳月が経っているのか、あちこちが煤けたように汚れている。

南條は建物の前に立つと、目を左右に忙しなく動かしながら耳を澄ませる。

微かに、獣じみた咆哮が耳朶に届く。妖鬼一匹辺りの気は微弱ではあるが、それでも結構な数がいるようである。

（さて、どうしたものか……）

建物を遠巻きに睨みながら、南條は顎を擦る。低級妖鬼とは言え、

数が多ければ多いほど厄介である。しかも、南條は日中に鬼王と対峙しただけで、わずかではあるが、体力を消耗させられていた。

（ここは、一気に片を付ける方法を考えるか）

そう思った、まさにその時であった。

「南條さん！」

張りつめた空気をぶち破るように、電話で助太刀を求めてきた雅通が緊張感のない大声で南條を呼んできた。

（終わった……）

南條は咄嗟に思った。

「南條さんっ！」

全く反応しない南條に、雅通が焦れたように再び呼んでくる。

「——聴こえてる」

あまりのしつこさに辟易しつつ、南條は振り返った。配慮の欠片もない雅通に苛立ちが募り、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

これにはさすがに雅通も気圧されたようで、おずおずと南條に訊ねてきた。

「あの、どうしたんですか……？」

「どうしたもこうしたもない」

南條が答えたのとほぼ同時に、妖鬼達がこちらに近付いて来る気配を感じた。

（やっぱり……）

南條は額に手を押し当て、深く溜め息を吐いた。考えるまでもなく、妖鬼達を呼び寄せたのは雅通の不用意な大声である。

気が付くと、南條と雅通は妖鬼——正確には、妖鬼に憑依された人間——に囲まれていた。

「ありやつ……？ 気付かれちゃったん、ですかね……？」

雅通も事態をやっと呑み込んだようで、辺りを見回しながら遠慮がちに言った。

そんな彼に対し、原因を作ったのが誰なのかを知らしめるために、

南條は冷たく言い放った。

「お前の声は、地声でも鼓膜が破れるほどの騒音だ。妖鬼どころか、普通の人間でもすぐに勘付く」

「鼓膜が破れるほどって……。それは大袈裟でしょ！俺だって、小声で話す時もありますってば！」

「説得力がない」

「ひど……」

冷たく言い放たれた雅通は、幼い子供のようにムスツと膨れてしまった。

南條の口から、再び大きな溜め息が漏れる。

その間にも、妖鬼は奇怪な鳴き声を上げながら、南條達にじりじりと近付いていた。

「瀧村！」

未だ機嫌を損ねたままの雅通に対し、南條は普段からは想像も出来ぬほどの大声を上げた。

「不満なら後で幾らでも聴いてやる！今は、こいつらをどうにかする事だけを考えろ！」

南條の言葉に、雅通はピクリと反応を見せた。雅通も愚鈍ではないから、状況はきちんと把握している。そもそも、妖鬼の気配を察知したのは、他でもない雅通である。

「いつも言っているが、始末するのは妖鬼のみだ。取り憑かれている人間は出来る限り傷付けるな」

「分かってますよ！」

雅通は気合いを入れ直すように、強く頷く。

それを見届けてから、南條は気を高める。身体——特に右腕に熱を帯び、極限に達した時、そこから湧き出るかのように物体が現れた。最初はただの塊でしかなかったそれは、徐々に銀色に光り輝く日本刀へと形を変えてゆく。

南條は柄を強く握り、刃の部分が完全変形したのを確認すると、妖鬼に対して刀を構える。

妖鬼達も南條の殺気を感じたのか、途端に一斉に飛びかかった。

南條は妖鬼を見る鳶色の双眸に力を籠め、妖鬼に向かって素早く刀を突いた。

「ぐ……ぐああ……っ……！」

心臓を刺された妖鬼は、辺り一面に吐き散らすように雄叫びを上げる。器となっている人間の顔も、苦渋で歪んでいる。

だが、彼は刀を抜かない。妖鬼が完全消滅するまで、ギリギリと体内を抉ってゆく。南條の刀に刺され、苦しんでいる姿を見るのは少なからず胸が痛むが、取り憑かれた人間を闇から救い出すには、これしか方法がない。

「ぐっ……うっ……っ……」

体内に入り込んだ妖鬼は、少しずつ弱り始めていた。

「忌まわしき悪鬼よ、闇の世界へ還れ」

南條は小さく呟くと、最後の仕上げとばかりに力を籠めた。

「ぐっ……っ……」

小さな呻き声を潮に、器となっていた人間は気を失った。同時に、その者から妖鬼は消え去る。

（まずは一匹）

倒れた人間を一瞥してから、今度は自分と同様に戦う雅通に視線を向けた。

雅通は自分の背丈ほどある槍を無闇に振り回し、妖鬼達を翻弄している。

「おい！ 俺にやられたい奴はこっちに来な！」

つい先ほどまで不貞腐れていたと言うのに、今の雅通は呆れるほどに生き生きとしている。

（あの余裕が、命取りにならなければ良いけど……）

そんな事を思っていたら、残りの妖鬼が不意を突いて、南條の左腕に噛み付いてきた。

「チッ……っ！」

南條は軽く舌打ちをし、それを力一杯振り払う。

妖鬼はそのままアスファルトに叩き付けられたものの、すぐに起き上がって再び襲って来た。

「お前らと違って、こつちには学習能力というもんがあるんだ」

南條は一切の隙を見せずに刀で妖鬼を刺す。

「お前達も哀れだな。鬼王の人形になど成り下がらなければ、こんなに苦しまずに済んだものを……」

心のない妖鬼に届くわけがないと分かりつつ、ポツリと言った。

第二章 第二節

妖鬼は南條の刀と雅通の槍によって消滅し、その度に憑かれた人間も力が抜けたように崩れ落ちる。

気配が消えると、今までの喧騒が嘘のように、一気に辺りは静まり返った。

（終わった、のか……？）

額から流れ落ちる汗を拭いもせず、南條はあちこちに散らばっている人間達を見渡す。

妖鬼は殲滅させた。そのはずであるが、まだ何かを感じる。

「——南條さん……」

雅通も同じ事を思ったのか、南條に向けて目配せをする。

南條は小さく頷くと、その気が発せられている場所へと歩いた。

それは、今まで戦っていた雑魚とは違った気だった。鬼王に比べたら遥かに弱い、ある程度の強さは感じる。

南條は刀を強く握り直した。

「そこにいるのは誰だ？」

建物に向かって、南條が問う。

その時だった。

「全く、せっかちだわねえ……」

間延びした声と同時に、どこからともなく、一人の女がフワリと二人の前に舞い降りた。

「なっ……！ 一体どこから……」

雅通は目を見開いて驚いている。

一方の南條は、表情一つ変える事なく女をジッと睨んだ。

「やだ。そんな怖い顔しないで……」

女は困ったように首を竦める。

ウェーブのかかった淡い栗色の髪は背中まで流れ、双眸は南條達と同じ黒。外見だけならば、普通の人間とさほど変わりはない。

妖鬼が取り憑いたのであれば、先ほど戦った人間達や、昼間に逢った例の女のように、自らの意識は完全に消え失せる。しかし、この女は違っていた。南條達をしつかりと見据えているし、何より、自分の意思で行動して話している。

一瞬、何故かと疑問を抱いたが、南條はふと想い出した。稀に、自ら望んで鬼王の手に墜ちる者がいると。

不安、絶望——それらが限界に達した瞬間、人は自らを消し去ってしまおうと考える。もちろん、皆がそうとは言い切れないが、乗り越える力がない者は、救いの手を差し伸べてくれる者に身も心も投げ出してしまふのだ。相手が鬼だったとしても、である。

殊に鬼王は、老若男女関係なく、その類稀な美貌で人々を魅了し続けたという。また、鬼王自身も美しいものを好む。

醜いと感じるものは情け容赦なく排除するし、逆に美しいと感じるものに対しては、ありつただけの愛情を注ぎ込む。そして、その中から更に選び抜かれた女は、稀少な靈力を分け与えられる。

靈力を与えられた者は、桜に縛られている鬼王に代わり、人間の能力者と戦う。

鬼王の寵愛を受け、選ばれた存在。南條達、能力者の間ではそれを鬼姫きひめと呼んでいる。

二人の前にいる女もまた、鬼姫と呼ぶに相応しい美貌の持ち主だった。

案の定、美人に弱い雅通は、先ほどの驚いた表情を一変させて惚けてしまっている。

南條はそれを苦々しく思いながら、鬼姫に向き直った。

「もう、そんなに怖い顔しないでっさっきも言ったのに……」

鬼姫は怯えたような瞳で南條を見つめる。だが、本心では恐怖なと感じていない事ぐらい、南條も分かっていた。

「——俺達を始末しに来たのか……？」

表情を変えずに鬼姫に訊ねた。

鬼姫は「そうねえ」とわざとらしく首を傾げた。

「強いて言うなら、あなたの観察？　鬼王は相当あなたを買っていたから、どんな戦い方をするんだろうと興味が湧いてね。

うん。確かにあなたは強いわ。冷静だし、動きにも全く無駄がなかった」

鬼姫の言葉に、南條は複雑な気持ちになった。

褒められるのは悪い気がしないが、相手は鬼姫である。手放して喜べるほど、南條という男は単純ではない。

「そうだわ」

南條の心を知ってか知らずか、鬼姫はニツコリと微笑みながら、彼を真っ直ぐに見つめた。

「あなたの名前、訊いておこうかしら？　これからまた、こうして逢う事になるでしょうし。」

因みに私の名はシュリ。宝珠の珠に、瑠璃の璃で珠璃。鬼王が、私のために与えてくれた名前よ」

鬼姫——珠璃は嬉々として語った。この様子からも、彼女がどれほど鬼王を心酔しているのかが窺える。

そんな珠璃に対し、南條は名乗るのを渋っていた。深い理由はない。ただ、面倒臭いだけだった。

（敵同士が仲良しこよししても、全く無意味だろうに……）

そう思っていたら、今まで惚けていた雅通が、南條を押し退けるようにしゃしゃり出て来た。

「あんた、珠璃っていいのか！

あ、この人は南條和海さん。和海って字は、平和の和と海を組み合わせたもの。それで、俺は瀧村雅通。優雅の雅に、通るって字を書くんです！」

南條を紹介する振りをして、実は自分を存分にアピールしようというのが見え見えだった。

だが、当の珠璃は雅通に全く興味がなさらしい。雅通には軽く愛想笑いだけを振り撒くと、すぐに南條に向き直った。

「南條和海さん。次に逢った時は存分にお相手してあげるわ。私も、

強い人は大好きだから。

あ、それとも一つ。例の女の子、これからは独りにしない方が
良いわよ？ 鬼王ったら、今まで以上に躍起になってあの子を狙っ
ているから」

琉璃はそう言つと、さつと踵を返した。

「待て」

南條は立ち去ろうとする彼女を呼び止めた。

「お前、何でそんな忠告めいた事を……？」

彼の問いに、琉璃は背を向けたまま天を仰ぎ、淋しげに答えた。

「決まってるでしょ。鬼王を愛しているから、誰にも奪われたくな
い。——ただ、それだけ……」

この言葉を残し、琉璃は空気に溶け込んでしまふようにその場か
ら消えた。

「南條さん……」

琉璃がいなくなつてから、雅通はあるまじき事を口にした。

「話に聞いていただけだったので少々疑つていたんですけれど、鬼
姫つて、本当に凄い美人でしたね。——琉璃、すげえ俺のストライ
クゾーンですよ……」

これを聴いた南條は、目を剥いて口の端を引き攣らせた。

雅通がどんな恋愛をしようとも勝手だと思つているが、それは普
通の人間に限つての事だ。しかも、雅通も南條と同様に能力者であ
る。そんな彼が、敵である鬼姫に理想を描いてしまふのは言語道断
だ。

「——頭が痛くなつてきた……」

南條は独りごちると、眉間に皺を寄せて額を手で押さえた。

だが、当の雅通は、南條の気持ちに全く気付いていない様子だっ
た。

「南條さん、どうしたんですか？」

まるで、他人事のように訊ねてくる。

南條のストレスは、これによつて更に増大した。

「――瀧村」

南條は雅通を一瞥すると、吐き捨てるように言った。
「それは、自分自身の胸に訊け」

南條と別れてから、美咲はあたかも、学校から戻りました、と言わんばかりに帰宅した。

その後、父親の貴雄が帰宅し、家族揃って夕食を取ったものの、心の中は全く落ち着かなかった。

南條の話では、貴雄も彼を知っているようであつたが、今日の事は言い辛い。理由はないのだが、何となく、鬼王と直接逢ってしまった事は話してはならないような気がした。

夕食を済ませ、風呂に入つた後、美咲はそのまま自室へ籠もつた。そのまま寝てしまおうかとも思つたが、ベッドに横たわつても、なかなか眠りは訪れない。

美咲は天井を仰ぎ見たまま、今日の事を想い出す。

鬼王という名の、妖しげな美貌を持つ男。美咲を生贄とし、更なる力を得ようとしている、と南條は言っていた。

（ほんとに、私にそれだけの力が……）

美咲は何かを確認するように、手の平を翳してみる。

（そもそも、私が持っている力って何なの？ あの人――南條さんだっけ？ 南條さんは分かっているような口振りではあつたけど……）

正直な所、美咲は自分が生贄だという実感が無い。

怖いのは確かだった。死を恐れない人間なんて、決していないのだから。

無意識のうちに、美咲は身体を起こしていた。そして、ベッドの上に置いていた携帯電話に手を伸ばし、登録したばかりの南條の番号を呼び出して通話ボタンを押してしまった。

（私、何を……！）

ハッと我に返った時には、既に電話の向こうでコール音が鳴っていた。切ってしまうかとも思ったが、それはあまりにも失礼だろうと思い直し、南條が出るまで、その場に固まった。

『はい』

呼び出し音が数回鳴ったところで、男の低い声が美咲の耳に届いた。

電話だと違和感を覚えたが、間違いなく南條の声そのものだった。そう思うと、一気に緊張が高まった。当然ながら、話す内容も全く考えていなかったので、「も、もしも……」と通り一遍の挨拶をするのが精一杯だった。

暫しの間、沈黙が流れる。

『おい』

さすがに心配になったのか、南條の方から声を発してきた。

『どうした？ 何か、俺に話したい事があったんじゃないか？』

「え、いえ……。その……」

まさか、勝手に手が動いていたとは言えず、言葉に詰まってしまった。

（どうしよう……）

黙っていても埒が明かない。かと言って、初めて逢ったばかりの南條相手と話せるような話題など全く持ち合わせていない。

『大丈夫か？』

南條が訊ねてくる。

「え……？ 大丈夫ですけど……」

『それならいいが』

また、会話が途切れてしまった。何とも言い難い気まずさを感じる。

南條も、もしかしたら同じ事を考えているかも知れない。そう思うと、居た堪れない気持ちになる。

「——ごめんなさい……」

美咲は謝罪を口にしていた。

『何で謝る？』

電話の向こうで南條は怪訝そうに訊ねてくる。

「いえ……。用もないのに電話をしてしまったので……」

『そんな事は別に気にしなくていい。俺はどうせ独り者だ。寧ろ、何でも話してくれた方がこっちとしても有り難いからな』

南條の低い声は、美咲の耳に優しく響く。それだけで、心が和らいでゆくようだった。

「南條さん……」

南條の言葉に安心した美咲は、小さく口を開いた。

「私、今日の事を誰にも話せませんでした。両親——特にお父さんの反応が怖くて……。言って悪い事ではないとは思ってます。でも、何故か言葉が詰まってしまって……」
『なるほど』

美咲が言い終えると、南城は相槌を打った。

『確かに、俺に逢いに来た時の貴雄さんの事を考えると、お前が鬼王に逢ってしまったと知ったら平常心ではいられないだろうな。だが、甘い事ばかりも言っていられない。親父さんには、もう少し現実を見据えてもらわないと。』

俺も、ずっと藍田を守ってやれるかどうかと言われたら、はつきりと「YES」とは答えられない。現に今もそうだからな。——本音を言えば、お前にも自分の身を守るだけの力は付けて貰いたい、と考えているぐらいだ』

「自分の身を守る力、ですか……？」

『ああ。確かに、お前の力はまだ眠っている状態だが、それなりに訓練をすれば、多少は引き出す事が出来るかも知れない。——ただし……』

南條はそこまで言って、言葉を途中で切った。

「『ただし』、何ですか？」

美咲は続きを催促した。

電話の向こうで、南條は暫しの間黙っていたが、やがて、思い切

つたように口を開いた。

『家は出て貰わないといけなくなる。修行をする場合は、民家が殆どないような山の麓だからな。』

『ご両親の気持ちもだが、何より藍田、お前にそれだけの覚悟があるかどうかだ』

南條の言葉に、美咲に迷いが生じた。

家を出る――

そんな事を考えたのは一度たりともなかった。

自分の身を守るようにはしたいと思う。だが、修行をするとなると、両親と離れ離れになるだけではなく、学校も辞めなくてはならなくなるだろう。

勉強は好きではないが、学校は決して嫌いではない。親しい友人も出来、充実した毎日を送っていたというのに。

「――もう少しだけ、考えさせてくれませんか……？」
やっとの思いで美咲はそう答えていた。

南條さんに呆れられちゃうかな、と少しばかり不安を感じていたが、彼は『そうだな』と美咲の気持ちを察してくれた。

『いきなり言われても、簡単に答えなど出せるものじゃないからな。寧ろ、藍田の言葉を聞いて安心したよ。』

時間はあるし、ゆっくり考えてみる。決心を固めたら、いつでも俺に言え。もちろん、ご両親に話す時は俺も責任を持って説得しよう』

「はい」

美咲は頷いた。

電話で話しているので、互いの顔は見えないものの、向こう側で南條が口許を綻ばせているのが目に映るようだった。

『それじゃあ、そろそろ……。あ、そうだ』

電話を切ろうとした時、南條が何かを想い出したように言った。

『藍田、今度の日曜日の予定は？』

突然訊かれ、美咲は一瞬、答えに窮してしまった。

「日曜日、ですか？ えっと、予定は特にはないです」

『そうか。それなら、その日は予定を空けておいてくれないか？』

お前に紹介しておきたい奴がいるから』

「え……？ 誰ですか？」

『仲間、とても言うっておこうか。そいつもお前に逢いたそうにしていたから』

「仲間という事は、同じ能力者の人ですか？」

『そうだ。せつかくの休みだし、ゆつくりしたいと思うが……』

「いえ。どうせいつもは家の中で暇していますから。誘って貰えて嬉しいですよ」

『そうか。なら良かった』

南條はそう言つと、『それじゃあ、また』と、今度こそ最後の挨拶をしてきた。

「はい。ありがとうございました」

『お休み』

「お休みなさい……」

美咲は南條の方から電話を切るまで、ずっと耳に携帯電話を当てていた。

そのうち、プツリと音を立てて切れた。それを確認した後、美咲も電話を離す。

身体が勝手に動いてしまった結果、思わずかけてしまった電話。

南條の声を聴けた安堵感と、南條から突き付けられた難題に対する困惑した気持ちとが、複雑に入り混じって交錯している。

『時間はある』

南條はそう言っていたが、本当はそんな悠長な事を言っていない場合ではない。

不安に押し潰されそうになっている美咲を安心させようと、彼なりに気を遣ってくれたのであろう。

（良い人なのか嫌な人なのか、よく分かんない人だな、南條さんって……）

美咲は再びベッドの上に携帯電話を戻すと、仰向けに倒れ込んだ。逢ったばかりだからなのか、おぼろげにしか想い出せない南條の顔。

日曜日、また逢ったらじっくりと見よう。そんな事を考えながら、美咲はゆっくりと瞼を閉じた。

少しずつ、意識が遠退いていった。

民家の殆どない田園地帯。外灯も疎らであるそこは、辺りが闇に包まれるとシンと静まり返る。

その中に、松明を灯したように明るい場所が一箇所だけあった。そこには、一本の桜の木が立っている。

琉璃はウェーブのかかった長い髪を靡かせながら、その近くにゆっくりと降り立つ。

「どこへ行っていた？」

地上へ足を着けたのと同時に、心地良い低音で訊ねられる。

琉璃は驚きもせず、声の主に振り返る。

琉璃の瞳に映ったのは、闇夜に浮かぶ銀の髪と金色の相貌の男。

琉璃はそれをうつとりと見つめながら、「あら」と小さく笑んだ。

「私の行動なんて、全てお見通しではなくて？　だって、あなたは、

我々を統べる唯一の王 なのですよ」

女の言葉に、王と呼ばれた男はわずかに口の端を上げる。

「念のために、だ。それより、どうだったのだ？　お前も例の能力者に逢ったのだろう？」

「ええ。この目でちゃんと。妖鬼達との戦いも見事でしたわ。尤も、あなたにはまだまだ敵わないでしょうけどね」

琉璃は夕刻に見た、妖鬼達と能力者である人間との戦いを想い返していた。

自らの霊力で日本刀を生み出し、それを鮮やかに使いこなす。圧倒的に不利な状況に於いても、冷静さを欠く事なく、襲い来る妖鬼達を、器を傷付けずに次々と斃していた。

まるで舞いを見ているような心地であった。あまりの美しい剣捌きに、さしもの琉璃も目を奪われてしまった。

「なるほどな。やはり、奴は私の見込んだ通りの男だったというわけか」

「はい。その辺の腰抜けとは、一味も二味も違いますわね」

でも、この世で一番なのはあなたですわ、と琉璃は心の中で強く強調する。

あの青年も、確かに美しい顔立ちをしていた。実年齢は二十代後半であろうが、それを感じさせぬほどの落ち着き。

彼の隣にいた少年のような青年は、琉璃に舞い上がっているのがありありと伝わってきたが、青年は舞い上がるどころか、表情一つ変える事がなかった。

それもまた、琉璃に強い興味を抱かせたが、やはり、彼女にとっては王が全てなのである。王のためなら、命を捨てても構わない、と思えるほどに。

だが、肝心の王は、琉璃とは違う少女を強く求めている。

『定めで結ばれた、我が愛しき妻』

その言葉を、何度、王の口から聴かされた事だろう。

琉璃も王の寵愛を受けた一人であるが、用が済めばいずれ捨てられる。どんなに王に忠誠を誓っても、琉璃の想いは決して叶わないのである。

（どうして、私ではなかったのかしら……）

琉璃は、まだ見た事のない王の妻に強く嫉妬した。

自分と違い、王に愛されるために生を享けた少女。だが、器となつてゐる少女は、王の気持ちになど気付いていないようで、ひたすら逃げ回つてゐるという。

強力な霊力も持ち合わせているが、それはあまりにも特殊で、数え年で十七にならないと完全に覚醒しないらしい。その状態では戦闘に加わる事など出来ないから、これから先はずっと、夕刻に出逢つた青年達に守られるのであろう。そう思うと、無性に腹が立つてきた。

（自分の身も守れない小娘に、この私が劣るなんて……！）

琉璃は人間だつた頃、言葉では言い尽くせないほど辛く苦しい経験を山ほどしてきた。だからこそ、苦勞もせず、ぬくぬくと守られている人間を見ているのが許せない。

「琉璃」

静かに、だが、有無を唱えさせない強い口調で王は言った。

「お前はただ、私に従つていれば良いのだ」

金色の鋭い眼光が琉璃を射抜く。

琉璃は言葉を失い、コクリと息を吞んでゆっくりと頷いた。

王はそれを確認すると、口許に笑みを浮かべながら、桜の木の中に溶け込むように消えて行つた。

取り残された琉璃は、立ち尽くしたまま桜の木を仰ぐ。

季節など無視して咲き誇る花達。否、実際は花などではない。大罪を犯し、或いは冤罪により非業の死を遂げた魂の集まりである。

人間だつた頃であれば、あまりにおぞましい光景に震え上がつていたであろうが、鬼として生まれ変わった今では、心に染み入るほど美しく映る。

（私も所詮、あの者達と同じ 亡者 なのだから……）

強い風が吹いた。

琉璃は靡く髪を両手で押さえ、塵が目に入らぬようと瞳を閉じた。

第三章 第一節

美咲が悩んでいる間にも、時間は刻々と過ぎてゆく。

何も知らない貴雄と理美は、起きてきた美咲を見るなり、いつもと変わらず「おはよう」と声をかけてきた。

「おはよう」

美咲は曖昧に笑みを浮かべながら挨拶を返し、自分の定位置へと腰かける。

今日は日曜日、南條と逢う約束をした日である。

あれから美咲は、自分がどうすべきかをずっと考えていた。

家ではもちろん、学校にいても常に上の空。そんな彼女を、友人が怪訝そうに首を傾げて見つめていた事にも気付いていた。

（まさか、今日中に決断を出せ、なんて言われないとは思うけど…

…）

目の前に出された目玉焼きとトーストを睨みながら美咲は思った。

（でも、のんびり構えてもいられないよね。今は何事もないけど、

いずれは、って事も考えられるだろうし……。——けど……）

暫しの間、自問自答を繰り返す。少しでも早く決断しないとという焦りと、親元を離れる事への不安が交錯する。

（どうする？ 私……）

と、その時だった。

「美咲？」

理美の心配そうな声に、美咲はハッと我に返った。

「どうしたの？ ずーっとぼんやりしちゃって……」

「あ、ううん！ 何でもない！」

美咲は慌てて笑顔を取り繕うと、トーストに齧り付いた。

「——あんたそれ、バターもジャムも塗ってないわよ……」

「へ？ ——あ……」

理美の突っ込みに、美咲はゆっくりとトーストから口を離した。

既に口の中には、味のないそれが入ってしまったている。バサバサ
していて美味しくない。咀嚼するたびに、虚しい気持ちになった。
「どうでもいいけど、片付かないからとっとと食べちゃいなさい」
「う、うん……」

『どうでもいい』の一言で締め括られてしまった事は癪だが、ぼ
んやりしている本当の理由など言えるはずもなく、美咲は齧った痕
のあるトーストに苺ジャムを塗り、再び頬張った。

外は見事な快晴だった。透き通った空に、綿のような雲がゆった
りと浮かんでいる。そして、日に日に暑さを増してゆく外気。

燦々と照り付ける太陽の下を、南條との待ち合わせ場所である最
寄り駅まで、美咲は足早に歩く。

駅には待ち合わせの十分前に到着した。

さすがに南條はまだ来ていないだろうと思っていたのだが、彼は
既に駅の前に立っていた。

美咲は慌てて彼の元へと駆け寄る。

「お待たせしました！」

南條は美咲を見るなり、口許に小さな笑みを浮かべた。

「思ったより早かったな」

「そうですね？ どう考えても南條さんの方が早いですけど……」

「女というのは準備に手間取るもんなんだろ？ 聞いた事がある」

「はあ、確かにそうかも知れませんか……。でも、私はあまりお洒
落には興味がありませんから」

「なるほど」

南條は美咲の服をじつと見つめる。

美咲の服装は、黒のＴシャツとジーパンという至ってシンプルな
ものだった。

「あの、変ですか……？」

あまりにも凝視されているので、美咲は些か不安になった。

「いや、服なんて着られれば十分だろ」

食い入るように見ていた割りには、随分とあっさりした返答だった。

美咲はすっかり拍子抜けしてしまった。

（この人、何なんだろ……？）

そう思っていたら、南條に「来い」と促され、美咲は彼に着いて行く。

南條は一定の速度で歩きながら、駅の駐車場へと入った。

「車で来たんですか？」

「そうだ」

「免許、持っていたんですね」

「持っていないと何かと不便だからな」

「そうなんですか」

取り留めのない会話をしているうちに、二人は黒い車の前まで来ていた。

（軽、でないのは確かだよな。しかも、結構大きい）

車に関して全くの無知である美咲は、単純にそんな感想を抱いた。

「さて、そろそろ行くか。藍田、適当に乗れ」

南條に言われた美咲は、一瞬躊躇しつつ、助手席のドアを開けた。

乗り込むと、仄かな柑橘系の香りが鼻を^{くすぐ}擽る。同時に、一気に緊張が押し寄せた。

南條は相変わらぬのポーカーフェイスだ。全く何も感じていない

ようだったが、美咲は違った。

（落ち着け。落ち着くのよ、美咲……）

車に乗っている間、美咲はジューパンの上に手を載せ、それを強く握り締めていた。

「そろそろかなあ……」

とあるアパートの一室で、一人の青年が壁に寄りかかりながら、

壁に掲げられた時計を見上げた。針は十時五十五分を指している。予定に狂いがなければ、待ち人はもうじき到着する。

彼——雅通の心の中は、期待で一杯になっていた。

「まさか、こんなに早く対面出来るとは思ってたしな」

雅通はそう言いながら、テーブルの上に置いていたペットボトルのコーラに手を伸ばし、口に含む。蓋を開けてから時間が経ってしまったせいか、殆ど気が抜け、甘ったるさだけが広がってゆく。彼は顔を顰めつつも一気に飲み干すが、かえって喉が渴いてしまった。「確かお茶もあったはず……」

雅通は立ち上がると、台所へ行って冷蔵庫を開けた。

と、その時だった。そのタイミングとほぼ同じく、台所に面したドアがゆっくりと開かれた。

そこに現れたのは、彼より年長の仏頂面した青年。更に一步下がるように、十五・六と思しき少女が控え目に立っていた。

「南條さん、お帰りなさい！」

雅通は冷蔵庫からペット緑茶を取り出すと、ドアの前まで行った。

『南條』と呼ばれた青年は、「お前、何をしてるんだ？」と眉間に皺を寄せながら雅通に訊ねる。

「いやあ、コーラだけじゃ喉を潤せなくて。悪いとは思ってたんですけど、お茶を失敬しちゃおうかなあ、って」

「——別に構いやしないが。しかし、俺の部屋ならともかく、余所でそんな真似をしたら、お前、確実に摘み出されるぞ？」

「大丈夫ですよー！ 幾ら俺でも、他の家ではこんな事しませんから！」

嬉々と言う雅通に対し、南條は、呆れたと言わんばかりに深い溜め息を吐いた。

「まあいい。それよりも入れ」

南條は後ろの少女に声をかけると、少女は「お邪魔します」と言いながら靴を脱ぎ、几帳面に揃えた。

三人は台所を抜け、部屋の中へと入る。

南條と雅通がほぼ同時に腰を下ろし、それを見届けるようにしてから、少女も雅通の真正面にゆっくりと正座した。

雅通は改めて、少女をまじまじと見つめる。

（可愛いっちゃん可愛いけど、凄い美人、ってわけじゃねえな）

見られないほどでは決してないが、色気のある美少女を期待していただけに、肩透かしを食らった気分だった。昨日、妖鬼と戦った後に現れた妖艶な鬼姫の印象があまりに強過ぎたからというものもあったかも知れない。そもそも、比べる事自体が間違いなのだが。

（でも、鬼王が見初めたってんなら、珠璃以上の美女じゃなきゃ納得いかねえな）

心の中で品定めをしていると、少女は怪訝そうに彼を見返してきた。

雅通は慌てて笑顔を繕うが、相手は全く笑わない。それどころか、余計に苦虫を噛み潰したような、険しい表情をされてしまった。

取り付く島がない――

そんな諺が頭を過ぎり、せっかくの笑顔も引き攣り笑いへと変貌した。

「百面相か？」

南條から冷たい突っ込みが入る。

「放つとして下さい……」

雅通はガツクリと肩を落とし、もう、無駄な愛想は振り撒くまいと固く心に誓った。

「あの……」

真顔に戻った少女が、南條に視線を向けた。

南條は彼女のその後の言葉を察したのか、「ああ」と軽く頷いた。「瀧村、彼女が藍田美咲だ。詳しい紹介は特にしなくても大丈夫だろう。」

そして藍田、こいつが前に電話で話した奴だ。名前は瀧村雅通。

一言で表せばただの 変人 だが、いざとなれば頼りになる」

「南條さん、 変人 は余計でしょ……」

南條の紹介の仕方に不満を覚え、ボソリと呟く。

「ん？ 変人 は気に入らないか。なら、 変わり者 にしておくか？」

「——どっちも大差ないですって……」

変人だという自覚がないわけではないが、いざ、面と言われると不愉快極まりないものである。

「それはともかくとして」

南條は不貞腐れた雅通を無視して、淡々と続けた。

「藍田にはまだ話していなかったが、鬼王には 鬼姫 という厄介な手下が付いている。俺達も、ちょうど藍田と初めて逢った日の夕刻に遭遇したんだが、そいつからは、かなり強い霊力を感じた。はつきり言ってしまうえば、俺や瀧村が側にいない時は危険だ。お前も強力な能力者だが、それ自体は全く覚醒していないからな」

「はあ……」

少女——美咲は、心ここにあらず、といった感じだった。

南條や雅通よりも、一番危険に晒されている張本人であるはずなのだが、自覚が全くないのであろうか。

「あのさあ」

余計なお節介だと思いつつ、つい口を突いてしまった。

「藍田さん、だっけ？ あんた、どんな状況に置かれてるか分かってる？ 今は大丈夫でも、そのうち命を奪われてしまうかも知れないんだぜ？」

「——ええ」

やはり、美咲の表情は変わらない。こうなってくると、美咲は死に対する恐怖心が全くないのかと疑いたくなってしまう。

「無理もない」

雅通の心の中を読んだように、南條が言った。

「いきなり『生贄です』なんて言われて、『ああ、そうだったんで

すか』と、すんなり納得出来る人間なんていないだろう。それに、藍田は鬼王と逢った事はあっても、妖鬼と対峙した事がない。ましてや、直接的に危害を加えられていないんだ。だから、実感もまだ湧かないのだろう」

南條が美咲に視線を投げかけると、彼女は強く頷いた。

「その通りです。正直な所、私は生贄という実感が全くないんです。鬼王は確かに怖かったです。捕まったら、二度と助からないだろうと直感しました。——でもやっぱり……」

美咲の態度は煮え切らない。気持ちは分からなくもないし、南條の言っている事は尤もだと思うのだが、内心では、非常に苛立ちを覚えていた。

美咲は南條に甘えている。それがありありと伝わってくるから、余計に腹立たしく思えるのかも知れない。

「——馬鹿馬鹿しい」

無意識に口にしていた。

南條と美咲は、同時に雅通に視線を向けた。

「ほんのちよつとでも自覚があればまだ良いけどさ。あんた、自覚のじすらねえじゃねえかよ。こっちはあんたのために命懸けで戦ってるのに、当の本人は、知らぬ存ぜぬかよ……」

あーあ！ あんたがそんなんじゃ、必死こいてる自分が滑稽に思えてくるね！」

「瀧村、止せ」

南條が窘めてきたが、雅通は構わず続けた。

「全く、誰かさんのせいで鬼王に人類が滅ばされるかも知れない、ってわけか。あんたの犠牲は、多くの犠牲にも値するんだ。——ひでえ話だよ」

「……によ……」

今まで黙っていた美咲が口を開いた。雅通の言葉に対して怒りが頂点に達してしまったのか、双眸は鋭い光を放ち、唇もブルブルと痙攣している。

「——さつきから黙って聞いてりや言いたい放題！ あんた、一体何様のつもりっ？ まるで人を能天気だと言わんばかりに！

私だって独りで散々悩んだの！ 親にも友達にも言えない苦しさ、あんたには分かる？ 今の私には、南條さん以外に頼れる人なんていないのに……！

あんなのような最低無神経男、同じ場所にいると思うだけで反吐が出る！」

美咲の予想外の反撃に、雅通は呆氣に取られた。大人しそうな外見から、メソメソと泣き崩れるのが関の山だろうと思っていただけに驚きを隠せずにいた。

だが、こんなガキに負けて堪るか、という意地も働き、雅通は更に言い返した。

「てめえ！ 言っていい事とわりい事の区別も出来ねえのかよっ？

最低無神経男 だって？ その台詞、男の部分を 女に変換してそっくりそのまま返してやるよ！」

「ちよっ……！ あんたの方がよっぽど無礼じゃない！ ああ分かった！ あんた、女の子に全然モテないでしょっ？ デリカシーの欠片もない男って、ほんつと最低！」

「……んだとお！」

雅通と美咲が同時に立ち上がった。あわや掴み合いになりるかと思つた所へ、南條が「いい加減にしろ」と仲裁に入った。静かだが、どちらにも有無を決して唱えさせない強い口調だった。

「瀧村、気持ちには分からないでもないが言い過ぎだ。

藍田もだ。——確かに、瀧村が無神経と言つのは見事に的を射ていると思うがな」

「そんな……！ 南條さんまで……！」

雅通は南條に泣き付こうとしたが、南條は顔を顰めながらそれを突き放す。そして、雅通だけではなく、美咲にも諭すように言つた。「これからは長い付き合いになるからな。不満があつたとしても少しぐらいは我慢しろ」

「——はい……」

兄とも慕っている彼の言葉は重い。

雅通は頂垂れ、小さく頷く事しか出来なかった。

気が付くと、時計の針は十二時を少し回っていた。

「ああ、もう飯時か」

南條が壁時計を見上げながら言った。

「何か食いに行くか？ 藍田、希望はあるか？」

突然振られて美咲は返事に窮した。

その側で、雅通が「俺には訊かないんですか？」と訊ねるも、南條はそれをあつさり和一蹴した。

「この場合は藍田が最優先だ。それにお前は、好き嫌いなんてないんだから何でも食えるだろ」

「いや、確かにそうですけど……」

南條の言葉に、雅通は不満を顔にしている。

美咲は何とも言い難い複雑な心境で、二人を見比べた。

まるで兄弟、と言うよりも親子である。雅通は偉そうな事を散々言ってきたが、彼も自分と大差ないのではないかと思う。美咲が南條を頼っているように、雅通もまた、南條を慕っている。初対面の印象は最悪だったが、南條と接するうちに、不思議と心が安らいでゆく自分がある事にも気付いた。

電話をしていた時も同様だった。無駄口を叩かないからこそ、彼の言葉には重みがある。まだ、二十代であるはずなのに、とても老成しているようにも感じる。

それに比べて雅通はどうだろう。二十歳だと言っていたが、どう考えても、美咲と同年代にしか思えない。ちよつとした事でムキになる所や、すぐに不貞腐れる所などは、その辺の幼い子供と何ら変わらない。彼を見ていると、南條がどれほど苦勞を強いられてきたのかが分かる気がする。

（こいつに加えて、私というお荷物も抱えてしまった……）

人事のように、南條に憐みの感情を抱いてしまった。

「おい」

南條の声に、美咲はハツとした。

「何か、食いたい物はないか？」

再度訊ねられた。

「いえ、私も別に好き嫌いはないので……」

「だったら、南條さんとよく行っている中華屋でいいんじゃないですか？」

美咲の言葉を最後まで聞かず、雅通が口を挟んできた。

美咲は口の端を引き攣らせ、南條は眉を顰めている。

「——だから、お前の希望なんて訊いてないと……」

「けど、美咲が好き嫌いはないって言うてるんですよ？ それにこいつ、自分で決められそうになかったから。」

別にいいんじゃないですか？ 美咲にも、馴染みの味を憶えさせるつても悪くないと思いますし」

（ちょ、ちよつと……！）

突っ込み所が多過ぎて、美咲は絶句した。

勝手に行く店を決められた事については、雅通の言う通り、実際に迷っていたからまだ許せる。

問題は、予告もなしに名前を呼び捨てにされた事だ。南條も美咲を呼び捨てにしているが、彼の場合は苗字である。

ところが、雅通は明らかに、美咲 と、しかも二回も呼んできた。ついさっきまでは 藍田さん だったのに、この突然の変わりようは如何なものか。

ここへ来た時も、妙に馴れ馴れしい笑顔を向けられ、美咲は心底ドン引きしていた。

（これから、こいつと上手くやっていけんの、私……？）

美咲は雅通を睨みながら、ひっそりと溜め息を吐いた。

雅通が強く推していた中華屋は、南條のアパートから歩いて五分ほどの場所にあった。外観だけでなく、内装も古き良き時代を感じさせ、平成生まれの美咲でも心が安らぐような気持ちになる。

三人は、その店内の一番奥まった席まで行くと、南條と雅通が並び、美咲は二人に向かい合わせになるように坐った。

席に着くタイミングを見計らい、小太りの気の良さそうな小母さんが、水を満たしたコップを持って来た。

「おや？ そっちのお嬢ちゃんは何初めて見る顔だねえ」

それぞれの前にコップを置きながら、小母さんは興味深げに美咲を見つめる。

あまりに無遠慮に見つめられた美咲は、すっかり困り果てて、曖昧に笑顔を取り繕った。

「で、この子は和海君と雅通君、どっちのガールフレンドなんだい？」

直球な質問に、美咲は言葉を失い目を瞠った。

その側で、南條は表情を崩す事もなく黙々と水を口に運び、雅通は「違う違う！」と強く否定した。

「こいつは別にそんなんじゃないから！——まあ、ガールフレンドって表現は決して間違いじゃねえけど。でも、俺はもちろん、南條さんとも、そんな深い関係になる可能性なんてないない！」

雅通の否定の仕方に、美咲は口を引き攣らせた。

確かに、間違った事は言っていないが、もう少し、言葉を選べないものか。しかも、ここまで敵視される憶えは全くない。

南條のアパートにいた時同様、怒鳴り付けてやりたい衝動に駆られた。

「あんた、それはあんまりじゃないかい？」

爆発寸前になっていた所に、小母さんが雅通を諭すように言った。「どっちとも深い関係じゃないのは分かったよ。けどね、こんな可愛い女の子相手にそこまで酷い事を言わなくつても……。この子だって相手を選ぶ権利はあるんだから。——ねえ、和海君？」

南條がコップを置くタイミングを見計らうように、小母さんが彼に話を振った。

南條は頭をわずかにもたげ、小母さんを見上げながら、「そうですね」と小さく頷く。

「それ見なさい！——全く、雅通君は和海君と違って、女心つてのをちつとも分かつちやいないんだから！」

南條から同意を得られた小母さんは、腕を組んで踏ん返り返っている。

「ああもう！ 分かったからとつと注文を取ってくれよ！」

反撃出来ないと思つたのか、雅通は店中に響き渡る大声で小母さんに八つ当たりする。

「はいはい」

雅通の態度に不愉快な気持ちになった美咲とは対照的に、当の小母さんは慣れているのか、軽く受け流して淡々と訊ねてきた。

「さ、ご注文は？」

昼食を済ませてから、雅通は、「用事がありますんで」と言い残して南條のアパートの前で別れた。

煩い雅通がいなくなつてホッとしたのも束の間、今度は南條と二人きりになつてしまつた事に気付き、緊張が全身を駆け巡つた。

「さて、これからどうするか……」

南條は腕時計を眺めながら独りごちる。

「俺は特に何の予定もないが、藍田は……」

「わつ、私も暇です！」

美咲は無意識に南條の言葉を遮っていた。

南條はわずかに目を見開く。

（あつ……！）

美咲は、とんでもない事を口走つちやつた、と慌てて自分の口を両手で押さえた。

南條は顎を擦りながら、美咲を見つめている。何を考えているの

か、表情を探ろうとしたが全く読めない。

交錯し合う視線。それは数秒という短い時間であつたにも拘わらず、美咲には一秒が妙に長く感じられた。

「送ろう」

先に口を開いたのは南條だつた。

「明日はお前も学校があるだろ。早めに帰って疲れを取つた方がいい」

「え、でも……」

「何だ？」

異を唱えかけた美咲に、南條は訝しげに訊ねる。

「——いえ。何でも、ないです……」

美咲は目を逸らし、ゆっくりと首を振つた。

もう少しだけ――

そんな我が儘は言えなかつた。

美咲は来る時同様、南條の車の助手席に乗つた。

会話がなく、カーオーディオも切っている車内には、エンジンの唸る音だけがやけに煩く響いている。

駅に着くまでに南條と話がしたい。そう思つても、口が貝になつてしまったように開かない。まだ、南條に訊きたい事は山ほどあるというのに。

南條は相変わらずの無表情で、ハンドルを握っている。

（このまま、時間が止まってくればいいのに……）

愚かな事だと分かりつつ、美咲は考えずにはいられなかつた。

美咲を送り届け、アパートに戻つた南條は、畳の上に、そのまま仰向けに寝転がった。

つい先ほどまで、雅通と美咲が、ここで掴み合い寸前の言い争い

をしていたのが嘘のように、辺りはシンと静まり返っている。

（やれやれ、これからしばらくは、あいつらの宥め役に徹しないと
いけないわけか……）

そう思いつつ、実は二人の遣り取りを結構楽しんで見ていたため、
そんな役回りも決して嫌だという気持ちにはなかった。

雅通は常に世話が焼けるが、本当の弟のような感じだし、美咲に
対しても同様だった。

ただ、雅通と別れた後、美咲は一瞬、女の表情を見せた。あんな
風に見つめられたら、幾ら南條と言えども動揺する。美咲に恋愛感
情はないが、男の理性は存外脆いのだ。

（俺も、瀧村の事は言えんな……）

天井を睨みながら、南條は自らを嘲り笑った。

あの時、美咲に『送ろう』と言ったのも、あのままでは、彼女の
全てを壊してしまいそうな気がしたからだった。

美咲は飽くまでも、貴雄から預かっていている大切な娘。そのくせ、
自分が守り切れる自信がないからと、危険に晒そうとしている。

先日の電話で話した事を、美咲はまだ迷っている。両親と離れる
事に不安を感じるのは当然だから、南條も急かす気はなかった。し
かし、半面で言いようのない胸騒ぎもする。

鬼王はともかく、鬼王を心酔してやまない鬼姫。南條も雅通もい
ない時に美咲の前に現れたら、鬼姫は何をしでかすか分からない。

鬼であるうとなかうと、嫉妬に狂った女が如何に恐ろしいかは、
南條も重々承知していた。

（どうする……？）

南條は自身に問いかける。

警戒しろ、などと忠告のみで済ませられる問題でもない。

（やはりここは、貴雄さんを説得すべきだろうか？）

南條は、貴雄の人の良さそうな面立ちを思い浮かべる。

守るはずが、守り切るのが難しい、などと言ったら、彼からどん
な反応が返ってくるだろうか。だが、そんな悠長な事を言ってい

れないのも事実だ。

昼間に雅通も言っていたが、美咲が今、どんな立場に立たされているのか、改めて考え直してもらった必要がある。もちろん、美咲を見捨てるのではない。美咲自身を少しでも強くするため、である。

第三章 第二節

家に帰ってから、美咲に疲れがドツと押し寄せた。

帰りの挨拶を両親にしてから、彼女はそのまま自室に入ると、ベッドに横たわって、ウトウトとまどろんだ。

少しずつ、魂は現を離れ、夢の中へと誘われてゆく。

しばらくして、美咲は自室とは別の場所にいる事に気付いた。

そこは、数日前に訪れた桜の木の前。考えるまでもなく、夢によく現れた場所でもある。

（まさか、また夢を……）

美咲は無意識に、自分の今の格好を確認する。

足元は素足であつたが、服装は着替えずに寝てしまったせいか、南條達と逢っていた時と全く同じだった。

（これじゃあ、夢なのに夢でないじゃない。身体ごと、ここに飛ばされちゃったみたいだし……）

同じ経験は何度もしていても、それでも美咲は妙な違和感を覚えてしまう。

と、その時だった。

「ようこそ」

背中越しに、男物の低い声が聴こえてきた。この声も、幾度繰り返して耳にきただろう。

美咲は、その声には返事をせず、代わりに黙って後ろを振り返る。思った通りであつた。そこにいたのは、ゆったりと流している銀の髪に金色の双眸を持つ男——鬼王だった。

美咲が彼に視線を送ると、鬼王は一步步近づいて来る。

美咲の全身が恐怖に粟立った。しかし、今は逃げようなどという気は全く起きず、寧ろ、鬼王の妖しく輝く瞳を睨んだ。

「ほう、少しは成長したようだな」

美咲の前に立つなり、鬼王は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「——もしかして、わざわざ私を呼んだの？」

背中を伝う冷たい汗を感じながら、美咲は訊ねた。

鬼王は「ああ」と、素直に頷いた。

「この場所に一人でいるのも、なかなか退屈だな。かと言って、私はこの桜に縛られているから、好きなように動き回れない。だから、意識だけを夢の中に飛ばし、弱り切っている愚かな魂をここへ呼び寄せ、私の足となって働いてもらうしかない」

「——私はあんたの暇潰しのためだけに呼ばれたって事？」

美咲は苦々しく思いながら鬼王に吐き付けると、鬼王は困ったように苦笑した。

「そう突っかかるな。まあ、今のは私の言い方が悪かったか。

お前は私の妻となる女だ。手荒な真似は絶対にしない。ただ、お前を横取りしようと躍起になっている連中には、それ相応の報いを受けてもらうが」

「——何を勝手な事を……」

「勝手？ それはないだろう。そもそも、私とお前が結ばれるというのは運命だったのだ。

よく考えてみる。何故、私が幼かったお前を呼んだと思う？ 封印を解くのは、誰でも良かったわけではない。お前が オウキの魂を持っていたからこそ、私はお前を求めたのだよ。清らかで美しい。——そう、ここに咲く桜の花のようにな」

鬼王はそう言うと、桜の木を仰いだ。

桜の時季ではいはずなのに、未だに咲き続ける花。しかしそれは、花卉 と呼ぶには、ほんのりと明かりが灯っているように映る。

これもまた、鬼王の持つ霊力の一つなのであるうか。

「鬼王、一つ訊いてもいい？」

木を見つめ続ける鬼王に、美咲は問う。

「何だ？」

「あんたが今言った、 オウキ って誰なの？」

「気になるのか？」

「当たり前でしょ。私は封印を解いたという事以外、何にも分からずに生贄に選ばれてしまったんだから。——もし、私が選ばれた事に意味があるのであれば、それを知りたい……」

「何を言い出すのかと思えば……」

真剣な眼差しを向けてくる美咲に対し、鬼王はクツクツと忍び笑いを漏らした。

美咲は不快に思いながら眉根を寄せた。

「——そうだな」

しばらく笑った後、鬼王はそれを引つ込めて真顔になった。

「教えてやつても良いが……。いや、止めておくか。」

お前、今の名前は何と言った？」

突然訊ねられた美咲は、一瞬答えに窮した。

「え？ あ、藍田美咲、だけど……」

「ミサキ、か。——美しく咲き誇る桜の花……」

鬼王は独りごちると、暫し美咲を見つめていた。

（一体、何考えてんの……？）

訝しく思いながら鬼王を睨むと、鬼王は一瞬、今までのイメージからは想像出来ないほど柔らかく笑んだ。

「美咲」

鬼王が美咲の名を呼ぶ。そして、手を伸ばすと、そつと彼女の頬に触れてきた。相変わらず、その手に体温は全くなく、ヒヤリとしている。

「——いや、お前はやはりオウキだ。姿は違えども、お前の持つ魂は……」

鬼王の金の双眸が、美咲を愛しげに見つめる。見つめられるほどに、先ほどまで感じていた恐怖は消え、今度は鬼王に、魂ごと引き寄せられてしまいそうになった。

自分の中の別の存在が鬼王を求めている。鬼王と、永遠に添い続けたいと渴望している。

だが、美咲は寸での所で我に返った。自分の頬を撫で続けていた鬼王の手を振り払い、距離を保とうと、わずかに後ずさった。

「――私は、オウキなんて知らない。私はずっと、藍田美咲だったんだから。これから先もそう。私は、あんたの望む者になんて絶対にならない！」

背中に流れる冷たい汗を感じながら、美咲は鬼王を睨んだ。

鬼王もまた、美咲を黙って見つめ返す。

無言の状態がしばらく続き、静寂に包まれたその場所には、風に煽られて揺れる草木のざわめきが、煩いほど耳に響いた。

「――おや？ そろそろ目覚めの時か……」

先に沈黙を破ったのは鬼王だった。その言葉と同時に、美咲の目の前が徐々に霞み始めていた。

（もしかして、意識が現実に戻りかけている……？）

そう思う間もなく、美咲は靄の中へと引き込まれていった。

夢から覚めると、部屋の中は仄かに朱色に染まっていた。

ベッドの上の目覚まし時計を見ると、六時を回っている。家に着いたのが二時頃だから、四時間は眠りに堕ちていた計算になる。

（夢の中じゃ、あんまり時間が経っていないように感じたけど……）

美咲はぼんやりとした頭で、鬼王と交わした会話を反芻する。いつもは逃げ回っていただけに、鬼王相手にあれほど話をしたのは、何とも不思議な心地であった。

そして、一番に気になった名前―― オウキ。そのオウキの魂を美咲が受け継いでいると、鬼王が言っていたのが気になる。

オウキとは何者で、鬼王とはどんな因縁関係にあるのか。

美咲はふと、幼い頃に耳にした別の女の声を想い出した。

（……アノカタヲ…… トキハナテ……）

女の声は、封印を解いてからは全く聴いていない。しかし、あの

地の底から湧き出るような 声 は、未だに焼き付いて離れない。
もしかしたら、鬼王の言っていた オウキ とは、あの時の 声
の持ち主と同一人物であろうか。美咲は考えたが、次第に頭が混
乱してきた。

「ああもう！ 止め止め！」

幾ら考えてもキリがない。そう思い、美咲は何度も頭を横に振つ
た。

階段を降り、階下へと着いた美咲は、そのままりビングへと向か
った。

そろそろ夕飯時である。出来上がるまで、テレビでも観て待つて
いようと思っていた。しかし、リビングのドアを開けようとした手
が、そのままピタリと止まってしまった。

「……君の言いたい事は分かるよ。しかし……」

父親の貴雄の声であった。

どうやら、客が訪れて来ているらしいが、相手の名前が聴き取れ
なかった。

美咲は息を殺し、それぞれの会話に耳を澄ませた。

「君には前にも話したが、俺は美咲を危険な目に遭わせたくないの
だよ。あの子は女の子だし、何より、俺達のたった一人の娘なんだ。
身勝手な事を言っているのは承知しているし、俺はどんなに罵ら
れても構わない。——だからお願いだ。どうか、和海君の力だけで
守り抜いてくれないか？」

（えっ……！）

美咲は耳を疑った。だが、確かに貴雄は今、『和海君』と名前を
呼んでいた。

和海——つまり、相手は南條だという事か。

（どうして南條さんが……？）

美咲は考える間もなく、ドアを乱暴に開け放っていた。
バタンと開く音と同時に、貴雄と理美、そして会話の相手——南

條は驚いてこちらに視線を向けてきた。

「何で……？」

どちらにともなく美咲は訊ねる。訊きたい事が多過ぎて、何を問
い質しているのか、実は自分でも分かっていない状態であった。

男二人が茫然としている中で、貴雄の隣に座っていた理美が立ち
上がって美咲に近付いた。

「とにかく、落ち着きなさい」

理美はそう言っ、美咲の肩を後ろからそつと抱く。そして、美
咲をそのまま部屋の中に誘導すると、貴雄の隣に座らせた。

美咲が腰を下ろすのを見届けてから、理美も再び正座する。

「さて、美咲本人が来たのですから、この子から率直な気持ちを訊
かれたらどうです？」

二人の男の表情を窺いながら、理美が問う。

美咲もまた、理美と同様に見つめる。

貴雄は完全に美咲から目を逸らしているが、対照的に南條は、彼
女を真つ直ぐに見据えていた。

「——お前が迷っているのは分かつてる」

表情を変えず、南條が口を開いた。

「だが、昼間に瀧村が言っていた通り、のんびりと構えられても困
る。厳しい事を言うようだが、自分の身を守るだけの力を付ける
のは、何よりもお前自身のためだ。

もちろん、無理に戦え、とは言わないし、それ以前に、鬼王はお
前への手出しは絶対にしないだろうが、お前を傷付けられない存在が
いないわけではない。——特に鬼姫は、奇襲をかけてくる可能性が高
い」

「——鬼姫、が……？」

「ああ。そいつはお前に並々ならぬ殺意を抱いているからな。一度
逢っただけでも、負の感情を剥き出しにしていたのは明白だった」

南條は一通り話し終えると、理美が用意したであろう緑茶に手を
伸ばした。渴いた喉を潤すように、ゆつたりと口に流し込んでいる。

美咲は今度は、貴雄に視線を移した。

彼は相変わらず、テーブルの一点を睨んだままで反応がない。

「——お父さん」

美咲が貴雄を呼ぶ。

貴雄はわずかにピクリと反応を見せた。

「お父さんは、私が女だから、女は弱いから戦わせたくないって思ってるの？」

美咲の問いにも、貴雄は貝のように口を閉ざしたままだった。

暫しの間、部屋の中がしんと静まり返った。

「——美咲は……」

今まで黙っていた貴雄が、やっと言葉を発した。

「美咲は、戦いたいと思ってるのか？ 妖鬼との戦いは生半可な気持ちでは出来ない。下手をすると命を落とす事にもなるんだ。現に、和海君の親父さんも、妖鬼と戦った末に亡くなっている。——

俺は、これ以上、自分の大切な者を……、奪われたくない……！」

貴雄は強く拳を握り締めた。

南條の父親を死なせてしまった事をどれほど後悔し続けてきたのかは、美咲にも痛いほど伝わってきた。しかし、半面で貴雄の弱さに苛立ちを覚えたのも本心であった。

「——勝手だね……」

美咲は呟くと、貴雄を激しく睨み付けた。

「それじゃあ南條さんはどうなるの？ 南條さんだって、もしかしたら、南條さんのお父さんと同じような目に遭ってしまうかも知れない。それなのに、私にはそれを、ただ指を銜えて見てるっていうの？」

私は嫌だ。そりゃあ戦うのは怖いから、ずっと独りで悩んできたよ。でも、私一人のために誰かが犠牲になるなんて考えたくもない！」

美咲は南條を見た。

「南條さん、たった今決めました！ 私だって、自分の身ぐらい自

分で守れるようになりたい！ 南條さんや雅通のようには無理でも、少しでもお役に立ちたいんです！」

南條は湯呑みを持ったまま、美咲をジッと見る。

「——本気か？」

「本気です。この目が信用出来ませんか？」

美咲に言われ、南條は更に美咲を強く見つめた。嘘か真実か——それを見極めようとしているのは確かだった。

やがて、南條は美咲から視線を外し、貴雄の方に目を動かした。

「貴雄さん、美咲さんは自分の意思で決めましたよ。異存はありませんよね？」

丁寧な口調ではあるが、有無を決して唱えさせない強さがあつた。貴雄は眉間に皺を寄せ、考えるような仕草を見せたが、もう、何を言っても無駄だと悟ったのか、諦めたように深い溜め息を吐いた。

「——そこまで言うなら、責任もちゃんと持てるのだろうね？」

「無論です」

貴雄の質問にも、南條は自信たつぷりに頷く。

「全く危険な目に遭わせないという保障は出来ませんが、俺も最善は尽くしますよ。」

大丈夫です。美咲さんは、あなたが思っている以上に強い。どんな苦難も乗り越えてゆけるでしょう」

南條はそう言つて、美咲に小さく微笑みかけてきた。

温かく包み込んでくれそうな優しい笑みを受け、両親も目の前にいるというのに、胸の鼓動が速度を増していた。

「よし！ この辺で気分を一新しちゃいましょう！」

暗くなりかけた空気を払拭するように、理美が明るく声を上げる。

「ちよつと遅れてしまったけど、これから夕飯の支度をするわね。」

せつかくだから、和海君も食べていきなさい！」

「いや、俺は……」

「遠慮しない！ あなたどうせ独り者なんだから、普段は口クなもの食べてないんでしょ？」

「は、はあ……」

南條が理美に圧倒されている。どんな状況に遭っても冷静さを失わないはずの彼が、理美に翻弄されているのは意外であった。

（もしかしたら南條さん、年上の女に弱いとか……）

そんな邪心が頭を過ぐる。同時に、やはり自分は、南條にとってはまだまだ子供にしか映っていないのかという虚しさが押し寄せ、そのまま俯いてしまった。

「美咲！」

しばらくして、理美に呼ばれた。

「ほら！ あんたも手伝いなさい！」

「えっ……！ わわっ！」

返事をする間もなく、美咲は理美にキッチンへと連行されてしまった。

残された男二人は、いつの間に用意していたのか、ビールを酌み交わしている。

それを見た美咲は、ふと、ある事に気が付いた。

「ねえ、お母さん」

冷蔵庫を漁っている理美に、美咲は言った。

「南條さん、ここまで何で来たか知ってる？」

「ん？ 車だったみたいけど？」

「えっ……！ ちよつと、車で来たのに飲酒は不味いでしょ！」

「平気よお。家に泊まってもらえばいいだけの話なんだしー！」

理美の言葉に、美咲は絶句した。

南條が我が家に泊まる――

成り行きとは言え、とんでもない展開になっている。もちろん、彼は客間に寝せるつもりだろうが。

あれこれと妄想を駆け巡らせながら茫然と立ち尽くしていたら、理美が美咲の顔を覗き込んできた。

美咲は仰天して、思わず背を仰け反らせた。

「美咲ちゃん」

理美は滅多にしない　ちゃん　付けに加え、ニヤニヤと気色悪い笑みを浮かべている。

「あんた、和海君に惚れてるね？」

「なっ……！」

美咲の心臓の鼓動は、最早、制御不能となっている。

我が母親ながら恐ろしい、と美咲は心底思った。

一方、理美は美咲の反応を楽しんでいる。

「ふふふ、やっぱり図星ね？　まあ、気持ちは分かるわ。和海君、かなりの美形だし、お母さんも後もうちよつと若かったら、ねえ」
意味深な事を言った理美は、鼻歌を歌いながら、野菜をリズミカルに切っている。

こんな親になりたくない、と美咲は切実に思ったが、血は決して争えないという事実も重々承知していた。

（でも、もしかしたら……）

そう思いかけて、美咲は慌てて頭を振った。

南條にも前に言われた。　負　の感情に押し流されてはいけな
いと。絶対に、自分に打ち勝つ事だけを考える。

理美の背中から視線を逸らし、美咲はリビングを見た。
勧められるがまま、南條は淡々とビールを煽っている。

（強く、なるんだ）

美咲は願いをかけるように強く思った。

第四章 第一節

南條が美咲の家を訪れてから、数日が経過していた。

高校に退学の旨を伝えるまで、美咲も両親も相当悩んだ。

辞める理由をどうすべきか。まさか、『対・鬼王のため』などという非現実的な事は言えるはずもない。

案の定、学校側も、美咲の退学に対しては難色を示していた。

学校側の気持ちは分かる。高校入学から、わずか一ヶ月余りで退学者が出たとなれば、外部からの評判は落ちる。ただでさえ、何かと難しいご時勢なのだ。落ち度がないとしても、外側の人間には、見えない所で何かがあったのだと、勘繰られてしまっても無理はないだろう。

学校側から考え直すように言われた時も、正直な所、気持ちが揺れた。

本当は辞めたくない。普通の女子高生として、普通の毎日を通じたいと、どれほど切に願ったか。

だが、鬼王に選ばれた時から、美咲は普通ではいられなくなった。そして、南條との出逢い。もし、美咲が選ばれた存在でなければ、南條とは、出逢う事はおろか、彼を知らずに一生を終えていたかも知れない。それもまた、心に隙間風が通り過ぎるように淋しく思える。

もう一つ、鬼王が言っていた美咲の中に眠るもう一つの魂であるオウキ。気にしないようにしていたつもりなのだが、ふとした瞬間に、その名が頭に浮かんでは消える。心なしか、美咲の中でオウキが蠢いているようにも感じた。

（私、本当にどうなるんだろ……）

一人、黙々と思案に耽っていた時であった。

「美咲！」

大声で名前を呼ばれ、美咲はハッと我に返った。

顔を上げると、助手席に座っていた雅通が、怪訝そうに後ろの美咲を振り返って見ている。

「何よ？」

美咲がつっけんどんに返事をする、雅通は不満げに口を尖らせた。

「んだよ。お前がずっと大人しくしてるから、心配になって声をかけてやったってのに……。ほんとに愛想のねえ女だよな、お前は」「煩いなあ。私は別に、あんたに心配して欲しいなんてこれっぽちも思っちゃいないわよ！」

「はあ？ 何だよその言い方は？ すっげーム力つく！」

「ああもう！ 男のくせにいちいち細か過ぎ！ だから女の子に全くモテないのよ！」

「てめ……！」

「いい加減にしろ、二人とも」

雅通が助手席から腕を伸ばし、美咲に掴みかからんとしたタイミングで、運転席の南條が淡々とした口調で止めに入った。

「狭い空間で喧嘩は止せ。喧嘩するほど仲が良いのは結構だが、暑苦しくて堪らない」

「何言ってるんですか！」

真っ先に否定したのは雅通だった。

「俺はこんなガサツ女は願ひ下げです！ どうせなら……」

「鬼姫のような女が良いと？」

「えっ！ いや……」

雅通が答えに詰まっている。言うまでもないが、図星のようである。

（ほんとに最低な奴……）

そんな事を思いながら、美咲は苦笑交じりに南條と雅通を見比べていた。

今、美咲達は南條の車で、聖地 と称される能力者の修行場へと向かっている。

もちろん、選ばれた者であれば、この世に生を享けた時からそれ相応の能力が備わっているそうだが、それでも、ある程度の修行を積みなければ、鬼王を封じるところか、低級の妖鬼すら斃す事も出来ないと言う。

そして、能力者には各々に師がいる。

美咲の場合、南條が直接の師となるらしいが、今回は、南條と雅通の師にも逢わせてくれると言う。

「あの、南條さんって、雅通の師じゃないんですか？」

美咲は南條に素朴な疑問を投げかけた。

「——そんなに俺は老けて見えるか？」

運転席に座っている南條の表情は、後ろからは全く窺えないが、声だけ聴くと、どこことなく覇気がないように感じる。

無意識のうちに、南條を傷付けてしまったのであるうか。そう思い、美咲は慌てて「違うんです！」と否定した。

「だって、雅通は南條さんを本当のお兄さんのように慕っているし、それに雅通はてんでガキ……」

「お前、そっちのがもつと失礼だよ……」

今度は雅通から突っ込みが入った。

「とにかく、俺は南條さんの弟子じゃねえ。同じ師の兄弟子と弟弟子って関係だよ。」

それと、俺達の師は、はつきり言って変人だけど……」

「へ、変人……？」

美咲の頬が引き攣った。

雅通も十分に変わっていると思っているが、その彼にも「変人」と言わしめる二人の師。逢う事に対し、期待より不安の方が大きくなる。

「確かに瀧村の言う通りかも知れないが」

美咲と雅通の間に、南條が弁護に入った。

「俺達の師はなかなか出来た人だ。それに、親父を早くに亡くした俺にとっては、本当の父親みたいな人だしな。藍田も、瀧村の言

葉を真に受けず、直接逢って確かめてみるといい」

「あ、はい……。すみません……」

「別に謝る必要はない。一番悪いのは、要らない情報を植え付けようとした瀧村だ」

「ちょっと……！　またしても俺患者扱いですか！　南條さん、本当に酷過ぎますよ！」

雅通は泣き出さんばかりに、ハンドルを握る南條の腕を何度も揺する。

「よ、止せっ！　事故ったらどうする……！」

さすがの南條も動揺している。後ろの座席からも、雅通に抵抗するように、必死でハンドルを握っているのがよく分かった。

（私、こんな事であの世になんて逝きたくないんだけど！）

そう思いながら、美咲もやんわりと止めに入った。

「雅通、いい加減にしなよ。あんたの性格の悪さなんて今更どうにもならないんだから」

「……んだとお！」

今度は美咲に怒りの矛先が向く。これはもう、聖地に辿り着くまで治まりそうにない。もちろん、分かっているながら怒らせるような事を言った美咲にも非はあるが。

（もうちょっと脳味噌を成長させた方がいいと思う……）

未だギャアギャア騒ぎ続ける雅通を見つめながら、美咲はうんざりとばかりに溜め息を吐いた。

聖地へ到着したのは午後四時過ぎであった。

前に南條から話は聞いていたが、見慣れた光景は全くなく、草花や木々が鬱蒼と繁っている。

自然に慣れていない美咲は、心底この場から逃げ出してしまったような衝動に駆られた。だが、ここから家に帰るとなると、どれほどの時間がかかるであろうか。無論、車の免許など持っていないので、南條の車を借りるというのも到底無理な話だ。それ以前に、

仮に免許を持っていたとしても、簡単に貸してくれないであろうが。そんな事を考えていた、まさにその時であった。

「あら、やっと到着したのね」

背中越しに、女性の声が聴こえてきた。

三人は同時に振り返ると、そこには、南條と同世代か少し上と思しき女性が立っていた。整った顔立ちに、カラーリングを全く施していない黒髪は後ろで一つに纏め上げられ、清潔感が漂っている。

一瞬、この女性が南條と雅通の師なのかと思ったが、よくよく考えてみたら、それは絶対に有り得ない。見た目年齢も然る事ながら、南條は来る途中、師を『本当の父親みたい』だと言っていたのだ。

（それじゃあこの人は……？）

首を傾げながら女を見ていたら、彼女はニコリと美咲に微笑んできた。

「あなたが藍田美咲さんよね？」

「え……。あ、はい」

女に自分の名前を呼ばれ、美咲は慌てて頷く。

そんな美咲に、女は何を思ったのか、顔を近付けるなり、不躰なほどジロジロと見つめてきた。

（なっ、何なの……？）

美咲は瞠目したまま、その場に固まった。まるで値踏みでもされているような、そんな居心地の悪さを感じてしまう。

「——もういいでしょ、江梨子さん」

女二人の間に、南條が割って入ってきた。

「藍田には、改めてじっくりと自己紹介させますから。」

それよりも、樋口^{ひぐち}さんが待ち草臥れているんじゃないませんか？」

南條が言くと、江梨子さんと呼ばれた女は「大丈夫よ！」とケラケラ笑った。

「待ち草臥れているどころか、あの人、ずっとガラクタ作りに没頭しているから」

「うわっ……！——マジかよ……」

ガラクタ作りに思い当たる節があるのが、雅通は口の端を引き攣らせた。

南條もまた、雅通ほど露骨に出ていないものの、それでも心なしか、表情が少し険しくなっているように感じた。

みるみる表情が曇ってゆく二人を見比べながら、美咲はふと、雅通が車の中で言っていた、彼らの師のイメージを想い出した。

『まあ、俺達の師は、はっきり言って変人だけど……』

もしかしたら、南條が先ほど言っていた 樋口さん というのが二人の師なのかも知れない。そして、その樋口のガラクタ作りが如何なるものなのかは、初対面となる美咲は全く分からないが、南條と雅通の反応を見る限り、決して歓迎出来るような趣味——と呼べるのであるうか——ではないという事だけは安易に想像が付く。

車の中で感じた不安が、再び心の中に過ぎる。

「ちよつと君達」

江梨子は胸の前で腕を組みながら、二人の男を交互に見た。

「逢う前から美咲ちゃんを不安に陥れてどうするの？ 見なさい？

美咲ちゃん、すっかり顔色が悪くなっちゃってるわよ」

江梨子はそう言つと、美咲を自分の元へと引き寄せた。

気が付くと、美咲は江梨子に抱き締められている。

美咲ちゃん と呼ばれた事に対しては、雅通の いきなり呼び捨て に比べたら大した事はないのでさほど気にもならないが、理由も分からず抱き締められるのはさすがに困惑する。

江梨子にしてみたら、多分、美咲をリラックスさせるつもりで起こした行動だったと思うが、美咲の中では、それがかえって不安を増幅させた。

「——江梨子さん」

眉間に皺を刻ませ、南條は先ほどと同様に口を挟んだ。

「あなたの行動も十分藍田を困らせてますよ？ いい加減、解放し

てあげて下さい」

南條が嗜めると、江梨子は不満げに口を尖らせた。

「だって、若い女の子と接するのは久し振りなんだもの。普段は、むさつ苦しい男共しか周りにいないし……。それに、美咲ちゃんは凄く可愛いから気に入っちゃったのよ！抱き心地も最高！」

江梨子が美咲を抱く力は余計に強くなった。

（ぐ、ぐる……、じい……）

ほっそりとした体型からは想像が付かないほど、江梨子の腕力は凄まじい。

このまま、彼女の腕の中で窒息死するのではと、美咲は半ば本気で思った。

しばらくして、美咲達は江梨子に先導されて南條と雅通の師の元へと向かった。

あれから江梨子は美咲を解放してくれたものの、余程気に入られてしまったようで、今度は歩いている間中、彼女の質問攻めに遭っていた。

家族は何人か、高校はどこに行っていたのか、趣味は何なのか。挙げ句の果てには、本人達を目の前にして、南條と雅通のどちらが好みなの、と訊いてくる始末。

当たり障りのない質問であれば良いのだが、さすがにこればかりは簡単に答えられなかった。

それでも食い下がろうとしてきた江梨子に、最終的には南條からのやんわりとした指摘が入り、渋々ながら引き下がってくれた。

「——しょうがないわね……。ま、そのうちまた訊けるかも知れないから、今日のところは勘弁してあげる」

江梨子は完全に諦めたわけではなかったらしい。

嬉々として鼻歌を歌い始めた彼女を見ながら、美咲はガツクリと肩を落とした。

「さ、着いたわよ」

四人が辿り着いた場所は、木造の一軒家だった。美咲の家に比べたら小さめだが、それでも、山の中にある建物にしては十分過ぎるほど立派だ。内部の造りも、普通の家と大差ない。

江梨子の話だと、メインとなるリビングダイニングと、他には寝室が五部屋、小さいながらトイレと風呂も完備されているらしい。リビングへと入った美咲達は、江梨子に促されるまま、部屋の中に設置されたテーブルの前まで行くと、南條と雅通は並んで腰を下ろし、美咲は二人に向かい合わせに正座した。

それを見届ける間もなく、江梨子はキッチンへ向かい、てきぱきとお茶を用意する。と言っても、冷蔵庫から取り出したペットボトルのお茶を、氷を入れたコップに注いでいるだけであつたが。

「さ、どうぞ」

江梨子は各々の前に、冷茶を満たしたコップを置く。

「長旅で疲れただろうから、まずはゆっくりしてなさいな。それじやあ、私はあの人を呼んで来るから」

あの人　とは、間違はなく南條と雅通の師であろう。

(いよいよ、なんだ……)

変な先入観を散々植え付けられてしまったせいで、不安の波がどつと押し寄せる。

それを江梨子は素早く察知し、「大丈夫よ」と微笑んだ。

「本人は決して悪い人間じゃないから。それに美咲ちゃんのように可愛い子なら、あの人にもすぐに気に入ってくれるわ」

そう言い残すと、江梨子は踵を返してリビングを出て行った。

江梨子の気配が消えた後、美咲は「あの」と口を開いた。

「ちょっと気になったんですが、あの江梨子さんって人は……？」

美咲の問いに、南條はゆつたりとした口調で答えた。

「あの人は樋口さん——俺達の師の奥さんだ」

「ついでに言えば、江梨子さんも俺達同様の能力者なんだぜ。——そうは見えないけどな」

勝手に口を挟んできた雅通に南條は眉を顰め、「お前は一言多過

ぎる」と寤めた。

「江梨子さんの存在があるから、俺達も心置きなく戦えるんだろうが。それに、今の言葉をそっくりそのまま言ってみる。——『君の方がよっぽど能力者らしさに欠けるわよ!』と笑い飛ばされるのがオチだ」

「——分かってますよ……。だから本人のいない時に言ってるんじゃないですか……」

またしても雅通は不貞腐れ、冷茶の満たされたコップを手に握ったまま、誰とも視線を合わすまいと言わんばかりにそっぽを向いてしまった。

そんな雅通を見ながら、この男には学習能力というものがないのか、と美咲は呆れた。

(本当に、こいつに凄い能力があるなんて信じられないし……)

つい、疑念が湧いてしまう。

と、その時だった。

リビングの扉が開かれ、江梨子が再び姿を現した。

「お待たせえ!」

江梨子に腕を引かれて中に入ってきたのは、四十代前半ほどの男。身長は江梨子より少し高めといった所だが、肉付きの良さと極太の眉が異様に貫禄があり、美咲を尻込みさせた。

この男が、南條達の師であろうか。だとしたら、抱いていたイメージとは全く違う。雅通の話から、かなり軽薄男な印象を抱いていたのだ。

男から視線を外せずにいると、側にいた江梨子と目が合った。

江梨子はニッコリ笑んだ。

ひぐちやすあき

「美咲ちゃん、この人が樋口泰明。見た目は怖いけど害はないから安心して」

(あ、『安心して』と言われても……)

笑顔を作ろうにも、頬の肉がすっかり固まり、引き攣ってしまう。そんな表情を浮かべていると、今度は樋口が美咲に近付き、視線を

投げかけてきた。

射抜くような眼光に、美咲の背中に冷や汗が止めどなく流れ落ちる。

（怖い……！ 怖いってば……！）

南條に助けを求めようとしたその時、樋口の手が美咲に伸びた。

美咲の恐怖は限界に達した。目を閉じ、歯を強く食い縛ると、これから起こるであろう事に覚悟を決めた。

ところが、樋口は美咲を殴るところか、豪快に頭を撫でてきたのだ。

予想外の展開に驚きつつ、美咲はゆっくりと瞳を開ける。

「いやあ！ 想像以上の美少女だ！」

樋口は美咲と視線が合うなり、部屋中に響き渡るほどの声で言った。

顔は笑っている。が、見た目が見た目だけに、全く怖くないとは言い難いものだった。

「ぎゃっははは……！ 美咲、ビビり過ぎだぜ！」

先ほどまで拗ねていたはずの雅通が、腹を抱えて美咲を指差しながら爆笑している。

南條もまた、雅通ほど大笑いはしていないものの、下を向き、声を殺して笑っていた。

二人を見ていたら、美咲に悔しさが沸々と込み上げる。

（雅通はともかく、何で南條さんまで……！）

未だに身体を震わせて笑い続ける南條を、美咲は恨めしく思いながら睨む。

「笑い過ぎ！」

突然、江梨子の叱責が飛んだ。途端に、南條と雅通から笑いがピタリと止む。

「全く！ 美咲ちゃんは泰明さんと初めて逢うんだからビックリしちゃって当然でしょ！」

それに何なの？ 南條君まで一緒になって笑うなんて！」

「――す、すみません……」

江梨子に説教を食らった南條は、ばつが悪そうに肩を竦め、彼女から視線を逸らしている。

（南條さんが、負けてる……）

美咲は珍しい光景だと思いつつも、ふと、以前に南條が家を訪れて来た時の事を想い出した。

年下の、しかも一回りも年の離れた美咲が相手だと落ち着いた大人となるが、母親の理美にしろ、江梨子にしろ、例外なく年上の女には弱いという事だろうか。

「まあまあ。その辺で勘弁してやれ」

まだ南條に食ってかかりそうな勢いの江梨子を宥めるように、樋口は彼女の肩を優しく叩いた。

「彼女も困っているし、これから長い間はいつらと生活を共にするんだ。しょっぱなから喧嘩して険悪な雰囲気になっちゃったら、彼女だって居心地が悪くて仕方ないだろ。ほら、まずは座れ」

「――もう。あなたは甘いのよ……」

不満げにぼやきながらも、江梨子は素直に樋口の言葉に従って正座した。

樋口はそれを満足げに見届けると、自らもどっかりと江梨子の隣に胡坐を掻き、「さて」と口を開いた。

「紹介は粗方済んでしまったから良しとして……。えっと、美咲、と呼んで良かったかな？」

見た目に似合わず律儀な性格らしい。美咲の呼び方についても、きちんと了承を得ようとしている。

まだ、樋口への恐怖心は完全に消えていないが、それでも、先ほどよりは少しばかり好感を覚えた。

美咲は「あ、はい」と短く答えると、樋口は嬉しそうに頷いた。「そうか。それじゃあ遠慮なく呼ばせてもらおう。

では美咲、今日からこの聖地で靈力を引き出すための修行をするわけだが、その前に、何か気になる事などあるかい？」

樋口に問われ、オウキの事を改めて想い出した。

貴雄にも南條にも、タイミングが掴めずに言えなかった事。だが、この際だから話しておいた方が良さだろうか。美咲はそう考え、「修行とは関係ないのですが……」と切り出した。

「実は、南條さんと雅通に逢った日、鬼王の夢を見たんです。その時、鬼王は私の中に、『オウキの魂が眠っている』と言っていました。——ただ、オウキが誰なのかまでは教えてくれなかったのですけど……」。

私は今まで、ただ、偶然鬼王の封印を解いてしまったから、生贄として選ばれただけだと思っていました。けど鬼王は、私が封印を解くのは偶然ではなかった、とも……。

あの、オウキとは一体何者なんですか？ 私、それがずっと気になっていて……。もし、知っているのであれば……」

藁にも縋る気持ちで、美咲は樋口に訊ねる。

だが、美咲の切実な想いとは裏腹に、樋口は怪訝そうに首を捻ってしまった。

「——オウキ か……。初めて聞いたな。

江梨子、お前は知ってるかい？」

樋口は江梨子に視線を移して問うが、江梨子は「知らないわ」とあっさり否定した。

「大体、あなたが知らない事を私が知っているわけないでしょ」

「——そうか。となると……」

「ええ。江梨子さんと同じくです」

樋口が訊く前に、南條は即答した。

「——やっぱりな……」

樋口は溜め息を一つ吐くと、再び美咲に向き直った。

「美咲、悪いがこの通りだ。俺達はオウキという者を知らないし、名前すら聞いた事がない」

「——そうですか……」

樋口からオウキの事を聞けるかも知れないと思っていただけに、

美咲の落胆は相当なものだった。

その時、南條が「あの」と口を開いた。

美咲達は一斉に、南條に視線を注ぐ。

「オウキについてですが、鬼王との関わりを調べてみる必要があるんじゃないですか？」

「うーん……。俺もそれは思ったけどなあ……」

眉間に皺を刻みながら、樋口は顎を擦る。

「大体、手がかりが何一つないのに、どうやって調べる気だ？――

――まさか、日本全国津々浦々、隅々まで周って探す、とか言わないよなあ……？」

「言いませんよ」

樋口の言葉に、南條は素早く突っ込みを入れる。

「全国を巡らなくとも、もしかしたら、藍田本家に何かあるかも知れません。絶対、という確信はありませんが……」

「なるほど！ 確かに藍田家は代々、鬼王との繋がりが一番深い！ いやあ、さすがは南條！」

樋口は水を得た魚のように、表情を明るく輝かせた。雅通、そして江梨子までもが、尊敬の眼差しで南條を見つめている。

だが、ただ一人、美咲だけは素直に喜ぶ事が出来なかった。

藍田の本家は、鬼王が縛り付いている桜の木がある場所の近くである。また、あそこへ行かなくてはならない。それを考えるだけで、美咲の中で、忘れかけていた恐怖が呼び覚まされる。

「藍田」

南條が美咲に視線を向けた。

「お前が行く必要はない。お前の目的は、飽くまでもここでの修行だ。それに今は、現の鬼王に遭遇するのは辛いだろうしな」

どうやら、美咲の不安を逸早く察知してくれていたようだ。安心させようとしているのか、小さく笑みを見せる。

それだけで、美咲の心は救われたような気持ちになった。

「よし、決まりだな」

樋口も満足そうに笑むと、これからの事を話し始めた。

「それじゃあ、南條には藍田本家へ行ってもらおう。瀧村も補佐役として同行しろ。本当であれば、南條が美咲を指導する立場なのだが、この際、止むを得ん。ただ、今日はここで疲れを取り、明日になったら出発しろ。美咲については、俺と江梨子で面倒を見よう」
てきぱきと指示を出す樋口を、美咲はただ、ポカンと口を開けながら見ていた。

雅通が言っていた 変人 というイメージは微塵もない。それどころか、本当に二人の師匠らしい貫禄を感じさせる。

（樋口さんのどこが変人なんだろ……？ それとも、逢ったばかりだから本性を現していないだけ……？）

美咲は怪訝に思いながら、箔のある樋口の顔を暫し眺め続けた。

第四章 第二節

美咲と共に修行に來たはずが、まさか、一泊した後で一時的にでも戻る事になるうとは、南條も予想だにしなかった。

美咲の家を訪れてから、彼女とは何度か連絡を取り合っていたが、オウキ という者についての話は微塵も出てこなかった。いや、もしかしたら、美咲は何度か言おうとしていたのかも知れない。

彼女は変に思慮深い面がある。だからこそ、南條が知らない所で言うタイミングを計っていたのであろう。それを察してやれなかったのは、完全に南條の落ち度である。

だからこそ、自ら藍田本家へ赴くと申し出たのだ。美咲への罪滅ぼしのつもりで。

（これで、あいつを少しでも救う事が出来るのなら……）

南條は、与えられた寢室のベッドに腰かけながら、自分を縋るような瞳で見つめる美咲を想い描いていた。

その時、部屋のドアが勢い良く開いた。

「南條さん」

現れたのは、雅通であつた。

南條は苦虫を噛み潰したように渋い顔をした。

「――瀧村、ノックぐらいしろ」

南條が窘めても、雅通は全く気にした様子も見せず、「まあまあ」と笑顔を浮かべながら中へ入って來た。

「あ、何もお構いなくう！」

「端から呼んでないから、もてなしなんかする気もない」

雅通の言葉に南條がきつぱりと否定すると、雅通は「相変わらず冷たい……」と、哀しげに顔を歪めた。

だが、それも一瞬の事で、すぐに立ち直ったかと思うと、これまた、断りもなく部屋に完備された折り畳み椅子を広げて腰を下ろした。

さすがに南條も、これ以上突っ込むのは疲れてしまい、溜め息を吐いて黙った。

「——南條さん」

雅通が口を開いた。

その表情は、つい先ほどとは打って変わって真剣である。

「当たり前前の事ですけど、藍田本家へ行けば、鬼王と遭遇してしまうんですよね……？」

「そうだな。鬼王が縛られている桜の木と藍田本家は目と鼻の先だ。嫌でも鬼王に遭遇するだろうな」

「——ですよね……」

そう呟く雅通の顔が浮かない。

南條は、まさか、と思いつつ雅通に訊ねてみた。

「瀧村、怖いのか？」

雅通は身体をピクリと反応させた。どうやら凶星らしい。

「——分かりますか……？」

「ああ。しかし、お前は鬼王に強い関心を示していたと思ったが……」

「——そんなの、単なる強がりですよ……」

雅通は肩を落として力なく言った。

「良くて中級レベルの能力しかない俺にとって、鬼王は畏怖を抱かせる存在です。——本当は、下っ端の妖鬼と戦う時も、自分を奮い立たせないとすぐに怖気付いてしまう……」。

情けないですよ……。これじゃあ、俺も美咲の事をとにかく言う資格なんてない。——南條さんも呆れたでしょ？」

一通り言い終えると、雅通は自らを嘲り笑うように、鼻をフンと鳴らした。

だが、南條は雅通を情けない男だとは全く思わなかった。それどころか、自分の窺い知れぬ所で色々考えていたのか、と改めて見直していた。

「そんなに自分を貶めるな」

南條は微笑を浮かべながら、雅通の肩を叩いた。

「本当の強さとは、まず、自分の中の弱さを認める事だ。俺は正直な所、お前は自分の力を過信し過ぎているんじゃないかと心配だったからな。だから今、お前の率直な気持ちを聞けて安心したよ。

大丈夫だ。弱さを乗り越えられれば、お前は幾らでも強くなれる。だから自分を信じろ」

「――南條さん……」

雅通は少しずつ、口許を綻ばせた。

「ありがとうございます！ 本当に嬉しいですよ！ 俺は南條さんに比べたらまだまだ未熟だけど、何かあったら全力で南條さんをサポートしますから！」

いつもの調子で意気揚々と宣言する雅通に、南條も安堵した。

煩いのは疲れると思うものの、逆に、雅通が悩み落ち込んでいる姿というのはあまりにも不釣り合いだ。やはり、彼は少しぐらい脳天気な方が丁度良い。

「それはそうと南條さん」

すっかり立ち直った雅通が、南條に訊ねてきた。

「万一ですけど、もし、藍田本家にオウキの手がかりがあるのなら、美咲の親父さんに訊いてみた方が手取り早くないですか？」

「――貴雄さんか」

雅通に言われ、南條は、穏やかでどこか頼りなさも感じさせる貴雄の表情を思い浮かべる。貴雄も確か、藍田本家の血筋であったはずだが、彼の雰囲気から察するに、オウキについて知っているとは到底思えない。

しかし、雅通の言う事も一理ある。それに、直接藍田本家に乗り込むより、貴雄から話を通してもらった方が面倒も少なくて済むだろう。

「そうだな。貴雄さんから芳しい答えは期待出来ないと思うが、訊くだけ訊いてみよう。それから、藍田本家へ行くかどうかを決めようか」

「はい！」

雅通が頷くと、南條は小さく笑んだ。

「では、明日は夜明けと共にここを発つか。なるべく貴雄さんには早めに逢いたい。午前四時頃に出発すれば、どんなに遅くとも昼過ぎには向こうに着くだろう。」

そんなわけだから瀧村、今日は早めに就寝して疲れを取っておけ。俺も樋口さんと明日以降の打ち合わせを軽くした後、すぐに寝させてもらう」

「分かりました。じゃあ、お言葉に甘えて早く寝ます」

雅通はそう言つと、すくつと椅子から立ち上がり、ドアまで向かった。

「南條さん、少し早いですけどお休みなさい」

「ああ。お休み」

南條から返された挨拶に、雅通はニツコリ頷くと、入って来た時とは対照的に、静かに部屋を出て行った。

雅通の気配が完全に消え去ってから、今度は南條も立ち上がる。

（さて、樋口さんの所に行くか）

南條は部屋を出て樋口の元へと向かった。

樋口の部屋の前まで来ると、ドア越しに妖しげな物音が聴こえてくる。

（またか……）

南條は口の端を引き攣らせながら、拳に力を入れてドンドンと数回ノックする。それでもしないと、中にいる樋口にノック音が届かないのだ。

「はいよ！」

十回ほどのノックで、やっと樋口からの反応が返ってきた。

「樋口さん！ 南條です！」

無駄に声を上げるのはあまり好きではないが、普段の声音では樋口に届かないのも承知していたので、止むを得ず、怒鳴るように呼

びかけた。

「おうっ！ 南條か！」

瀧村もだが、地声の大きい樋口さんの声は良く通るな、と呆れていたら、その声同様、ドアも豪快に開かれた。頭には捻り鉢巻きのように白いタオルが縛られている。

「どうした？ 出発前の挨拶にでも来たか？」

南條の顔を見るなり、樋口は言った。

南條は「ええ。そんな所です」と、苦笑を浮かべた。

「そうか。ま、とにかく入れ。——ちよつとばかり散らかっているけどな」

「はい。お邪魔します」

樋口に促された南條は、部屋の中へと入る。途端に、彼の表情はみるみる険しくなった。

決して広いとは言えない六畳間に、工具や木片、金属が散乱している。足の踏み場など、全くと言っていいほどない。

「まあ座れ。あ、その辺の物は適当に除けていいから」

「はあ……」

『適当に』と言われ、南條は益々困惑した。だが、除けなければとても座れそうにないので、渋々ながら物を移動させてゆく。

（それにしても、俺達より数日前からここに滞在していたとは言え、よくもここまで派手に散らかせるもんだ……）

ゴミ屑 と呼んでも過言ではない木片を拾いながら、南條はひっそりと溜め息を吐く。

一通り片付け、辛うじて座れるだけのスペースを空けると、南條はやつとでその場に胡坐を掻いた。

「悪いな。江梨子にもしよつちゅう注意されるんだが、俺としては散らかっている方が安心してしまつてなあ」

「——今度は何を作るつもりですか……？」

呆れ顔を隠す事なく南條が訊ねると、樋口は照れ臭そうに頭を掻いた。

「いやあ……。ただ、修行ばかりしていてもストレスが溜まっちゃまうしなあ。だから、気持ちを落ち着けるためにも、つつい工具を弄ってしまっただけって言うか……」

「別に構いませんが、周りに迷惑をかけない程度にしてください。ただでさえ、瀧村はここへ来る途中、藍田に余計な事を吹き込んでしまったんですから……」

「ん？ 余計な事？」

「はい。——『俺達の師は 変人 だ』と」

南條の言葉に、樋口は一瞬目を丸くしたが、突然、大声を上げて笑い出した。

「あつはははは……！ 変人 か！ こりゃあ瀧村にも一本取られてしまったなあ！」

「——笑い事じゃないでしょ……」

南條は再び溜め息を吐く。

「いや。それよりも……」

南條は咳払いをすると、本題を切り出した。

「樋口さん、俺と瀧村は明日の午前四時頃、ここを発ちますよ。最初はそのまま藍田本家へと向かおうかと思いましたが、瀧村が、まずは藍田貴雄さんにも話を訊いてみたらどうかと言っていましたので、貴雄さんを訪れてみるつもりです。それに、貴雄さんから本家に話を通して貰えば、俺達もそちらに行きやすくなりますから」

南條の話を聞きながら、樋口は「なるほど」と何度も相槌を打った。

「その辺は、南條の判断に任せるよ。それにしても、瀧村も成長したなあ。あの鼻垂れ小僧が、いっちょ前に南條に助言するようになるとは……」

樋口は胸の前で両腕を組みながら、嬉しそうに微笑む。

「とにかく、オウキについては任せたからな。美咲の事は、俺と江梨子とでしっかり面倒を見てやるから安心しろ」

「すみません。——本当は俺がやるべき事でしたのに……」

「そんなのは気にするな！ その代わり、しっかりと成果を上げて報告に来る事。いいな？」

樋口の言葉に、南條は強く頷いた。

美咲は、江梨子に案内された寝室のベッドに横たわり、今日の事を振り返っていた。

まさか、誰もがオウキについて知らなかったとは思ってもよらなかった。だが、美咲がオウキの事を話した後の反応はさすがに早かった。

南條と雅通は、明日から本家へと向かう。いつ行くかまでは聞かなかったが、多分、美咲が寝ている間に発ってしまうのだろう。

美咲のために、行動を起こしてくれた南條には感謝している。それなのに、半面で淋しさを感じてしまう。

（これじゃあまるで、私が子供みたいじゃない！）

心の中で自分を叱咤してみても、心に空いた隙間は埋まらない。

（我慢、しなきゃ……）

何度も強く言い聞かせる。

（オウキの事が分かれば、鬼王を封じ直すのも、少しは楽になるかも知れないんだから……）

美咲は瞼を閉じ、暫し心の整理をする。

美咲も美咲で、明日からは早速、能力を引き出すための修行が始まる。いつまでも雑念を抱いたままでは、これからの修行の妨げにもなりかねない。強くなると決意した以上、南條に甘えたままではいけないのだ。

「頑張らなきゃ」

今度は、口に出して自分に言い聞かせた。

満月が眩く輝いている夜だった。

桜の太木の前で両腕を組みながら、鬼王は何かに想いを馳せるように口許に笑みを浮かべている。

「鬼王、何か良い事でもありませんか？」

ウェーブのかかった淡い栗色の髪を靡かせながら、琉璃が訊ねる。その問いに対し、鬼王は更に嬉しそうに口の端を上げた。

「——我が妻が、少しずつ目覚め始めている」

「我が妻 とは、つまり……」

「そう。オウキだ」

オウキ ——その名を耳にし、琉璃の中に不快感がジワジワと広がる。

鬼王にとっては、オウキが絶対的な存在。分かっているつもりでも、感情は全く着いてゆかない。

オウキの魂を宿しているという少女は、鬼王に対し、忠誠どころか、宣戦布告紛いの事を言い放つたらしい。

長い間、鬼王の手となり足となり仕えてきた琉璃にとっては、信じ難くもあり、腹立たしさも感じる。だが、オウキを得なければ、鬼王は完全復活を望めない。

「琉璃」

名前を呼ばれ、琉璃はピクリと反応する。

鬼王は笑みを引つ込めると、今度は冷やかに彼女を見遣る。

「お前に限って有り得ない事だとは思っているが、私を裏切るような真似は絶対にするな。お前の命運は私が握っているのだ。そんな私は、お前の魂を永遠に消し去る事など造作でもない。——そう、肝に銘じておけ」

予想はしていたが、鬼王の言葉に琉璃の背筋が一瞬にして凍り付く。

魂を永遠に消されるという行為は、即ち、業火燃え盛る地獄に落とされ、二度とこの世に這い上がる事が出来ないという事である。さしもの琉璃も、それだけは避けたいと切望する。魂だけの存在であっても、生きる事も死ぬ事も出来ずとも、鬼王の側に仕えてい

たい。そのためなら、鬼王とオウキが結ばれてしまふのを、黙って見つめているしかない。

「――私は、鬼王に忠誠を誓った身。どんな事があるうとも、私は永遠にあなたにお仕え致す所存です」

背中に流れる冷たい汗を感じながら、琉璃は鬼王を真っ直ぐに見据えながら告げた。

鬼王は探るように琉璃を見返す。

「分かった。私にとつても、お前はなくてはならない存在だ。すぐに消すような真似はしない」

「ありがとうございます、鬼王」

琉璃が鬼王に恭しく跪くと、鬼王はゆっくりと立ち上がった。

「では、早速だが琉璃に頼みがある」

鬼王の言葉に、琉璃は頭をもたげた。

「何でしょうか？」

「明日、邪魔な鼠が二匹、ここいらに来ようとしているようだ。少しばかり、奴らの相手をしてやってくれぬか？」

「鼠、ですか……？」

琉璃は少し考えて、鬼王の指す 鼠 が、以前に逢った能力者二人の事であると思ひ当たった。

二人いたうちの一人は、顔すら想い出せないが、もう一人の事ははっきり憶えている。

確か、 南條和海 と言ったであろうか。

鮮やかで、舞うような美しい剣捌きを見せてくれた青年。再び逢つてみたいと密かに思っていただけに、喜びもひとしおである。

「お任せ下さいな」

先ほどとは打って変わって、琉璃は満面の笑みを浮かべた。

「私も、最近はずっかり身体が鈍っていましたもの。存分に遊ばせて頂きましょう。特にあの青年は、腕慣らしには丁度良い相手ですわ」

「その言葉を待っていた」

鬼王は嬉しそうに頷く。

「では、私はここから、お前達の戦い振りをゆっくりと観察させてもらうでしょう。——あの男、確かに楽しみだな」

鬼王は、フツと笑うと、自らの身体を桜の木の中に融け込ませてゆく。

「鬼王の、仰せのままに……」

珠璃は桜の木に背を向けると、フワリと夜空にその身体を浮かせた。

（さて、今晚は獲物探しをしないと）

珠璃の容貌は月明かりに照らされて、妖しい美しさを醸し出していた。

第五章 第一節

ぴぴぴぴ……

夢の中を彷徨っていた美咲の耳に、煩い電子音が響いてきた。

美咲は目を閉じながら眉を顰め、音の発信源を手で探る。あちこちに手がぶつかり、しばらくそれを掴む事が出来なかったが、何とか探り当て、勘で電子音を止める。

止まった途端、静けさが戻った。

美咲はうつ伏せになったままで目をうつすらと開け、電子音の発信源であった携帯電話を睨んだ。表示されているデジタル時計の時間は、AM 6:00 となっている。

「……によ……。こんな朝っぱらからあ……」

寝惚けながら独りごち、再び目を閉じようとしたが、次の瞬間、美咲はハッと気が付いた。

「ヤバッ！」

美咲は咄嗟にベッドから飛び起きた。

今になって想い出したが、彼女は昨日から、修行のために聖地に来ていた。そして昨晚、夕食が済んでから、翌朝は六時起床だと、樋口に命じられていたのであった。

「急がないと！」

美咲はベッドの上に置いていた洗面用具一式を手に取り、足早に寝室を出た。

洗面所へ行くと先客がいた。

上下ジャージという、それこそ学生の修学旅行のようなスタイルの江梨子が、洗顔を終えてタオルで水分を拭き取っていた所だった。「おはようございます」

美咲が声をかけると、江梨子にはこやかに「おはよう、美咲ちゃ

ん」と返してきた。

「どう？　昨夜はよく眠れた？」

「はい、お陰様で。うっかり寝過ぎそうになったほどです」

「あらま！　美咲ちゃんってば正直ねえ」

江梨子はケラケラ笑うと、昨日同様、美咲を強く抱き締めてきた。

「でも、そんな美咲ちゃんも大好きよ！　本当に可愛いー！」

「……ぐぐ……ぐるじいでずう……」

江梨子の事は決して嫌いではない。しかし、この抱き着き癖だけはどうかして貰いたい。

誰かに助けを求めたい。そう思っていた、まさにその時であった。

「おいおい。朝っぱらから女同士で、何イチャイチャしてるんだ……」

……？」

二人の前に、破れかけた白いＴシャツとスウェットの下を身に着けた樋口が、寝惚け眼で現れた。

「あら、おはよう」

江梨子は樋口に視線を移し、ニッコリと挨拶する。だが、美咲を解放する気は全くないようで、未だ抱き締められたままである。

そんな二人を、樋口は微苦笑を浮かべながら見つめていた。

「別に構わんが……。でも、美咲は嫌がつてるんじゃないか？　いい加減に離してやったらどうだ？」

「あら、妬いてるの？」

「今更お前に焼き餅なんて妬かんよ」

「——つまんないわねえ……」

樋口の言葉に江梨子は口を尖らせると、やっとの事で美咲を解き放ってくれた。

苦しさから解放された美咲は、何度も肩で息をして新鮮な空気を取り込む。

「それはそうと泰明さん」

顔を拭いたタオルを手で畳みながら、江梨子は樋口に言った。

「南條君と雅通君の姿が見えなかったんだけど……。もしかして、

もう出発しちゃったの？」

「ああ。昨夜、午前四時頃にここを発つと、南條が言っていたからな。

俺も何とか起きて見送ってやったが、その後はまた、あいつらに悪いと思いつつ二度寝しちゃったよ」

樋口はばつが悪そうに頭を掻いている。

「何だ……。それならそれで起こしてくれば良かったのに……。

ねえ、美咲ちゃん？ 私達だつて見送りぐらいしたかったわよねえ？」

江梨子に振られ、美咲は慌てて「え、ええ」と頷く。

江梨子ではないが、美咲もまさか、そんな朝早くから行ってしまうとは思ひもなかったので、少しかりショックであった。

永遠に逢えなくなるわけではない。それでも少しだけ、南條の顔を見ておきたかった。

だが、過ぎてしまった事を、いつまでもクヨクヨしているわけにもいかない。美咲は美咲で、ここでやるべき事がある。昨夜も、自分自身に誓ったのである。これから、もっと強くなるのだと。

洗顔を終え、身支度を整えてから、美咲はキッチンへと向かって、江梨子と共に朝食を作っていた。ただ、実質的には江梨子が殆どやっていたので、美咲は彼女の手伝いをするのみであったが。

昨晚、夕飯を作っているのを見た時もあったが、さすがに江梨子は手際が良い。

十分に熱したフライパンに、慣れた手付きで卵を割り入れ、ほど良い半熟の目玉焼きを作り上げた。

サラダ用のキャベツを刻む手も鮮やかなもので、美咲はすっかり感心して見惚れていた。

「あ、美咲ちゃん。悪いけどこれ、リビングに持って行ってくれる？」

江梨子は手を休めず、焼き立ての目玉焼きが載せられた皿と、三

段に重ねられた空の小さなサラダボウルを指差す。

美咲は「はい」と頷くと、言われた通り、お盆にそれを載せてリビングへと運んだ。

（お母さんもだけど、やっぱり普段から主婦をやってる人は違うんだろっな）

そんな事を考えながら、美咲はテーブルに、目玉焼きの皿とサラダボウルを並べる。

昨晩は南條と雅通もいたため、賑やかな夕食であったが、いざいなくなると、やはり淋しいような気持ちになる。

（家では、お父さんとお母さんの三人だけなんだから、普段とさほど変わらないのに……）

マイナス思考になりつつあった事に気付き、美咲はそんな自分に喝を入れるつもりで両手で頬を叩いた。

その頃、南條と雅通は、途中で見付けた二十四時間営業のコンビニエンスストアで朝食を買い、それを駐車場で食した後、雅通に運転を交代して貰って車を走らせていた。

「南條さん、しばらく寝てて下さいよ」

ハンドルを握りながら、雅通が言った。

雅通の気遣いは嬉しかったが、南條は「いや」と小さく首を振る。「お前も疲れているのは一緒だからな。俺だけ寝るわけにはいいかな」

「——でも、俺はコンビニに着くまで爆睡しちゃってましたし……」
気まずそうにしている雅通に、南條も苦笑を漏らす。

雅通の言う通り、彼は聖地を発ってから数分も経たないうちに、夢の世界へと旅立ってしまった。さすがに呆れはしたものの、雅通が相当疲れていたのは南條も分かっていたので、何も言わず眠らせておいた。

ただ、変に動物的な勘が働くようで、コンビニに車を入れた途端、急に目を覚ました。

「――南條さん、まさかとは思いますが……」

雅通が、チラリとこちらに視線を向けてきた。

「俺の運転つて、そんなに信用出来ませんか？ 別に危ない運転なんてしてないはずなのに、昨日は美咲にまで怯えられちゃいましたし……」

雅通の言葉に、南條は昨日の事を彷彿した。

確かに、美咲の怯えようは相当なものだった。大袈裟なほど後ろのシートで縮こまり、『私……こんな所で死ぬのは嫌……』とブツブツ繰り返していた。

そんな美咲を、雅通は何度も怒鳴り散らしていたが、南條はその遣り取りをひっそりと楽しんでた。ただ、雅通の怒声を隣の助手席で耳にするのは、さすがに堪え難いものがあつたが。

「俺は別に、お前の運転する車には乗り慣れてる」

雅通の問いに、南條は淡々と答えた。

「藍田が怖がつてたのは、普段のお前があまりにもおちゃらけたイメージがあるからだろ。まあ、事故る事もなく無事に聖地に着いたんだから、そんなに気にするな」

「そうですか……」

雅通は短く呟くと、今度は口を閉ざして運転に集中し始めた。

会話がなくなった車内には、エンジン音が煩く耳に響く。

ほど良い揺れも手伝い、南條にも睡魔が襲ってきた。

（ここは瀧村に甘えるか）

そう思いながら、南條は腕を組んでゆっくりと目を閉じる。

数分と経たないうちに、南條は深い眠りへと就いた。

朝食を済ませた美咲は、樋口と江梨子に連れられて山奥へと入っていた。

樋口に言われた通り、動きやすいジャージを着込んでスニーカーを履いていたが、それでも山道は歩き難い。辺りが木々で覆われているせいか、陽は全くとっていいほど届いておらず、歩きたびに地面のぬかるみを感じた。

一方、樋口と江梨子は慣れているのか、ぬかるみを物ともせず歩いている。

（それにしても、どこまで行くんだろ？）

そう思いながら、美咲は必死で二人の後を着いて行く。少し休憩を取りたいとも思ったが、こんな中で二人にはぐれてしまったら、とても独りで行動出来る自信がないし、弱音を吐くのも何となく憚られた。

しばらくして、目の前に開けた光景が飛び込んできた。

日陰に目が慣れてしまい、燦々と降り注ぐ陽光が眩しい。

美咲は左手を翳しながら目を凝らす。

そこには、湖が広がっていた。湖の水面は透明と思えるほど澄み切っており、陽を浴びて美しい輝きを放っている。

まさか、山奥に湖があるとは思ってもみなかったので、美咲は目を見開いたまま、それに魅入ってしまった。

「ここが聖地の中心に当たるのよ」

未だ茫然としている美咲に、江梨子が説明してきた。

「私と泰明さんもだけど、南條君や雅通君、もちろんその他の人達も、この場所で靈力を開花させたの。」

南條君にも聞いたとは思うけど、靈力というのは、お母さんのお腹から生まれ落ちた時から、選ばれた者のみに備えられている。だけど、修行をしなければ、せっかく持っている能力も宝の持ち腐れで終わってしまうわ。もちろん、それでも良いという人もいるけど、そんなのはまず稀ね。特別な能力があるのであれば、それを活かせるように強くなりたいと思うのが当たり前だと思うもの」

江梨子の話を聞きながら、美咲は確かにそうだと頷く。

強くなりたいというのは、誰にでも共通する願い。守られる事はもちろん嬉しいが、半面で、相手が傷付く姿をただ傍観しているだけというのは、考えただけで胸が痛む。自分に力があるのであれば、周りに負担をかけたくなどない。少なくとも、美咲はそんな気持ちで修行の決意をしたのだ。

「ところで美咲」

今度は樋口が口を開いた。

「お前は能力者に、それぞれ属性があるのを知っているか？」

「属性、ですか……？」

樋口に訊ねられたが、当然ながら美咲は何も知らないので、「いいえ」と首を振った。

そんな美咲に、樋口は「そうか」と口許に笑みを浮かべると、属性について説明をしてくれた。

「一口に 能力者 と言っても、持っている霊力は違う。」

例えば俺の属性は木。木属性は遠距離系の攻撃が得意だから、俺と同様の能力者は主に弓矢を使う。

次に江梨子の属性は水だな。水属性は攻撃よりも、回復や防御の能力が高い。

次に瀧村は火の属性だ。中距離攻撃が特に得意だから、槍のような柄の長い武器が主だな。

最後に南條だが、あいつは金の属性で、能力者の中では霊力が特に高いと言われている。武器は接近戦向けの剣や刀が主流だ」

樋口はそこまで言うと、美咲に「ここまでで何か質問はあるかい？」と訊ねてきた。

「そうですね……」

美咲は少し考えてから、特に気になった事を口にした。

「樋口さんが言っていた武器ですけど、みんな、普段はどうしているんですか？ 弓矢は弓道というのがあるからともかく、刀や槍なんて持っていたら、法律に引っかかりたりしないんでしょうか……？」

美咲の質問に、樋口は江梨子と顔を見合わせて口の端を上げた。

美咲は怪訝に思いながら、二人を見つめる。

「本当は南條のを見せてやりたかったが、ここにいないから仕方ないか」

樋口はそう言うと、美咲の前で目をゆっくりと閉じて深呼吸をする。

美咲は固唾を吞んでそれを見つめる。すると、樋口の右手が仄かに光を放った。

（な、何……？）

そう思っている間にも、光は手の中で徐々に長さを増しながら何かの形が形成されてゆく。手から放たれていた光は少しずつ消え、同時に、樋口の手には、彼の背丈よりも幾分か低めの弓と、矢が数本入った筒が現れた。

美咲は目を睜った。

一体、こんな物をどこに隠していたのか。そんな事を考えていたら、樋口が「驚いたかい？」と訊ねてきた。

美咲は呆氣に取られたままで頷くと、樋口は満足げにニッコリと笑んだ。

「この通り、武器の精製も能力の一つなんだよ。もちろん、南條と瀧村も、こうやって武器を出現させる。だが、靈力で精製された武器が有効なのは妖鬼だけであって、生身の人間を傷付ける事は決していない。ただ、攻撃をすれば、多少なりとも取り憑かれた人間に苦しみを与えてしまうけどな。」

そして、こいつの用が済んだら……」

樋口はそこまで言うと、今しがた出した弓と矢から手を離す。途端に、それらはまるで掻き消されるかのようにフツと姿を消した。「こんな感じで、出すには相当な精神力を要するが、消すのはあつという間に出来てしまうんだな」

樋口は弓矢を持っていた右手を差し出した状態で苦笑する。

美咲は、口を開けたままの状態でポカンとしている。こんな能力

が、本当に自分の中にもあるのか。生まれてこの方、鬼王と出逢った事以外では普通に過ごしてきただけに、とてもじゃないが信じられない。

「能力者全員が、武器の精製が出来るわけじゃないのよ」

ぼんやりとしていた美咲を、江梨子は笑みを浮かべながら見つめてきた。

「私なんかは、泰明さんも言っていたけど、回復と防御が主だから特別な武器はないの。」

妖鬼が取り憑いた人間はそれこそ化け物で、容赦なく敵——この場合は私達の事ね——に飛びかかって来るから能力者も怪我が絶えない。でも、妖鬼に負けさせられた怪我は普通の薬じゃ治せない。そんな時こそ、私と同様の能力者の出番。体内から発せられる気を使つて、彼らの怪我を癒すの」

江梨子は美咲の手を取った。

昨日や今朝の事もあつて警戒心が起こったが、そんな気持ちはすぐに消え去った。

江梨子の手を通して、美咲の中に温かな気が流れ込んでくる。それは、今まで感じてきた恐怖と不安、苦しく切ない想いを優しく包んでくれる。

「どう？」

江梨子が短く訊ねてくる。

もしかしたら、本当にを安心させるために手を握ってくれたのか。そう思わずにはいられなかった。

「はい」

美咲も同様に短く答えた。

それだけでも江梨子には通じたのか、彼女は「良かった」と言いながら手を放した。

「さてと」

江梨子が手を放したのを見届けてから、樋口が口を開いた。

「俺達的能力については一通り説明し終わったから、次は美咲の能

力についてだな」

樋口に言われ、美咲はまだ、自分が何の属性になるのかを聞いていなかった事を想い出した。

「あの、私の属性は……？」

美咲が訊ねると、樋口は両腕を組み、難しそうに眉根を寄せた。

「——実はだな、美咲の霊力はかなり特殊なんだよ。属性としては無——つまり、何にも属しないという事だ」

「属性、ないんですか？ 私は？」

美咲が言くと、樋口は頷き、「ただ」と付け加えた。

「逆に属性がないからこそ、修行次第ではどんな能力でも身に付けられるかも知れない。——まあ、俺は属性のない弟子を持った事がないから、はつきりとした事は言えないんだが……。でも、一番弟子の南條が敢えてやろうとしていた事だ。最大限まで尽くしてみよう」

樋口は美咲の肩を優しく叩いた。

「これは美咲だけでなく、俺と江梨子の修行でもある。どのみち、俺達もいずれは戦う事になるからな」

そこまで言くと、樋口は江梨子を見る。

江梨子は何も言わず、その代わり、彼の言葉に応えるように強く頷いた。

そんな二人の姿を、美咲は羨望の眼差しで見つめていた。樋口夫妻がどんな経緯で一緒になったのかは知らないが、それでも、二人は強い絆で結ばれている事は美咲にも伝わってきた。

（私は、どうなんだろう……）

美咲はまた、本家へ向かっているであろう南條に想いを馳せる。

（どうか、何事もないように……）

煌めく湖に視線を移し、美咲は南條と雅通の無事を願った。

第五章 第二節

南條と雅通が藍田貴雄——つまり、美咲の実家に着いたのは、ほぼ予定通り、午後一時を回ってからだった。

貴雄はサラリーマンであるが、今日は日曜日だし、家にいるはずだろう。そう思いながら、南條は藍田家の側に車を寄せ、雅通と降りてから玄関へ向かった。

「出ますかね？」

玄関の前で雅通が南條に訊ねる。

「多分な」

南條は短く答えると、インターホンを押した。

ピンポン、という電子音が家の外まで響く。

ほどなくして、「はい」と女物の甲高い声が聴こえ、玄関のドアが開かれた。

現れたのは、貴雄の妻であり美咲の母親である理美だった。

「あら、和海君！」

南條を見るなり、理美は嬉しそうに声を上げる。

「どうしたの？ 今は県の外れまで行っていたと思っていたのに！」

理美の予想以上の歓迎振りに、南條は少しかり気まずさを感じつつ、「実は」と切り出した。

「ちょっと貴雄さんに用がありました。貴雄さんはご在宅でしょうか？」

「ええ、いるわよ。——あら、一緒にいらっしゃる彼は？」

理美は雅通の存在に気付き、訊ねてきた。

「あ、彼は瀧村雅通と言います。能力者の一人ですよ」

「まあ！ 彼が！」

南條の紹介を聞いた理美は、胸の前で両手を合わせながら目を爛々と輝かせ、今度はその手で、雅通のそれを包み込んだ。

「初めまして。雅通君の事は娘からもよく聞いていました。」

まあまあ！　どんな子かと思ってたけど、なかなかの好青年ね！
可愛いわあ！」

「は、はあ。どうも……」

気付くと、雅通は理美のペースにすっかり呑み込まれている。雅通も十分に無駄なテンションの持ち主だが、理美のは更に上回っている。これが美咲の母親というのは、言われなければ絶対に気付かない。面差しは、さすがに母娘だけあり、どこことなく似ているような気もするが。

「何だ？　騒がしいな」

理美の声を聞き付けてか、どこからともなく貴雄が出て来た。

「こんにちは」

貴雄を見るなり、南條は真っ先に挨拶する。

「和海君……？」

案の定、貴雄は驚いている。

「どうしてここへ……？」

「突然すみません。ですが、どうしても貴雄さんに訊きたい事があります。

俺達——特に美咲さんの今後にも関わってくる事だろうと思いましたが、急遽こちらへ戻って来ました」

南條が言つと、貴雄は怪訝そうにしつつも、「まあ、入りなさい」と促してきた。

「お邪魔します」

南條が家に上がると、雅通もそれに倣う。

貴雄を先頭に、南條と雅通がその後を、最後尾に理美が着いて行く。

二人はリビングに通された。

前に上がった時もあったが、辺りは整然としている。やはり、理美がこまめに掃除をしているのだろう。綺麗な部屋を見ると、改めて、樋口の散らかし放題な塵屋敷と比較してしまう。

「まあ、座りなさい。——えっと、君は？」

「瀧村雅通です」

貴雄の問いに雅通が答えると、貴雄は「そうか、雅通君か」と、納得したように頷いた。

南條と雅通は並んで座る。

それを見届けてから、貴雄は彼らと向かい合わせに座り、理美はキッチンへ向かった。

「さて、俺に何を訊きたいのかな？」

座るなり、貴雄は質問してきた。

南條は居住まいを正しつつ、はつきりと切り出した。

「遠回しな言い方はしません。貴雄さんに率直にお訊ねします。

貴雄さん、あなたは オウキ をご存知ですか？」

「—— オウキ ……？」

貴雄は首を捻りながら繰り返すも、わずかに眉がピクリと反応したのを、南條は決して見逃さなかった。

「知っているんですね？」

南條は重ねて訊ね、雅通はただ、黙って成りゆきを見守っている。貴雄は貝のように口を閉ざしてしまった。

南條はそんな貴雄に苛立ちを覚えたが、それでも、彼が話すのを辛抱強く待つ。

その間に、麦茶を満たしたコップの載った盆を持ちながら、理美がキッチンから戻って来た。

理美も一言も発さず、各々の前にコップを静かに置いてゆくが、誰一人として手を出さない。

どれほどの時間が経ったであろうか。

「—— 君の言う通りだよ」

やがて、貴雄は諦めたように口を開いた。

「俺は、 オウキ が誰なのかを知っている。和海君も分かっていると思うが、それでも俺は藍田の直系だ。—— ただ、オウキの事は、無闇に他言してはならないという決まりがある。だから申し訳ないが、俺からはオウキについて話す事が出来ない」

「——そうですか」

貴雄の言葉に、さすがの南條も不快感を隠し切れなくなった。
（自分の娘が危険に晒されているというのに何て父親だ……）

南條は眉を顰めて貴雄を睨む。

貴雄はその視線を避けるように、視線を下に向けていた。

「貴雄さん」

蛇に睨まれた蛙のような状態になっている貴雄に、南條は同情を寄せるどころか、更に追い打ちをかけるように言った。

「あなたから話すのが無理でしたら、俺が直接本家へ行って聞き出しますよ。」

貴雄さん、宜しければ本家へ話を付けてくれませんか？ それぐらいなら、あなたでも出来るでしょ？」

「え、それは……」

貴雄は否定しかけていたようだが、南條の鋭い視線に出くわすと、「分かった」と短く答えて立ち上がった。

「では、今から兄に電話してみよう。ちょっと待っていてくれ」
そう言い残して、貴雄はリビングから出て行った。

「——なっさけない親父ですねえ」

貴雄の気配が遠ざかってから、雅通がポツリと言ったが、すぐ側に理美がいたため、南條は慌てて、「瀧村」と厳しく窘めた。

雅通もすぐに察したらしい。口には出さなかったが、その代わり、理美の顔を気まずそうに窺っている。

「いいのよ」

理美は雅通と目が合うなり、肩を竦めた。

「私も雅通君と同じ事を思っているから。あの人、私にも娘にも優しくして良い人だと思うけど、変に臆病な所があるのよ。それに、家は出ているはずなのに、あの通り、ずっと心は本家に縛られっ放し。娘を救いたい、なんて口先では言っていたけど、結局は自分で何も出来なくて、自分が死なせた恩人の息子の和海君に、その責任を押し付けてしまうのだもの。もちろん、私に特別な能力があれば、

あの子を全力で守ってあげたいけど……。でも私は、しがないただの母親だから……」

そこまで言うと、理美は哀しげに笑んだ。何にも考えずに明るく振る舞っているようでも、彼女は心の底から娘を案じている。

そんな理美を見ていたら、南條はふと、離れて暮らしている自分の母親を想い出した。

高校卒業と同時に、修行のために聖地へ赴く事になった時、どれだけ母親に反対されただろうか。母親は、父親が無残な最期を遂げた事を引き摺り続け、和海にも同じ道を辿らせたくない、と必死に訴えていた。だが、当時の南條は強い父親に憧れ、自分も強くなりたいと切に願った。だから、母親の言葉に一切耳を貸さず、家出同然で実家を飛び出した。

母親とは、それつきり逢っていない。逢いたい気持ちはあるが、果たして、母親は自分を捨てた息子を笑顔で迎えてくれるだろうか。

しばらくして、貴雄が再びリビングへ戻って来た。

「電話、してきたよ」

中に入るなり、貴雄が言った。

「兄が話してくれるそうだ。それで悪いんだが、これからすぐに逢いたいとの事だったので、早速本家へ行ってくれないだろうか？」

本家との話が付いた。一筋の光明が見えた気がして、南條は喜びを感じた。

「もちろんです。こちらとしても一刻も早く話を聞きたいですから、願ってもない事です」

南條は口の端を上げると、雅通を促しつつ立ち上がった。

「もう少しぐらいゆっくりしてればいいのに……」

名残惜しそうにしている理美に、南條は小さく会釈する。

「ありがとうございます。ですが、あまり遅くなっては本家の方にも迷惑がかかるでしょうから」

南條はそう言うと、リビングを出て玄関に出た。

雅通も慌ててそれを追う。

「では失礼します。今度は、美咲さんを連れて帰って来ますよ」

藍田貴雄の家を出てから、南條は本家に向けて車を走らせた。

本家の側には、鬼王が縛られている桜の木が立っている。もしかしたら、鬼王は南條達の気配を察知して姿を現すかも知れない。

「瀧村、気をしっかり持て」

ハンドルを握りながら雅通に言う。

「ええ」

雅通は拳を強く握って頷く。恐怖心は、そうそう簡単に拭えるものではない。それでも雅通は、昨日の南條の言葉を信じて強くなるうとしている。

本家が近くなると、民家は疎らとなり、広々とした田園が目前に飛び込んでくる。

美咲と初めて逢った時は、ただ、美咲と、妖鬼に取り憑かれた女を追う事に必死で、ゆっくりと風景を眺める事など出来なかったが、改めて辺りを見渡してみると、大らかで長閑な雰囲気がある。

街中から見事に外れているため、不便な点は多そうだが、年若い時から残りの余生を過ごすには丁度良い場所かも知れない、と南條は思った。

藍田本家は、さすがに古い歴史があるだけあり、敷地が広い。

南條は、車を停める場所に少々迷ったが、取り敢えず、一番に目に付いた空き地に駐車し、そこから家まで歩いた。

玄関までの距離も半端ではない。幾らなんでも広過ぎたら、とさすがの南條も啞然としてしまった。

数分歩き、やっとの事で玄関らしき場所まで辿り着くと、ここでもやはり、南條が先頭に立ってインターホンを押す。

だが、貴雄の家と違って家の者はなかなか出て来ない。

（まさか、聴こえてないのか？）

南條はもう一度、インターホンを押そうとしたが、その時、玄関の引き戸がカラカラと音を立てて開いた。

途端に、南條は目を見開いて息を呑んだ。

雅通もまた、同様に驚いている。

（藍田……？）

そこにいたのは美咲——否、美咲によく似た少女だった。

本人ではないとすぐに察したのは、美咲は聖地にいるはずだというのと、何より、少女から放たれている気が美咲の物とは全く異なっていたからだった。

髪型も違っていた。肩にかかる程度の長さの美咲に対し、そこにいる少女は、漆黒に輝く髪を腰まで流している。

「どなたですか？」

少女は、二人の男を怪訝そうに見比べながら、ゆったりとした口調で訊ねてきた。

「初めまして。我々は藍田貴雄さんのご紹介でこちらにお伺いしました」

相手が年下であろう事は確かであるが、初対面であるから、礼儀として低姿勢で挨拶した。

「貴雄叔父様の……？ ああ、南條和海さんと瀧村雅通さんですね？」

少女は、貴雄の名前を反芻してからすぐに納得したらしいが、ニコリともせず続けた。

「ようこそいらっしやいました。あなた方の事は父から伺っております」

どうやら、この少女は藍田本家当主の娘らしい。

年に似合わぬ落ち着き、さり気ないながらも、どこか優雅さを感じさせる所作を改めて見て、南條は独り納得した。

そんな南條の思いを知ってか知らずか、少女は相変わrazuの無表情で、「お入り下さい」と促してくる。

南條は靴を脱ぎ、それをを揃えてから上がった。

雅通も同様に倣っている。

少女はそれを見届けると、自分が先頭になって、廊下を静かに歩いて行く。その間、三人には会話が全くなかった。お喋り好きで、沈黙を何より嫌う雅通ですら、少女の纏っている冷ややかなオーラに怖気付いているようだ。

見た目は美咲と良く似ていても、やはり、美咲と少女は全くの別人だ。南條は少女の背中を睨みながら思った。

しばらくして、少女は足をピタリと停めた。

そこには、汚れが全く見受けられない障子が嵌められている。まめに貼り替えをしているのだろう。

少女は黙って障子を引くと、二人の客に、「どうぞ」と部屋の中へ手を差し出す。

南條と雅通は部屋へ足を踏み入れた。

「では、父を呼んで参りますので」

少女はそう言い残し、障子を閉めて、再びその場から去った。

少女の気配が完全に消えた後、二人は改めて部屋の中を見回す。

部屋の広さは、どう少なく見積もっても十畳は軽くある。その中に木製の座卓と座布団が整然と置かれているが、それらは、物の価値に無頓着な南條ですら、どれほどの値打ちがあるのか気になってしまうほどだった。

「しかし、外を見ただけでもデカいと思いましたけど、中もやっぱり広いですねえ」

広い空間が落ち着かないのか、雅通は熊のように部屋の中を徘徊し出した。

「瀧村、みつともないぞ。座って待ってる」

そう注意するものの、当の南條もソワソワしている。今のアパートはもちろんの事、実家もこじんまりとした市営住宅だったために、広い家はどうも落ち着かない。

（それにしても、藍田はこんな家で幼少期を過ごしたのか……）

畳の上に直接胡坐を掻きながら、南條は思った。

親元を離れざるを得なかったのは、偶然か、それとも必然だったのか。

当時は美咲もまだ五歳。一番甘えたい時期に親と離れ離れで暮らすのは辛かったであろうに、美咲はその事に関しては、辛かったとも、淋しかったとも一切口にしなかった。もしかしたら、親への思慕よりも、鬼王への恐怖が勝ったからかも知れないが、それでも、美咲は貴雄と違って芯が強いのだ。

何事にも真つ直ぐで、一度決めたら頑として貫き通す。美咲が修行之決意をした時の瞳にも、迷いは全くなかった。

表面上では父親に遠慮しつつも、内心では、何もしない父親を齒痒く感じていたのかも知れない。

ふと、部屋の外側に、先ほどの少女ともう一つ、全く別の気を察知した。

雅通もすぐに勘付いたらしく、部屋の徘徊を止めて、その場に直立不動になった。

南條も立ち上がると、障子に視線を向ける。

障子はゆっくりと開かれ、夏の陽射しと共に男が姿を見せる。

男は五十代前半といった所であろうか。身長は170前後で、弟の貴雄に比べると、全体的に肉付きはあまり良いと言いい難い。だからと言って、脆弱な印象も全くなく、寧ろ、滲み出ている気に威圧感がある。

「あなたがこちらのご主人ですか？」

南條が訊ねると、男は頷いた。

「ああ、私が当主の藍田史孝だ。あいだふみたかもしかして、君が南條和海君かな？」

「はい、そうです」

「そうか。なるほどな……」

藍田は南條に意味深な視線を注ぎながら、ニヤリと口許を歪めた。
(気味が悪い男だ)

南條は不快感を覚えつつ、それでも表面上では冷静を装い黙っていた。

「取り敢えず楽しなさい」

南條の思いに気付いていないのか、藍田は表情一つ変えず、二人の客に席を勧める。

「では、失礼します」

南條は頷くと、緊張したままの雅通に目配せした。

二人は並んで藍田に向かい合うように、少女は少し離れた場所で、三人の男達を遠巻きにするように慎ましく正座した。

「藍田さん、こちらも時間がありますので、早速本題に入らせて頂きます」

南條は座るなり、真っ先に口を開いた。

「貴雄さんからも聞いているかと思いますが、私達はオウキについて詳しく知りたいのです。あなたの姪御さんに当たる美咲さんは、鬼王に生贄として選ばれてしまった。ですが、オウキが何者なのか分かれば、彼女を鬼王から守るのも楽になるのではないかと考えたのです」

南條はそこまで言うと、藍田の微妙な表情の変化を逃すまいと彼を見つめる。しかし、藍田はそんな南條の視線を受けても、全く表情を崩さない。それどころか、藍田の圧倒的な存在感に、南條の方が気圧され、危うく目を逸らしそうになったほどであった。

「くっ……、あははは……！」

突然、藍田が声を上げて笑い出した。

雅通は肩をビクリと反応させ、南條は、苦虫を噛み潰したように眉根を寄せた。

「——何が可笑しいのですか？」

「いや、すまない」

藍田は謝罪を口にする^{ひろかず}と、すぐに笑いを引っ込めた。

「君を見ていたら、つい、博和君の事を想い出してしまつてね」

藍田が口にした 博和 という名前に、南條の表情は更に険しさ

を増したが、藍田は意に介した様子もなく続けた。

「博和君も正義感の強い男だったよ。あの当時は、美咲はまだ生まれていなかったし、鬼王も封印された状態だったが、鬼姫は既に存在していたからな。鬼姫は鬼王の能力の一部を与えられているから人間に妖鬼を取り憑かせる事が容易に出来る。」

あの日に戦った相手も、その鬼姫が呼び寄せた妖鬼達だった。――実に惜しい人を亡くしてしまった……」

「父の話は結構です！」

亡くなった父親の話題を出された瞬間、南條の中で、プツリと何かが切れる音がした。

「先ほども申し上げたはずです。私は、オウキについて知りた
い、と。それに、今の現状と父の事は無関係です！」

我慢の限界を超えていた南條は、もう、藍田相手に感情を抑える
気持ちはなくなっていた。

「南條さん、落ち着いて」

興奮している南條を雅通が宥めると、今度は彼の代わりに藍田に
向き直った。

「藍田さん、いい加減にして下さいよ。南條さんも言ったでしょ？
俺達には時間がないんです。」

あんただって、可愛い姪っ子が生贄になるなんて考えたくないで
しょ！ だったら、俺達に少しぐらい協力的でも良いではないです
かっ？」

一気に言い切った雅通は、肩で息を繰り返している。

藍田はそれを眺めながら、「なるほど」と溜め息を漏らした。

「君達は、本当に何も知らずに過ごしてきたのだね」

「――どういう意味ですか……？」

南條は、未だ苛立ちが残っている状態ではあったものの、それ
も、心を落ち着かせようと静かに訊ねた。

藍田は徐に、「南條和海君、そして瀧村雅通君」と二人の名を口
にした。

「私——いや、我々にとって、美咲は一番危険な存在だ。」

美咲の中に眠るもう一つの魂である オウキ とは、我々の祖先に当たる古代の巫女姫。正式には サクラノビメ という名で、オウキ は、後に鬼王によって与えられた名前らしいが」

藍田は、服の胸ポケットからメモ帳とボールペンを取り出し、無骨な字で、 佐久良之姫 、 桜姫 という二つの名を縦に箇条書きすると、それを南條と雅通に向けて卓の上で滑らせた。

「佐久良之姫は他の能力者と違い、この世に生を享けた時から全ての属性を兼ね備え、類稀な靈力を誇っていたと言う。だが、強過ぎる靈力は、いずれ国を滅ぼす脅威となる事も十分に有り得る。そう考えた一族は、 神の宿り場 として崇められていた桜の木の側に祠を作り、そこへ姫を幽閉し続けた。」

しばらくの間は平和だった。しかし、どこからともなく余所者の男がこの地に足を踏み入れた時から、少しずつ異変が起こり出した。その男は、銀色の長い髪に金に輝く双眸を持つ、女と見紛うほどの美しい男だったらしい。——その男の正体については、君達が考えるまでもないだろう?」

藍田はそこまで言うのと、フウと一息吐いた。

当の本人は淡々と語っているが、今まで知らなかった事を次々と聞かされた南條は、ただ、驚いて息を呑むばかりだった。

隣にいる雅通も、呆氣に取られている。

「その男——鬼王は、自分と同じ気を辿ってこの地へ来たのだ、と言いつ出した。そして何を思ったのか、佐久良之姫が幽閉されている祠へ行き、姫をそこから解放してしまった」

「——誰も、止められなかったのですか?」

話の途中で南條が訊ねると、藍田は、フンと鼻で笑った。

「君のような男がそんな当たり前の事も分かんのかね? 相手は鬼王だ。止めようとした者がいたであろうが、鬼王の力の前ではどうにもなるまい。」

とにかく、解放された佐久良之姫は、それから間もなく、鬼王に

よって新たに 桜姫 という名を与えられ、自分を閉じ込め続けた一族への復讐を始めた。

最初は一族のみの復讐で終わらせるはずだったが、そのうち、鬼王を神と崇める世界を創ろうと目論むようになり、自らの霊力を以て人々の生気を鬼王に捧げ続けた。我々が潜在的に持っている 負の感情は、鬼王の活力源ともなるからな。

人々が次々と、鬼王と桜姫の手に落ちてゆくを見て、辛うじて生き残っていた同族の能力者は、このまま彼らを野放しにしておくのは危険だ、と考えた。もちろん、鬼王と桜姫の霊力の前では、他の能力者では到底太刀打ちなど出来ない事も、重々承知していた。そこで考えたのが、各々の霊力を籠めた封印を創り上げ、鬼王を神の宿り場 に縛り付ける事だった。

封印は時間を要しながらも完成させた。しかし、封印が出来上がったとしても、その前に桜姫が立ちはだかっている。しかも、鬼王に解放されてからは新たな命を吹き込まれ、既に人間ではなくなっていた。人間でなくなった桜姫を抹殺する——そうになると、普通の武器では殺せないという事だ。

君達にも当然あると思うが、能力者は属性によって各々の武器を精製出来る。彼らは、彼らの中でも最強の霊力を持つ金属性の者に桜姫を始末させた。もちろん、相手は人間であった時から全属性を持ち合わせていた能力者なのだから、どれほど苦戦を強いられたかは、この目で見ずとも想像が付く。

桜姫を始末してからは、今度は鬼王を 神の宿り場 に押し入れて封印を施した。本当は、鬼王も抹消したいと思っただろうが、鬼王は元から肉体を持っていないし、何故か霊力も全く利かず、封印をする事が精一杯だったようだ」

長い時間を要して話をしていたからか、藍田から、わずかに疲れが見え隠れしていた。

だが、彼の様子を見る限りでは、まだ続きがあるようにも思える。「失礼します」

今まで静かに控えていた少女が、不意に口を開いた。

「この先は私から話させて下さい。お父さん、宜しいですよね？」

「——そうだな。私もさすがに疲れてしまった。すまないが、続きは朝霞^{あさか}にしてもらおうか」

「ええ」

アサカ と呼ばれた少女は頷くと、南條と雅通に視線を向けてきた。

「では、鬼王と桜姫のその後についてお話しします。

鬼王が封印され、桜姫が始末された後は、国に平穏な日が戻ってきました。これで、人々が彼らの脅威に怯える事はなくなるだろうと。

しかし、桜姫の恨みはあまりにも深過ぎました。彼女はそれから二百年後、同族の中で特に気に入った娘を 器 として、復活を遂げてしまったのです。

桜姫の魂を受け継いだ娘は、 神の宿り場 に封印されている鬼王に呼ばれ、封印を剥いでしまうのですが、ご存知の通り、それを剥がしただけでは鬼王は完全復活しません。鬼王が復活する条件は、鬼王に自らの魂を捧げる事。ならば、直接娘を差し出さぬようにすれば良い。そう考えた同族の者は、言い伝え通り、金属性の能力者に、桜姫の魂を、器ごと抹殺するように命じたそうです。

娘を殺害した後は、再び鬼王の封印を施し直したそうですが、それから更に二百年後、桜姫の魂は別の娘に宿り、全く同じ事が繰り返されたようです。

その連鎖は、いつまでも途切れる事はなく、今はみいちゃん——美咲の事です——の中に桜姫の魂が宿ってしまった」

アサカはそこまで言うつと、南條を見つめた。

「南條さん、あなたは金属性の方ですよね？」

改めて訊ねられ、南條は「ああ」と頷く。

「確かにその通りだ。しかし、俺は自分の属性については一切言わなかったと思うが？」

「言われなくても分かります。あなたから放たれる気は、明らかに金属性のものですから」

笑み一つ浮かべず、アサ力は淡々と言った。

「とにかく、今は属性云々についてはあまり関係がないので省きます。」

太古から続いている桜姫の呪いの連鎖。それはこれからも途切れる事はないでしょう。ですが、永遠に断ち切る事は出来なくても、暫しの間だけ止める事は出来る。——南條さん、私が言いたい事はお分かりですよ？」

アサ力は念を押すように南條に問う。

「——ああ……」

南條は、ゆっくりと口を開いた。

「つまり、俺があい……、美咲を……」

「南條さん！」

南條が紡ごうとした言葉を、雅通が遮った。

「それ以上は絶対に口にしちゃいけませんって！ あなただって常々言ってるでしょ？ 人の言葉には魂が宿るのだ、と。」

あんた達もあんた達だ！ 仮に今の話が本当だとしても、何故、桜姫の呪いの連鎖を止める方法を考えようとしらない？ そもそも、桜姫がそこまで深い恨みを抱くようになったのは、一族が桜姫を一人の人間として扱わなかったからじゃないのか？

俺は桜姫じゃないから桜姫の気持ちは完全には分からない。けどな、これだけは言える。南條さんも俺も、あんた達ほど腐っちゃいねえ！ 美咲もだ！ 運命なんて流されるもんじゃなく、自ら切り開くもんだろ？」

そこまで言うと、雅通は、藍田とアサ力に険しい視線を送る。

藍田は瞑想でもしているかのように目を閉じ、アサ力は、一人で熱くなっている雅通を冷ややかに傍観していた。

「——瀧村」

藍田の話を聞いているうちに、いつもの冷静さを取り戻してきて

いた南條が、静かな口調で言った。

「俺は決められた運命に流されるつもりは毛頭ない。俺が傲慢な人間に指図されるのが嫌いなのは、お前も知っているはずだ」

南條は、感情の欠片も持ち合わせていないような父娘に向き直った。

「鬼王と桜姫についてはよく分かりました。そして、あんた達がどれほど腐れ切っているかも。」

あんた達は、俺が美咲を殺せば万事解決するだろうと考えているのだろうが、それは違う。――俺は、美咲を手にかける事なく、桜姫の魂から解放させますよ。もちろん、鬼王にもあいつは渡さない」

南條はその場から立ち上がった。

「瀧村、用は済んだ。帰るぞ」

「あ、はい！」

南條が促すと、雅通は慌てて立つ。

藍田本家の父娘に、挨拶する気も起きなかった。

未だに座ったままの二人を一瞥すると、南條は雅通を先導して部屋を出た。

第五章 第三節

本家を出てからの南條は、どこか沈んでいるように感じる。

藍田に対して、ああは言っていたものの、やはり、彼に科せられた宿命に、心の奥底で葛藤が起こっているのかも知れない。

（これから大丈夫なんだろうか……？）

車を置いている場所まで歩きながら、雅通は思った。

強い南條の心が、あの父娘によって折られてしまった。

あの父娘は、明らかに、南條に美咲を始末させる事を望んでいるが、彼の性格上、無下に手を下す事など出来ないであろう。むしろ、雅通が金属性をであったとしても、美咲を殺す事は絶対に出来ないが。

ふと、先を歩いていた南條が足を止めた。

「南條さん……？」

怪訝に思いながら、雅通は南條の名を呼ぶと、南條は「臭うな」と眉を顰めた。

（臭う……？）

雅通は心の中で同じ言葉を繰り返すと、目だけを動かして気配を探る。

と、その時、風に乗って、仄かに甘い香りが鼻腔を擦った。

（この匂い……！）

雅通の鼓動が速度を増した。

最後にこの匂いを嗅いだのは、五月の上旬辺りであっただろうが、その主の事は、今でもはっきりと記憶に残っている。

「——また現れたか」

何もない空間に、南條が呼びかけるや否や、目の前に、淡い栗色の長い髪を靡かせた女が姿を現した。

「相変わらず、勘が鋭いわね」

女は二人を見るなり、ニコリと笑んだ。

「――琉璃……」

雅通は無意識に、女の名を呟いていた。

鬼王に新たな命を吹き込まれ、鬼王に忠誠を尽くす美しい人形。初めて逢った時は、その人間離れした麗しい姿に雅通は一目で心を奪われた。

（駄目だ！ これじゃあ、ミイラ取りがミイラになっちまう！）

琉璃の誘惑を振り払おうと、雅通は心の中で何度も強く言い聞かせるも、琉璃と目が合い、微笑まれてしまうと、魂を抜かれたように惚けてしまう。

「何のつもりだ？」

ぼんやりとしている雅通とは対照的に、南條は淡々と琉璃に訊ねる。

「『何のつもり』？ それは考えるまでもないのではなくて？」

琉璃の顔から笑みが消えた。

同時に、周囲から獣じみた咆哮が耳に響いたかと思うと、二人は複数の妖鬼に囲まれていた。

「ごめんなさいね。私もこんな手荒な真似はしなくなかったのだけど、鬼王があなた達を排除したがつているようだから。」

それに、日本刀使いの和海さん。あなたとは一度、真っ向から戦ってみたいと思っていたしね」

琉璃は南條を一瞥すると、顔の辺りまで手を挙げ、指を鳴らした。それが合図となったように、妖鬼達は一斉に二人に襲いかかって来た。

（クソッ！ まだ、槍を出してないってのに！）

雅通は自分に群がる妖鬼を蹴散らしつつ、槍を出そうと気を高める。しかし、後少しという所で悉く邪魔され、思うように精製が出来ない。

（ああもう！ このままじゃ埒が明かねえ！）

槍を思うように出せず、苛立ちばかりが募ってゆく。

どうしたら集中出来るのか。そう思っていると、咄嗟に、雅通の

前に日本刀を持った南條が現れた。

「とつとと出せ！ 少しの間であれば、俺も何とか食い止められる！」

この切羽詰まった状況でも、武器の精製を出来てしまうのは、さすがと言っべきだろうか。

そんな南條に、雅通は感心していたが、「早くしろ！」と再び急かされ、慌てて我に返った。

雅通は深呼吸を一つすると、両手に気を送り込む。

両腕は熱を帯び、手の平が仄かに光を放つと、それは少しずつ、雅通の背丈ほどの槍へと形を変え、彼の手の中へその姿を現した。

「南條さん！ お待たせしました！」

雅通は精製された槍を構えると、今、まさに彼に飛びかかるようにしている妖鬼に狙いを定めた。

「俺を舐めんじゃねえ！」

雅通は声を上げ、妖鬼の 器 とされている人間の男の腹を貫く。
「ぐ……ぐぐ……う……」

靈力で精製された武器は、人間には直接的に害はない。それは分かっている、苦渋に歪む人間を見ていると胸が酷く痛む。

「苦しませてわりいな。けど、このまま取り憑かれたままだと、あんた自身が闇に堕ちちまうから……。勘弁してくれよっ！」

雅通は、腹を貫いている槍にグツと力を入れる。

「ぐ……ぐあああ……！」

断末魔の叫びと共に、器となっていた男がその場に崩れ落ちた。取り敢えず、その男からは妖鬼が消滅したが、周りにはまだ残っている。

ふと、南條を見てみると、疲れなど微塵も感じさせずに刀を振っている。

（俺も頑張らないと！）

雅通は槍を構え直すと、次の標的に向かって行った。

（さすがね）

妖鬼達と戦う南條を遠巻きに見つめながら、琉璃は満足げに口角を上げた。

琉璃が放った十数匹の妖鬼はほぼ殲滅されているが、幾ら相手が雑魚であろうとも、数が多ければ多いほど苦戦を強いられる。

案の定、わずかではあるが、南條に疲れが見え隠れし始めている。もう一人の青年もそれなりの働きは見せているが、南條と比べると、妖鬼を消滅させた数は遥かに劣っている。

「さて、私も少し動こうかしら」

琉璃は独りごちると、真っ直ぐに南條の元へと歩み寄った。

南條は刀を握ったまま、怪訝そうに琉璃を見つめる。

「そんな怖い顔をしないで」

琉璃が肩を竦めて見せると、南條は更に、苦虫を噛み潰したように顔を顰めていた。

琉璃は構わず続けた。

「さっきも言ったでしょ？ 私はあなたと戦ってみたい、って。あなたの力が如何ほどのものなのかを、この身を以て知りたいのよ」

「——俺は女と戦う気はない。例え相手が鬼姫であろうとな」

「あら、意外と紳士なのね」

南條からの言葉に、琉璃は目を瞠った。

「私を女として見てくれるのは素直に嬉しいわね。でも、それじゃあ私もつまらないわ」

琉璃は苦笑を浮かべると、南條の胸の前に手の平をそつと翳した。

「——なんのつも……！」

そう言いかけた南條の声が、途中で途切れた。南條は右手で刀を握ったまま、その場に膝をガクリと落とし、もう片方の手で、胸の辺りを強く掴みながら歯を食い縛っている。

「南條さん！」

槍使いの青年が南條の元へ駆け寄ろうとするも、彼は彼で、残っ

た妖鬼に行く手を阻まれている。

「てめえら！ 邪魔すんじゃねえ！」

槍使いの苛立った感情が、心地良いほど珠璃の中に流れ込んでくる。

珠璃はそれを満足げに一瞥すると、再び、崩れ落ちた南條を見下ろした。

「どう？ 今、私はあなたに最上級の 負 の感情を送ったのよ。

あなたも憐れな人ね。大切だったお父様を死に追い遣った男の娘のために働き、挙げ句の果てには、守るはずの娘を自らの手で殺さねばならない運命を背負う羽目になってしまった……」

珠璃は苦渋に満ちている南條の前に膝を折り、不敵な笑みを浮かべた。

「ねえ、本当は嫌で堪らないのではなくて？ あなたは元来、面倒な事は大嫌いだったはずでしょ？

何もかも捨ててしまった方が楽になれるわよ？ あなたのお母様だって、あなたが普通の生活を送ってくれる事を何より望んでいる。このままでは、お母様を不幸に陥れるだけよ。そうでしょ？」

「……ち……が……」

南條は否定をしようとしているが、心に迷いが生じ始めている事も明白に表れていた。

そんな南條に、珠璃は更に追い討ちをかけた。

「強がらなくていいのよ。嫌だ、って、楽になりたい、って、心から願いなさい。この忌まわしい靈力を棄ててしまえば、お母様だって喜んでくれるはずよ」

「……それが……」

脂汗を額に浮かべながら、南條が苦しげに何かを口にした。

「……貴様の……言いなりになる……かつ！」

南條は、手にしていた刀を無造作に振り落としてきた。

珠璃はハッとして、咄嗟にそれを避けようと後ずさったが、右腕に一太刀を受けてしまった。

「チツ……！」

琉璃は小さく舌打ちをすると、斬られた腕を反対の手で押さえた。その腕からは赤黒い血が滲み、指の隙間を縫うように滴り落ちてゆく。

それを眺めながら、南條はゆつくりとその場から立ち上がると、琉璃の血で染まった刀を握りながら琉璃に近付いて来た。

「——良い気分にならせてもらったよ」

南條はそう言うと、琉璃の前に刀を突き出したが、当の琉璃は表情を変えず、「何の真似かしら？」と穏やかな口調で訊ねた。

「あなたさつきは、女とは戦えない、と言っていたはずよね？　なのに、どういう風の吹き回し？　もしかして、私は女ではないと、あなたの中で認識されてしまったのかしら？」

「——そうだな」

南條は静かに答えた。

「あんな下らん戯れ言を吹聴するような女は、女であって女でない」
「あら、下らなくはないでしょ？」

南條の言葉に、琉璃はクスクスと笑った。

「だって、確かにあなたの心は、ああ言っていたもの。だから私は、あなたを楽にしてあげようと思ったただけなのに……」

「ふざけるな！」

南條は琉璃を激しく睨むと、首の擦れ擦れの所まで刀の切っ先を突き付けた。

「いいか？　俺は誰の指図も受けない。鬼王や貴様だけじゃない。本家の馬鹿共にも好き勝手に踊らされて堪るか」

暫しの間、琉璃と南條は物言わず睨み合っていた。

聴こえるのは、残った妖鬼の咆哮と、空を斬るような槍の音のみであった。

「——仕方ないわね……」

沈黙を先に破ったのは琉璃だった。

「どのみち、あなたに怪我をさせられたせいで靈力が使えなくなつてしまったもの。これ以上、あなたとやり合つても無駄ね。」

じゃあ悪いけど、あなた達で勝手にやってちょうだいな。その子達も好きにしちゃって」

珠璃は半ば投げやりな口調で言つと、妖鬼を残してその場から立ち去つた。

「待て！」

南條が自分呼び止める声が聴こえた。だが、珠璃はそれを無視した。

南條を闇に落とす事は失敗に終わったが、またいずれ、機会は訪れるであろう。今はまず、傷を癒す事を最優先に考えねばならない。
(やっぱりあの男は只者じゃなかったわね)

珠璃は満足気に笑むと、鬼王の待つ 帰るべき場所 へと向かつた。

第六章 第一節

翌日の昼過ぎ、南條と雅通が聖地へと戻って来た。

「おお！ お疲れさん」

車を降りた二人に真っ先に労いの言葉をかけたのは、樋口だった。
「どうだ？ 収穫はあったか？」

樋口の問いに、南條は「ええ」と短く答える。

何かあったのだろうか。その表情は、いつにも増して憔悴し切っているように感じる。

南條の異変が気になり、美咲は声をかけようとしたのだが、隣にいた雅通がこちらに視線を向け、ゆっくりと首を振った。南條さんには話しかけるな、とでも言いたげに。

いつもであれば、こういった雅通の偉そうな態度に腹を立てる所であるが、今は何故か、雅通の言う通り、気軽に南條に話しかけてはならないような気がした。

案の定、南條は美咲の前を通りかかっても、笑いかけてくれるどころか、視線すら合わせようとしない。寧ろ、美咲を拒絶しているのではと思えるほど、南條の全身からは冷たい気が漂い続いていた。
「ちよつと瀧村君」

南條のすぐ後ろを歩いていた雅通の腕を、江梨子がガッツリと掴んだ。

「なっ、何ですか……？」

江梨子に拘束された雅通は、あからさまに怯えている。

そんな雅通に対し、江梨子はこれ以上にならないほどの満面の笑みを見せた。

「ねえ、何があったの？ あんたはずーっと南條君の側にいたのよね？ だったら、南條君が何であんなになっちゃったのか、ちゃんと事情を知っているはずよねえ？」

「そ、それは……」

雅通は、必死で江梨子の魔の手から逃れようと足掻きながら、南條に視線を送る。

だが、当の南條は雅通の事などお構いなしに、そのまま自室へと入ってしまった。

「——わ、分かりました！ 話しますから！ だからそんな目で俺を見ないで下さいってばっ！」

江梨子の笑顔が相当怖かったのか、雅通は目に涙を浮かべている。「宜しい」

江梨子は満足気に頷くが、雅通を解放する気は全くないようで、腕は相変わらず掴んだままである。

「それじゃあ場所を移しましょ。泰明さんに美咲ちゃん、着いてらっしゃいな」

江梨子の言葉に、美咲は黙って頷き、樋口に至っては、「強引だなあ……」とブツブツぼやきながら、江梨子と雅通の後を着いて来た。

美咲達四人は、リビングへと入った。

美咲、樋口、江梨子は、雅通を囲むように座る。

これではまるで、刑事ドラマとかで見るような犯人への訊問シーンじゃない、と美咲は思った。

美咲は江梨子と違い、無理強いをしてまで問い質す気は全くないため、雅通が憐れで仕方がない。

樋口に至っても、きつと、美咲と全く同じ考えであろう。

一方、美咲と樋口の気持ちを知ってか知らずか、江梨子は、それこそ鬼刑事のように訊問を始める。

「さて率直に訊くけど、本家に行ってから何があったの？ あの様子から、あんまり良くない事を吹聴されたような気がするけど？」

「——お察しの通りです……」

江梨子の毒牙からは逃れられない事を悟ったのか、雅通は諦めたように話し始めた。

藍田貴雄——美咲の父親——に逢いに行ったが、オウキに
いては他言を禁じられているからと教えて貰えなかった事。その後、
何とか南條が頼み込み、本家へ話を付けて貰った事。本家へ行き、
当主である藍田史孝から聞いた、オウキことサクラノビメと鬼王の
哀しい伝説の事。

オウキの正式名称については、雅通にしては珍しくメモを取って
いたようで、それをテーブルの中央に載せ、三人に見えるようにし
てきた。

（桜姫 に、 佐久良之姫 ……）

美咲は食い入るように、その二つの名を見つめた。そして、ふと、
幼い頃に聴いた女の 声 を改めて想い出した。

もしかして、いや、もしかしなくても、あの声は間違いなく桜姫
の物だったのだ。

何も知らない昨日までは、ただ、鬼王に怯えてばかりいたが、雅
通が持ち帰ってきた土産により、美咲の考えは一変した。

桜姫は生を享けた時から、強過ぎる霊力故に異端者扱いを受けた。
意味も分からず閉じ込め続けられ、どれほど辛かったであろう。

だからこそ、自分を救ってくれた鬼王に心惹かれた。それは、美
咲も痛いほど分かった。美咲自身、桜姫の魂を持っているのである
から。

かと言って、憎しみに流され、一族だけではなく、全く関係のな
い人々を苦しみの境地に陥れようとする考えは如何なものか。

（どうして人は違う者を相容れようとしないんだろう……）

そう思った途端、桜姫の哀しみが伝播したように、美咲の瞳に熱
い物が込み上げる。

気が付くと、美咲は涙を零していた。瞳から湧き出たそれは、頬
をゆつくりと伝い、ポタポタとテーブルの上に落ちてゆく。

「美咲ちゃん……？」

突然泣き出した事に、江梨子も驚きを隠せなかったらしく、心配
そうに美咲に声をかける。

「う……ごめ……なさ……っ……」

美咲は涙を止めようとしたが、制御が利かない。

胸が張り裂けそうなほど痛くて、息が出来ないほど苦しい。

樋口は口を閉ざしていた。

さしもの雅通も、美咲に対して軽口を一切叩かず、物思いに耽るように、眉根を寄せながらテーブルの一点を見つめている。

しばらくして、美咲もようやく落ち着きを取り戻した。

「——すみません」

美咲はポケットに忍ばせていたハンカチを取り出すと、それで涙を拭った。

「ほんとに大丈夫？」

江梨子に訊かれ、美咲は「はい」と頷く。

「どうやら私の中の 桜姫 と共鳴しちゃったみたいです。——と言っても、何となく、なんですけど……」

美咲はそこまで言うのと、深呼吸を一つした。

「俺も今回ばかりは、腸が煮えくり返りましたよ」
はらわた

今まで黙っていた雅通が口を開いた。

「話を聞くにつれて、奴らの身勝手さをまざまざと知らされましたから。」

本家の人間は人の命を虫けら同然だと考えている。もちろん、はつきりと聞いたわけではないですけど、あそこのオヤジの言い方から、嫌でもこっちに伝わってきました。許されるんだったら、一発ぶん殴ってやりたいほどでした。

南條さんも、死んでしまった自分の親父さんを引き合いに出された事で、怒りを剥き出しにしていましたから。——あんなに感情的になった南條さん、俺は初めて見ましたよ……」

雅通を話を聞きながら、美咲はふと、南條と初めて出逢った日の事を想い出した。

アパートの一室で、南條が美咲に言いかけた言葉。あの時、南條

は『関係ない』と言っていたのもあって今まで忘れていたが、もしかしたら、南條の父親の死は、何か陰謀めいたものがあつたのではないか、と思い立った。

「あの」

美咲は誰にともなく呼びかけた。

他の三人は、一斉に美咲に視線を注ぐ。

「南條さんのお父さんですけど、何で亡くなつたんですか？ 私のお父さんからは、妖鬼と戦った末に亡くなられた、とは聞いているんですが……。でも、南條さんのお父さんの話が、どうして史孝伯父さんから出てきたのか……」

心のどこかでは、答えを聞く事を怖れている。だが、本当の事を知らなくてはならないとも思っていた。

美咲は各々の表情を窺った。それぞれ、意図的に美咲から目を逸らそうとしているのが一目瞭然であつた。

「雅通」

美咲は雅通をターゲットに絞り、鋭い視線を投げかける。

雅通は名前を呼ばれると、身体をビクリと反応させた。

「——江梨子さんと言い、美咲と言い、何だつて俺の周りにいる女は気が強いのはっかなんだ……」

雅通はガツクリと頂垂れると、お手上げだ、と言わんばかりに深い溜め息を吐いた。

「分かつた。俺から話すよ。——ただし……」

雅通は真顔で念を押してきた。

「聞いた後で、自分を追い詰めるような真似は絶対にすんなよ？」

「え……。あ、うん」

あの雅通が慎重になつている事に、美咲も少なからず不安を覚えたが、それでも、ちゃんと全てを知りたい、と思いながら頷く。

それを見届けてから、樋口と江梨子が複雑な表情をしている中、雅通は一呼吸置いて話し始めた。

「俺も又聞きしただけだから大まかにしか知らないけど、南條さん

の親父さんは、美咲の親父さんの身代わりになつて命を落としたとか……。美咲には悪いけど、貴雄さん、だっけ？ あの人には霊力もあまり高くなさそうだし、近くにいたら、かえって足手纏いになるタイプだ。俺も、あの人に逢つてそれは感じたからな。

ただ、南條さんの親父さんは、当然、今の南條さんと同等、もしくはそれ以上の霊力を持っていた人だったみたいだから、仮に貴雄さんが一緒にいたとしても簡単に妖鬼に斃されるのはおかしい」

雅通は突然、口を閉ざした。

美咲は固唾を吞んで続きを待つ。

南條の父親が貴雄の身代わりになった。それだけでも衝撃的な事ではあるが、雅通達を見ていると、どうもそれだけではなさそうに感じる。

暫しの間、部屋の中に重苦しい沈黙が流れたが、やがて、雅通は意を決したように再び口を開いた。

「——昨日、俺と南條さんは藍田本家を出てから妖鬼達に取り囲まれた。幸いにも鬼王に遭遇する事はなかったけど、その代わり鬼姫に再び逢った」

話が急に別の方へ飛んだ。

昨日の事と南條の父親の死には、何ら関連性はなさそうに思えたが、途中で口を挟むのもどうかと考え直し、美咲はそのまま黙っていた。

「最初は鬼姫も俺達の戦いを遠巻きに見ていたんだけど、そのうち何を思ったか南條さんに近付いて幻術を使いやがった。

奴らにとって人の心の闇は格好の餌だ。そして、鬼姫は南條さんの中にも闇がある事を見抜いたのかも知れないな。しかも、本家でとんでもない事を吹聴されたばかりだったから、南條さんも、寸での所で闇に落ちかけていた。

俺もあの時は南條さんの事で頭が一杯だったから気付かなかったけど、もしかしたら、南條さんの親父さんも鬼姫の幻術にやられたのかも知れない、と帰り際に思ったよ。そして、そのまま闇に落と

されて……」

「ちよつと待つて」

最後まで黙つて聞き続けようと思つていたが、一つ、雅通の話の中に引つかかる点を見付けてしまった。

話を途中で遮られたにも拘わらず、雅通は嫌な顔一つせず美咲を見た。

「何だ？」

「あのさ、さつき、南條さんが本家でとんでもない事を吹聴された、つて言つてたけど、一体、何を言われたの？」

美咲の質問に、雅通の眉がピクリと動いた。

この男は、頭に 馬鹿 が付くほど正直だ。だから、思つた事が顔に出やすい。当然ながら、隠し事など出来るようなタイプではない。

「——いずれは分かつてしまふ事だろうし……」

雅通は独りごちると、美咲を真つ直ぐに見据えた。

「本家の奴ら、南條さんに言つたんだよ……。——桜姫の呪いを食い止めるには、金属性の能力者が、魂を受け継いだ娘を……」

そこで雅通は口を噤んだ。だが、雅通の言葉のニュアンスで、彼が何を言おうとしたか察してしまった。

「——何、言つてんのよ……」

口を開いたのは江梨子だった。

「つまりそれつて南條君が美咲ちゃんを……？ あんた、一体何を考えてんのよつ？」

咄嗟に江梨子は立ち上がり、雅通の胸倉を掴んだ。その表情は、怒りと哀しみが複雑に入り混じっている。

「俺だつて信じられませんでしたよ！」

江梨子に激しく睨まれながら、雅通も怯む様子を見せずに返した。「でも、物は考えようでしょ？ もし奴らの言っている事がほんとなら、その運命に逆らつちまえばいい。

江梨子さん、一番辛いのはあなたじゃなくて、桜姫に選ばれてし

まった美咲、そして南條さんです。確かに、南條さんはずっと思案に暮れている。でも、南條さんなら、必ずや迷いから抜け出せる。

——俺は、そう信じています」

雅通の強い言葉に、江梨子の手の力が緩んだ。同時に、江梨子は美咲に視線を注いだ。

美咲を憐れんでいるのが、手に取るように伝わってくる。

しかし、美咲は江梨子の気持ちとは対照的に、自分でも驚くほど落ち着いていた。この先の事を考えると怖くないわけではないが、雅通の思わぬ優しさが、美咲の心を和らげてくれた。そして、こんな時だからこそ、自分のために悩んでいる南條を救うべきだとも思った。

美咲はそう決意すると、素早く立ち上がった。

他の三人は、一斉にこちらを見る。

「美咲ちゃん……？」

未だ心配そうな表情を浮かべている江梨子に対し、美咲は笑みを見せた。

「私は、平気ですよ」

聖地に着いてから自室に入った途端、溜まっていた疲労が一気に押し寄せてきた。

南條はベッドに仰向けに倒れると、天井をジッと睨んだ。

綺麗好きな江梨子がいるお陰で、建物の手入れは良く行き届いているが、それでも、さすがに天井までは手が回らないようで、わずかに黒く煤けているのが目に付く。

無意識に見ているそれは、最初は何の変哲もないように見えるが、時間が経つにつれて、人の顔が浮き出ているように見えるから不思議である。

（もしかして、こんな情けない俺の姿を親父が呆れて見下ろしているのかも知れない）

そんな事を思いながら、南條は自らを嘲笑う。

あの時、鬼姫の幻術に陥れられかけたのは不覚以上の何物でもない。南條の中では、美咲と関わっていくうちに、貴雄に対する憎しみは消え去ったと思い込んでいたが、心のどこかでは、未だにわだかまりが燻っていたらしい。

鬼姫は、それを南條以上に見抜いていた。だからこそ、あんな術をかけてきたのである。

術をかけられている最中の胸の苦しみは、今までに味わった事がないほど酷かった。心臓を鷲掴みにされるような、といった例えがあるが、まさにその通り、鬼姫の闇の言霊が、南條の体内にじわじわと入り込み、そのまま心臓が縛り付けられるような感覚があった。

もし、あの時、迷いを振り払えなかったとしたら、咄嗟に刀を振り落とせなかったとしたら、南條は間違いなく鬼姫によって闇に突き落とされていた。

（ほんとに俺が、美咲を守ってやれるほどの資格があるんだろうか……？　そもそも俺は……）

心の中で自分に問いかけていた時だった。遠慮がちに、部屋のドアがノックされた。

南條はゆっくりと身体を起こした。

本当は、誰の顔も見たくないというのが正直な気持ちだったが、訪問者を無下に扱う事も出来ないと思い、ドアに近付いて開けた。

途端に、南條は息を呑む。

訪問者は、雅通でも樋口でもなく、ましてや江梨子でもない。そこにいたのは、美咲であった。

「あの……」

美咲は南條が出てくるなり、彼の表情を窺ってくる。

自分に言いたい事が山ほどありそうだと南條は美咲と視線を交えながら思った。

「入れ」

南條は短く促した。

「はい」

美咲も無駄口を一切叩かず、素直に従って中に入って来た。ただ、美咲は雅通と違い、自分で勝手に折り畳み椅子を出して坐る、といった芸当はしない。

南條もそれを承知しているので、彼から椅子を出し、それに坐るよう指示した。

美咲は「失礼します」と言って、腰を下ろす。気は強い方ではあるが、あの両親も、美咲へ最低限の躰をしてきたのか、場を弁える事はしっかりと心得ている。

美咲が坐るのを見届けた南條は、自らも向かい合わせになるようにベッドの脇に腰かける。

「——雅通から、聞きました」

坐るなり、美咲が言った。

南條は驚くよりも、やはり、と思った。

雅通が江梨子に捕まっていたのも知っているし、何より、あの男は嘘が全く吐けない。

腹は立たない。どのみち、どんな形であれ、本家での遣り取りは知られてしまっていただろうから。

「——そうか……」

南條は短く答えると、美咲を見た。

少なからず、美咲に対して懸念がある。

鬼王完全復活の鍵となる桜姫。その魂を受け継ぐ美咲。そして唯一、桜姫を封じる事が出来る存在である、南條。

美咲はどんな気持ちで、雅通から話を聞いたのであろうか。

「私は、南條さんの負担にはなりたくないんです」

美咲の言葉に、南條は目を見開く。まさか、美咲は、自分を消せ、と南條に言うつもりか。南條が口を開こうとした時、美咲は「でも」と続けた。

「私は、易々と命を落とす気はありません。雅通も、運命に逆らう

べきだ、と言っていましたから。

私が桜姫の魂を持って生まれ、鬼王の妻として選ばれてしまったのは、確かに宿命だったのかも知れません。けど、それならそれで今からその 宿命の糸 を断ち切ってしまえばいい。

南條さんもそうです。属性については、昨日、樋口さんから詳しく教わりましたから、南條さんが予想外の重責を背負ってしまったのも、雅通の話でよく分かりました。

南條さん、私は確かに、南條さん達のような力はないですけど、強くなりたいという気持ちに変わりはありません。——私は鬼王と、そして何より、自分の中の桜姫と戦います」

美咲はそこまで言うのと、真っ直ぐな瞳で南條を見つめた。茶味を帯びた双眸に迷いは全くない。寧ろ、貴雄の前で修行を決意した時以上に、強い光を放っている。

「ほんとに強くなつたな」

南條は素直に思った事を口にし、微笑を浮かべた。

「そうですか……？」

南條の言葉に、美咲は訝しげに首を傾げる。

「私は、自分では全く変わっていないように思っんですけど……」

「自分の事は、意外と自分では分からないもんだ」

口許の笑みはそのまま、南條は続けた。

「俺は初めて逢ったあの日から、いや、それよりも前からずっとお前を見てきた。もちろん最初は、貴雄さんに頼まれたからというものもあるけどな。そして、お前を守ると言いながらも、心の奥底で親父の死が燻り続けていたのも真実だ。

だが、いつまでも過去に囚われてばかりではいけないな。今のお前を見て、つくづく思ったよ」

南條はそこまで言うのと、美咲に手を伸ばし、そのまま頬に触れた。柔らかくて温かな感触が、直に伝わってくる。

南條はそのまま、美咲を自分の元へと引き寄せそうになったが、寸での所で我に返り、慌てて手を引っ込めた。

「——すまない」

「い、いえ……」

美咲も何やら察したのか、南條から目を逸らすと、気まずそうに俯く。

初めて美咲と言葉を交わした日は、女としての認識が全くなかったので軽口も平然と叩けたが、今は、美咲の想いが何となく分かっているからか、ほんの些細な行為でも異常なほど意識してしまう。

まるで、恋に目覚めたばかりの初心^{うぶ}な少年のようだと南條は自分に呆れ返ってしまった。

（今は、色恋沙汰に溺れている暇なんかない）

南條は自分に言い聞かせると、気持ちを切り替えるつもりで「藍田」と美咲を呼んだ。

呼ばれた美咲は、わずかに頭をもたげる。

「明日から、本格始動しようか？」

南條の口から、自然と言葉が出ていた。

「もちろん、樋口さんは俺の師だから俺よりも遥かに信頼が置けるが、お前は飽くまでも俺の弟子になるわけだからな。お前の強い想いに応えるためにも、俺は、精一杯の事をお前にしてやる」

「ほんとに、南條さんが……？」

「ほんとだ」

美咲の問いに、南條は大きく頷く。

「お前を強くして、俺も、更に強くなる。鬼王を封じる——いや、斃すつもりで」

第六章 第二節

また、一日が過ぎた。

美咲は携帯のアラームが鳴る前に目が覚めた。と言うより、正確には、ベッドに入ってから殆ど眠れずにいた。

南條の言葉と、頬に触れた手の感触が、自室に戻ってからも残り続けていた。

美咲の思い違いでなければ、南條は以前よりも自分を意識してくれている。声も、自分を見つめる瞳も、優しさに満ちていると感じた。

（ほんの少しでもいい。私の存在が、南條さんの心に留まる事が出来るのなら……）

美咲は思いながら、ゆっくりとベッドから身を起こした。

身支度を整え、朝食を済ませてから、美咲は南條と共に、聖地の中心である湖畔へと向かっていた。

江梨子と樋口は、他にやる事があるから、と言って山小屋に残り、雅通に至っては、同行する気満々であったようだが、何故か樋口に引き止められていた。

『瀧村、今日はとことん俺に付き合って貰うぞ！』

樋口は豪快に笑いながら、雅通の肩をガツシリと掴んでいた。

雅通はどうにか逃れようと足掻いていたが、江梨子までもが一緒にになって拘束していた。

（雅通、ほんとに大丈夫かな……？）

相変わらずぬかるんでいる道を歩きながら、美咲はさすがに心配になってきた。

樋口も江梨子も、決して悪い人間ではないと分かっている。しか

し、どこか得体が知れない部分があるのも否めない。

（あんまり深く考えない方がいいかも……）

言葉では言い表せないほどの良からぬ事が頭に浮かび、美咲は慌ててそれを振り払った。

そうしているうちに、二人は湖畔へと辿り着いた。

昨日と同様に良い天気恵まれており、湖は降り注がれる陽光に照らされてキラキラとしている。

何度見ても心が洗われるようだ、と美咲は思った。

「藍田」

ぼんやりと湖に魅入っていた美咲に、南條が静かに声をかけた。

美咲はハッと我に返り、南條に向き直った。

「ご、ごめんなさい！ ポケッとしてしまつて……」

慌てて謝罪する美咲に、南條は小さく笑んだ。

「どうした？ もしかして、緊張してるのか？」

「え……。ええ、まあ……」

緊張しているというのは、あながち間違いではない。日中とは言え、今は南條と二人きりの状態。しかもここは、山小屋から結構離れた場所にある。南條に限って、可笑しな真似は絶対にしないと思うが、それでも、一度意識してしまうと胸の鼓動が速度を増してゆく。

（落ち着け！ これからしばらくは南條さんの下で修行する事になるんだから！ これぐらいで動揺してどうすんのよ！）

心の中で言い聞かせながら、美咲は深呼吸する。

それを眺めながら、南條は、こいつほんとに大丈夫か、と言わんばかりに首を捻っている。

「まあいい。取り敢えず始めようか」

呆れたような表情はそのまま、南條は美咲に促した。

「昨日、樋口さんからも聞いたと思うが、藍田には俺達と違って属性と言うのがないから、修行も特殊な物になると思うが。」

そうだな、まずは、武器の精製術を教えようか。――藍田、ちょ

つと失礼するぞ」

南條は断りを入れると、後ろに回り、背中越しに美咲の両手を、自らのそれで包み込んだ。

予想外の事に、美咲は瞠目したまま言葉を失った。先ほどの緊張は度を越え、仕舞いには全身が熱を帯び、じわじわと汗が噴き出してきた。

「身体が硬くなってる。もう少しリラックスしろ」

（それは無理！）

口が全く利けなくなっているので、心の中で即座に突っ込みを入れる。

案の定、南條には美咲の思いは全く通じていないらしく、飄々としながら続けた。

「武器の精製で一番重要なのは精神力だ。自分の中の靈力を極限まで増大させ、手の先に気を集中させる。気持ちが散漫になっていたら、当然ながら武器の精製は出来ないし、些細な靈力すら発動出来ない」

南條はそこまで言うと、美咲の手を包み込んでいる両手に力を籠める。これでは、靈力を発動させる前に精神状態の方が可笑しくなってしまう。

「——な、南條、さん……」

やっとの思いで美咲は口を開いた。だが、その声は消え入るよう小さい。

それでも、南條には十分に通じたらしい。

「どうした？」

「あの、どうして……？ その、身体を……」

「身体が何だ？ まさか気分でも悪いか？」

「いえ、そうじゃなくてですね……。何で、こんなに身体を、密着させるのかなあ、って……」

「ん？ ああ、そう言う事か」

美咲の動揺の原因は理解されたらしいが、南條は身体を全く離そ

うとせず、「だが」と続けた。

「お前はまだ、霊力を引き出す方法を知らないだろ？　だから俺が、少しでも力を貸してやろうと思ったただけだ」

「そ、それは分かりますけど……」

「まだ何かあるのか？」

怪訝そうにしている南條に、美咲は真っ先に疑問に思った事を口にした。

「もし私が私でなかったら……。例えば、私が雅通だったとしても同じ事をしていきますか？」

「しないな」

南條は迷わずきっぱりと否定した。

「俺は男色の趣味などない。それに、男同士がべったりしているのを見たら、お前はと思う？」

「え……？」

南條に逆に問われ、美咲は、この美しい湖畔をバックに、南條と雅通が密着しながら修行する姿を頭の中に描いてみた。

「——気色悪いですね……」

口角と眉を痙攣させながら美咲が答えると、南條は満足げに頷いた。

「だろ？　俺はこれでも相手を見ながら鍛錬方法を考えてるつもりだ。——確かに、これはセクハラだ、と言われてしまえばそれまでだが……」

南條の言っている事は支離滅裂だが、妙に説得力を感じさせるのも事実である。

（ここは、腹を括るしかないわけか）

全身の熱を感じつつ、美咲は、深呼吸を数回繰り返して高鳴る鼓動を落ち着かせる。

心が静けさを取り戻すと、今度は、自分の中に眠っているであろう霊力を引き出す事に専念した。

昨日は属性の説明を一通り受けただけで終わったせいもあり、当

然ながら、靈力の出現方法など知らない。しかし、瞳を閉じ、心を無の状態にすると、体内に温かな物が流れ込んでくる。

（これは、南條さんの気……？）

江梨子から受け取った気は温かかったが、南條の気はまた違う。

江梨子の気はどちらかと言うと慈愛に満ちているのに対し、南條の気は豪傑さを感じさせる。

南條の持つ金属性は、能力者最強と言われていると樋口は言っていたが、彼から流れ出る気は、確かに 最強 と呼ぶに相応しいものだった。

（でも、私は……？）

南條の気を受け取りながら、美咲は自分の中に眠っているであろう靈力を引き出そうとする。だが、そうそう簡単には出てきてはくれないものらしい。

（それにやっぱり、南條さんに抱き締められていると思うと……）

意識しないようにと自分に言い聞かせてみても、時折、美咲の項に南條の吐息がかかり、それによって集中力が削がれてしまう。

（本当に、こんなんで修行になるの……？）

南條に下心などないと分かっているにもかかわらず、やり方に疑念を抱いてしまっているのは無理もない事だった。

あれから、南條と美咲は、陽が西に傾く頃まで鍛錬を続けていたが、結局、何の進展もないまま終わった。

「仕方ないな。どのみち、藍田の靈力は特殊だから、そうそう簡単に出てこないのだろう」

南條はそう言うとき、美咲に向けて小さく笑って見せる。

そんな南條の優しさは痛いほど伝わり、途端に美咲は居た堪れない気持ちになる。

「すみません……」

気が付くと、南條に謝罪していた。

南條は怪訝そうに美咲を見つめる。

「どうして謝るんだ？」

「——だって私は、全然集中していなかったから……。分かってはいても、南條さんに、その……。だ、抱き締められていると思うと……」

口にしてから、美咲はハツとした。適当な言葉が浮かばなかったとは言え、抱き締められているとは、何とも大胆な発言であった。

（南條さん、引いたよね……。？）

美咲は窺うように、南條を上目で仰ぎ見るが、南條の表情に変化はない。

それを見ていたら、意識をしているのは自分だけなのだと改めて認識させられ、少しばかり哀しいような気持ちになった。

（南條さんが、私なんて相手にするわけない……）

南條を見つめているのが辛くなり、美咲はそのまま俯いてしまった。

南條に恋愛感情を抱いてはいけないという事はないと思う。南條と美咲は相反する関係ではあるが、それは飽くまでも、美咲の中に眠る桜姫であって、美咲自身ではない。しかし、今は南條に想いを伝えてはいけないような気がしていた。

「藍田」

今まで微動だにしなかった南條が口を開いた。

「お前も知っていると思うが、俺は面倒な事が嫌いだ。こんな俺だから、自分で弟子を取ろうと思った事も一度たりともなかった。でも、お前は違う。俺は……。お前のためならどんな事でもしてやる。」

——鬼王だけではなく、本家の奴らからも……」

そこまで言うと、南條は美咲に背を向けて歩き出した。

美咲もそれに着いて行く。

南條は前を歩きながらも、美咲の歩測に合わせてくれているのか、彼にしては、ゆったりとした歩き方であった。そんなさり気ない優しさが、また、美咲の想いを膨らませてゆく。

茜色の空に、青白い月がひっそりと浮かび始めた。

夕食を済ませた後、各々は好きなように過ごしていた。

樋口と南條はそれぞれの自室へ戻り、雅通は風呂場へと直行。美咲は江梨子と共に洗い物をし、その後はリビングで、江梨子の淹れてくれた緑茶を啜りながら寛いでいた。

「ねね美咲ちゃん、今日はどうだったの？」

自ら淹れた緑茶に手を付ける事なく、江梨子は美咲に訊ねてきた。恐らく、江梨子は修行の成果について聞きたいのである。

「駄目ですね。集中しなくては、と思えば思うほど、雑念が入ってしまつて……。南條さんも手助けしてくれたんですけど……」

美咲が答えると、江梨子は、「違うわよ」と不満げに否定を口にした。

「え……？　違う、って何がです……？」

怪訝に思いながら美咲が首を傾げていると、江梨子はグルリと辺りを見回し、身を乗り出してきた。

「私が聞きたいのは南條君との事よ」

「南條さん、ですか……？」

益々意味が分からない。美咲は更に困惑した。

（一体、江梨子さんは何を知りたいんだろ……？）

そう思っていると、江梨子は美咲に対し、とんでもない事を口走ってきた。

「美咲ちゃん、南條君と出来ちゃったんでしょ？」

美咲は思わず、口にしていた緑茶を吹き出しそうになったが、寸での所でそれを呑み込んだ。そして、一呼吸吐いてから、「何言つてんですか！」と江梨子に怒鳴った。もちろん、声は最大限まで抑えている。

「わわ……、私と南條さんが、ででで……、出来た、って……！　そんな事、絶対に有り得ませんよ！　南條さんの名誉のためにも言うておきますが、私は南條さんに、指一本触れられておりません！」

指一本触れられていない、と言うのは真っ赤な嘘であるが、南條との間に何の進展もなかったのは事実であるから、美咲はきっぱりと否定した。

だが、江梨子は全く信じていないようで、なおも美咲の顔を窺ってくる。

「ほんとにいい？ あーんな辺鄙な場所に二人つきりでいて、なーんにもなかったの？」

「当たり前です！ なーんにも、ありませんよ！」

「ふうん……。何だかつまんないわねえ」

「っ、つまんない、って……。江梨子さん、そんなに何か期待してたんですか？」

「そりゃあ期待もするわよ」

悪びれもせず、江梨子は言った。

「だって、私は敢えて美咲ちゃんと南條君を二人つきりにしてあげようと思ったんだもん」

また、江梨子は意味不明な事を口にしてきた。

今度は何を言うつもりなんだろ、と美咲は思いながら、引き攣り笑いを浮かべて江梨子の話の続きを待つ。

「私から見たら、南條君だって美咲ちゃんに対して満更でもないよな感じなのよねえ。それなのに、あの男はいつも後一步が踏み出せないから駄目なのよ！」

確かにあいつの上っ面は最上級よ。悔しいけどそればかりは私も認めざるを得ないものね。けどね、問題は中身！ クソ真面目過ぎて、見ているこっちが苛々しちゃうわ！

ったく！ こっちはこっちで真っ先にしつこい金魚の糞を回収してやったつてのに全然意味ないじゃないの！」

話すうちに感情が昂ぶってきたようで、江梨子は、テーブルを力一杯拳で叩いた。それに合わせてテーブルは振動し、そこに載っていた湯呑みがカチャンと音を立て、中の緑茶がわずかに零れた。

「江梨子さん、真面目なのは南條さんの長所ですから……」

興奮状態の江梨子を、美咲は何とか宥めようとする。しかし、それがかえって逆効果であった。

「美咲ちゃん！ それじゃ駄目よ！ あいつの場合、少しは頭を柔らかくして貰わないと！ 特に恋愛が絡むと、ほんっとにあいつはどうしようもないんだから！

そうよ！ 感情の赴くままにドーンと押し倒す！ それが男ってもんよ！」

どうも論点がずれている。しかも、どれも明らかに、美咲ではなく、ここにいない南條に向けられた言葉である。

（それに 金魚の糞 って、絶対に雅通の事を指してるよね……）
表現としては間違っではないだろうが、だからと言って、雅通を生き物以下の物体に例えてしまうのはどうだろう。こればかりは、さすがに雅通に対して同情してしまう。

江梨子が独りで興奮してくれたからか、美咲はあっという間に冷静さを取り戻していた。同時に、自分達のいない所で江梨子に散々貶され、くしゃみを連発しているであろう南條と雅通を想い浮かべた。

第六章 第三節

興奮状態の江梨子から解放されたのは、日付けが変わろうとしていた頃だった。

正直な所、美咲は一晩中、江梨子に付き合わされる覚悟をしていたのだが、途中で樋口が現れたので何とか解放された。

（樋口さんのお陰で助かった……）

美咲は部屋に戻るなり、そのままベッドに倒れ込んだ。

横になりながら、日中、聖地の中心で南條に背中越しに抱かれた事を改めて想い出す。

戸惑いの方が大きかった。しかし、心のどこかではそれを望んでいたのか、南條とずっと、あのままでいたいと思う自分もいた。

（南條さんには、私のような邪な思いなんてないはず。——なのに

……）

そう思いながら、期待を抱いてしまう自分の愚かさに苦々しさを感じる。

（こんなんで、私はほんとに南條さんの期待に応えられるの……？）

美咲は、何度も自問自答を繰り返す。

自分も強くなりたい、という気持ちは本物であるが、半面で、不安も全くないわけではない。そもそも、自分の力が如何なるであるかも分かっていないのだ。

（でも、頑張らないと……）

美咲は心の中で言い聞かせると、そのうち、意識が少しずつ遠退いていった。

『……ノカタヲ……』

夢と現の狭間を彷徨っていたら、どこからともなく声が聴こえてきた。

一瞬、鬼王が自分を呼んでいるのかと美咲は思ったが、その声は、鬼王のそれとは違う。

（明らかに女物の声だ。それに……）

美咲は無意識に、両腕で自らの身体を抱き締めていた。

聖地の中心を彷彿させる、澄み切った湖のような声である。しかし、その声は鬼王の同様、美咲を恐怖の底へと陥れる。

（けど、怯えてばかりじゃ駄目だ）

美咲は自分に言い聞かせると、腕を解き、深呼吸を一つした。

「桜姫、なんでしょ？」

姿なき者に、美咲は問いかける。だが、相手から返事は戻ってこない。

「今までずっと、人を散々振り回していたくせに……。それなのに、逆にこっちの質問に対してはだんまりを決め込む気？」

美咲は苛立ちを露にして、再び訊ねる。怖くないわけではないが、表面上だけでも強気な姿勢を貫かないと、その場に崩れ落ちてしまいそうだった。その証拠に、美咲の身体は鬼王と現で初めて逢った時と同様に震え、背中には汗が止めどなく流れ続けていた。

「……フツ……」

暫しの沈黙の後、女の忍び笑いが聴こえてきた。と同時に、美咲の目の前が靄がかかったようにぼやけた。だが、それはほんの一瞬の事で、すぐに視界がはっきりとした。

そこに現れたのは、美咲と同年代の娘であった。

（これが、桜姫……？）

美咲は目を瞠った。

声の感じから、モデル並みにスタイルの良い美女を想像していたのだが、実際の桜姫は美咲よりも小柄な童顔で、可憐と言った表現が一番しっくりくる。

（もっと怖い女だと思っていただけに、何だか拍子抜け……）

美咲はホッと胸を撫で下ろすと、改めて桜姫を見つめた。

艶やかに輝く黒髪は惜しげもなく背中まで流し、頭には控え目に

髪飾りを挿している。服装も随分と変わっており、学校の歴史の教科書で見た事のある、上半身には、細やかな刺繍が施されたダボダボした上着と、下半身には足元までスッポリと隠れるロングスカートのような物を身に纏い、その上から、淡い紅色の薄いシヨールを両方の二の腕に絡ませている。

何とも奇妙な格好ではあるが、桜姫は古代の巫女姫なのだから、現代風の格好をしている方がかえって不自然か、と美咲は思い直した。

「こうしてそなたと対面するのは初めてであるな」

愛らしい見た目からは想像出来ぬほどの口調で、桜姫は言った。

「ただ、本来であれば、私は 器 の前に姿を現さないのであるが、今回は少しばかり事情があつてな」

「事情……？」

当然ながら、桜姫の言いたい事が全く理解出来ず、美咲は怪訝に思いながら首を傾げた。

そんな美咲に対し、桜姫は漆黒の双眸を真っ直ぐに注ぎ込んでくる。ただ、見つめられているだけだというのに、その瞳からは圧倒的な力を感じた。

美咲は視線を逸らしそうになる。だが、ここで逃げて堪るか、といった変な意地が働き、奥歯を強く噛み締めながら桜姫と対峙した。二人の間に、不気味なほどの静けさが流れる。

「——そなた、相当な変わり者だのう」

沈黙を破つたのは、桜姫の方だった。

「私と視線を合わせた者は皆、魂を抜かれる、などとほざきながら怯えていたというのに。確かに、わずかばかりの恐怖心はこちらにも伝わってきたが、今まで見てきた人間共とは比べ物にもならぬ」

「あ、当たり前よ！ 私の中にはあんたの魂もあるんだから！ なのに、自分で自分に怯えるなんて……。滑稽にもほどがあるわ！」

桜姫の言葉に美咲が強気で出ると、桜姫は「なるほど」と口の端を上げた。

「そなたの言う事は尤もだ。

それにしても、そなたは本当に面白い娘だ。私は千年以上もの間、自分により近い娘を 器 として生き永らえてきたが、そなたのように、自分の意思をはっきりと持った娘は未だかつていなかった。

——だが、だからこそそなたは厄介だ」

桜姫はそこまで言うのと、先ほどとは比べ物にならないほどの鋭い視線を美咲に向けてきた。

「そなた、何故、私の意志に逆らおうとする？」

そう訊ねる桜姫の口調は、ゆったりと穏やかなものであるが、決して有無を唱えさせない強さがあつた。

美咲は貝のように口を閉ざした。否、金縛りに遭つたように微動だにも出来ずにいた。

桜姫は続けた。

「私の望みは鬼王の復活。そして、鬼王を支配者とし、共に新たな世界を創り上げる事だ。それなのに、そなたは悉く私達の邪魔をしてくれる。しかも、あの金属性の男に現を抜かしおつて……」。

あの男は、鬼王にとつても、私にとつても、非常に邪魔な存在だ。——金属性の能力者のせいで、我々はこれまで、どれほど苦い汁を吸わされ続けてきた事か。

そして、アイダの一族にもだ。あの者達が、この私を……！」

桜姫は 藍田 の名を口にするのと、忌々しげに眉を顰め、両手を強く握り締めた。

雅通から話を聞いた時もあったが、やはり、桜姫の藍田家に対する憎しみは相当なものようだ。

こうして直に桜姫と面と向かっていると、昨日以上に、桜姫の無念が美咲の中に流れ込んでくる。それはあまりにもドロドロしており、美咲は息苦しさを覚えた。

（駄目だ！ このまま桜姫の感情に呑み込まれてしまったら……！）
美咲は心の中の自分に言い聞かせると、胸を押さえながら深呼吸を繰り返す。

負　の感情に流されてはいけない――

それは、南條に言われ続けていた事だ。

強くなると、この宿命を断ち切ると決めた。だから、こんな所で負けていけない。

「――憎む事が、全てじゃないよ……」

どうにか落ち着きを取り戻し、美咲は桜姫に言った。

「確かに、私だってあんたに同情したよ。だって、あんたは私で、私はあんたなんだから。けどね、人間だって捨てたもんじゃない。もちろん、嫌な奴だってたくさんいるけど、その分、いい人だってたくさんいるんだよ？　少なくとも、私はあんたと違っていい人に恵まれたから。」

私は、ここにいる全ての人が好きなの。だから、あんたが鬼王と共にこの世界を滅ぼすと言うのなら、私は、みんなのために戦うよ」「戦う、だと？」

美咲の言葉に、桜姫は、あははは、と高らかに笑った。

「ほんとに馬鹿な娘だよ！　そなた、今言ったよな？　『あんたは私で、私はあんた』だと。」

そなたの言葉は即ち、自らの身を滅ぼすという意味も含まれておる。――そう、私とそなたは、どうあっても離れられない運命なのだよ」

「だから、私がその　運命　を断ち切るのよ。確かに今までは、私のようにあんたの魂を受け継いでしまった人達は、南條さん同様の金属性の能力者によって殺されてしまった。けど、それは単に自身と向き合い、戦おうとしなかったからでしょ？

私は絶対に嫌だ！　何もせず、ただ、下らない　運命　に流され続けるだけなんて真っ平ごめんよ！」

美咲は強く言い放つと、桜姫を睨んだ。

桜姫は眉一つ動かさずに美咲を見つめ返していたが、やがて、フ

ウと深い溜め息を一つ吐いた。

「——そなたはどこまでも強情だな」

桜姫の皮肉たつぷりの言い回しに、美咲は「そりゃどうも」と返しながら小さく笑んだ。

「南條さん達と常に行動を共にしているうちに、自然と強くなっちゃったのかもね。南條さんにも、強くなったな、と言われたし」

「確かにそうだな。私は生まれた頃からそなたと共にあったが、もう少し、可愛げのあった娘だったと記憶しておる。——ほんとに、とんでもない疫病神に惚れおったから……」

桜姫は微苦笑を浮かべると、「だが」と続けた。

「私にも私の信ずべきものがある。それはどんな事があっても曲げるつもりは一切ない。——そなたが、どんなに私に抗おうとも、な」「それならなおの事、私はあんた達に対抗するよ」

「——まだ言うか……」

桜姫は心底呆れたように言う。そして、それが合図となったかのように、美咲の目の前は桜姫が現れた時と同様、靄がかかり始めた。「桜姫！」

美咲は慌てて桜姫の名を叫んだ。

「最後に一つだけ教えて？」

美咲が訊ねると、桜姫は「何だ？」と問い返してきた。

「あんた、鬼王を愛してる？」

「それはまた随分と……」

桜姫から小さな溜め息が聴こえてきた。

「そなた、私と共にいながら私の気持ちも分からないのか？」

「べ、別に分からないわけじゃないけど……。ただ、念のために確認したかっただけで……」

「念のために、か」

桜姫はそう呟くと、ほんの少し、哀しげに瞳を伏せた。

「考えるまでもない。鬼王は私にとって全てだ。——あの方を失ってしまったら……。私も、こうして生き永らえる意味がない……」

外から響く静かな水音で、美咲は目を覚ました。

「……ん……」

美咲は小さく呻きながらベッドから身を起こす。そして、窓際に向かい、カーテンを開いた。

思った通りであつた。雨が降っている。

「こつちに来てから、初めての雨じゃん……」

美咲は独りごちると、窓の外を眺めた。

夜が明けているであろう事は何となく分かったが、空には暗雲が立ち込め、心なしか哀愁を誘う。それは、先ほどまで見ていた桜姫の夢のせいでもあるのだろうか。

桜姫の鬼王に対する深い愛情は、美咲にも痛いほど伝わってきた。相手を想う気持ちは、美咲も桜姫も同じなのだ。ただ、愛し方が少し違うだけで。

（もし、鬼王と桜姫の出会い方が違っていたら……。そして、あの忌まわしい過去がなければ……）

美咲は思いながら、飽きる事なく降りしきる雨空を仰ぎ続ける。

鬼王を、桜姫を幸せにしたい。封印という形ではなく、もっと違う方法で二人を救う事が出来ないのか。

（とにかく、私が強くなるしかないんだ）

美咲は窓から視線を外すと、自らの手を見つめた。そして、自分が今、何をすべきか考えていた。

（修行も確かに大切。それは分かっている。けど、全てを知った以上、私は……）

美咲は手で拳を作ると、ある事を決心した。

今までは怖くて逃げ続けていたが、それでは駄目なのだ。鬼王と桜姫のため、そして何より、周りの幸せのために。

南條達の反応が怖くないわけではない。だが、ここで立ち止まっていたでは、何の進展もないまま終わってしまう。

「——本家へ、行こう」

美咲は自分に言い聞かせるつもりで口にした。

美咲が本家へ行きたいと告げたのは、朝食を済ませてからだった。案の定、みんなは美咲の言葉に目を瞠って驚いている。

「美咲、何だつてまた……」

雅通が眉根を寄せながら呟くと、江梨子もそれに続いて「そうよ」と口を開いた。

「鬼王や桜姫については南條君達が調べてくれたのだから、今更、美咲ちゃんが行く必要なんてないでしょ？ それに、今は本家に近付くのは危険だわ。——万一、鬼王が美咲ちゃんの目の前に現れたとしたら……」

江梨子はそのままで言うと、最後の言葉を呑み込み、複雑な表情で美咲を見つめていた。江梨子だけではない。雅通も、樋口も、江梨子と同じ気持ちを抱いているようで、神妙な顔付きをしている。

ただ、南條だけは違った。何か思案に暮れているのか、俯き加減に目を伏せている。

美咲は各々に視線を送ると、ゆっくりと話し始めた。

「江梨子さんの言いたい事はよく分かります。でも、私は夢の中で桜姫と逢い、桜姫の想いを知ってしまった以上、私が少しでも行動を起こさないといけないんじゃないか、と思ったんです。

確かに、鬼王と桜姫が危険である事に変わりはありません。けど、そもそもの元凶は藍田の一族にあるのではないですか？ それにどのみち、本家の人間は私を消したがつている。ならば尚更、本家の主——史孝伯父さんと、面と向かって話さなければいけません。

そして、全ての誤解を解き、最良の方法をお互いに考えるんです。——こんな私の考え、間違っているでしょうか？」

皆に向かって美咲が問う。

「いや、間違いはない」

静かな口調で答えたのは、南條であった。

「藍田の言う通り、全ての元凶は藍田家だ。ただ、常人よりもちょ

つと強い霊力を持っていたというだけで、桜姫を異端者と見なしてしまったのだから。——それを考えると、桜姫は本当に憐れに思える」

南條はそう言うと、美咲に向けて小さく笑んだ。

「藍田、俺と一緒に本家へ行くか？」

「——いいんですか……？」

「いいも悪いも、お前一人ではここから帰る事なんて無理だろ？」

「そ、そうですね……。それじゃ、南條さんに甘えます」

美咲の答えに満足したように、南條は頷くと、今度は樋口に向き直った。

「そういうわけです。今度は、藍田を連れて本家へ行きます。——何だか、ロクに修行もしていませんが……」

ばつが悪そうに南條が苦笑を浮かべると、樋口は「いやいや」と答えた。

「俺は別に構わないが。それよりも南條、身体は大丈夫なのか？」

「ええ。俺はこれでも頑丈に出来ていますから」

優しい師匠の言葉に、南條は目を細めて頷いていた。

（こうして見ると、ほんとの親子みたい）

二人を見比べながら、美咲はそんな事を思っていた。

第七章 第一節

本家へ行くと話をしてから、南條と美咲はすぐに聖地を後にした。南條が藍田本家へ赴いた時は雅通も一緒だったので、交代で車の運転をしてもらったが、今回はそうはいかない。そのため、以前よりも休憩が自然と多くなり、本家へ着いた時間も相当遅くなってしまった。

車のデジタル時計は 18:00 を表示している。外を見ると、太陽が西に沈みかけている。

こんな時間に、しかもアポなしで本家へ乗り込むのは不味いだろ
うか、と南條は一瞬思ったが、美咲としては、すぐにでも藍田と話をしたそうだったから、その迷いを振り払い、前回同様、敷地内の空き地に車を止め、そこから玄関まで歩いた。

その間、美咲は硬い表情のまま口を閉ざしていた。緊張しているのか、それとも、何か思案に暮れているのか。

そう思っているうちに、玄関の前に二人は辿り着いた。

南條は美咲がインターホンを押すだろうと思い、黙ってその場に立っていたが、美咲は何故か後ずさりしてしまった。

（俺が押せ、って事か）

南條は微苦笑を浮かべながら、インターホンに手を伸ばす。

外観に似合わぬ、ピンポーン、と現代的な電子音が辺りに響き渡る。

しばらくして、引き戸が開かれた。

どいう偶然か。今回もまた、南條達を出迎えてくれたのはアサカだった。

「あら……」

アサカは南條を見るなり、小さく声を上げた。だが、表情は相変わらず、能面のように変化がない。

「もっいらっしやらないかと思っていましたのに。——もしかして、

お忘れ物でもなさいましたか？」

何とも白々しい言い方に、南條はわずかに不快感を覚えたが、どうにか感情を抑えた。

「いや、そうじゃない。今日は、藍田さんと逢いたいという者を連れて来ただけだから」

南條は、努めて落ち着き払った口調で告げると、背後に視線を向けた。

「誰かいらっしゃるのですか？」

アサカが怪訝そうに首を傾げていると、南條の後ろに隠れていた美咲が、恐る恐るといった感じで姿を現した。

「——みいちゃん……」

美咲を見るなり、それまで無表情だったアサカの眉がわずかに動いた。

「久し振り、アサちゃん」

自分そっくりなアサカに向け、美咲は微笑した。

美咲が本家へ来るのは、実に十年振り以上であつた。その間に、大好きだった祖父母が相次いで亡くなつたが、鬼王の夢を見て以来、ここへ近づく事を極端に恐れていたため、祖父母の最期を看取るところか、亡くなつた後も、墓参りにすら訪れる事がなかった。

あれだけ可愛がられていたのに、と一部の親戚は陰口を叩いていたそうだが、貴雄も理美も事情を知っていたから、そんな親戚連中の嫌味にも黙つて堪えていたようだった。

（けど、薄情な孫には変わりないよね）

家に上がり、南條と並んで従姉の朝霞の後を着いて行きながら、美咲は思った。

「みいちゃん」

長い廊下を歩きながら、朝霞はチラリとこちらを一瞥した。

「せっかく来たのだから、お祖父様とお祖母様にご挨拶ぐらいした

らどうかしら？」

言われるまでもない、と美咲は心の中で答えつつ、朝霞の言葉に黙って頷く。

朝霞はそれを見届けると、ニコリともせず、視線を逸らした。

（やっぱ苦手だな）

冷やかな気を放っている朝霞の背中を見つめながら、美咲は眉を顰めた。

朝霞の方が美咲よりも二歳年上だが、あまりにもそっくりな容姿で、亡き祖父母を始め、周囲からは、双子のようだと常に言われてきた。しかし、似ているのは外見だけで、性格は全くの正反対だ。美咲も、誰彼構わず愛想を振り撒くような性格ではないが、それでも、人当たりは決して悪くない方だと思っている。

それに比べて朝霞は、場合によっては冷酷と思えてしまうほど愛想がない。それは、同世代の相手に限らず、自分より遥かに年上の人間に対しても同じだった。

もしかしたら、生まれ落ちた時から、既に 笑う という感情が欠如していたのであろうか。そう思えるほど、顔の筋肉が殆ど動かない。

（南條さんも、朝霞の毒気にやられてしまったのかも知れない）

美咲は盗み見るように、隣の南條に視線を送る。

南條は無表情に見えるが、ほんのわずかに表情が険しくなっているようにも感じる。

そう思っているうちに、美咲達は仏間の前へ着いた。

朝霞が襖を静かに開くと、夏とは思えぬほど、ひやりとした空気が全身に纏わり付く。

美咲は無意識に自らの身体を抱き締めながら、仏間の中へと足を踏み入れ、仏壇の前に歩み寄った。

十畳以上ある部屋の片面には、埋め尽くさんばかりの遺影。その中には、幼い頃好きだった祖父母、そして、祖父の右隣に、若い女性の遺影もあった。朝霞の母親である。

朝霞の母親は、朝霞を生んで間もなく亡くなったそうで、当然ながら、美咲も面識が全くない。ただ、物静かで穏やかな人だった、とは貴雄から聞いた記憶がある。

（人は遅かれ早かれ、死んでしまうものなんだね……）

そう思ったが、美咲はハツとして、考えていた事を振り払うように頭を揺すった。

「どうした？」

南條が訝しげに訊ねてきた。

「い、いえ。何でもありません」

美咲は慌てて答えると、仏壇の前に正座した。そして、すぐ脇にあるマツチ箱を手に取り、そこから一本取り出すと、軽く力を加えて擦り付ける。

ジュツ、と音を立てて火が点くマツチ。美咲はそれを少しばかり見つめてから、二本立てられている蠟燭ろうそくに、それぞれ火を灯す。火が移ったのを確認すると、蠟燭の芯からマツチを放し、手首を振って残った火を消した。

（お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、今までごめんなさい……）

美咲は心の中で謝罪を述べ、側に置いてあつた線香に手を伸ばして、今度は片方の蠟燭からそれに火を移す。

橙色に揺らめく炎は、少しずつ、だが確実に線香を赤く燃やしてゆく。

美咲は線香を線香立てに置くと、目を伏せてそつと手を合わせた。もし、二人が生きていたら、今の私を見てどう思ってくれるだろう、と考えながら祈りを捧げ、美咲は顔を上げて両手を離れた。

「では、別室に移りましょうか」

美咲の仏前への挨拶が済むと、朝霞は淡々と二人を促した。

（もう少しでも余韻に浸りたかったのに……）

美咲は苦々しく思いながら、それでも素直に立ち上がり、朝霞に着いて行った。

客間に通された美咲と南條は、藍田が来るのを待っていた。朝霞は、父を呼んでくる、と言って部屋を一旦出ている。

不気味なほど静まり返った室内。家が広いせいもあるが、外からは全く物音が聴こえず、ただ、耳鳴りだけがやけに煩く響いている。ほどなくして、朝霞が藍田を伴って戻って来た。

「遠い所ご苦労さん」

美咲と南條を見るなり、藍田は労いの言葉をかけてくる。だが、それは口先だけだと美咲もすぐに察した。その証拠に、藍田の態度から、二人——殊に美咲を歓迎しているようには到底思えなかった。（ま、仕方ないか）

ちよつと前の美咲であれば、伯父のそっけない態度に深く傷付いていただろうが、今は不思議と落ち着いている。やはり、真実を全て知ったからであろうか。

「こちらこそ、急に申し訳ありません」

黙っている美咲に代わり、南條が低姿勢で口を開く。

それで気を良くしたのか、藍田はわずかに表情を和らげ、「まあ、楽にきなさい」と促してきた。

「それで、今日は一体何を訊きに来たのかな？ 鬼王と桜姫については先日全て話したつもりだが？」

「はい。あなた方のお陰で、鬼王と桜姫の事は分かりましたし、俺の用件もあの時に済んでおります。

ですが、美咲さんは直接、あなたと話したいそうで」

南條はそう言くと、美咲にチラリと顔を向けてきた。

「ん？ 美咲が私と？」

眉間に皺を寄せながら、藍田は美咲を睨んでくる。

射るような鋭い視線に、美咲は一瞬怖気付いたが、ここで逃げしまつては元も子もない、と自分に言い聞かせ、「はい」と思い切って口を開いた。

「私、昨夜、夢の中で桜姫と逢いました」

「ほう」

「正直に言いますけど、桜姫は怖かったです。伯父さん達が、何故、桜姫を危険視するのも分かったような気がします。でも、そんな桜姫も、私達人間と人を愛する心は一緒です。」

私は桜姫の魂も持っているから分かります。桜姫は、藍田への恨みと同時に、深い哀しみを抱いている。だからと言って、桜姫の復讐を認めているわけじゃありません。私は寧ろ、みんなが平等に幸せになれる事を願っていますから」

「――何が言いたいんだね？」

藍田の眉がわずかに痙攣する。だが、美咲は気付かぬ振りを装って続けた。

「伯父さん、私はこのまま死ぬなんて嫌です。何より、南條さんに負担をかけたくない。だから、ここで桜姫の呪いを断ち切って……」

そこまで言いかけた時、藍田の口許が歪んだ。かと思ったら、突然、部屋中に響き渡るほどの大声で笑い出した。

「あつははは……！ 何を言うかと思えば下らん命乞いか。それに美咲、お前の言っている事は支離滅裂だ。」

死にたくない？ だが桜姫の呪いは断ち切る？ 馬鹿らしいにもほどがあるわ！」

藍田は一通り笑い終えると、これまでにないほど冷酷な視線を向けてきた。

「美咲、この際だからはっきり言うが、お前は運命に逆らう事など出来ない。お前が死ななければ、この金属性の青年によって消されなければ、この世に平穏など訪れない。」

貴雄には悪いが、お前は死ぬために生まれてきた。そして南條和海君、君は美咲を殺すために生まれてきた。――長きに渡って続いていた呪いの連鎖は、どう足掻いたって切る事は出来ないのだよ」

藍田の言葉は、一つ一つが鋭い刃となって美咲の心を突き刺してゆく。それは、南條も同じであろう。南條は冷静を装っているが、正座をした膝の上に置かれた両手は強く握り締められ、わずかに震えている。

（こいつこそ……、今すぐ消えてしまえばいい……！）

美咲は心から思った。

負の感情に押し流されてはいけない。頭では分かっている、身体は完全に怒りに支配されている。

と、その時、美咲の中で、何かが、ドクンと脈打った。同時に、頭の中に声が飛び込んでくる。

『私がそなたに代わって……、目の前の男を消してやる……』

美咲はハツとした。危険を察知し、慌てて声の主——桜姫を制止しようとする。だが、桜姫に支配されてしまった美咲は、自分の意識とは裏腹にユラリと立ち上がり、藍田の元へと歩み寄る。そして、藍田を畳の上に押し倒すと、馬乗りの姿勢になって首を強く締め付けた。

「ぐ……あ……っ……！ はな……せ……っ……！」

藍田は必死でそれを振り払おうとしていたが、桜姫の意識に取り込まれてしまった美咲の力は相当なものであった。

（桜姫駄目っ！ このままじゃ伯父さんが死んじゃう！）

辛うじて残っている意識の中で桜姫に必死に呼びかけるも、桜姫は全くそれに応じる気配がない。それどころか、締め付ける手の強さは更に増すばかりであった。

桜姫の霊力は強過ぎる。到底、美咲では振り払えるものではない。

（嫌だ……！ 私は誰にも死んで欲しくなんか無いのに……！ ——

——南條さん！）

美咲は心の中で南條に呼びかけながら、視線を送った。

美咲の突然の変貌に、南條は驚きを隠せずにいた。

（一体何が起こったんだ？）

南條は訝しく思いながら、チラリと朝霞を一瞥した。

だが、朝霞は父親が生命の危機に立たされているにも拘わらず、動揺している気配を全く感じさせない。

そんな朝霞を忌々しく思ったが、今はそんな事で、一々目くじらを立ててはいられない。南條は再び、美咲と藍田に視線を移した。ふと、美咲と目が合った。そこで南條は我に返る。慌てて立ち上がると、藍田から美咲を引き離そうとした。ところが、どんなに力を入れてみても、藍田の首から手が離れない。

「藍田……！ 離れろ……！」

美咲に声をかけるも、美咲はただ、首を横に振るばかりだった。離す事を拒絶しているのか、それとも――

（桜姫か！）

南條は咄嗟に勘付いた。

先ほど、藍田は南條達を刺激するような言葉を散々連発していた。それにより、美咲の中で怒りが湧き上がり、桜姫の魂が暴発したとしても可笑しくない話である。

（どうする……？）

南條は美咲の背後から両腕を羽交い締めにするような格好で思案する。

一番手っ取り早いのは、霊力の刀を出現させて桜姫の魂を消滅させる事だが、そうなると、媒体となっている美咲の生命までもが危険に晒されてしまう。だからと言って、このままにしておいたら、今度は藍田が命を落としかねない。

（何も手立てがないのか……）

霊力を発動させられない自分は、何と無力なんだ。南條は悔しさに堪え切れず、唇を強く噛み締める。

「……な……じょ……ん……」

その時、美咲から微かに声が聴こえてきた。南條は耳を傾ける。

「……お……ねが……おじ……んを……け……て……」

多分、『お願い。伯父さんを助けて』と言いたいのであろう。しかし、助けたくともどうする事も出来ない。

「お前の気持ちは分かる。だが、俺には……」

「……ん……じょ……さんの……ち……ら……なら……お……き……を……」

「な、何を言っ……」

「……は……やくう……」

藍田の首を絞めながらも、美咲は南條に必死で訴えてくる。

南條は決断を迫られた。美咲を取るか、藍田を取るか。

（いや。どちらも死なせやしない！）

南條は美咲から身体を離れた。

（消滅させない程度に靈力を加減すれば、美咲も、きっと……）

そう思い、南條は気を高めて刀を出現させた。

右手に握られた日本刀は、仄かに光を放っている。

「美咲、少しだけ我慢しろ」

南條は美咲に告げると、深呼吸して心を落ち着かせ、刀を両手で強く握り直して、一思いに美咲の背を貫いた。

「……う……あ……あああ……！」

悲痛な叫び声が、部屋中にこだまする。背を向けられた状態であるから表情までは窺えないが、それでも、苦渋に歪んでいるであろう事は容易に想像出来る。

（すまない、美咲……）

美咲の身体を刀で抉りながら、南條は心の中で謝罪する。幾ら美咲が自ら望んだ事とは言え、美咲を貫くのは胸が酷く痛む。

（後、少し……）

南條は最後の仕上げとばかりに、更に力を籠める。

「……や……やあああーっ……！」

藍田の首を絞めていた美咲の手の力が緩み始めた。

それを見極めた南條は、美咲から刀を抜いて、左手で美咲の身体を自らの元へ引き寄せた。

「——大丈夫か……？」

耳元で囁くように訊ねると、美咲は朦朧としながらも頷く。

南條は安心して胸を撫で下ろした。

「……うつ……げほつ……」

美咲から解放された藍田が、締められた首を触りながらムクリと起き上がった。

南條は、美咲を抱いたままの格好でそれを見つめる。

「和海君、君もこれでよく分かっただろう？」

藍田は南條と美咲を睨んだ。

「桜姫の存在は極めて危険だ。こうして自分の意に染まない人間を、いとも簡単に消し去ろうとする。——危険な芽は、今すぐにでも摘み取った方が無難だ」

「——危険なのは桜姫でないのではありませんか？」

南條の言葉に、藍田の眉がピクリと痙攣した。

「どういう意味かね？」

「一々説明しないと分かりませんか？」

「ああ、ちつとも分からんね」

「——だったら今からきちんと話します。耳をかつぽじってよく聴いておいて下さい」

南條は一呼吸置き、一度、遠巻きにしている朝霞に視線を向けてから話し始めた。

「一番危険なのはあなた方ですよ。美咲の言葉に耳を貸すどころか、非難するような事を平気で並べ立てる。——まあ、あなた方が腐っているのは、前に逢った時に身を以て思い知らされましたがね。

しかし、だからと言って、美咲の想いを簡単に切り捨ててしまうのは可笑しい事ではありませんか？ 運命に逆らう事など出来ない、とあなたは言いましたが、それは単に逃げているだけではないでしょうか？」

「何だと……？」

「どうやら凶星のようですね」

怒りを露にした藍田に、南條は、してやったり、と心の中で思いつつ淡々と続けた。

「いいですか？ あなた方がその誤った認識を改めない限り、何も

変わりはない。

確かに、俺にも多少の迷いが生じましたが、美咲の強い想いが俺を突き動かしてくれました。

鬼王や桜姫が怖いと思うのは無理のない事です。しかし、何もせず、ただ運命に流されているばかりでは、かえって鬼王達の思う壺でしょう。

俺達——特に美咲は、あなた方にも運命と戦って欲しいと切実に願っているんです」

そこまで言うと、南條は藍田の表情を窺うようにジッと睨む。

藍田もまた、負けじと南條を凝視している。

陽が落ち、明かりの灯っていない部屋は仄かに闇に包まれ、月の光だけが頼りなく差し込んできた。

「——馬鹿馬鹿しい！」

沈黙の後、藍田は吐き捨てるように言い放った。

「和海君、やっぱり君は博和君の血をしっかりと引き継いでおるようだ。親子二代揃って、同じ様な事を私に吹聴してくるとは。

君の言い分はよく分かった。しかし、私は自分の考えを改める気など更々ない」

そこまで言うと、藍田はニヤリと口許を歪めた。

「金属性の能力者は、何も君だけではない。——この意味、君は分かるかね？」

藍田の言葉に、南條は目を見開いた。

考えるまでもない。藍田は、他の能力者を使ってでも美咲を消すつもりだ。

一瞬、藍田に勝ったと思ったが、やはり、彼の方が一枚も二枚も上手だった。

（もしかしたら、全てを見越して金属性の能力者を呼び寄せている可能性もある）

南條は唇を強く噛み締めた。同時に、美咲を抱く腕にも無意識に

力が入る。

その様子を、藍田は冷ややかに見つめている。

そして、離れた場所に座っている朝霞は、先ほどと変わらず、人形のように各々の姿を傍観していた。

第七章 第二節

美咲は、南條に横抱きにされた格好で本家を辞去した。

本来であれば、抱かれるのは非常に恥ずかしくて抵抗を感じるが、南條の刀に身体を貫かれた影響が、全身の力が、全くと言っていいほど抜けていた。そのため、歩くのはおろか、立っている事すら間々ならない状況であった。

しかし、実際は心の傷の方が格段に大きい。ほんの少しでも、藍田と朝霞を信じていたから、向き合って話し合えば分かってくれるだろうと思っていたのに、あの伯父は、美咲の言葉に耳を貸すどころか、真摯な想いを汚い足で踏み躪った。

それにより、美咲の心は見事に折れた。自分の真の弱さを改めて思い知らされ、嫌悪感を覚えた。

「……め……なさ……」

南條の胸に顔を埋めながら、美咲は嗚咽を漏らした。泣くなんて卑怯だ。それは頭で分かっていたが、一度溢れ出た感情は抑える事が出来なかった。

「謝る必要はない」

南條は美咲を責めるどころか、寧ろ、いつもよりも柔らかな口調で言う。

「確かに、お前は桜姫の 負 の感情に押し流されてしまった。だが、お前は十分に自分の中の桜姫と戦い、俺の刀にも必死で堪えていた。

自分の中の弱さを認めるのも、強くなるために必要な事だ。それに、お前はもう、以前よりもずっと強くなっているんだ。

大丈夫だ。お前は決して独りじゃない。貴雄さんと理美さん、樋口さんに江梨子さん、瀧村もいる。——そして、俺も……」

南條はそう言うと、美咲を抱く腕に一層の力を籠めてきた。

「お前の未来のためなら、俺はどんな事でもしてやる。お前が強く

なりたいと願うのなら、俺も一緒に戦う」

南條の言葉一つ一つが、まるで穏やかな川のせせらぎのように、美咲の心に優しく流れ込んでくる。

「……あ……りがとう……ございます……」

しゃくりあげながらも、美咲は素直に感謝を口にする。

「礼を言われるのは悪い気がしないが、ただ、仕方なかったとは言え、俺もさっきはお前に刃を向けてしまったからな……」

南條はばつが悪そうに言うと、「すまなかったな」と、今度は逆に謝罪してしまった。

「俺の刀のせいで、しばらくはまともに身体を動かす事も出来ないと思うが……」

「……平気……ですよ……」

美咲は顔を上げ、精一杯笑顔を繕った。

「……南條さんは……私の……無理難題を……聞き入れてくれたんですから……。寧ろ……暴走を止めてくれた事に……感謝……しています……」

「そうか」

南條は短く答えると、小さく笑みを浮かべた。

「さて、そろそろ行くか。車に……」

南條が言いかけた時、ふと、強い芳香が美咲の鼻を掠めた。

（これは……？）

美咲が怪訝に思っていると、南條は、チツと小さく舌打ちをし、先ほどのまでの穏やかな表情を一変させた。

「どうやら今回もお出ましのようだ」

その台詞と同時に、天から何者かが降り立ってきた。

ウェーブがかった淡い栗色の長髪に漆黒の双眸。外見は申し分のない美貌で、美咲は一瞬、天女かと本気で思ってしまったほどだった。だが、それは天女などではないという事もすぐに察した。

（多分、鬼姫だ……）

美咲がぼんやりと女を見つめると、女もまた、美咲に視線を注い

できた。

「お久し振り——いえ、初めまして　が正しいかしら？」
女は首を傾げるような仕草をしながら、ニコリと微笑む。

「——俺達の事を付け回していたのか？」

苦虫を噛み潰した表情で南條が鬼姫に吐き出すと、鬼姫は「また随分なご挨拶ね」と肩を竦めた。

「別に私達は、あなたを付け回していたつもりなんて更々ないわ。
寧ろ、あなたの方から私達の領域に飛び込んで来ているのではなくて？」

尤も、今回はいつも以上にあなたが来ている事を喜んでいるけどね」

鬼姫はそう言うと、再び美咲に視線を遣った。

「桜姫、鬼王はあなたに逢いたいと仰っていますわ。どうやら、思いの外早くあなたがお目覚めになったのを感じたらしいわね。

あ、南條和海さん、あなたも宜しければいらっしゃいな」

「俺も……？」

怪訝そうにしている南條に、鬼姫は「ええ」と口許に笑みを作りながら頷く。

「——一体何を企んでいる……？」

「もう、本当に疑り深いわね」

「当たり前だ。この間は、存分に良い気分させられたからな」

南條の言葉には、皮肉がたつぷり籠められている。多分、存分に良い気分　とは、闇に陥れかけられた時の事を言っているのだろう、と美咲もぼんやりとしながら思った。

「大丈夫よ」

鬼姫は苦笑しながら言った。

「私は鬼王に命令されない限り、あなたに手を出すつもりはないから。——ただ、鬼王自身は分らないけどね」

最後の台詞を口にした鬼姫は、一瞬、二人に鋭い視線を送ってきた。

「さて、あまりのんびりもしてられないわね」

鬼姫は踵を返すと、二人の前をゆっくりと歩き始めた。

南條は躊躇している。

（無理もないよね。いきなり『来い』って言われて、二つ返事で素直に従えるわけないもん）

美咲は南條に抱かれながら考えていた。

その間にも、鬼姫との距離は少しずつ、だが確実に広がってゆく（鬼王は確かに怖い。けど、いつかは対決しないといけないんだ）

美咲はそう思い、弱々しい声で「南條さん」と呼んだ。

「鬼王の許へ……行きましょう……」

美咲が告げると、南條は驚いたように目を瞠った。

「しかし今、お前が鬼王と逢うのは……」

「大丈夫……ですよ……」

美咲は精一杯の力で笑って見せた。

「これも……良い機会かも……知れません……。それに……伯父達よりも……もしかしたら……鬼王の方が……親身に話を聴いて……くれるかも……」

「——本気で言ってるのか？」

「もちろん……ですよ……」

南條の問いに、美咲は頷いた。

「だって……私には……桜姫がいるんですから……」

美咲の言葉の意味を南條はどう捉えただろう。少しばかり考えていたようだったが、やがて、「分かった」と低い声で答えた。

「お前が正しいと思うのなら、今はそれに従うのが一番かも知れない。——それじゃあ行くか？」

南條は小さく笑むと、鬼姫との間に広がった距離を埋めるように足早に歩き始めた。

美咲は南條に抱えられた格好のまま、神の宿り場と称される桜の木の所まで来ていた。

ここへ来るのはどれほど振りであろうか。そこは以前に訪れた時と同様、花が満開に咲き誇っている。そして、辺りは既に暗くなっているにも拘わらず、その場所だけ、仄かに明かりが灯っているように見えた。

鬼王は 神の宿り場 の前で待機していた。まるで、美咲達を迎えるように。

「ご苦労だったな、シュリ」

鬼王は鬼姫に向かって微笑みかける。

シュリ と言うのは鬼姫の名前であろうか。そう呼ばれた鬼姫は、「お安いご用ですわ」と、心から嬉しそうに満面の笑みを浮かべている。

それを満足げに見届けると、鬼王は、今度は美咲達に向き直り、ゆったりとした足取りで近付いて来た。

「靈力を、吸われたようだな」

鬼王は己の手で美咲の頬に触れてきた。

やはり、体温は全く感じられない。凍り付かんばかりのヒヤリとした感覚が、直に伝わってくる。だが、不思議と今は、以前のような恐怖心はない。

「お前が、桜姫を傷付けたのか？」

鬼王の問いに、南條は「ああ」と頷く。

「ほんとは、靈力を使わずにこいつの暴走を止めたかったが、止むを得なかった。あそこで止めなければ、こいつは、人を一人殺していた……」

「だがこの娘は、その人間が消える事を少なからず望んだのではないか？」

「——確かにそうかも知れない」

南條は眉を顰めながら続けた。

「しかし、藍田史孝を殺す事が本意でなかったのも事実だ。だからこそ、美咲は自分の中の桜姫と戦おうとしてもしていたんだ。

こいつは、自分が操られているにも拘わらず、『伯父さんを助け

て』と俺に訴えてきた」

「ほう」

鬼王の目が、興味深げにわずかに見開かれた。

「本来であれば、妖鬼に操られている 器 の意識はなくなるはず。桜姫も例外ではないのだが、なるほど、これは確かに珍しいな」

鬼王はそう言つと、口の端を上げて美咲をまじまじと見つめた。

「美咲、と言ったか？」

鬼王に訊ねられ、美咲は頷く。口が利けないと言うよりも、まだ、話せるだけの気力がないのだ。

「では美咲、改めてお前に訊くが、今、桜姫はどうしているか分かるか？」

「……今……？」

突然訊かれて、美咲は少々驚きつつも、鬼王の言葉に素直に従つて意識を集中させる。

（桜姫？ どうしてる？）

心の中で問うが、返答がない。もしかして、南條の霊力の影響で再び眠りに就いてしまったのだろうか。

「……多分……眠ってる……」

辛いのを我慢しつつ美咲が告げると、鬼王は「そうか」と呟いた。「……桜姫に……逢いたかった……？」

美咲は鬼王に訊ねてみる。

鬼王は微動だにせず美咲を見つめていたが、やがてポツリと答えた。

「別に、永遠に逢えぬわけではない。それに、時が満ちれば、必ず桜姫と巡り会えるだろう」

予想外の反応に、美咲はわずかに目を瞠る。美咲を抱いていた南條も、同様に驚いていたようだった。

「——ただの冷酷無慈悲な亡霊の長かと思っていたが」

美咲の思いを代弁するように、南條が言った。

「その認識は、決して間違つてないと思うぞ」

南條に対し、鬼王は微苦笑を浮かべた。

「だが、これだけははっきり言える。——一番残忍なのは アイダの一族だ。自分達の 血 を護るためなら、同族間の殺生も全く厭わない。」

私は長きに渡り、アイダを始めとする人間共の、愚かで醜い争いを見てきた。いや、正確には 聴いた と言った方が正しいか。

ここにいる珠璃もまた、アイダの直系に殺害された一人だった」

鬼王はそこまで言うのと、隣で控えめに立っているシュリに視線を送った。

美咲と南條もそちらを見る。

この場にいる全員の視線を受けたシュリは、ほんの少し、哀しげな表情をしたが、それはすぐに引っ込め、先ほどと同じような、自信に満ち溢れた笑みを見せた。

「私は、人間でなくなつて良かったと思っています」

珠璃は、はっきりと鬼王に向かって言った。

「あの連中の汚い姿は、もう、嫌と言うほど目の当たりにしてきましたもの。もし、あのまま生きていたら、私もきっと、連中のように腐れ切ってしまったかも知れない。」

私は 鬼 としての命を吹き込まれた時から、二度と、人間になど戻るまい、と心に決めたのですから」

珠璃は淡々と語っているが、美咲の心には、その言葉の一句一句が鋭く突き刺さり、胸が酷く痛んだ。

（もう、これ以上、哀しみを増やすなんてしちやいけない）

美咲は思いながら、無意識に南條の胸に強く縋り付いた。

そんな美咲を、南條はどう思ったのであろう。何も言わず、ただ、変わらず彼女を抱いていた。

「ところで」

鬼王は美咲と南條に再び顔を向けると、静かな口調で訊ねてきた。「お前達、私に何か言う事があったのではないか？ そうでなければ、幾ら私が美咲を呼び付けたとは言え、わざわざここへ来る事も

なかっただろう？」

「それはご尤もだな」

南條は苦笑を浮かべながら続けた。

「確かにお前の言う通り、俺達もお前に用があった。だからこそ、鬼姫からの申し出を受け入れた」

「ほう」

鬼王は小首を傾げた。

「して、私への用とは？」

鬼王に重ねて問われ、美咲は一呼吸置いた後にゆっくりと口を開いた。

「鬼王……私は……絶対に、あんたの妻になんきやいけないの……？」

「ん？」

美咲の言葉に鬼王の眉がわずかに痙攣し、瞳が鋭い光を帯びた。

美咲の中に忘れかけていた恐怖心が生まれたが、それでも、どうにか心を落ち着けて続けた。

「私は……あんたの妻になんてなりたくない……。桜姫にも、あんたにも悪いけど……私だって……一人の人間なんだ……。勝手に決められたレールの上を、言われるがまま……歩くんじゃない……私は私で……自分で決めた道を……進んで行きたいの……」。

あんたや桜姫のために死ぬなんて……。私は絶対に嫌だ……。伯父さん達にも……。殺されたくない……」。

死ぬために生まれて来たなんて……。考えたくもないのに……」

美咲は途切れ途切れに話しながら、先ほどまで対面していた藍田と朝霞の事を想い出し、押し潰されそうなほどの哀しみに襲われた。止まっただけの涙が、再び頬を伝ってゆく。

鬼王とシユリは暫しの間、口を閉ざしていた。美咲の涙を見つめながら、シユリは複雑な表情を浮かべていたが、鬼王は能面のように表情に変化がない。

静まり返った周囲には、> r u b y < > r b < 微風 > / r b < >

rp< >/rp<>rt<そよかぜ>/rt<>rp< >/rp<>/ruby<に煽られた草木と虫達の繊細な音色が響き渡る。――お前は、それが可能であると思うのか?」

今まで微動だにもしなかった鬼王が、静かに訊ねてきた。

「そんなの……分かるわけない……」

美咲はそう答えた後、「でも」と言葉を紡いだ。

「出来る、って、心から想えば……不可能だって可能になる……きつとね……」。

私は……桜姫にも言ったよ……。下らない運命に流されるなんて……真つ平ごめんだ……。って……

だから、私は戦う……。あんた達だけでなく……伯父さん達とも……」

美咲がそこまで言うのと、鬼王は瞳を伏せて暫し黙った後、口の端を上げた。

「決意は固そうだな」

鬼王は独り言のように呟き、瞼を上げて美咲を真つ直ぐに見据えた。

「だが、お前に定められた宿命は、簡単に断ち切れるものではない。桜姫とお前は一心同体。どんな事があるうと、決して離れる事など叶わぬ。」

そして、十一月十一日には桜姫が完全復活し、器であるお前は消滅するであろう。過去の器もまた、完全復活と共に消滅したからな」

「それは……今までの器の意思が……弱かったから……でしよう……?」

「当たらずとも遠からず、だな」

鬼王は先ほどと同じように美咲に触れてきた。

「まだ、時間は残っている。お前がやりたいようにすると良い。」

しかし、だからと言って、私は桜姫を諦めたわけではない。もちろん、お前との対決もな」

鬼王はそう言うと、南條に視線を注いだ。

「俺も別に、お前と戦う事を諦めちゃいない」

南條がきっぱり言い放つと、鬼王は満足そうにニヤリと笑った。

「いい度胸だ。やはり、お前は違う。私を存分に楽しませてくれそうだ」

鬼王達と別れてから、南條と美咲は、少しばかり休憩を取った後、聖地へ向けて車を走らせた。

助手席では、体力の限界を超えていたであろう美咲が、静かな寝息を立てながら眠っている。

（妖鬼を消滅させる側の俺には、憑かれた人間の苦しみが分からないからな……）

信号待ちをしている間、未だ顔色の優れない美咲を横目で見ながら、南條は複雑な心境であった。

今回はどうにか桜姫の暴走を止められたが、また、何かの拍子で今日のような事がないとはいい切れない。刀を貫かれている間、美咲の、断末魔の叫びにも近い悲鳴は、ずっと南條の耳から離れずにいる。出来るなら、あれ以上、美咲に苦しみを与えたくない。「クソッ！」

南條はやり場のない怒りをハンドルにぶつける。力でしか解決出来ない己の無力さ、そして、守るはずの美咲を殺しかけた自分に。そのうち、信号が青に変わった。

南條はアクセルを踏み込むと、静かに車を発進させた。本音を言えば飛ばしたい気分であったが、美咲が隣にいた事もあり、何とか冷静を保っていた。

第七章 第三節

聖地に到着したのは、午前九時を回った頃であった。

行き同様、何度も休憩を取りながら来たものの、それでも、さすがに南條の疲労はピークに達していた。

「着いたぞ」

南條は隣で眠っている美咲の肩を揺すりながら声をかける。

「……ん……」

美咲は小さく呻くと、ゆっくりと瞼を上げた。

「あれ……？　ここは……？」

どうやら、まだ寝惚けているようである。

南條は苦笑して「聖地だ」と答えた。

「聖地、ですか……？」

美咲は気だるそうに目を擦りながら、南條に視線を向けてきた。

「もしかして私、ずっと寝てました……？」

「ああ、鬼王達と別れて車に乗り込んでからな」

「えっ！」

南條の言葉に美咲は急に目が覚めたらしく、声を大にして頭を下げてきた。

「ご、ごめんなさい！　私ってば……！」

そんな美咲に、南條は口許を綻ばせながら「別に謝る事じゃない」と答えた。

「何度も言うようだが、元々の原因は俺の刀のせいだ。あれは妖鬼のみを消滅させるための物だから、媒体となっている人間を殺める事はないが、それでも、少なからず影響はあるらしいからな。

特にお前は、雑魚共とは比べ物にならない桜姫の魂を持っている。簡単に斃せない分、身体への負担も大きくなってしまっただろう」

「——確かに、凄く苦しかったです……」

「そうか」

美咲の素直な反応に、南條は、不謹慎だと思いつつ愛おしさを感じる。同時に、疲れも癒えてゆくような気がした。

「さて、降りるぞ。樋口さん達も首を長くして待ってるだろうしな」
南條が言つと、美咲は微笑を浮かべながら「はい」と頷いた。

山小屋に入ると、待つてましたとばかりに、真っ先に江梨子が出て来た。

「お帰りー！ 美咲ちゃん！」

江梨子は隣にいる南條を跳ね飛ばす勢いで、美咲に抱き着いた。

「もう！ 美咲ちゃんがない間、すっごく淋しかったのよー！」

「え、江梨子さん……。いなかったって言つても、たかが一日じゃないですか」

抱き締められた美咲は、比較的冷静に突っ込みを入れていたが、

江梨子は「何言つてんのよ！」と逆に返していた。

「その一日が私には長かったのよ！ 泰明さんはともかく、瀧村君の顔をずーっと見てるのは、とーっても辛かったんだからあ！」

「——江梨子さん。幾ら何でもそれは言い過ぎでしょ」

完全に除け者とされた南條が美咲の隣でボソリと呟くと、江梨子は不服そうに彼を睨んだ。

「だって本当の事だし。私はあんたら男共よりも、美咲ちゃんのような綺麗で可憐な女の子が側にいる方が幸せなもの」

「——そうですか」

南條は短く答えながら、そう言えば、この人は男よりも美少女が好きだったな、と漠然と思った。同時に、ある種の危険な匂いも直観的に嗅ぎ取ってしまった。

（樋口さんがいるし、変な気は起こさないと思うが……）

顔を顰めながらそんな事を考えていたら、奥の方から、樋口と雅通が並んで現れた。

「南條、またまたご苦労さん」

樋口は満面の笑みを浮かべながら、南條を労うように何度も肩を

叩いてきた。

「さすがに今回は疲れたんじゃないか？」

「え？ あ、いえ。俺は別に平気ですよ」

「そうか？」

「ええ」

美咲に気を遣わせまいと笑顔を繕ってみたが、それは樋口には不自然に映ったらしく、怪訝そうに眉根を寄せられてしまった。やはり、長い付き合いなだけに、樋口の事だけは完全に誤魔化し切れないようだ。

亀の甲より年の功 とは正にこういう事を言っただろう、と南條は思いながら苦笑した。

「南條さん！」

と、そこへ雅通が間に割り込んできた。

「本家の奴らはどうなったんですか？ 上手く話が纏まったんですか？ それと、鬼王と珠璃にも逢いましたか？」

雅通は矢継ぎ早に質問を投げかけてくる。

そんな雅通に、樋口が珍しく「おい」と窘めた。

「お前、見て分らないか？ 南條は相当疲れているんだ。ちょっとは休ませないと……」

「そのお気遣いは無用です」

樋口の言葉を遮るように、南條は口を挟んだ。

「また、状況が変わってきてしまいましたが、今後の事を改めて話し合う必要があります。——敵はどうやら、鬼王だけではなさそうですね」

「——何だと？」

樋口の眉がピクリと痙攣した。

「まさかとは思うが、本家の人間が……？」

「そのまさかですよ」

南條が答えると、樋口だけではなく、江梨子と雅通も目を見開いた。

南條は表情一つ変えず続けた。

「あの男——藍田氏は俺にはつきりと宣戦布告してきましたよ。——金属性の能力者は俺だけではない、と。つまり、俺以外の金属性を持つ能力者に、美咲を消させようという魂胆でしょう」

「何て事を……！」

咄嗟に声を上げたのは雅通だった。

「あのクソオヤジ、どこまでも腐ってやがる！　そこまでして、美咲を消したいつつう意味が分かんねえ！

南條さん！　こうなったら、とことんやってやろうじゃないですか！　同じ能力者であろうと関係ねえよ！」

雅通は同意を求めるように、樋口と江梨子を真っ直ぐに見据えていた。

「お前に言われるまでもないな」

樋口が先に答えると、続いて江梨子が「同感ね」と口の端を上げた。

「私達は、美咲ちゃんを徹底的に守るって決めてるんだから！　指一本でも触れようものなら、そいつを徹底的にボコボコにしてやるわ！　私の霊力は、確かに妖鬼との戦闘には向いちゃいんだけど、生身の人間相手ならば話は別よ！」

急に熱くなり出した江梨子に、南條は一抹の不安を覚えた。それは樋口や雅通も同様だったらしい。双方共、顔が青ざめている。

ただ、美咲だけは状況が全く掴めていないらしく、茫然と江梨子を見つめていた。

「——お手柔らかなに、江梨子」

江梨子の肩を小さく叩きながら、男達の気持ちを代弁するように、樋口がボソリと言った。

自室に戻った美咲は、江梨子に治療を施してもらった事となった。「能力者の怪我は何度も治してるけど、美咲ちゃんのような子を治

癒するのは初めてだから、正直ちよつと自信がないけど……。でも、可愛い美咲ちゃんのためだものね！」

江梨子はそう言うと、美咲をベッドの上に座らせ、自らは立ったまま、目を閉じて呼吸を整えている。

美咲は息をコクンと呑み、その様子を見つめる。

すると、江梨子は大きく息を吸い込み、美咲に向けて手を翳し始めた。途端に、美咲の身体は温かな氣に包まれる。それは、初めて江梨子達と聖地の中心である湖に行った時に、江梨子から与えられたものと全く同じであった。

（——凄い。傷が少しずつ塞がっていくのが分かる）

美咲はあまりの心地良さに、全身の力が徐々に抜けてゆくを感じた。もちろん、南條の刀で貫かれている時とは違っている。

（このまま、身体が浮いてしまいそう）

美咲の瞼は次第に重さを増してきた。

と、その時、突然、ガタンと物凄い音が耳に飛び込んできた。

美咲はハッと我に返り、物音の正体を見極めるべく目を大きく開いた。

「江梨子さんっ！」

床の上に、江梨子が倒れていた。

美咲は急いで立ち上がると、江梨子の側に片足を上げた姿勢で屈み込んだ。

「大丈夫ですかっ？」

江梨子の上半身を抱き起こしてから美咲が声をかけると、江梨子は掠れた声で「ええ」と答えた。

「ごめんね……。大きな口を叩いちゃったけど、怪我の治癒って、実はかなり体力を消耗するから……」。

それに、さつきも言ったけど、美咲ちゃんのような特殊な子は初めてだったから……」

江梨子はそこまで言うと、美咲に向けて力なく笑う。

そんな江梨子に対し、美咲は何の言葉も見付からず、ただ、貝の

ように口を閉ざしていた。

やはり、自分はみんなとは違うのか。南條だけではなく、江梨子にまで負担をかけてしまった。そう思うと、悔しくて堪らない。藍田や鬼王の言う通り、自分は決められた宿命からは逃れられないのか、と。

「――美咲ちゃん」

江梨子が口を開いた。

「あなたは、私達に何の遠慮もする必要はないのよ……。私達はみんな、各々の意思で闘う事を決めたんだから……」。

美咲ちゃんだって、強くなるって、桜姫と戦うって決めたんでしょ……。？ だったら、最後まで戦い抜きましょ……」。

美咲ちゃんが本気で戦うなら、私達は幾らでも支えになってあげるからね……」

ヒトの言葉には底知れぬ力がある。江梨子のそれもまた例外ではなく、確実に、美咲の心の中にゆつくりと沁み込んでゆく。そして、弱気になりかけていた自分を奮い立たせる。自分が、正しいと思った道を真っ直ぐに進んで行けば良い、と。

「美咲ちゃん、頑張りましょ……」

江梨子はそう言って、美咲に小さく笑む。

美咲は「はい」と頷くと、江梨子に応えるように笑って見せた。

外は夏の陽光が燦々と降り注いでいるというのに、この広い家中だけは、常に淀んだ空気に包まれている。ただ、昔からこんなに暗い雰囲気ではなかった。祖父母の生前、いや、正確には、美咲がここに住んでいた頃は、もう少し賑やかだったような気がする。

（今では、ここは年中お通夜のようなものね）

仏前に正座しながら、朝霞は二本の蠟燭に灯された炎をぼんやりと眺めていた。

幼い頃の事など、本当は想い出したくもない。しかし、仏前に向

かい、祖父母達の遺影に見下ろされていると、嫌でも過去のイメージが頭を駆け巡る。

朝霞の母親は、朝霞を産んで間もなく亡くなっている。古いしきたりのある本家の嫁としては、あまりにも儚げだった、と叔父の貴雄から聞いた事があった。

母親がいない事が淋しくないわけではなかったが、朝霞は昔から、感情の出難い性質だった。そのためか、周りからは、愛想の欠片もないと疎まれ続けた。

祖父母も例外ではなかった。二人共、本家の跡取りとなるであろう朝霞よりも、素直で明るかった美咲に愛情を注ぎ込んでいた。美咲が、桜姫の魂を受け継いだ娘であると知ってから、である。

見た目はそっくりだと言われていたのに、性格も周囲の扱いも全くの正反対だった。

（だから、美咲なんて大嫌いだった）

朝霞は唇を強く噛み締めると、自分を蔑んでいるであろう祖父母の遺影を睨んだ。同時に、隣に並んでいる母親の遺影も見上げる。

「お母さん……」

無意識に口になっていた。

「私も、一緒に連れて行ってくれたら良かったのに……」

今となつては、自分を置いて逝ってしまった母親に憎しみさえ覚える。本当の父親である藍田も、朝霞を心から愛していないと知っているから。

（ここには、私の居場所なんてないのよ……）

そんな事を思っていた時だった。

突然、仏間の障子を乱暴に開く音がした。

朝霞は眉を顰めながら、そちらを振り返る。

「やっと見付けたよ、朝霞サン」

人を見下したかのような物言いをしてきたのは、つい今朝方、藍田が本家へ呼び寄せた男であった。

「——何かご用でも？」

淡々とした口調で男に訊ねると、男は不快感を露骨に出した。

「あんたのその悟り切ったような態度、すつげえム力つくな」

「別にそんなつもりはないですけど？ 私に至って普通にしているつもりですし」

「それが普通じゃねえつつつてんだよ。——あんた、ほんとに十八歳？ 年齢詐称してんじゃないの？」

「随分な言い方ですね。お生憎様、私は間違いなく十八歳です。年齢詐称なんてするわけがないじゃないですか」

「——一々腹立つ女だな」

「何とでも言つて下さいな。」

それより何のご用ですか？ 私はさっきも訊いたはずですが？」

男に向かって朝霞が再び問う。

男は、チツと小さく舌打ちし、「オッサンが、朝霞を呼んで来い、つてよ」と答えた。

朝霞は怪訝に思い、首を傾げた。

「お父さんが？ 何故？」

「んなもん俺が知るかよ。」

とにかくあんたに伝えたからな。とつと行つた方がいいんじゃないかねえか？」

男は用件を言い終えると、朝霞の返事も聞かずにその場を立ち去ってしまった。

残された朝霞は、先ほどまで男がいた場所を暫し睨んでいた。

（ほんとに、自分の都合ばかり押し付けて……）

朝霞は溜め息を一つ吐くと、蠟燭の火を消してゆつくりと立ち上がった。

朝霞は藍田の自室前に立っていた。男からはつきりと場所を聞いたわけではないが、藍田がいる場所は、大抵が自室だと決まっている。

「お父さん、いらっしやいますか？」

朝霞は障子の前で呼びかけてみる。すると、中から「ああ」と低い声が返ってきた。

「入りなさい」

藍田に促され、朝霞は「失礼します」と静かに障子を開ける。

藍田は、朝霞が来ても背を向けたままであつた。そこからは、微塵の優しさも感じられない。

「藤崎さんふじさきから、お呼びだと窺つたんですけど」

藍田の背中に向かって朝霞が言つと、藍田はやつとでこちらを振り返つた。

「適当に座りたまえ」

朝霞を一瞥するなり、藍田は表情一つ変えず勧めてきた。

朝霞は「はい」とだけ答え、控え目に下座に正座する。

藍田はそれを見届けると、再び背を向け、自らの机の前で書き物を続けていた。

（一体、何のために私を呼んだの？）

朝霞の不信感は一層募つた。男から呼び出しを食らい、藍田の部屋を訪れてみると、ただその場に放置され、時間を持て余す結果となる。

朝霞は藍田に聞こえぬ程度の溜め息を吐いた。

ジツとしている事は慣れている。しかし、だからと言って不愉快に思わないわけではない。

朝霞が呼ばれてから二十分ほどしてからだつた。

「おいっ！　藍田サン！」

障子の向こうから、耳障りなほどの男の声が聴こえてきた。

「朝霞、入れてやりなさい」

相変わらず背中を向けたままの格好で、藍田が朝霞に言う。

朝霞は黙つてその場を立ち、静かに障子を開けた。

そこにいたのは、予想通り、先ほど朝霞を探し回っていた男――藤崎だつた。

「どうぞ」

朝霞がわずかに身体を避けると、藤崎は無遠慮に部屋へと足を踏み入れてきた。そして、藤崎に続くように、朝霞と同世代の少女と藤崎よりも小柄な少年が続いて中へ入った。

朝霞は全員が入ってから、ゆっくりと障子を閉め、再び正座した。「藍田サンよ、俺達を急に呼び付けて一体何をさせる気だよ？」

入るなり、藤崎は藍田に向かって訊ねた。

恐れを知らないのか、はたまた鈍いだけなのか、藍田本家の当主に向かって、よくもそんな口が利けるものだわ、と朝霞は呆れた。多分、他の二人も同じ事を思っているに違いない。その証拠に、二人は揃って微苦笑を浮かべている。

藍田がこちらを振り返った。彼も藤崎の態度には辟易したようで、あからさまに苦虫を噛み潰した表情を浮かべていた。

「取り敢えず楽しみにしなさい」

藍田は渋い表情はそのままに、朝霞以外の三人に促すと、各々畳に腰を下ろした。

「では、早速だが本題に入ろう」

藍田は三人——特に藤崎——に視線を注いだ。

「君達も能力者だから、私の姪が亡霊の長である鬼王の妻に選ばれてしまった事は知っているだろう？」

「ああ、それぐらいはな。お前らももちろん知ってんだろ？」

藤崎に訊ねられ、二人はほぼ同時に頷く。

「ただ、あまり詳しくは……。第一、私達はその姪御さんにも逢った事がないんですから」

そう答えたのは少女だった。

「確かにそうだな」

藍田は口の端を上げながら、胸の前で両腕を組んだ。

「妻に選ばれた娘についての詳細は、藍田の直系にしか言い伝えられていないからな。後は、こちらが選ばせてもらった金属性の能力者のみにしか口外しない。——ただ、今回は予定外の者にも教えて

しまつ羽目になってしまったが」

藍田の話を聞きながら、藤崎は「ふうん」とつまらなそうに唸った。

「となると、金属性の俺が呼び付けられたのは、あんたに選ばれたつつう事か？」

「不本意ではあるがな」

「――はつきり言いやがる」

藤崎は吐き捨てるように言い放った。

「で、これから俺にどうしろと？　まずは、あんたの姪について話を聞かなきゃ、俺もどうしようも出来ないぜ？」

「分かっている。だから、これから話そうとしているんだ」

「へいへい。けどさ、俺はともかく、この二人は金属性じゃないだろ？　聞かせちまつていいのかよ？」

「さつきも言つたが、もう、予定外の者にも口外してしまったからな。それにどのみち、君一人では不安な点が多過ぎる」

「――つまり二人は俺のお目付け役って事？」

「そういう事になるな」

「そこまで俺って信用ないかねえ」

藤崎は片膝を上げると、そこに肘をついた姿勢で額を押さえた。

朝霞はそれを鋭く睨み付けた。だが、元々感情が表に出にくいいためか、部屋にいる人間は皆、朝霞のわずかな変化にも気付かずにしたようであつた。

「史孝様」

すっかり不貞腐れている藤崎の代わりに、少女が口を開いた。

「何だね？」

「何故、そこまで金属性に拘りを？　確かに金属性は最強ではあるでしょうけど」

少女の問いに、藍田は苦笑を浮かべる。ただ、藤崎に対してよりは、明らかに物腰が柔らかくなっていた。

「まあ、そんなに焦るな。君達には、今からちゃんと話す。ただし、

長丁場になるのは覚悟しておいて貰いたい」

「分かりました」

少女は頷くと、ジッと藍田を見つめた。隣の少年もまた、少女に倣うように視線を送る。

ただ一人、藤崎だけが、機嫌を損ねて明後日の方向を向いていた。
「では、始めようか」

藍田は藤崎を無視するように、鬼王と桜姫について話し始めた。
その様子を、朝霞は遠巻きに眺めていた。

（まさか、二度もこの話をする事になるなんて、お父さんも思っ
てなかったかも知れないわね）

朝霞は完全に他人事のように思いながら、それでも話に耳を傾け
ていた。

そのうちに、もしかしても美咲の事が頭を過ぎった。

想い出したくもない。考えれば考えるほど、あの憎らしい笑顔が
はつきりと浮かび上がる。

（いずれ、死んでしまう運命なのに……）

朝霞は藍田達に冷ややかな視線を向けながら、わずかに頬を歪め
た。

第八章 第一節

聖地での共同生活も、ちょうど十日目となった。その短い期間の中で、美咲を取り巻く環境は、またしても大きな変化を遂げていた。鬼王と桜姫に纏わる哀しき恋、予想外の桜姫の覚醒——とは言っても、完全なものではないが——、そして、美咲を亡き者にしようと躍起になっている藍田本家。

当初は、鬼王が最大の敵だという認識が強かったが、今では逆に、伯父の藍田と従姉の朝霞が脅威となっている。特に朝霞に至っては、何を考えているのか、あの能面のような表情からは全く窺えない。鏡に映し出したかの如く自分とそっくりだから、尚更気持ち悪い、と美咲はいつも思う。

修行の方も、南條の手解きを受けながら何とかやっているものの、それでも、美咲の眠った霊力はなかなか引き出される事はない。力らしいものが出現したのは、藍田を絞め殺しそうになったあの時くらいである。

（ほんとにこれで大丈夫なの……？）

全く成長を遂げない自分に焦りを感じ、美咲は自問自答する事が多くなっていた。もちろん、弱気になっではいけないと分かっている。分かっているにしても、やはり、これから迷惑をかけてしまうであろう事を思うと、胸が押し潰されそうになる。

「……き。美咲！」

名前を呼ばれ、美咲はハッと我に返った。

「どうした？ 心配事か？」

そう訊ねてきたのは南條であつた。

「い、いえ。——すみません」

美咲は気まずさを覚え、身を縮めながら謝罪した。

南條は、そんな美咲を眉を顰めて怪訝そうに見つめる。

「——気分が悪いなら遠慮なく言え。無理をして倒れたりしたら元

も子もないからな」

「ありがとうございます。——でも、大丈夫ですから」

美咲は笑顔を繕った。

南條の気遣いは素直に嬉しかったが、これ以上は悠長に構えてなどいられない。本家を辞去してからずっと、美咲は、何となく不吉な予感がしていたのだ。

「南條さん、お願いします」

美咲は深々と頭を下げた。

南條は、まだ何か言いたそうであつたが、やがて、諦めたように小さく溜め息を漏らした。

「ほんとに、辛いならすぐに言え」

そう告げると、南條はそのまま修行を続行してくれた。

（そう言えば）

美咲はふと、南條さんが自分を下の名前と呼ぶようになったのはいつからだっただろう、と考えた。

取り敢えず、本家に一緒に行くまでは 藍田 だった。貴雄や理美の前では 美咲さん と呼んでいたが、それは飽くまでも建前だ。美咲は記憶を遡ってみる。どうでも良い事と言われればそうかも知れない。しかし、苗字から下の名前になるのは、何か特別な意味合いを感じる。

「美咲」

再び名前を呼ばれた。

美咲は、またしてもぼんやりしていた事に気付き、今度は、先ほど以上にビクリと反応した。

恐る恐る南條の顔を窺うと、予想通り、眉間に皺を刻みながら美咲を睨んでいた。

「——俺は、何度も同じ事を言うのは嫌いだ」

いつになく刺々しい言い回しに、美咲は返す言葉も見付からず萎縮してしまう。

南條は深い溜め息を一つ吐くと続けた。

「いいか？ 霊力を引き出す修行は生半可な気持ちでやるもんじゃない。妖鬼との戦いは常に死と隣り合わせだ。鬼姫クラス以上を相手にするとなると尚更だ。」

俺はお前の強い決意を買ったからこそ、師になろうと決めたんだ。それなのに、さっきからお前は何だ？ ずつと上の空じゃないか？俺も俺でやる事があるんだ。心底やる気がない奴の面倒を見ていられるほど、俺はお人好しじゃない」

南條の言葉は一つ一つ、美咲の心に深々と突き刺さる。言っている事は尤もだと思う。だが、それでも胸の痛みは消えない。

美咲は黙ったまま俯いた。南條を怒らせてしまった事はもちろんだが、それよりも、修業中に余計な事ばかり考えてしまった自分を酷く嫌悪していた。

「——ごめんなさい……」

やっと出たのは謝罪だった。これ以上は、何も言葉が出てこなかった。

南條は再び大きな溜め息を吐く。

もう、修業は中断されてしまうのだろうか。そう思っていたら、

南條が「おい」と美咲に声をかけてきた。

「そこに座れ」

南條は、叢の手近な場所を指差した。

美咲は意味が分からず、ぼんやりと立ち尽くしていたが、今度は苛立ちが籠められた声で、「座れ」と命令された。

そこでやっと、その場に体育座りをした。

南條はそれを見届けると、自らも美咲の隣に腰を下ろす。

「何を考えていた？」

座るなり、南條が訊ねてきた。

美咲は答えに窮した。心の中では、どうして、南條さんは急に私を下の名前で呼ぶようになったの、と問い質しているが、実際に口に出るような事ではない。

そのまま、膝を抱えた格好で沈黙した。

そんな美咲を、南條はどう思っているのか、片膝を上げ、そこに肘を着いた姿勢で美咲を凝視している。もちろん、俯いている美咲にはそれが見えていたわけではないが、刺すような視線は痛いほど感じていた。

「俺は別に、お前を責める気など更々ない」

黙りこくっている美咲に痺れを切らしたらしく、南條が口を開いた。

「ただ、俺はお前の考えている事を知りたいと思ったただけだ。どんな些細な事であれ、隠し事をされるのは俺としても本意ではないからな。それに、師である俺には、弟子のお前の気持ちを知る権利があるんだ」

「——分かっています」

「ほんとか？　なら、どうしてずっと黙っている？」

「それは……」

美咲の鼓動は煩いほど高鳴り、全身は燃えるように熱くなっている。

言うてはいけない。ならば、方便を言ってしまう方がいい。そう思うが、南條を上手く誤魔化せるような言葉が何一つ浮かんでこない。

「——言えるわけ、ないじゃない……」

我慢の限界を超え、美咲は思わず口にしてしまった。

「——言っちゃいけないって、分かってるんです……。だから、ずっと心の奥底に仕舞い続けてた……。言ってしまったら……、南條さんを、困らせるだけだから……」

全てを言い切らぬうちに、美咲の瞳から透明な雫が零れ落ちた。それは、留まる所を知らず、抑えようと思えば思うほど、苦しい嗚咽が漏れ続ける。

（最低だ、私……）

顔を伏せながら、美咲は自らを嫌悪した。

強くなりたい。そう願っていたはずなのに、強くなるどころか、南條を意識する事で弱さが増してゆく。

自分など相手にされるはずない。分かっているはずなのに、優しくされると、もしかしたら、と期待を寄せてしまう。

（いつその事、嫌われた方がどんなに楽か……）

そう思った時だった。

美咲の身体が、温かなものに包まれたような感覚があった。

美咲は驚き、顔をわずかに上げて目を見開く。

彼女は、南條に抱き締められていた。

「——悪かったな」

美咲の耳元で、南條は囁くように言った。

「俺も、お前が何を考えているのか分からなくて少し苛々していたから。——言いたくなかっただろうに、無理やり言わせてしまった……」

南條の台詞に、美咲の体温は更に上昇した。この口振りからすると、南條は、ずっと前から美咲の気持ちに気付いていたという事になる。

「——迷惑じゃ、ないですか？」

恥ずかしさを感じつつ、美咲は顔をもたげて南條に訊ねた。

南條は微笑を浮かべている。

「そうだな。迷惑、という事はないが……。ただ、こうなってしまうと、かえってお前と修業をし辛くなるかな。——俺は、なるべくお前を 女 として意識しないようにと、ずっと考えてきたから」

南條はそう言うと、美咲を抱き締めていた方の片側を離し、それで美咲の髪に触れてきた。

「俺は、独占欲が強いぞ？」

「そうなんですか？」

「意外か？」

「はい」

「そうか」

南條は口の端を上げ、美咲の髪から頬、頬から顎へかけて手を滑らせた。

美咲の全身は硬直した。南條と視線を交わしたまま、小さく口を開けていた。

南條の顔が少しずつ近付く。

恋愛経験の全くなかった美咲でも、この先に起こるであろう事は予想が付いた。美咲は戸惑いを感じつつも、ゆっくりと瞳を閉じた。そのうち、唇に温かいものが触れる。考えるまでもなく、南條のそれであった。

初めての事に、美咲の身体はわずかだが震えていた。緊張しているだけなのか、それとも、大人の世界へと足を踏み入れてしまった事に恐怖を感じてしまったのか。

南條の口付けはほんの数秒であった。しかし、その短いはずの間が、美咲には長く感じられた。

唇が離れてからも、南條の感触は残っていた。

甘い口付け――

そんなフレーズをどこかで聞いたような気がする、と美咲はふと思った。だが、今の彼女には、その味を感じる余裕すらなかった。

陽が沈み、西の空が朱色に染まった頃に、美咲は南條と共に湖から戻って来た。

南條から予想外のキスをされた事により、その後の修行は中断してしまった。美咲の気持ちはもちろんだが、南條もまた、自らの行動にわずかながら驚いていた様子であった。

ただ、南條は、この事は謝らない、とその場ではつきりと言いつた。『謝ってしまつては全てが嘘になる。美咲にも失礼だから』と。

そんな南條の言葉を聞きながら、真面目な彼らしいと思う傍ら、嬉しかった。自惚れでも何でもなく、自分は南條に大切にされているのだと感じられた。

（でも、まだ信じられないような……）

美咲はぼんやりとしつつも、自らの唇に触れてみた。夢のようだが、あの感触は鮮明に憶えている。

（これでまた、修業に専念出来なくなったらどうしようもないな……）

自嘲するように口の端を上げると、美咲は風呂場の前まで来た。

この風呂は家庭用と同じで、どんなに頑張っても、二人で入るのがせいぜいだ。だからと言って、無理矢理にでも二人で入る者もないので、自然と交代での入浴となる。もちろん、入る時は周りにもちゃんと分かるように、ドアノブにかけられた札を、空室から 入浴中 へと換える。

美咲もまた、身体に沁み付いているのか、ぼうつとしていても、ちゃんと札を裏返していた。

ドアを開けると、風呂特有の息苦しい水蒸気が全身を覆う。脱衣所でその状態であるから、浴室はもつと凄そうだ。

そんな中で、美咲は服を脱いで、シャンプーなどが入っている小さなカゴとタオルを手に、浴室のガラス戸を開いて足を踏み入れた。予想通り、湯気で周りが見えないほどにまであっている。そこで、美咲はタオルをシャワーのフックにかけ、カゴを床に置いた。それから、シャワーヘッドを手に取り、その場へ片膝を立てた姿勢で座ると、湯を出して無造作に全身に浴びせる。

夏場だからか、少々熱いような気もしたが、慣れてくると、さほど気にならなくなる。それどころか、一日分の汗が流されてゆくような心地良ささえ感じる。

ふと、美咲は目の前の鏡を見た。当然ながら曇っているが、ほんの微かに、美咲の姿が映し出されているのが目に入る。

（今って、どんな顔してるんだろ）

美咲はシャワーを止め、シャワーヘッドを適当な場所に置いてから、手を使って鏡を拭いた。

徐々に自分の顔が見え始めてきた。だが、それでも蒸気が見事に

邪魔をし、拭いた先からどんどん曇ってしまふ。

（別にどうでも良かったか）

キリがないと悟った美咲は、拭くのを止め、再びシャワーに手を伸ばそうとした。

その時であった。

曇っている鏡の中で、美咲の姿が少しずつ変化を遂げていた。

（な、何……？）

美咲は眼を見開きながら、その様子を眺めていた。

鏡の中のそれは、長い黒髪の少女へと変わってゆく。否、よくよく見ると、その正体はただの少女ではなかった。

（まさか……、夢見てる……？）

現状が把握出来ず、美咲は心の中で問い質してみる。

「夢ではない」

鏡の中の少女が、美咲に向かって言ってきた。

愛らしい外見に似合わず、どこか人を見下したかのような言葉遣いの少女。それは紛れもなく桜姫だった。

「——何で……？」

混乱した結果、随分と間抜けな質問をしてしまった。案の定、桜姫は呆れたようで、フンと鼻を鳴らして笑った。

「そなたは、夢以外で私が現れるのは変だと思っておるのか？ それとも、現の世界で私と逢うのが怖いのか？」

明らかに、美咲の反応を窺って面白がっている。美咲はそれを嫌というほど感じ、片頬を引き攣らせながら桜姫を睨んだ。

「誰があんたを怖いって？ 私はただ、意表を突かれてビックリしちゃっただけよ」

「ほう」

美咲の言葉を端から信じていない。桜姫はニヤリと笑むと、美咲をジッと見つめた。

「その顔、止めてくれない？」

次第に苛々が募り、美咲は吐き出すように桜姫に言った。だが、

桜姫は一向に表情を変えず、「やはり怖いのだな？」と逆に訊いてきた。

これで、美咲の苛立ちも頂点に達してしまった。

「怖くないって言ってるでしょ！」

つい、鏡に向かって怒鳴ってしまった。

「大体何なの？ お風呂に入った途端に姿を現すなんて！ 本家に行つてからはずっと息を潜めていたくせに！ 出て来るんなら、時と場合を考えて出て来なさいよ！」

「ああ、煩いのう……」

美咲の罵声に辟易したのか、桜姫は眉を顰めながら、鬱陶しそうに手の平を振った。

「もう少し声を抑えられんのか？ ただでさえ、ここは音が反響しやすいと言つのに……。——全く、そなたは短気だから敵わんわ……」

……

「私は短気じゃないわよ！ あんたのその態度が人の神経を一夕逆撫でしてるんでしょっ？」

「私は別に、そなたを怒らせる気は更々ないが？」

「あんたにその気がなくなつてね、こつちにはそう感じるの！ 分かる？」

「分からね」

ここまできつぱり言われてしまつては、返す言葉も見付からない。美咲はその場にペタリと座り込むと、項垂れて深い溜め息を吐いた。「——で、結局私に何が言いたいわけ？」

どうにか落ち着きを取り戻してから、美咲は改めて桜姫に訊ねた。桜姫の顔から、笑みがスツと消えた。そして、それと入れ替わるように、今度は、彼女独特の、冷気を纏つたような視線を投げかけてきた。

美咲の全身に、一瞬で悪寒が駆け巡つた。自らの身体を抱き締めながら、それでも美咲は、桜姫から視線を逸らす事なく睨み返した。「——不愉快だ……」

地の底から湧き出るような低い声で、桜姫が言った。

「そなたも分かっておるう？ 人間の能力者——殊に金属性の者は我々に仇なす存在だと。」

それなのに、そなたは何だ？ 例の男に身も心も委ねてしまいおつて……」

そこまで言うと、桜姫は本当に不快そうに顔を顰めた。彼女が言っているのは考えるまでもなく、南條とのキスの事だ。

桜姫の突然の出現により、その事を失念しかけていたが、再び想い出した。途端に、意識をし出して胸の鼓動が速度を増す。

「わ、私が何をしようとあんたには関係ないでしょ？ それに、誤解を招きそうな言い方もやめて！」

私はね、南條さんとはキス以上の事はしちやいないわよ！」「きす……？ ああ、接吻の事か。」

フン。たかが接吻であろうとも、一線を超えた事には変わりなかるう？」

「——それは……」

悔しいが、桜姫の言っている事は尤もだ、と美咲は思った。同時に、接吻 という表現も、妙に艶めかしい雰囲気を感じるのやめて欲しいとも考えていた。しかし、改めて考えてみると、彼女は古代人であるから、キス などという現代的な表現を使わないのは当然であるが。

「——なら、私が鬼王とどうにかなれば良かったってわけ？」

桜姫にばかり一方的に言われるのが悔しく思えて、今度は逆に訊き返した。

「——そんなに鬼王が嫌いかな？」

美咲に対して、桜姫は淡々とした口調で訊ねてきた。だが、心なしかその表情は、わずかに哀しげに歪んでいるように見て取れた。だからと言って、美咲としても同情する気は更々ない。

「鬼王に対しては前は怖かったけど、今は好きとか嫌いとかそんな感情は別にないよ。けどね、あんたが鬼王を愛しているのと同じよ

うに、私も南條さんが好きなの。この気持ちは、これからだって絶対に変わらない。——どんな事があってもね」

美咲ははつきり言い放つと、再び桜姫の表情を窺った。

桜姫は感情を悟られまいとしているのか、美咲から視線を逸らすように瞳を閉じていた。

その状態のまま、少しばかり口を嚙んでいた桜姫だったが、やがて、だんまりを続けても仕方がないと悟ったのか、諦めたように小さく溜め息を漏らした。

「どこまで強情なのか、この娘は……」

桜姫は呆れた口調で言った。

「いいか？ 何度も言うようだが、そなたとあれば、決して相容れぬ間柄だ。愛せば愛するほど、そなたは不幸になるだけだ」

「勝手に決め付けないで」

「決め付けではない。私は真実を述べているだけだ」

「あんたも強引だね。これじゃあ、史孝伯父さん達と全然変わらないじゃない」

美咲が言つと、桜姫の表情が一変して険しさを増した。

「あの愚か者共と一緒にするな」

静かだが、吐き出された言葉の中には険が籠っていた。

不味い事を口走ってしまった、と後悔したが後の祭りである。

美咲は息を吞んで、桜姫に視線を注いだ。

「周りから大切にされ、幸せに育ったそなたには分かるまい。私が過去に、一族の者に与えられ続けてきた苦しみなど……」

そなたは面白い。しかし好かん。何かと言つと、綺麗事ばかり口にする。しかも、そなたの感情はそのまま私に伝わってくるから、余計に気分が悪くて堪らん」

「——綺麗事を言うのが悪い事なの？」

口答えるのもどうかと思つたが、ただ黙っている事も出来ず、訊いてしまった。

「だから好かんと言っている」

苛立ちを露わにして桜姫は答えた。

「いいか？ そなたのように甘い事ばかり言っている者が、この薄汚れた世の中を渡って行くのは不可能だ。哀しい事だが、それは昔も今も全く変わっておらん。特に人間は、私利私欲のためなら手段など選ばない。」

そなただつて、心の底では気付いているはずではないか？ 現にあの時、アイダの男を殺してやりたいと思っただろう？」

「そ、そんな事は……」

「ない、と言い切れるのか？」

美咲は言葉に詰まった。

認めたくはないが、桜姫の言う通り、美咲は確かに、ほんの一瞬でも、藍田に対して殺意が芽生えてしまったのだから。

「——けど、殺したくないとも思った……」

美咲は唇を噛み締めつつ、やっとの思いで口にした。

「殺したくないって思ったからこそ、南條さんに、桜姫を止めるようにお願いしたんだから……」

確かに苦しかった。あのまま、私は桜姫と死んじやうかも知れないって思ったよ。でもね、私はあの時、南條さんを信じていたから。

——南條さんなら、絶対に助けてくれる、って……」

美咲はそこまで言つと、桜姫を真っ直ぐに見据えた。

桜姫もまた、口をへの字に結んだまま見つめ返してくる。

どちらが先に折れるか。それは、美咲だけでなく桜姫も考えている事だろう。

どれほど睨み合いを続けていたであろうか。

それまで微動だにしなかった桜姫が、眉根を寄せて深い溜め息を吐いた。

「全く……。何故、そなたのような頑固娘を選んでしまったのか……。扱い辛くて堪らん」

桜姫は投げ遣りにも思える口調で言つと、ゆっくりと首を左右に

振った。

「けど、ちょっとぐらい障害があつた方が面白いんじゃない？」

お手上げ状態になつてゐる桜姫に対し、美咲は得意げに続けた。

「私が抵抗すればするほど、あんたもそれに対抗しようと躍起になる。そして、私は更に、私の中のあるたと戦う。確かにめんどくさいけど、物は考えようでしょ？」

「——そなた、真正の馬鹿だな……」

「一々突つかからないでくれる？ それに、私が馬鹿なら、あんただつて相当な大馬鹿つて事になるんだよ？」

「私のどこが 馬鹿 だと言うのだ？」

「あれ？ 今自分でも言つたじゃない。『何故、そなたのような頑固娘を選んでしまったのか』つて。それつて要は、見る目がなかつた、つて事になるわけなんだし」

「——よくもまあ、口が減らんものだな」

付き合ひ切れん、と言わんばかりに、桜姫はとうとう深い溜め息を漏らした。

「そなたを脅してやるつもりだつたのに、これではまるつきり逆ではないか……。疲れたわ……」

桜姫の言葉に、美咲は眉根を寄せた。

「ま、まさかと思うけど……。脅すだけの目的で、私の前に現れたの……？」

「そうじゃ、と答えたらどうするつもりだ？」

「ど、どうするも何も……。本当にそんなふざけた理由だったら、あんたを一発引つ叩くぐらいは……」

「それが可能だと思つておるのか？」

「——無理だよ……」

美咲はあつさりと折れてしまった。

桜姫は実体を持っていない。夢の中であれば可能かも知れないが、現の世界、ましてやは今は、鏡の中に映つてゐるだけのようなものだ。無理に殴ろつものなら、桜姫よりも自分が先に大怪我をする。

（それこそ、馬鹿丸出しだわ）

そんな事を思っていたら、桜姫は、不意に真顔になって「私」と口を開いた。

「そなたの前に出たのは、少しばかり、そなたと話してみようかと思っただけだ。」

鏡というのは便利なもので、夢と現の世界を上手い具合に繋いでくれる。確かに、場所はまだ宜しくなかったが、何分、私が目を覚ましたのがつい先刻の事だ」

「——だったら、部屋に戻るまで待つてれば良かったじゃない。そっちにだって鏡はあるんだしさ」

「あそこでは、会話が筒抜けになるのではないか？」

「不味いの？」

美咲が問うと、桜姫は「ああ」と頷いた。

「そなたとは、一対一で話したいからな。余計な人間が加わると、かえってややこしくなりそうだ。——特に、あの男がいると、な」

「——よっぽど目の敵にしてるんだね、南條さんを」

美咲は心底呆れた。ただ、落ちていてよく考えてみると、桜姫を闇に葬るだけの霊力を持つ南條は、彼女にとっては脅威そのものなのだ。

美咲が鬼王に恐怖心を感じたように、桜姫もまた、南條の存在を恐れている。

（結局、本体と入れ物は相容れないってわけか）

心の中でだけとは言え、自らを 入れ物 と表現してしまった事を、美咲は苦々しく思いながら口角を引き攣らせた。

「確かに、そなたは所詮、器 に過ぎんからな」

美咲の心を読んだのか、桜姫はまた、ニヤリと口の端を上げた。

「そなたが生を成した日まで、私はそなたの中で、じつくりと彼奴等の足掻きを観察させてもらうぞ。」

だが、そなたが望みさえすれば出て来てやっても良い。——あの時のようにな」

「冗談じゃない！」

美咲は浴室中に響き渡るほどの声を上げた。

「私は何度でも言う！ 絶対に、周りが勝手に決めた下らない 運命なんて断ち切ってやる！ 鬼王にだって宣言してやったんだから！」

鬼王の名を出した途端、桜姫はわずかに目を見開き、「鬼王……」と呟いて、そのまま口を閉ざしてしまった。その途端、美咲の胸が、チクリと痛み出した。

間違いなくそれは、美咲ではなく桜姫の感情だった。

（悪いけど、私だって幸せになりたいから……）

口には出さず、心の声で美咲は桜姫に語りかけた。

桜姫はもう、何も答える事はなかった。鋭い光を帯びた瞳を伏せ、そこからゆっくりと姿を消していった。

桜姫が消え去った鏡は、再び美咲を映し出す。しかし、どこか違和感を覚える。

何故だろう、と少し考えて、美咲はハッと気が付いた。

瞳が、濡れているのだ。

シャワーを浴びたのだから、濡れていたとしても可笑しくはないのだが、止めてから、結構な時間が経っている。

これはきつと、以前に雅通から鬼王と桜姫の悲恋を聞いた時と同様に、桜姫の想いに同調してしまったのかも知れない。

「——私は、南條さんを好きなのに……」

誰にともなく呟くと、美咲はその場に座り込んだまま、あらぬ方向に視線を彷徨わせた。

第八章 第二節

夜もすっかり更けた頃、一台の車が聖地へ到着した。

まず、助手席から二十代前半の青年が、続いて、運転席にいた二十歳前と思われる少女と、後部席からは、少女より幾分若い、小柄な少年が降りて来た。

「あー！ 坐りっ放しでケツがいてえ……！」

地面の上に立つなり、助手席に坐っていた青年——ふじさきたくま藤崎拓馬は、背を反らせながら何度も腰の辺りを擦る。

そんな彼を、少女は不機嫌を露わにして睨み付けた。

「偉そうな口を叩ける立場じゃないでしょ？ こっちは、あなたが隣でいびき軋掻いびきいている間もずっとハンドルを握り続けていたんだから」

「は？ 俺そんなに軋掻くほど……」

「寝てましたよ。ガッツリね」

異を唱えようとした藤崎の脇から、少年が突っ込みを入れてきた。「それにしても、あなたのような人が最強能力者なんて未だに信じられませんよ。」

俺の中の金属性能力者は、常に冷静沈着で口数が少ない。それでいて、内面は深い慈愛に満ちている。あなたの場合、面白いぐらいどれにも当て嵌まらないですもんねえ？」

「……んだとお！」

藤崎が歯を剥き出しにしてファイティングポーズを取ると、少年はさも可笑しそうに口許を歪めた。

「——やる気ですか？」

「ったりめえだ！ テメエに言われ放題言われて黙ってられっか！」

「——しょうがないですねえ……」

少年が深い溜め息を吐き、藤崎とあわや取っ組み合いになるかと思った、まさにその時だった。

「いい加減にしなさいっ！」

鬼のような形相となった少女が、二人の男に雷を落とした。

「ほんつとに、あなた達はどこまで馬鹿なの？ いい？ 今日はわざわざここまで喧嘩しに来たんじゃないの？」

全く！ 本来の目的を忘れないでもらいたいわ！」

少女の剣幕に、藤崎だけでなく、少年も気まずそうに肩を竦めた。そんな彼らを交互に見ながら、少女は、「もう」と深い溜め息を漏らしながら、こめかみの辺りを押さえる。

「何度も言うようだけど、こんな辺境地にまで来て下らない仲間割れは勘弁してちょうだい。」

さ、とつとと行くわよ！」

少女は踵を返すと、振り返りもせずに颯爽と歩き出した。

「チッ！」

藤崎は小さく舌打ちしつつ、かと言って、先を歩く少女に逆らう事の恐ろしさも重々承知していたので、黙って後に続く。

少年も同様に着いて行った。

車を停めた場所からしばらく歩くと、山小屋が見えてきた。

「うわっ！ 全然変わってねえなあ」

建物を目にした途端、藤崎は思わず頬を引き攣らせた。

「しかし、中は何度カリフォームをしてるらしいって聞いた事はあるけど、外側は相変わらずきつたねえよなあ……。俺も、よくこんな場所で我慢して滞在してたよ……」

「あなたの昔話はどうでもいいわよ」

少女は、藤崎に冷ややかな視線を向けてピシヤリと言い放つと、ノックもせずにドアを開けた。

これにはさすがの藤崎も驚き、少女の脇から、「おい」と突っ込みを入れた。

「予告もなしにいきなり侵入したら、向こうだってビックリしちまうんじゃないかよ？」

しかし、少女は藤崎の声も無視して中へと足を踏み入れる。

「つたく！　しょうがねえなあ……」

藤崎は後ろ手で頭を掻きながら、少女の後を着いて行った。

その隣では、少年が苦笑を浮かべている。

「ま、これが綾乃ちゃんなんですから」

少年の言葉に、藤崎も「だな」と同意した。

「鬼王も桜姫も、藍田のオッサンも畏れないのがこいつだからな。つたく、肝の据わり方が普通じゃないぜ」

少女――綾乃はそんな彼らの会話も意に介さず、靴を脱いで廊下を突き進む。

橙色の電球が仄かに光る下、それぞれの足音がヒタヒタと鳴る。辺りが静まり返っているから、尚更不気味に響いていた。

不意に綾乃が、あるドアの前で足を止めた。そこは確か、リビングだったはずだったよな、と藤崎は過去の記憶を手繰り寄せた。

綾乃は中に入った時と同様に、挨拶せずに部屋の前ドアを開いた。ここまで来ると、綾乃に対して呆れるのを通り越し、凄い、としか言いようがない。

「――誰？」

ドアを開けた途端、奥の方から女物の声が聴こえてきた。

綾乃の後ろにいる男二人は、固唾を呑んでその場に立ち尽くしている。しかし、綾乃は対照的に、表情一つ変えずにリビングに入ると、声のした方へと足を向けた。

藤崎はどうすべきか少し考えたが、木偶の坊のように立っただけも仕方ないと思い直し、少年に「行くぞ」と促して、そろそろと後続いた。

声の主は台所仕事をしていた途中だったのか、食器洗い用のスポンジを手にしたまま、怪訝そうにこちらを睨んでいる。当然の反応である。

「こんばんは」

不法侵入者に表情を曇らせている女とは対照的に、綾乃は満面の笑みを浮かべた。

「あなた達、誰なの？ 他人の家に勝手に上がり込むなんて感心出来る事じゃないわね」

やんわりとした口調だが、所々に刺々しさを感じさせる。

「あら、私達だってあなたと同じですもの。いつ、何時なんどきにこちらに入ろうと特に問題ないと思いますけど？」

笑顔はそのまま、綾乃は女にサラリと返してしまった。

その途端、女はカツと目を見開いた。更に表情を険しくさせ「まさか……」と呟いた。

「——あんた達、本家の……？」

「ようやく分かって頂けましたか」

今まで愛らしい笑顔を取り繕っていた綾乃だったが、今度はそれを消し去り、不敵な笑みを浮かべた。

その変貌振りは、傍から見ている藤崎も背筋が凍るようであった。

「——ちよつと、待ってなさい……」

女は手に持っていたスポンジを流し台に戻すと、水道で手の泡を洗い流し、足早にリビングを出て行った。

「まさか、逃げたんじゃねえだろうな？」

女の気配が消えてから藤崎が言つと、綾乃は「違うわよ」と答えた。

「あの人、そんな柔な性格してないわ。恐らく、他の誰かを呼びに行つたんでしょ？ もうじき、その人を伴つて戻つて来るわよ」

「ふうん……」

綾乃の言葉に、藤崎は気のない返事をして、手近な場所にどっかりと腰を下ろして胡坐を掻いた。

それからしばらくして、リビングのドアが、カチャリと音を立てて開かれた。

綾乃が言つた通り、女は他の人間を伴つて戻つて来た。しかも、一人ではない。

女を先頭に、そのすぐ後から、四十代ほどと思われる厳つい顔の

男が姿を現し、次に、その男とは対照的な、すっきりと整った容貌の若い男、また更に、少年のような幼さの残る男が続いた。

（んだよ、野郎ばっかか……）

そう思いながら、次々と中に入ってくる男達を藤崎はつまらなそうに眺める。ところが、最後尾に着いて来ていた少女を目にした途端、藤崎はギョツとした。

（藍田、朝霞……？）

しかし、よくよく見ると、少女は藍田本家当主の娘と比べ、表情に柔らかさがある。髪長さも、朝霞よりもだいぶ短い。

（けど、ここまでそっくりだとさすがに気色わりいな。まあ、朝霞よりは断然可愛いと思うけど）

そんな事を考えながら、藤崎は不躰なほど、少女をジロジロと見つめた。

その時、少女と目が合った。藤崎の嫌らしい視線がよほど気になったのか、少女は不快感を露わにして険しく睨み付けてきた。

藤崎は首を竦め、少女に向けて愛想笑いをしてみたが、少女の表情は頑ななままだった。

（ま、無理もねえな）

藤崎はそそくさと視線を逸らし、微苦笑を浮かべる。

その様子を、綾乃と少年は、同時に顔を顰めながら眺めていた。言うまでもなく、二人は完全に藤崎を変質者扱いしている。

「ええと」

全員が中に入ってから、厳つい男が口を開いた。

「まずは、せつかくだから楽にしなさい」

顔に似合わず穏やかな口調で、男は客である藤崎達を促す。とは言っても、藤崎だけは先ほどから、その場に堂々と胡坐を掻いたままだったのだが。

綾乃と少年がそれぞれ正座をすると、中に入ってきた他の者達も、わらわらと座り出す。

それを見届けてから、厳つい男は「さて」と続けた。

「遠い所ご苦労さん。——まあ、こっちは正直、君達をあんまり歓迎出来るような立場じゃないんだがね。しかし、時間も時間だし、今夜はゆっくりしなさい。」

あ、一応互いに紹介し合おうか？ 名前が分からないと何かと不便だからな」

男はそう言つと、そこにいた面々の名前と属性を簡単に説明し出した。

厳つい男は、木属性の樋口泰明、最初に綾乃と言葉を交わした女は、水属性の樋口江梨子、端正な顔立ちをした男は、藤崎と同じ金属性の南條和海、幼顔の男は、火属性の瀧村雅通。

そして、一番気になっていた、本家当主の娘に似ている少女は、藍田美咲。樋口は全く触れなかったが、考えるまでもなく、彼女が桜姫 だ。

（しっかし、桜姫が自分の娘そっくりだとは、藍田のオッサンも複雑な気持ちだろうなあ）

美咲に更なる興味が湧いた藤崎は、自らの顎を擦りながら思った。ただ、先ほどのように睨まれては堪らないので、表情は出来る限り引き締めている。

「それじゃあ、今度は君達の素性を明かしてもらおうじゃないか」
一通り、全員の紹介を終えてから、樋口は藤崎達に向かって言った。それに呼応するように、周りも彼らに注目してきた。

「分かりました」

真っ先に答えたのは、綾乃だった。この場合、代表格になるのは最年長である藤崎になるはずなのだが、綾乃は彼を完全に下っ端だと思っっている。

出鼻を挫かれた藤崎は、当然ながら良い気分ではない。しかし、綾乃相手に異を唱える事も出来ず、彼は憚然として黙っていた。

そんな藤崎を余所に、綾乃は淡々と紹介を始めた。

「まず、彼は藤崎拓馬。属性はそちらの南條和海さんと同じ金です。——全くそうは見えませんかどね」

最後に余計な一言を添えてから、綾乃は苦笑いを浮かべる。

藤崎は心底面白くない気持ちになったが、小さく舌打ちをするだけに留めた。

「次に、彼が北川航太郎。きたがわこうたろう属性は水ですので、樋口江梨子さんと同じになります」

気のせいであろうか。綾乃は、樋口江梨子をやたらと強調したように感じる。

江梨子も何かを直観したのか、眉をピクリと痙攣させ、綾乃に冷やかな視線を注いだ。だが、綾乃は気付いていない。いや、彼女の性質上、気付かぬ振りをしているだけかも知れない。

（ほんとにおそろしい女だぜ……）

身を縮ませながら、そんな事を考えていたら、綾乃は「最後に」と続けた。

「私は神山綾乃かみやまあやのと言います。属性は火。瀧村雅通さんと一緒ですね？」

江梨子の時とは対照的に、雅通には好意的な笑顔を向ける。

小首を傾げた仕草で微笑まれた雅通は、一瞬、戸惑ったようであったが、すぐさま釣られたように、ニンマリと気色悪い笑みを返していた。

（こいつ、すっげえ単純だな！）

自分の事を棚に上げて、腹の底から笑い飛ばしたい衝動に駆られた。もちろん、この緊迫した雰囲気の中で爆笑するのは場違いにもほどがあるので、即座に俯いて笑いを必死で噛み殺した。

どちらの紹介も済んでから、樋口は再び「ところで」と口を開いた。

「君達がここまで来た目的は何なんだい？ 藍田本家からの差し金かな？」

遠慮がちな口調ではあるが、随分と率直に訊いてくる。だが、回りくどい事が嫌いな藤崎は、この樋口のストレートさに好感が持てた。

綾乃も、藤崎と同じ事を思ったのだろう。江梨子の時とは対照的に、心から嬉しそうに微笑んでいる。

「今日の事は当主には一切話していませんよ。私達が独断であなた方に逢ってみたいと思っただけですもの。」

桜姫の魂を受け継いでいるという藍田美咲さんはもちろんですが、何より、その美咲さんに傾倒している南條和海さんに強く興味が湧きましたから」

綾乃はそこまで言うと、南條に向けてチラリと視線を送った。だが、雅通と違い、南條からは表情の変化が窺えない。笑いもせず、かと言って怒った様子も見せず、興味なさげに綾乃の視線を遣り過す。

南條の無反応さには、さすがの綾乃も辟易してしまったようで苦笑を浮かべていた。

「それで、ウチの南條と美咲を見た感想は？」

殆ど間髪入れず、樋口が訊ねてきた。

綾乃は、「そうですね」と片頬に手を添えた仕草をした。

「南條さんはウチの藤崎と違って、冷静な判断が出来る方だろうとお見受けしました。実際、南條さんから感じられる気も、藤崎とは比べ物にもなりませんもの。いえ、藤崎だけではなく、他の金属性の能力者よりも、遥かに高い霊力をお持ちだと思います。」

美咲さんは、当主のお嬢様の朝霞さんに本当によく似ていらつしやいますね。最初、朝霞さんが聖地に来ていたのかと思ったほどです。

そして、桜姫の魂を持っているからなのでしょうね。美咲さんからは計り知れないパワーを感じます。当主の仰る通り、金属性以外の能力者では到底太刀打ち出来ないでしょう」

「ほう……。なかなか鋭いね、君は」

樋口は感心したように小さく声を上げたが、綾乃はそれに対してニコリともしなかった。

「別に褒められるほどの事ではないと思いますよ？ 確かに逢って

それほどの時間は経っていませんけど、ちょっと見ていれば分かる事です。

樋口さんだって、穏やかな話し方をされていますけど、相応の霊力をお持ちではないですか？　ただ、戦うのはあまり好きじゃないようですけど」

「うーん……。霊力に関しては何とも言い難いが」

誰の目から見ても、綾乃の態度は不愉快極まりないものだが、樋口はよほど人間が出来ているようで、嫌な顔一つせずに答えた。

「確かに君の推察通り、俺は戦闘はあまり好きじゃないから、出来るならば派手な事は避けたいと言うのが正直な気持ちだ。——もちろん、必要とあらば、俺も戦う意思は十分にあるがね」

樋口は淡々と語っていたが、藤崎は、その言葉一つ一つに彼なりの強さを垣間見たような気がした。

（何より、綾乃の嫌味に一々ブチ切れねえのがすげえよなあ……。まあ、このオッサンにしてみたら、綾乃なんてガキも同然なんだろうけどさ）

そんな事を考えながら、藤崎は改めて、樋口の厳つい顔を見据えた。

第八章 第三節

日付けが変わった頃になって、全員、各々の部屋へ戻って行つた。とは言つても、この小屋には、リビングと風呂、トイレを抜くと部屋が五箇所しかないから、予定外の客の部屋の割り当てをどうするかで、少々揉めた。

その結果、綾乃には江梨子の部屋を一晚だけ貸し、江梨子は、聖地在住組全員から、ゴミ置き場 と呼ばれている樋口の部屋移動を余儀なくされた。

ただ、幾ら気心の知れた夫と同室となるとは言え、綺麗好きな江梨子には非常に辛い仕打ちだったらしい。

『泰明さんは好きだけど、あの汚らしい部屋だけは許せないのよ！だからせめて、美咲ちゃんの部屋に行かせて！』

人目も憚らず、最後まで樋口に駄々を捏ねていた。もちろん美咲は、江梨子は同性だから別に構わないと思つたのだが、樋口を始め、南條と雅通は必死で異を唱えた。美咲に対して下心がありそうだから、と。

そして、藤崎と航太郎は、男 という理由だけで、リビングでの宿泊まりが決定した。

その扱いもどうよ、と美咲もさすがに心配になつたが、本人達は全く気にした様子はなかった。寧ろ、南條や雅通と同室になる事を拒んでいたようだったから、かえって都合が良かったのだろう。

（何だか、目まぐるしい一日だった……）

美咲はベッドに仰向けになりながら、今日——正確には日付けが変わっているから昨日になるが——を振り返っていた。

風呂場で起こった、予想外の桜姫との遭遇、突然現れた、新たな能力者三人。

だが、それよりも、聖地の中心地での出来事の方が遙かに衝撃が大きかった。

（何だかやっぱり、まだ信じられない……）

感触は確に残っているような気がするものの、先ほどまでの南條を見ていると、やはり、あのキスは夢だったのでは、と考えてしまう。

（ほんとにヤバいな、私……）

美咲は横を向き、目を閉じる。しかし、日中の事が頭を駆け巡り、なかなか眠りに就く事が出来ない。いつもであれば、眠れないのは、寧ろ、有り難いと思うのだが。

「——水でも飲んで来よ……」

結局、ムクリと起き上がった。ベッドから降りて部屋を出ると、廊下には、橙色の頼りない明かりが仄かに灯っている。

その中を、美咲は物怖じせず、キッチンに向かって歩いて行く。

聖地に来た当初は、こんな時間帯に独りで出歩くのは怖くて堪らなかったが、最近はそんな恐怖心もすっかりなくなっていた。知らず知らずのうちに、この環境に順応してしまったのだろう。

少し歩くと、リビングの扉が見えてきた。キッチンはリビングと隣接しているため、一度、リビングを経由しないと行けない。

（あの人達を起こさないようにしないと）

美咲はそう思いながら、そっとドアノブを回した。カチャリ、とわずかに音が鳴った。

ドアを開け、リビングに入ると、寝ている男二人には目もくれずにキッチンへと足を運ぶ。もちろん、足音もなるべく立てないようにと気を遣った。

キッチンに入り、窓から差し込む月明かりを頼りに、食器棚からコップを一つ取り出す。それに、水道から直接水を注ぎ、八分目まで入れると、水道を止め、そのまま一気に呷った。

無味無臭の水は、普段は味気なく思えるが、異様に喉が渴いていた今は、それも美味しく感じられた。まさに、生き返った心地

がした。

「ふう……」

美咲は小さく息を吐き出すと、使用済みのコップを軽く洗い流し、流し台に置かれている水切りカゴの中へそれを入れた。

全ての作業を終え、さて、戻ろうか、と思い、踵を返した時だった。

振り返った途端、美咲のちょうど真後ろに、一人の男が、ぼうつと佇んでいるのに気付いた。

「……………」

美咲は危うく悲鳴を上げそうになったが、寸での所でどうにか抑えた。

「よお」

驚きのあまり、言葉を失っている美咲を余所に、男は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら声をかけてきた。

「こんな時間に野郎二人が、しかも、あんたを殺せるだけの男のいる場所に独りで来るなんて、随分と用心だなあ、美咲サン」

男の話し方は一々癪に障る。美咲はあからさまに眉を顰めて男を睨んだ。

「おいおい。さっきも思ったけど、そんな怖い顔で睨むなよ。せつかくの可愛い顔が台無しだぜ？」

男はわざとらしく肩を竦めた。

「あなたに『可愛い』って言われたって、ちつとも嬉しくないです」不快感を露わにしたまま、美咲は吐き捨てるように言った。

「大体何なんですか？ 足音も立てず、いきなり後ろに立たれていたら、こっちもビックリしちゃいます」

「俺は別に、脅かすつもりなんてなかったんだけどねえ」

完全に気が立っている美咲に対し、男——藤崎は苦笑を漏らした。

「ただ、誰かが入って来たような感じだったから確認しただけだ。

にしても、偶然とは言え、美咲サンと一対一で逢えるなんてラッキーだぜ。あん時からずっと、あんたが気になってたしな」

「——私を消せるチャンスだから、ですか？」

美咲が問うと、藤崎は「まあそう言っなよ」と宥めるように返した。

「俺は藍田のオッサンや朝霞と違って、ひろーい心を持ってる。それに、あんたのような美少女をあっさり消しちまうのも勿体ねえからなあ」

「だから何が言いたいんですか？　回りくどい言い方をされると苛々します！」

「やれやれ……。えらい短気だなあ」

藤崎は深い溜め息を吐くと、突然、美咲の左手首をグイと握った。

「なっ……！」

「静かにしろ」

声を上げようとした美咲の口を、藤崎は空いている方の手で塞いだ。

「別に悪いようにはしねえよ。ちよいと俺に付き合ってもらっただけだ」

藤崎はそう言っつと、口の端を上げた。

藤崎に連れ出された場所は駐車場だった。

「ここなら邪魔は来ねえだろ」

藤崎は美咲を解放すると、彼らが乗って来たであろう車に寄りかかった。

美咲は彼と対峙するように立っている。

「——藤崎さん」

美咲は初めて、藤崎の名を口にした。

「あなた、本当に何を考えてるんです？　——やっぱり、人知れず私を消すつもりですか？」

「ああ！　だから何度も言わせんなって」

藤崎は眉根を寄せながら、頭をポリポリと掻き出した。

「さっきも言っただけ、俺はあんたを消すつもりなんてねえよ。そ

れよりも……」

再び、藤崎が美咲に近付いて来た。

美咲は藤崎を見据えたまま息を呑む。

「あんた、俺の女になってみる」

予想外の言葉に、美咲は目を剥いたまま絶句した。

藤崎は構わず続けた。

「まあ確かに、朝霞とおんなじ顔つてのは引つかるけど、性格は断然あんたの方が可愛いしな。もちろん、あんたのもう一つの人格の桜姫にもかなり興味ある。しかも、オッサンを殺しかけたってんだから、ほんとに傑作だ！」

「ふざないで！」

呪縛から解き放たれたように、美咲は藤崎をキツと睨んで声を荒らげた。

「『俺の女になってみる』って？ 冗談じゃない！ 私はあるたのような軽薄男は反吐が出るほど大っ嫌いなもの！ それに何なの？ 完全に人を虚仮こけにしてんでしょっ？

史孝伯父さんの事だってそうよ！ 確かに少しだけ、消えてしまえばいい、って思ってしまったけど、心の底から望んだわけじゃない！

もう、あんたとこうしているだけで気分が悪くなる！」

美咲はそこまで言い切ると、そのまま藤崎に背を向けた。

「おい」

不意に、先ほどとは打って変わって冷ややかな声が美咲の耳に飛び込んできた。

美咲は立ち止まったまま、恐る恐る振り返る。

「そこまで言われちゃあ、俺もさすがに黙っちゃいらんねえな」

そう告げる藤崎の右手には、日本刀が握られていた。剥き出しの銀の刃は降り注ぐ月光を受け、時折、ギラリと強い光を放つ。

「殺すつもりはねえよ？ けど、やっぱ、大人しくしてもらうのが一番だよなあ。オッサンの話じゃあ、南條って男の刀でも無事だっ

たようだから、ちょっとぐらいは平気だろ？」

藤崎は刀を構え、徐々に距離を縮めて来る。

それに合わせて、美咲もまた、背中を流れる冷たい汗を感じながらゆっくりと後ずさった。

桜姫の意識と戦いながらも、あの時の、内臓を抉り取られるような感覚は未だにはつきりと憶えている。だからこそ、余計に恐怖を煽られた。

（どうする……？）

桜姫を目覚めさせぬようにと、美咲は必死で自分の中の魂を抑えながら考えた。

ここから小屋までは、だいぶ距離がある。当然ながら、どんなに叫んでも助けは呼べない。かと言って、隙を見付けて逃げようにも、美咲は自分の脚力に自信がなかった。

そうしている間にも、藤崎は、また更に近付いて来る。

（そうだ。こいつの言う通り、私は簡単に死にはしないんだ。だったら……）

負けを認めるようで悔しかったが、もう、藤崎の魔の手から逃られる術はない。美咲は覚悟を決めると、その場に立ち止まり、歯を食い縛って強く瞼を閉じた。

「やっと大人しくなりやがったか」

藤崎は笑いを含んだ声で言った。目を閉じているので様子は窺えないが、カチャンと金属音が微かに響いたから、刀を構え直したであろう事は推測出来た。

（もう、どうにでもしなさいよ！）

半ば自棄になりながら心の中で叫んだが、先ほど以上に、全身から冷や汗がじわじわと滲み出た。

と、その時であった。

「何をしている？」

美咲の耳に、藤崎ではない別の男の声が飛び込んできた。美咲にいつも安心感を与えてくれる、低いが柔らかさを帯びた声音。

美咲は、まさかと思いつつ、声のした方に首を動かした。

「んだよ。いつの間に俺達を着けて来やがったんだ？」

不快感を露わにしながら、藤崎は相手の男に訊ねた。

「お前が美咲を無理矢理外へ連れ出してからだ。」

それにしてもお前、隙があり過ぎだ。しかも、俺の気配を感じ取れないようでは、どんなに高い能力を持っていたとしても、ただの宝の持ち腐れにしかならんな」

「偉そうな口利いてんじゃねえよ！」

男——南條の台詞がよほど癪に障ったのか、藤崎は南條に噛み付きそうな勢いで声を荒らげた。

「大体何なんだ、その悟り切った口調はよ？　その、何もかも見透かしているようなツラも気に食わねえ。」

ああ分かってるさ。どうせ俺は、てめえと違って出来損ないの金属性能力者だしな。けどな、俺だって好きでこんな能力を持つちまったわけじゃねえんだよ！」

「——何もそこまで言っていないだろ……」

南條は、心底呆れたと言わんばかりに深い溜め息を吐いた。

「俺も別に好きで金属性になったわけじゃない。寧ろ、こんな能力を持ってしまった事を憎んだ事だってある。」

まあ、そんな話、今はどうでもいい」

南條はそこまで言っていると、美咲を自らの元へと引き寄せた。

驚きのあまり、美咲は思わず目を見開くが、抵抗する理由などないので、そのまま南條の中に大人しく包まれた。

「ふうん……。やっぱそういう事？」

そんな二人を見ているうちに冷静さを取り戻したのか、藤崎は顎を擦りながら嫌らしい笑みを浮かべた。

「オッサンの話を聞いてもイマイチピンとこなかったけど、こんなのを目の当たりにしちゃったら信じるしかねえよなあ。けど、南條サン、だったよな？　南條サンの気持ち、俺もよーっく分かるぜ？　彼女、不思議と惹き付ける魅力があるからなあ。見た目の可愛

さだけじゃねえ。何かこう、男を惑わせるような色香を漂わせてる
つつつか……」

「俺をお前と一緒にするな」

南條は、静かだが鋭い口調で返した。

「確かにお前の言っている事に間違いはない。だがな、俺はお前と
違って、美咲に対して下心なんて一切持っていない。

美咲の良い所は、何事にも揺るがない強い信念を持っている事だ。
俺達の窺い知れない所で自分の中の桜姫とも必死に戦っている。――

――まあ、お前のような男には、美咲の苦労など一生かかっても分か
らんだろうけどな」

南條はニコリともせず、藤崎を見据えた。

藤崎は返す言葉が見つからないのか、刀を握り締めたまま、茫然
と立ち尽くしている。

その様子は、先ほどまで藤崎に散々振り回されていた美咲には滑
稽に映った。

「ああアホらし！」

南條に勝てない事を悟ったのか、藤崎は刀を引つ込めると、「て
めえらで勝手にやってろ！」と言い残し、その場を去ってしまった。

藤崎の姿が完全に見えなくなった途端、美咲から一気に力が抜け
た。そのまま、地面の上崩れ落ちそうになったが、南條が、それを
寸での所で押さえた。

「大丈夫か？」

「は、はい。どうにか……。すみません……」

先ほどよりも、強く抱きしめられる格好となった美咲は、すつか
り動揺し、言葉がどもってしまった。

そんな美咲に対し、南條は、藤崎に向けていたのとは比べ物にな
らないほど、柔らかな笑みを湛えた。

「謝る必要はない。それより、何事もなく良かった。――正直、
こつちも気が気じゃなかったからな」

「心配、してくれたんですか？」

「当たり前だ。お前に何かあったら、貴雄さんと理美さんに合わせる顔がなくなる。——いや、一番は俺自身の気持ちの問題か……」

南條はそう言うと、左手だけを美咲の身体から解き、そつと頬に触れてきた。

手を通して感じる、南條の仄かな体温に、昨日の日中の事を再び想い出し、美咲の鼓動は速度を増した。

今、この駐車場にいるのは南條と美咲だけ。場所的には湖よりも情緒に欠けるが、二人きりというだけでも十分過ぎるほどのシチュエーションだ。おまけに、辺りは夜の闇に包まれている。期待しない方が可笑しい。

そう思っている間にも、南條の顔が少しずつ近付く。これは、間違いない昼間と同じである。

美咲は、早鐘を打つ鼓動を感じながら、強く瞼を閉じる。心の準備は、しっかりと整っていた。

ところが、どんなに待ってみても何も起こらない。代わりに、美咲の額に、コツンと何かがぶつかった感触がした。

「お前、期待してたな？」

南條の言わんとしている事は嫌でも理解したが、美咲は敢えて、「何がですか？」と惚けた。もちろん、動揺を悟られまいと冷静を装っている。

だが、どんなに誤魔化そうとしても、南條は全てを見通していたようだ。

「初めて逢った時にも教えてやっтар？ お前は思った事がすぐに出やすい」

「そ、それは……」

最早、美咲には、これ以上返す言葉は見付からない。自分の心の内を読まれてしまった恥ずかしさと悔しさが複雑に交錯し、口を尖らせて、南條から視線を逸らした。

「美咲」

南條が、美咲の名を口にする。そして、彼女の顔を両手で挟むと、

半ば強引に自分へと向けさせた。

「俺に、どうして欲しいか言ってみろ」

南條のこの台詞に、美咲は瞠目したまま言葉を失った。

南條は、美咲から答えを聴きたいのか、辛抱強く待ち続ける。

静寂と共に、辺りから、風に煽られた木々のざわめきが聴こえ出した。

「あの……」

暫しの時間をかけて、美咲はゆっくりと口を開いた。

「南條さんと、こうしているだけで、十分です……」

美咲の答えを、南條はどう思ったであろうか。美咲は気になり、南條の顔を窺おうとするも、彼の表情には、あまり変化が見られない。

（ほんととは、日中のように……）

そう思った時だった。

美咲の口角の辺りに、南條の唇が触れた。

「取り敢えず、今はこれで我慢しろ」

やはり、美咲の心を完全に読み切っている。南條は得意げに口の端を上げると、美咲を自分の元から解放した。

「それじゃあ、そろそろ戻るか？ あんまり遅くなると睡眠時間も減ってしまうしな」

「は、はい……」

南條の言葉にも、美咲は呆けたままで返答する。

南條は微苦笑を浮かべ、背を向けると、さり気なく美咲の手を取った。

ほっそりと見えるのに、普段から鍛え上げられているからだろう。南條の手は、力強さを感じさせる。

（少しだけなら、いいよね？）

美咲は自分に言い聞かせると、空いていたもう片方の腕を、南條のそれに絡ませた。

南條は表情を微動だにさせない。かと言って、美咲を振り払うよ

うな事もしなかった。

時折吹き抜ける、涼やかな風を感じながら、美咲は、南條と共に暗がりの中を歩き続けた。

第九章 第一節

藤崎達が聖地を発ったのは、翌朝八時過ぎ、朝食を済ませてからだった。

本当は、起床してからすぐに帰るつもりだったのだが、樋口から、「朝飯ぐらいは食って行きなさい」と勧められ、彼らもその言葉に甘えた。

ただ、江梨子是不機嫌さを露わにしていた。それでも黙って支度をしていたのは、夫の樋口に説得されてしまったからであろう。彼女はどうか、渋々ではあっても樋口の言う事だけは聞けらしい。

そして、美咲も昨日以上に機嫌が悪そうに見えた。南條達とは普通に接しているものの、余所者三人——殊に藤崎に対しては、笑顔を見せるどころか、目も合わせようとしてこなかった。

（確かに無理ねえと思うけどよ）

綾乃の運転する車の助手席で、藤崎は昨晚の事を想い返していた。偶然とはいえ、自分達が寝ていたりリビングに美咲が現れたのは、

本当に幸運だと思った。

美咲は、藤崎と航太郎を起こさぬようと気を遣っていたらしいが、藤崎は横になりながら、彼女の気配をすぐに察知した。と言うより、なかなか寝付けずにいたのが本当の理由だったが。

その後は美咲を外に連れ出し、人気がないのを良い事に、彼女を意のままにしまおうと考えた。だが、まさかあそこで南條が出て来るとは計算外だった。しかも、すっかり気配を消して藤崎達を追って来ていたのだから、余計に気分が悪かった。

（嫌味な野郎だぜ）

南條の飄々とした表情を頭に浮かべながら、藤崎は、チツと舌打ちした。だが、南條に敵対心を持ってしまうのは、自分と同じ金属性だから、というのが一番大きい。

昨日、綾乃も言っていたが、南條の霊力は、金属性の中でも更に

高い。それは藤崎も感じていた。

南條という男は、ただ、そこにいるだけでも、藤崎のプライドをズタズタにさせる。昨晚、南條に対して、心にもない事を言い放ってしまったのがいい例だ。

「それにしても」

後ろの席に座っていた航太郎が、口を開いた。

「藍田さんの話してた通り、南條さんってカッコ良かったなあ。まだ二十代後半らしいけど、それを全く感じさせない落ち着きに、全身から滲み出る半端ないオーラ。無駄口も一切叩かないし、ほんと、誰かさんとは大違いですよなあ」

「てめ……！」

航太郎の挑発に、藤崎は助手席から身を乗り出しかけたが、運転席の綾乃にギリギリと一瞥され、すぐごと引っ込んだ。

「なあに？ コータロ君、南條さんみたいな人がこっちにいてくれた方が良かったと思った？」

藤崎からすぐに視線を外した綾乃は、ハンドルを握ったままで航太郎に訊ねた。

航太郎は「そうだね」と弾んだ声で答える。

「だって、藤崎さんより南條さんの方がどう見たって頼り甲斐あるじゃん。あの人達だって南條さんには一目置いてるようだし。」

俺、あの人の弟子になりたかったなあ！ まあ、俺の師も決して悪くはなかったけどね」

「あらあら」

無邪気に言う航太郎に、綾乃もコロコロと笑った。

「でも、コータロ君の言う事も尤もよね。ほんと、藤崎さんが金属性能力者なんて未だに信じられないもの。確かに私、何度か藤崎さんが武器を精製する所を見た事はあるけど、それでも、ねえ」

綾乃の言葉には嫌味がたつぷりと籠められている。

航太郎だけではなく、綾乃にまで虚仮にされた藤崎は、苛立ちをどうにか抑えようと、車窓に肘を突いた姿勢で貧乏揺すりを繰り返

した。

「あ、後、美咲って子はビックリしたなあ」

美咲――

その名前に藤崎はピクリと反応した。南條はともかく、航太郎が美咲にも関心を寄せていたのは予想外だった。だが、すぐにその理由のはっきりとする。

「彼女、朝霞さんにすっごく似てたもんなあ。と言っても、朝霞さんよりは人当たりが良さそうな感じしたけど。

でも、よくよく考えるともったいないよね。あんな綺麗な子を、いずれは始末しなきゃならないなんてさ」

航太郎は美咲に同情するような言い方をしていたが、その割りには、躊躇いもなく殺伐とした事を平然と口にしていた。

藤崎にとつては、何故かそれが面白くない。少なくとも、彼の中の美咲の存在は、自分でも驚くほど急激に大きなものとなっている。

最初はただの興味本位であつたが、南條との関係を改めて目の当たりにしてから、更に美咲への執着が強くなった。

（美咲を手籠めにしてやったら、あの男はどうなるやら）

藤崎は思った。

南條は絶対、藤崎以上に美咲に執心している。美咲を気にして追って来たのが、何よりの証拠だ。

（一度くらい、あの憎つたらしい仮面を引き剥がしてやりてえよ）
南條のポーカーフェイスが崩れる瞬間を想像しながら、藤崎は小さく口許を歪めてほくそ笑んだ。

藤崎達が去り、聖地内もやっと落ち着きを取り戻した。

とりわけ、江梨子は三人――特に綾乃――を嫌悪していたので、

いなくなつてからは、ストレス発散とばかりに、リビングと、綾乃に貸した自室の掃除を徹底的に始めた。

「今日一日、江梨子にはなるべく近寄らん方がいいぞ？」

樋口の忠告に、南條を始め、美咲と雅通も同時に頷く。

皆が怯えを感じるほど、江梨子から放たれるオーラは鬼気迫るものがあつた。

「さて、そうなるとさすがに掃除が終わるまではここにはいられんよなあ……」

樋口は心底困り果てたように、頭をポリポリと掻き出す。

こんな時こそ、たまには修行でもしたらどうなんだろうかと、南條は思つたが、樋口の性格上、よほどの事がない限りは積極的に動く事はまずない。

（この人の頭の中は、殆どガラクタ作りで占領されているしな……）

どんなに掃除しても、一向に綺麗にならない樋口の部屋を頭に浮かべながら、南條はひっそりと溜め息を吐いた。

「しょうがない！ 今日ぐらいは外の空気を吸うか！ そんなわけだから瀧村、お前も俺に付き合え！」

「え……？ またですかあ……？」

雅通はあからさまに嫌そうな表情をしている。確かに、南條と美咲が修行をしている間、彼はずっと、樋口に振り回されてばかりだったのだから無理もない。

「——もう、どうにでもして下さいよ……」

どんなに抵抗しても無駄だと悟っているのか、雅通は投げ遣りな口調で答えた。

「よしよし！ 素直なのは結構！ じゃ、早速行くぞ！」

どう見ても、不承不承だったように見える。

だが、当の樋口は雅通の気持ちを知ってか知らずか、上機嫌で彼を引っ張って行ってしまった。

その場には、南條と美咲の二人が残された。

「じゃあ、俺達は昨日の続きだ」

南條は軽い気持ちで言った。

ところが、美咲は何を思ったのか、ギョツとして目を見開き、みるみるうちに頬を赤らめていった。

この美咲の異常なまでの反応を、南條は最初は怪訝に思った。しかし、考えていくうちに、ああ、とすぐに納得した。

「修行の続き、だ」

笑いたいのを必死で堪えながら強調すると、美咲は、「そ、そうですか」と気まずそうに答えた。どうやら、南條の思った通りの事を考えていたらしい。

（これはかなり、からかい甲斐があるな）

真っ赤になつて俯く美咲を見つめながら、南條は、またしても笑いが込み上げてくるのを感じていた。

聖地の中心に当たる湖は、今日も陽光を浴びて水面をキラキラと輝かせている。

「もう少し頑張らないとな」

南條が言つと、美咲は「はい」と頷く。

「やっぱり、いつまでも南條さん達に迷惑かけてはいけませんから。――桜姫を抑えるだけでなく、自分でも、少しでも戦えるようにしませんと」

からかった時に見せた反応とは打って変わり、美咲は真剣そのものの表情で、南條を真っ直ぐに見据える。

こういった彼女の強さは、南條もとても好感が持てる。本来であれば、そうそう簡単に異性――殊に一回り以上も離れた娘になど惹かれる事は絶対になかった。

ただ、藤崎が南條に向かって言った事も、口では異を唱えながらも妙に納得いくものがあつた。

やはり、桜姫の魂を受け継いだ娘は普通とは違ふのだろう。美咲自身が全く意識せずとも、人を惹き付けてしまう力がある。

もしかしたら、自分や藤崎以外にも、過去に桜姫の魂を受け継い

だ娘に魅せられた者がいたかも知れない。南條はふと、そんな事を思った。

「南條さん？」

自分の名を呼ばれ、南條はハッと我に返る。

そこには、先ほどと変わらずに自分を見つめる美咲の澄んだ瞳があった。

「どうしたんですか？ 今度は南條さんの方が変ですよ？」

怪訝そうに訊ねる美咲に、南條は、「いや」と自らを嘲るように口角をわずかに上げた。

「悪い。少しばかりぼんやりしてしまった。——さて、いい加減始めないと？」

「はい！」

ニツコリと頷く美咲を見つめながら、こうしていると、やっぱり普通の女と変わりのないな、と南條は改めて思った。

南條と美咲が修行をしているちょうどその時、雅通は樋口の車を運転していた。もちろん、助手席には所有主である樋口もどっかりと坐っている。

「樋口さん、どうせ俺をアシに使いたかっただけなんですよ？」

ハンドルを握りながら不満を口にする雅通に、樋口は隣で、あはは、と豪快に笑った。

「まあ、細かい事は気にすんな！ その代わり、昼飯ぐらいは奢ってやる！」

「——期待しないでお願いします」

「おいおい、そんな事言うなよ。釣れない奴だなあ」

雅通は、この人には何を言っても無駄だ、と心の底から思った。

車は、樋口のナビに従いながら走らせている。雅通は、どこへ向かっているかも知れないし、樋口も全く教えてくれない。

（まったく！ いっつも損な役回りだぜ、俺は）

考えれば考えるほど憂鬱が増し、雅通は小さく溜め息を吐いた。

あれから車は三時間ほど走っていた。

その間、国道沿いにあったショッピングセンターに寄りたいと樋口に言われ、雅通は命じられるがまま、その駐車場へと車を入れた。一体何なんだと訝しく思っていたら、樋口は店内に入るなり、生花の専門店へと歩を進めた。

これで更に、雅通の頭は混乱した。まさか、江梨子さんに花でも贈るつもりか、と一瞬考えたが、樋口に限ってそれは有り得ない。しかも、選んだ花はどう見ても仏花。そんな物を江梨子にプレゼントしようものなら、更に彼女の逆鱗に触れる事は火を見るよりも明らかだ。

（わっかんねえよなあ……）

ショッピングセンターを出てからも、雅通はずっと考えていた。

「瀧村、あそこを左折してくれ」

二百メートルほど先を指差しながら、樋口が言った。

追求したいのは山々だったが、雅通は敢えて何も口出しせず、指示通りに車を操作する。どこかの敷地内のようなだが、それを確認する間もなく、車を中に入れて行った。

（ここどこだよ……？）

雅通はスピードを落としながら、目だけを動かして、時折、辺りを見回してみる。と、ある場所で視線がピタリと止まった。

その先には、辺りを埋め尽くさんばかりに墓石がズラリと並んでいる。

（まさか、墓参り……？）

雅通は一面の墓石から視線を逸らし、今度はそのまま樋口を一瞥する。

そんな雅通の視線に気付いているのか否か、樋口は、手持ち無沙汰な感じで、花束を上下に振りながら弄んでいる。

「樋口さん、車、どこに停めればいいんですか？」

ここが目的地であろう事は雅通もさすがに分かったので、樋口に訊ねた。

樋口はハツとしたように顔を上げた。

「あ、ああ、そうだな。邪魔にならん所に適当に止めとけ」

「て、適当って……。ちゃんと場所指定して下さいよ！ 困ります！」

雅通に叱咤された樋口は、面倒臭そうに「しょうがねえなあ」と呟いた。

「じゃあ、あの看板のある場所の前だ」

「えっ！ あそこに停めてもいいんですか？ だってどう見たって、駐車しちや駄目な場所でしょ！」

「どうせ今日は平日だし誰も来やしないよ。とやかく言わずに停めろ」

「——分かりましたよ……」

雅通は渋々頷くと、指定された場所の前に車を寄せて停止させた。
「んーっ……」

車を降りてから、雅通は大きく背伸びする。休憩を挟みながらとは言え、ずっと運転しっ放しだったから、腰にも相当な負担がかかっていた。

「おおっ！ 気持ちいいなあ！」

樋口も花束を右手に握ったまま、何度も首を回す。

「やっぱり、たまには外に出ないと鈍ってしまうな」

「だったら修行したらいいじゃないすか」

雅通の突っ込みに、樋口は、「まあまあ」とニヤリと笑う。

「その時になったら俺も真面目にやるよ。さ、それよりもっとと行くぞ！」

「行くって、誰の墓ですか？」

「すぐ分かる」

「はあ……」

またしても変に量されてしまった雅通は不満を感じたが、先ほど

同様、どんなに訊こうとしても答えは得られないと分かっていたので、黙ったまま、樋口の一步後ろを着いて行った。

少しばかり歩いて、樋口が一つの墓石の前で足を止めた。

だいぶ前に建てられたのであろう。隣にある、比較的新しい墓石と比べると、年季の入り方は一目瞭然だった。

「樋口さん、いい加減教えて下さいよ」

痺れを切らした雅通は、今度こそはと思いながら、答えの催促をした。

樋口は、花束を包んでいた紙を解くと、「よく名前を見てみると、墓石に向かって顎をしゃくった。

雅通は言われるがままに、主の名前を確認する。

「南條、博和……？——あっ！」

「分かったろ？」

「はい」

雅通が頷くと、樋口は満足げに笑みを浮かべた。

「ほんとは命日はもう少し先なんだが、俺の夢の中に突然、博和さんが現れてきたからな」

言葉を紡ぐ樋口を、雅通は神妙な面持ちで見つめる。

南條博和——

南條の父親であり、樋口夫妻の師でもあった男。

雅通は博和に逢う事が叶わなかったが、それでも、彼の武勇伝は樋口からよく聴いていたので、常に身近な存在のように感じていた。顔も写真で見た事がある。涼しげな目元は南條のそれと同じだったが、中性的な美形の南條に対し、博和は、美しさと同時に豪胆さが備わっているような印象があった。考えるまでもなく、南條は母親に似たのであろう。

「人の命ってのは儚いもんだな」

誰にともなく呟きながら、樋口は墓前に跪き、持参した仏花を供えた。

「俺も、いつまでこうしてられるか分からない。争い事は好かんから、今まではなるべく避けようと考えていたが、さすがにもう、南條達に甘えてばかりではいかな……」

戦うなら、悔いのないように全力を尽くして、博和さんのように散るのも、決して悪くないかも知れない……」

「——本気ですか？」

静かな口調で雅通は訊ねた。

樋口がわずかに反応を見せる。

「樋口さん、戦うのは別に死ぬのが目的じゃないでしょ？ 寧ろ、生き抜くためじゃないですか。」

南條さんはもちろん、俺も美咲も、拓けた未来を信じて戦おうとしてるんです。

それなのに、あなたがそんな弱気でどうするんです？ こんな事を言ったなんて知ったら、江梨子さんだって哀しみますよ！

それに、あなた達の子供だってまだまだ小さいじゃないですか！あなたが命を粗末にしたら、それこそ、自分の子供を不幸に陥れるだけですよ！——幼い頃の南條さんと同じ気持ちにさせてしまつても、あなたは満足だと心から思えますか……？」

樋口相手に、ここまで言い切ってしまうのは初めてだった。いつもであれば、出過ぎた事はあまり口に出来ないが、それほどまでに樋口の投げ遣りとも思える台詞に気が昂っていた。

そんな雅通に対し、樋口は何も言葉を返してこない。見た目に似合わず心の広い男はあるが、さすがに機嫌を損ねてしまったのだろうか。

雅通は冷静さを取り戻すと、恐る恐る樋口の様子を窺った。

とその時だった。

「……くっ……あっはははっ！」

辺りの空気を震撼させるほどの大音声で、樋口は豪快に笑い声を

上げた。

雅通は、何事だ、と呆氣に取られながら傍観する。

「あははは……！ いやあ、まさかお前に本気で説教させるとは思ってもみなかった！」

樋口は深い溜め息を吐き、立ったままの雅通を見上げた。

「今のは冗談。一度言ってみたかっただけだ」

樋口のこの台詞に、雅通の全身が音を立てて固まった。最初は口をポカンと開けた状態で茫然としていたが、落ち着きを取り戻すにつれ、次第に怒りが沸々と込み上げた。

「……あなたって人は……！」

「ちよつ、ちよつと待て！」

前屈みになり、掴みかかろうとしてきた雅通に、樋口は両手を前に出して制止のポーズを見せた。

「悪かった悪かった！ だからそんなに怒るな。——全く、お前は氣が短すぎて敵わん」

「俺は南條さん相手だったら、ここまでブチ切れたりしませんよっ！ 全く、冗談にしてはタチが悪過ぎます！ しかもあなたの師の墓の前でしょ？ 少しは自重して下さい！」

「分かった分かった！ 今のはほんとに俺が悪かった！」

雅通の怒りをどうにか抑えようと思っているのか、樋口は合掌し、彼を拝むように必死で謝罪してきた。

「——拝む相手が違うでしょ」

雅通は溜め息を交えながら突っ込みを入れた。

「樋口さんのつまらない冗談に、南條さんの親父さんだつてきつと呆れ返っていますよ。俺も人の事を言えた義理じゃないですけど、あなたの場合、もう少し考えて物事を口にした方がいいと思います」

「はは……。全くだな」

雅通の説教に、樋口は力なく答えた。この反応は意外だった。

先ほど同様、豪快に笑い飛ばされて終わりかと思っていただけに、雅通もすっかり拍子抜けした。

（ほんとにこの人の考えてる事って分かんねえよなあ）

雅通がそんな事を思っている傍らで、樋口は跪いたままの姿勢で、墓前に静かに両手を合わせていた。

雅通はそれを、何も言わずにただ見下ろす。

「そう言や」

不意に樋口が口を開いた。

「博和さんにもよく叱られたっけなあ。

俺は若い頃、今以上に軽はずみな言動が多過ぎたから、口を開くたびに『言葉を慎め！』って怒鳴られて、酷い時はぶん殴られた事もあった。しかも加減は一切なしだったからな。一度殴られると、なかなか腫れが引かなかったんだ、これが」

「――ま、マジですか？」

恐る恐る雅通が訊ねると、樋口は「マジで」と苦笑を浮かべた。

「南條はあの通り、滅多な事では感情的にならないが、博和さんはほんとに熱い男だったからなあ。女の江梨子には甘かったが、男の俺には容赦もクソもあつたもんじゃなかった。あの人と修行生活をしていた時は、どれだけ毎日怯えていた事か……。

でも、今では厳しくして貰えた事に感謝している。それに博和さんは、理由もなく無闇に手を上げるような人じゃなかったしな。――何よりも俺自身が一番、叱られる理由を分かってたわけなんだから」

「――分かっていながら、何度も親父さんを怒らせてたってわけですね？」

雅通が呆れながら言うと、樋口はいつもの調子で、「まあまあ」と笑って誤魔化してきた。

「性格つてのは、自分でもなかなか直せるもんじゃないからな。困った事に、頭で考えるよりも口が先に動いちゃってるんだよ。お前だって分かるだろ？　ん？」

同意を求めてこようとする樋口に、雅通は、口の端を引き攣らせながら笑うのが精一杯だった。同時に、博和さんが俺の師じゃなく

て良かった、と内心ホツとしたのも本音であつた。

「よしっ！ 瀧村も博和さんにちゃんとご挨拶しろ！ ボーッと突っ立つてただけじゃ失礼だろ！」

完全に自分の事を棚に上げている樋口。もう、これ以上は何も返す言葉が見付からなかった。

雅通は言われるがまま、墓前に屈み込んで手を合わせた。

（博和さん……。樋口さんのような奔放な弟子を持つてしまつて、さぞや苦勞された事でしょう。——今更ですが、ほんとにお疲れ様でした）

心の中で博和に語りかける雅通に対し、樋口は満足そうにそれを眺めている。真剣に祈りを捧げているのだと思ひ込んでいるのだらう。

「さて、そろそろ行くか？」

顔を上げたタイミングで、樋口が言った。

雅通は、「ええ」と頷きながら立ち上がると、樋口が先頭に立つて歩き出した。

雅通も、樋口の後を追おうとして、はたと足を止めた。

古びた墓の前に、樋口の手によって供えられた花。それは微風に煽られて、緩やかに揺らめく。

（今度は、南條さんと一緒に来ますから）

墓に向かつて小さく笑むと、今度こそ背を向けて、その場を離れた。

第九章 第二節

今日の修行も、結局何の成果も得られなかったような気がした。
(私、ほんとに何しにここまで来たんだろ……)

わずかな靈力すら発動出来ないもどかしさを感じつつ、美咲は、唇を強く噛み締めながら、南條の一步後ろを着いて行く。

強くなりたい。しかし、桜姫に支配されて靈力が発動されるのは、全く意味がない。

「——やっぱり駄目なんですか……？」

南條の背中に向かって、美咲がポツリと訊ねると、南條は足を止めて、こちらを振り返った。

「何故、そんな事を言うんだ？」

逆に問い返された美咲は答えに窮した。いや、『何となく』と言いたかったのだが、南條が曖昧な返答を求めている事は一目瞭然だった。

会話のない二人の周りでは、風に煽られ、揺らめく木々のざわめきと、虫達の鳴き声が響き渡る。

陽も西に傾き、辺りは少しずつ暗さを増してゆく。

「——すみません……」

沈黙に堪えられなくなった美咲は、謝罪を口にしていた。無意味な謝罪もまた、南條が嫌っている事は重々承知していたが、他に何の言葉も浮かんでこなかった。

案の定、南條は眉を顰めて美咲を睨んでいる。

きっと、弱気になっている私に呆れてるんだ、と美咲は複雑な思いで、南條から視線を逸らした。

やがて、南條が深い溜め息を一つ吐いた。

「思慮深いのは、お前の長所でもあり欠点だ」

静かな口調で南條は言った。

「確かに、タイムリミットは日に日に迫っている。悠長になど構え

ていられる余裕なんてないのも事実だ。だがな、『時間がない』、『もう無理だ』と諦めてしまつては、今までやってきた事は全て無意味になってしまう。

樋口さんにも言われた事があると思うが、お前の霊力は特殊だ。いや、実際は、美咲は桜姫の媒体となつていてるだけに過ぎないから、お前自身には霊力は殆どないのかも知れない。——お前だつてほんとは分かつているはずだ。だから、余計な事を考えてしまつたんだろっ？」

南條の紡ぎ出す言葉に、美咲は心臓を鷲掴みにされるほどのショックを受けた。

自分の非力さに気付かない振りをしてきた。意識してしまつたら、二度と修業なんて出来なくなりそうだったから。

「——私は、私です……」

美咲は重い口を開いた。

「確かに南條さんの言つた事は正しいです。私はただの 桜姫の媒体 だというのも分かっています。——けど、そんな事、簡単に口にして欲しくなかった……」

そこまで言い切ると、美咲の瞳に熱く込み上げてくるものがあつた。自分の意識とは裏腹に、唇は震え、嗚咽が漏れる。哀しさと悔しさがぶつかり合い、涙が止めどなく零れ落ちた。

本家で、桜姫の魂に負けてしまつた時と同じ気持ちだった。

（私、南條さんの前で泣いてばっかだ……）

情けなくて、恥ずかしくて、顔を合わせられない。そう思いながら俯いていたら、美咲の身体が温かいものに包まれた。

考えるまでもなかった。美咲は、南條に抱き締められている。

「——すまない……」

耳元で南條が囁いてきた。

「昨日といい今日といい、俺はお前を傷付けてばかりだな。——ほんとはそんなつもりはなかったんだが……」。

俺の言動は、どうやら誤解を招く事が多いらしいから。俺は回り

くどい事が嫌いだから、つい、思ったままを口にしてしまう。

でも、それもいけないな。俺の場合、相手の気持ちを考える事も大切な事知れない」

南條は抱き締める力を緩めると、右手で美咲の顎を持ち上げて仰向かせた。

微苦笑を浮かべる南條と視線がぶつかった。

「あ、あんまり見ないで下さい……」

美咲はどうにか視線を逃れようと目を逸らした。

「——俺に見られるのは嫌か？」

「そんな事は、ないですけど……。ただ……」

「『ただ』、何だ？」

南條の問いに、美咲は一呼吸置いてから「恥ずかしいんです」と答えた。

「——泣き顔なんて、不細工だから……」

南條はわずかに目を見開いた。

一体、何を考えているのか。美咲はチラリと南條の表情を窺っていたら、突然、プツと吹き出した。

「——南條さん……？」

美咲はあからさまに眉を顰めながら睨むが、南條は動じている様子は全くない。寧ろ、面白がられているのがありありと伝わってくる。

「わ、悪い……」

謝罪を口にしてきたが、それでもまだ笑い足りないようで、苦しそうに口許を歪めていた。

「美咲はどんな事にでもすぐに反応してくれるからつい……。でもまさか、『不細工だから』と返されるとは俺も思ってもみなかった」

南條はそこまで言うと、左手の親指で美咲の涙を拭いた。

「俺は別に、どんなお前も不細工だと思った事は一度もない。でも、やっぱりお前は、明るく笑っているのが一番だ。——俺のせいで泣いているのを見るのは、とても辛いから……」

南條は少し哀しげに笑み、涙の痕が残る頬にそつと唇を押し当ててきた。

美咲を振り回しているようでも、彼の行為は、一つ一つに優しさを感じる。だからこそ、余計に美咲の胸は締め付けられるように痛みを覚える。

「南條さんのせいじゃないですよ」

美咲もまた、躊躇いつつも自らの両手で南條の頬を包み込んだ。

「ただ、私自身の心が弱いだけですから。」

南條さんは、そんな私も全て受け入れ、側にいてくれる。それだけでも、十分過ぎるほど幸せなんです」

言ってしまったから、美咲はハツと我に返った。改めて考えてみると、随分と大胆な事を口にしてしまった。

南條も、わずかに目を見開いて美咲を凝視している。彼にとっても、美咲の今の台詞は予想外だったのだろう。

「え、えつと……」

どうにか誤魔化そうとしたものの、一度出てしまった言葉は取り消しが利かない。

しばらくして、南條から柔らかな笑みが零れた。

「美咲にそう言われるのは、悪い気がしないな」

南條の端正な顔が間近に迫ってきた。美咲の緊張は更に増し、先ほどよりも胸の鼓動が高鳴る。

「キス、して欲しいか？」

唇が重なる擦れ擦れの所で、南條が訊ねてきた。

当然ながら、美咲は返答に窮する。して欲しくない、と言えば嘘になる。かと言って、軽々しく、はい、とも答えられない。

「どうなんだ？」

焦れたように重ねて問う南條。もしかしたら、美咲が困惑しているの分かっていながら、敢えて答えを催促しているのだろう。

「——嫌だ、って言ったらどうするんですか？」

考えた末、美咲は逆に南條に問い返してみた。もちろん、南條を試すつもりだ。

だが、そんな美咲の作戦など通じるはずもない。南條はニヤリと口の端を上げると、「さあな」とあっさり返してきた。

「――狡いですよ……」

美咲は不満を露わにして口を尖らせた。

「結局、南條さんばかり余裕があるみたいですね」

「余裕？ 俺はそんな風に見えるか？」

「見えますよ。だって、私ばかり南條さんの背中を追っ駆けているような気がしますし……」

「それは違うぞ」

迷いのない声で、南條はきっぱりと否定した。

「俺は余裕がないからこそ美咲に訊いたんだが？ お前は変に恥ずかしがる所があるから、なかなか本心が聴けないしな。

大丈夫だ。ここにいるのは俺だけだから、気兼ねなんてしなくていい」

南條の言葉に、美咲は大いに突っ込みを入れたくなった。だが、当の本人は真剣そのものなので、余計な事は言えない。

美咲は、仕方ない、と深い溜め息を一つ漏らした。

「――して下さい」

半ば自棄になって口に出した。

それでも、南條には十分満足のいく返答だったらしく、嬉しそうに微笑を浮かべた。

「目を閉じろ」

南條に言われるがまま、美咲は瞳を閉じた。待つ瞬間というのは、やはり、一番緊張感が高まる。

仄かに感じる吐息から、唇の距離が縮まってきているのが分かる。
(もう少しだ……)

そう思っているうちに、南條の唇が美咲のそれに触れた。温かくて柔らかな口付けは、美咲の南條に対する愛おしい想いを大きくさ

せてゆく。

キスの時間は、昨日よりも少し長めだったように思えた。それでも、南條は唇に触れる程度で、それ以上の事はしてこない。

「そろそろ行くか？」

唇を離すなり、南條は言った。

美咲としては、まだ、キスの余韻に浸っていたい所であったが、あまり遅くなると、江梨子に変に勘繰られてしまいそうだ。

「はい」

美咲が頷いたのを確認すると、南條は小さく笑んで美咲の前を歩き出した。昨晚のように手を差し出してこなかったのは、まだ、完全に陽が落ちていないのと、みんなが起きている時間帯であるからだろう。

（生きてさえいれば、南條さんにたくさん触れる事が出来るんだから）

美咲は自分に言い聞かせ、南條の後を追うように歩き出した。

午後七時をとくに回っていたが、夏は日が長いため、空はまだ少し明るい。

藍田本家では、当主である藍田史孝と娘の朝霞が、二人きりで夕飯を食していた。

会話はない。食べる事に専念している、と言うよりも、この親子は、普段からあまり会話らしい会話をする事がない。

（美咲は全然違うのに……）

不意に朝霞は思った。

見た目は似ていても、どうしてこうも境遇が違うのか、と苦々しい気持ちになる。

藍田の弟で、美咲の父親でもある貴雄は、朝霞から見ても、常におドオドしていて苛立つ事がある。しかし、彼の元に生まれた美咲を羨ましくさえ感じる。

貴雄は他の親戚達と違い、朝霞に優しく接してくれた唯一の人だった。元々、嘘が吐けない男だから、その優しさが本心からくるものであったのは、朝霞もよく分かっていた。だからこそ、ふとした瞬間に、貴雄叔父様が私の父だったなら、と考えてしまう。

（絶対に有り得ないけど）

朝霞が口許をわずかに歪めた時、藍田は箸を置いて立ち上がった。食器の中は全て空になっている。

「もういいんですか？」

藍田から返ってくる答えは分かっているが、念のために訊ねた。

「ああ、部屋に戻る」

藍田はそれだけ言い、後は何も語らずに茶の間を出て行った。

残された朝霞は、眉を顰めながら残りを食べ切り、汚れた食器を何度かに分けて台所の流し台へと運んだ。

藍田の方針で、家政婦を雇う事も絶対になかったので、朝霞は、学業の合間を縫いながら家事全般をこなしていた。そのため、これだけは唯一、美咲に勝っていると自負している。

（でも……）

朝霞はふと、洗い物をする手を休めた。

（どうして、私と美咲は顔がそっくりなの……？）

洗剤の染み込んだスポンジを握ったまま、あらぬ方向に視線を泳がせた。

確かに、朝霞と美咲は従姉妹同士だ。どこか似通っている所がある。とても不思議ではない。しかし、それにしても、二人はあまりにも似過ぎている。

（それに、私も美咲も父親似じゃない……）

朝霞の中で、様々な想いが交錯する。

どちらも父親に似ていないが、美咲の場合、母親の理美に面立ちが何となく似ている。

ところが、朝霞は母親にも似ていないような感じがする。

（もしかしたら……）

朝霞は無意識にスポンジを強く握り締めた。

先ほどまでは、有り得ない、と思った事。だが、どうしてもその可能性を完全否定出来なくなっている。

（でも、そんな事は訊けない……）

複雑な面持ちで視線を落とす。そこでは、放り込まれたままの汚れた食器が、朝霞に洗われるのを待っていた。

朝霞は食器を次々と手に取り、洗剤付きのスポンジで綺麗に磨き上げると、流水で汚れと共に泡を洗い落としてゆく。

食器達は透明な水滴を残し、本来の姿へと戻った。

（私は、何のためにここに存在するの……？）

洗い物を終えてからも、暫しの間、立ち尽くす。

誰からも愛された事のない自分。誰も愛した事のない自分。

朝霞は、自分の存在の意味を考えるも、答えを導き出せなかった。その時、不意に、朝霞の脳裏に、ある場所のイメージが浮かび上がった。その前は、何度も通りかかっている。しかし、立ち寄ろうと思った事は一度たりともなかった。

（いつその事、この肉体を棄ててしまった方が楽になるかも知れない……）

そう思つや否や、朝霞は流し台を離れ、静かな足取りで台所を後にした。

第九章 第三節

家を出ると、先ほどとは打って変わり、辺りは暗闇に包まれていた。月は出ているが、重苦しい雲によって、時折、姿を隠してしまう。

そんな中でも、朝霞の足取りに迷いは一切なかった。怖くないと言えば嘘になる。それでも、何としても行かなくてはならない、ともう一人の自分が強く訴えてくる。

（黙って家を出て来たけど、お父さんはそんな事、気にもしないものね）

無慈悲　をそのまま描いたような藍田を想い浮かべながら、朝霞は苦笑いを浮かべた。

そのうち、目的の場所へ到着した。

そこには、一本の桜の木。夏に入ったというのに、未だに花を咲かせているのは、あまりにも気味が悪い。

（この光景、遠巻きには言え、何度も見ているのに）

朝霞はそう思いながら、無意識に自らの身体を抱き締めた。心なしかこの周辺は、ひやりとした空気が漂っているように感じる。

朝霞の足が竦みそうになった。だが、それでも何とか自分の気持ちを奮い立たせ、足を動かす。

一歩、また一歩と、桜の木に近付いてゆく。

と、その時だった。

「何かご用かしら？」

背中越しに若い女の声が聴こえてきた。

「……………」

朝霞は声にならない悲鳴を上げ、ビクンと肩を上下させた。

振り返る事も出来ずにその場に立ち尽くしていると、声の主は朝霞のすぐ側まで近寄って来た。

「珍しいお客様ね」

声の主である女は、不躰なほど朝霞の顔を凝視しながら口の端を上げた。

「あなた、藍田本家のお嬢さんね？」

「——そうですけど……。どうしてそれを……？」

朝霞の問いに、女は、「訊かれるまでもないわよ」と小さく声を上げて笑った。

「私はあなたが生まれるずっと昔から、この地に存在し続けていたのよ。人の生き死にもこの目で何度も見てきたわ。——もちろん、あなたの事もね」

女の話聞きながら、朝霞は、やはり、と思った。

「——あなた、鬼姫ですか？」

女はそれまでの笑顔を引つ込め、あからさまに眉を顰めた。

「ねえ、その 鬼姫 は止めてくれないかしら？ そそもそ 鬼姫 という呼び名は、あなた達人間が勝手に考えた呼び名でしょ？」

私には 珠璃 という、鬼王が与えて下さった名前があるの。だからあなたも、私を 珠璃 と呼んでくれない？」

「——シュリ……？」

朝霞が女の名を口にすると、女は機嫌を取り戻してニツコリと笑んだ。

「ええ。 宝珠 の 珠 に 瑠璃 の 璃 で 珠璃 。

えっと……。あなたの名前は確か、 朝霞 だったかしら？」

「——ほんとに何でもお分かりなんですネ」

女——珠璃は、朝霞をずっと見続けてきたと言っていたから、朝霞の名前を知っていた事に対しても、それほど驚かなくなった。

（それにしても）

朝霞は改めて、珠璃をまじまじと見つめた。

（言い伝えに違わず綺麗だわ、鬼姫って）

本家の娘であり、後継者だからこそ、鬼王と桜姫、そして藍田家のルーツについては、幼い頃から叩き込まれてきた。とは言え、長い時間が経てば、必ずどこかで曲解されて伝えられてゆく事もある。

そのため、朝霞も黙って話に耳を傾ける振りをしつつ、実は疑念を抱く点が幾つかあった。その一つが鬼姫の事だった。

確かに、鬼王ほどの男が敢えて醜女しうめを側に置いておくとも思えないが、かと言って、目の覚めるような絶世の美女は随分と大袈裟ではないか、と。

だが、朝霞の目の前にいる琉璃は、同性の朝霞から見ても美しい。そして、ただ 美しい だけではなく、ゾクリとさせる妖艶さがある。女性に免疫のない男性なら、一目で惑わされ、知らぬ間に魂を抜かれてしまうのではなからうか。

「朝霞」

琉璃に名前を呼ばれ、朝霞はハツとして顔を上げた。

「あなた、鬼王に用があつたんじゃなくて？」

「え？ ああ、はい」

いつにもなく、しどろもどろになつて答える朝霞。

元は人間であつたとしても、今は 人外 となつている琉璃に怖気付いてしまったのだろうか。

（でも、これしきの事で怯えているようじゃ……）

そう思った、まさにその時であつた。

木の幹が、わずかに歪んだように見えた。

「——お出ましょ」

琉璃の言葉に、朝霞は固唾を吞んで幹を睨んだ。

すると、幹の一部分が異様な盛り上がりを見せた。それは次第に人の形となつてゆき、今度は青白い手がスウツと伸びてきた。

（ここから、鬼王が……？）

そう思うや否や、幹の中から少しずつ、 ヒト が姿を現した。それを目の当たりにした朝霞は、口を利く事も間々ならない状態で茫然としていた。

琉璃も美しいと思つたが、姿を現した男——鬼王には更に圧倒された。

癖のない銀の髪は惜しげもなく流し、金色の双眸は満月の如く、

妖しくも鋭い光を放っている。

朝霞の全身が小刻みに震えた。人の感情をともに受けやすい性質の朝霞は、鬼王から発せられる 負 の重圧に、押し潰されてしまいそうなほどの苦しみを覚えた。呼吸も次第に荒くなり、無意識に胸の辺りを両手で押さえ込む。

「その娘は？」

苦しさを感じている朝霞とは対照的に、鬼王の口調はゆったりとしたものだった。

「アイダ の後継者ですよ」

鬼王に答えたのは珠璃である。

鬼王は アイダ と聴くと、眉をピクリと痙攣させた。だが、それはほんの一瞬の事で、すぐに真顔に戻って朝霞に視線を注いだ。

朝霞は額から流れ出る汗を拭う事も忘れ、揺れ動く瞳で鬼王を見つめ返す。

「なるほど」

鬼王は顎を擦りながら口の端を上げた。

「似てはいるが、確かに違うな。これから発せられる霊力は、それに比べると遥かに低い」

鬼王の言う あれ とは、恐らく、美咲の事であろう。

（結局、ここでも美咲と比べられるわけね……）

朝霞は苦々しい思いで鬼王を睨んだ。

「良い目をしている」

鬼王はそう言うのと、少しずつ、朝霞との距離を縮めてきた。

朝霞はその場から動かなかった。否、足が棒になってしまったかのように硬直していた。

覚悟を決めていたつもりだった。しかし、いざとなると恐怖心が朝霞を支配し、逃げだしてしまいたい衝動に駆られる。

（でも、もう、後戻りは出来ない……）

そう思っている間に、鬼王は朝霞の目の前まで来ていた。

鬼王は朝霞を見下ろすと、先ほどと同様に口許を歪めた。だが、

目は全く笑っていない。

朝霞の精神力は限界にまで達していた。憎悪、嫉妬——全ての負の感情が内面にまで注ぎ込まれ、朝霞は気を失いかけたが、どうにか堪えた。

「お前は憐れな娘だ」

不意に鬼王が言った。

「周りから愛されなかったが故に、己自身もまた、愛を知らずにここまで育ってしまったか……」。

お前も美咲同様、人間共にとっては脅威ともなる存在だ……」

鬼王の発した言葉に、朝霞は目を見開いた。

「——鬼王……」

やっこの思いで口を動かした。だが、その唇は小さく震えている。「今のは……、どういう意味……？」

朝霞の問いに、鬼王は小さく溜め息を吐いて瞼を閉じた。

辺りは静けさに包まれた。虫の鳴き声も全く届かず、ただ、風に煽られた草木がカサカサとざわめいている。

「——少し、喋り過ぎたようだな」

沈黙を先に破ったのは鬼王だった。

「これ以上は、私から話す事はない。真実を知りたくば、己の力で探すのだな」

「——どうやって、探せば……？」

「それも自分で考えろ、と言いたい所だが、少しだけならば教えてやろう。——そこにいる珠璃。あれもお前と同じだ」

朝霞は弾かれたように珠璃に視線を向けたが、珠璃は真顔のまま、彼女を見つめ返すだけだった。

朝霞もよく言われるが、珠璃もまた、考えている事が全く読めない。だからと言って、珠璃から真実を聞き出そうとしても、易々と答えてはくれないだろう。

（ほんとにどうしたら……？）

その時、朝霞の頬に冷たい物が触れた。それは鬼王の手だった。

朝霞は珠璃から目を逸らすと、再び鬼王に向き直った。

金の瞳に、そのまま吸い込まれてしまいそうだった。

もう、全てから解放されたい。憎しみや哀しみの感情を消し去ってしまいたい。鬼王と視線を交わしながら、朝霞は願った。

「行け」

感情のない声で、鬼王は言い放った。

「お前のような女は要らん。それに、今の私には、お前に与えられるほどの霊力はない」

予想だになかった言葉に、朝霞は目を見開いた。同時に、鬼王にまで見放されてしまった事に衝撃が走り、一言も発する事が出来なくなった。

（私はこれからもずっと、あの人から解放される事はないの……？）
心の中で問い質すも、当然ながら、鬼王からは答えなど返ってこない。

珠璃は眉根を寄せながら、桜の木を見つめている。その様子は、敢えて朝霞と視線を合わせないようにしているように思えた。

朝霞が立ち去ってから、珠璃は桜の木を仰ぎ見たまま微動だにしなかった。

鬼王が朝霞を突き放した。それは朝霞本人だけではなく、珠璃も驚きを隠せなかった。

『お前に与えられるほどの霊力はない』

そう言っていたが、鬼王の霊力は、珠璃一人に分け与えたぐらいで衰えるものではない事は、彼女も知っていた。例え、完全に封印が解かれていないとしても、その力は、人間の能力者をも超越している。

ただ、南條和海ほどの能力者であれば、修業次第では、同等に対

抗出来るであろうが。

「あの娘は、 ヒト として生きる方が良い」

ぼんやりと佇んでいた珠璃に、鬼王が静かに語りかけてきた。

「確かに、あの娘から発せられる 負 の感情は、私の力を増幅させてくれるであろう。しかし、あれはあまりにも憐れな存在だ。何より、あれを我が元へ留めてしまえば、美咲やあの男が黙っていないだろう。」

あれもまた、美咲を憎んでいるようでも、心の奥底では愛を感じている。本人は気付いておらぬようだがな。——そして……」

鬼王は目を細め、口許をわずかに歪めた。

「何よりも珠璃、お前がそれを望んでおらんのではないか？」

鬼王の言葉に、珠璃はピクリと反応した。

「——私が……、何故……」

反論しかけたが、口が思うように動かない。

鬼王は小さく吐息を吐くと、珠璃から視線を逸らして桜の木を見つめた。鬼王が何を考えているのか、その表情からは窺い知る事は出来ない。いや、そもそも、鬼王の心の内を読み取る事など、珠璃には到底無理な事だった。

「——鬼王」

闇に消えてしまいそうなほどの囁き声で、珠璃は訊ねた。

「私はこれからも、あなたの側にいて良いのですか……？」

鬼王の反応を見逃すまいと視線を注ぎ続けるも、その表情は、少しも変化を見せない。答えが見付からないのか、はたまた、端から答える気はないのか、鬼王の口から声が発せられる事はなかった。

（ヒト でなくなった私と、鬼王に拒絶された朝霞、本当に不幸なのはどっちなの……？）

不意にそんな疑問が脳裏を過ぎった。

ヒト でなくなった事に後悔は全くない。その代わり、一度身が滅びたら、転生は二度と叶わない。鬼王に新たな命を吹き込まれたと言っても、鬼王自身か、強い霊力を持つ能力者に消滅されれば、

それで珠璃の全ては終わる。

（確かに鬼王の言う通りだわ）

珠璃は思った。

（私は朝霞に同情している。朝霞は私と同じだから……。

ヒト　として生きるのは確かに辛い。でも、朝霞だけはせめて、私のようにはなつて欲しくない……）

鬼王に倣うように、珠璃も再び桜の木を仰いだ。行き場のない魂達の集合体は、朽ちる事を知らない花のように、闇夜の中にぼんやりと浮かんでいる。

桜姫の魂を宿した少女——美咲にそっくりな朝霞。しかし、美咲と違い、朝霞はあのまま消えてなくなりそうなほど儚い。

（全てを知ったら、朝霞、あなたはどうなるかしら……？）

既にここにはいない朝霞に、珠璃は心の中で訊ねた。

朝霞はとても繊細だ。傷付くどころではきつと済まないであろう。

（それならばせめて、私が朝霞のために……）

そう思った瞬間、珠璃の前を一陣の風が通り過ぎた。

珠璃はそれを避けようとして、顔の前に両手を翳す。

手を除けてみると、目の前から鬼王の姿が消えていた。どうやら、

あの一瞬の間に桜の木へ戻ってしまったようだった。

「——朝霞は、私が守りましょう」

桜の幹に向かい、珠璃はゆっくりと跪いた。

第十章 第一節

聖地での共同生活を始めてから、一ヶ月以上が経過していた。

美咲も普通に学校生活を送っていれば、今頃は、テスト勉強にでも精を出していたであろう。しかし、今の彼女は、テストよりも修行に追われている。

勉強は決して好きではない。それなのに、だるいと思いつつも、授業を受けていた頃が懐かしくなってしまうのは何故だろう、と美咲は考える。

（お父さん達、どうしてるんだろ……）

不意に想い出してしまった。

自ら決意を固めて出て来て、ここでの生活にも慣れたはずなのに、急に恋しさを覚えてしまう。

「——美咲ちゃん？」

名前を呼ばれ、ハツとした。慌てて顔を上げると、江梨子を始め、全員が彼女に注目していた。

「どうしたの？ さっきから箸が止まっているようだけど？」

心配げに訊ねてきたのは、江梨子だった。

ちょうど今は朝食時であったが、気が付くと、美咲以外の食器は、ほぼ綺麗になっている。それを改めて見て、どれほどぼんやりしていたかが窺えた。

「ご、ごめんなさいっ！」

美咲は慌てて食事を再開した。とは言っても、すぐに空になるはずもなく、それからまた、暫しの時間をかけて、自分の分を平らげた。

食事が終わり、江梨子と食器の後片付けを済ませた美咲は、リビングで冷たい烏龍茶を飲みながら小休止を取っていた。聖地の中心へ修行に行く前は、いつもそうやって過ごしている。

「美咲」

コップの半分ほどを飲み終えた頃、南條が声をかけてきた。もしかしたら、修業に出る時間だろうか。美咲はそう判断し、立ち上がるうとしたのだが。

「お前、だいぶ疲れてるだろ？」

予想外の台詞が耳に飛び込んできた。

美咲は驚き、目を見開いたまま南條を凝視した。

「今、変な事を言ったか？」

南條は眉根を寄せながら訊いた。

「あ、いえ。別にそんなつもりじゃ……」

美咲は首を横に振るも、これ以上の言葉が見付からない。

そんな美咲を、南條はなおも訝しげに見ていたが、「まあいい」とすぐに話題を切り替えた。

「ちよつと、お前に確認したい事があるんだが？」

またしても、唐突な質問だった。

美咲は目をパチクリさせて、「何ですか？」と問い返すと、南條は、美咲を暫し見つめてから、思い切ったように切り出した。

「家に、帰りたいか？」

「――へ……？」

美咲はポカンとしてしまった。

南條は呆れたように苦笑いを浮かべる。

「だから、家に帰りたいか、と訊いているんだ」

「え、ええ。それは分かりましたけど……」

「何だ？ 不満でもあるのか」

「いえ、そうじゃなくてですね……」

美咲は混乱している頭の中を一旦整理させてから、口を動かした。「どうして急にそんな事を訊くのかって思ったんです。だって、私は全然、何にも出来ていないんですよ？ そんな中途半端な状態で、家にノコノコ帰るなんて出来るわけじゃないじゃないですか」

「――なるほど。美咲の言い分は尤もだな」

南條のこの言葉は、美咲の胸にグサリと突き刺さった。嘘でも否定して欲しかったのが本音だが、よくよく考えてみると、南條は世辞などは一切口にしない。

（けど、前に少し反省したんじゃないかな……？）

三度目のキスをされた時の事を想い出しつつ、美咲は南條に対し、少なからず恨めしさも感じていた。

当の南條はと言うと、そんな事は全く意に介していない様子で続けた。

「だが、あまり根を詰め過ぎるのも良くない。それに、お前はまだ未成年だ。本来であれば、自立出来るまで親元を離れてはいけなかった。」

とは言え、こんな環境に無理やり押し込んでしまったのは、他でもない俺だけだな」

南條はそこまで言うのと、小さく笑みながら肩を竦めた。

「——少し、帰るか？」

一瞬の間を置いて、南條が口にした。

美咲はまたしても茫然としてしまった。

「どうなんだ？」

なかなか返答しない美咲に、南條は重ねて訊ねてきた。

美咲はそこで、やっと我に返った。

「——いいんですか……？」

「駄目だと思ったら、最初からこんな事は訊かないと思うぞ？」

当然のように返されてしまった。

家に帰れるのは確かに嬉しいが、迷いが全くないわけでもない。

南條にも言ったが、美咲はまだ中途半端だ。そんな状態で呑気に帰り、万が一の事があつたりしたら、と考えると不安になる。それに今は、鬼王以上に、藍田や藤崎達の行動が懸念される。

鬼王はあれでも話を通じる。しかし、本家の連中は全く違う。特に藤崎は、前科があるから余計に。

「大丈夫だ」

南條がそつと、美咲の頬に触れてきた。

「いざとなったら、俺が守ってやる。後は樋口さんに話して瀧村も同行させる。それでも、俺も瀧村も、生身の人間と戦えるだけの力量は備えているしな。寧ろ、鬼王達よりも楽かも知れない」

南條はそう言つと、優しい眼差しで微笑を浮かべた。

南條や雅通に守られてばかりというのは申し訳ない気もしていたが、素直に嬉しいとも思っていた。

「私も、出来る限り頑張りますから」

南條を真つ直ぐに見据えながら美咲は言った。

「気張り過ぎだ」

南條は片眉を上げ、頬から髪に手を伸ばした。

「でも、そこがお前のいい所だな」

午前十時に、美咲と南條、雅通は聖地を発った。

樋口夫妻もまた、彼らに感化されたのか、樋口の両親に預けているという幼い息子に逢いに行くと言い出した。

美咲達を先に送り出してくれたから、その後すぐに、簡単に身の回りを整理して出て行つたのだろう。

聖地を発ってから三時間後、南條の運転する車は、高速のとあるサービスエリアへ入った。

「まだ先は長いし、軽く何か食つておいた方がいいだろう」

駐車場に車を入れてから、南條はエンジンを止めてキーを抜いた。それを見届けると、助手席に坐っていた雅通と、後部座席に乗っていた美咲は車から降り、南條も中から出て来た。そして、ロックをかけると、ドアが閉まっているのを確認してから、二人を促すように先に立って歩き出す。

平日で、夏休みもまだ少し早いからか、駐車場内はガラガラに空いている。更に思ったのは、一般の乗用車よりも大型トラックがやけに目立っていた事だった。その大きさもだが、台数を見ても、明らかに企業用のトラックの方が多い。

「私達つて、周りからどんな風に見えるんでしょうね？」

つい、そんな疑問を口に出してしまった。

そんな美咲に、南條は不思議そうに小首を傾げつつも、「そうだな」と美咲の問いに答えてくれた。

「取り敢えず、普通のサラリーマンやOLじゃないって思われる事は確かだろう。もちろん、平日休みの企業だつてあるけどな。」

ああでも、美咲は OL と呼ぶには少し見た目が若いから、どんなに見積もつても 女子大生 か」

「俺はどうです？」

今まで黙っていた雅通が、間に割って入って来た。

南條はにべもなく答えた。

「お前は中坊だ」

「ちよっ……！ それは酷過ぎでしょ！」

雅通は、心外だ、と言わんばかりに南條に噛み付く。

「――冗談に決まつてるだろ」

そう答える南條の口許は不自然に歪んでいた。これはどう見ても、笑いたいのを必死で堪えている。

「ったく！ 人をからかうのも大概にして下さいよ！ つうか南條さん、最近性格変わったんじゃないですか？」

雅通のこの言葉に、側にいた美咲の方がドキリとさせられた。

雅通を一瞥してから南條に視線を移すと、南條もまた、わずかが目を見開いている。

「――変わった？ 俺が？」

「ええ、変わったと思いますよ。ま、その理由は、江梨子さんが面白がつて話題に出していたから分かりますけどねえ」

雅通はそう言つて、南條と美咲に交互に視線を送る。

美咲の全身から、嫌な汗が吹き出てくるのを感じた。

「別にいいんですよ。恋愛なんて自由なんですし。けど、俺つて今、相当な邪魔者じゃないですかねえ？」

「いや、それは……」

雅通の嫌味の応酬に、さすがの南條もすっかりうるたえていた。美咲も何とかフォローを入れたと思ったが、そんな事はない、と強く否定出来ない。どのみち、否定したとしても信じてはもらえないだろう。

（江梨子さんの事だから、絶対にありもしない妄想話を吹聴してそうだし……）

引き攣り笑いを浮かべる大の男二人を前に、嬉々として南條と美咲の事を話している江梨子を想像したら、深い溜め息が漏れた。

片や雅通は、駄々っ子のように完全に拗ねている。

南條もすっかり持て余してしまったようで、眉根を寄せながら、人差し指で頬を搔いていた。

ついさっきまで機嫌が悪かった雅通だったが、食事に有り付けた途端、いつもの調子に戻っていた。しかも、一番高いステーキ定食を南條の奢りで注文させたのだから尚更だ。

美咲も南條に奢ってもらう事になったが、さすがに雅通のように図々しい真似は出来ず、山菜うどんと稲荷寿司のセットに留めた。どのみち、美咲は小食な方なので、あまりガッツリとは食べられない。

「本家の奴ら、俺達が向こうに戻ったと知ったら奇襲かけて来ますかねえ？」

食べる手を決して休める事なく、雅通が訊ねた。

南條は焼き魚定食の鮭の切り身を箸で解しながら、「どうだろう」と口にする。

「本家当主の考えてる事は、俺も皆目見当が付かないからな。——ただ、一番の要注意人物なのは藤崎拓馬だ。あいつはどうも、こいつにやたらと執心しているらしいな」

南條が美咲に視線を向けると、それに釣られたように雅通も注目してきた。

美咲はうどんを持ち上げかけた箸を止めた。白くて太い麺はその

ままスルリと箸から落ち、微かな音を立てて出し汁の中に戻った。

「また何で美咲を？ あいつらからしたら、桜姫の魂を持っている美咲は脅威でしかないんじゃないか？」

「——お前は美咲を見て、何とも思わないか？」

南條は逆に雅通に問い返した。

「は？ 美咲を見て、ですか？」

雅通は復唱すると、今度はまじまじと美咲を凝視する。

美咲としては堪ったものではないが、だからと言って、目を逸らす事も出来ず、雅通の痛いほどの視線を口の端を引き攣らせながらも黙って受けていた。

「別に普通じゃないですか？」

一通り見終えてから、つまらなそうに言い放った。

その雅通の反応に対し、南條はあからさまに顔を顰めた。

「鈍過ぎだな」

ボソリと吐き出した。だが、人の疎らな室内では、どんなに小さな呟きもすぐに美咲と雅通の耳に飛び込んでしまった。

「——どういう意味ですか？」

食ってかかりそうな勢いで、雅通は南條を睨む。

南條は、鮭の解し身を口に運んで咀嚼してから、「そのままの意味だ」と表情一つ変えずに言った。

「お前のような男には、真に良い女の条件というのは一生分からんかもな」

「失礼な！ 俺だってそのぐらい分かりますよっ！」

「だったら、美咲を見て何とも思わないのは不思議じゃないか？」

「そ、それは……」

駐車場にいた時の仕返しとばかりに、南條はやたらと雅通に突っかかる。

だが、一番動揺しているのは、雅通よりも美咲だった。

褒められるのは悪い気がしないのだが、本人を目の前にして、よくも平然とそんな話が出来るものだと思ってしまふ。しかも、南條

はいつもと変わらず飄々としている。

（これじゃあ、心臓が幾らあっても足りないよ……）

二人の男が論議を繰り広げている中、美咲は俯きながら、黙々とうどんを啜り続けた。

午後五時を回った頃、美咲の実家へ到着した。

（ほんとに、帰って来たんだ……）

実家を目にした途端、美咲は随分と懐かしい気持ちになり、また、余所の家に来たのではないかという錯覚にまで陥った。

「降りるぞ」

南條の呼びかけに、美咲と雅通はそれぞれ車から降りた。そして、美咲だけが、トランクに詰められた自分の荷物を取り出した。

（大丈夫かな……）

自分の家だというのに、とてつもなく緊張している。しかも、敢えて連絡を入れていなかったから余計だった。

「行くか」

南條は美咲から荷物を受け取ると、二人の先頭に立ってインターホンを押した。ピンポン、と辺りに響き渡ってから、殆ど間を置かず、玄関の扉は開かれる。

そこに真っ先に現れたのは、母親の理美だった。

「あらっ……！」

案の定、理美は目を丸くして驚いていた。

「みんなどうしたの？ 美咲も一緒だけど……。まさか、修業は終わり？」

「いえ。まだですよ」

真っ先に口を開いたのは南條だった。

「最近、美咲さんめだいぶ疲労が溜まっていたようだったので、それならば、と帰って来たんです。もちろん、十分に休養を取りましたら戻りますが」

「そうなの。でも、しばらくはいるのよね？」

「ええ、そのつもりです」

理美の問いに南條が頷くと、理美は嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。気丈に振る舞っているようでも、やはり、常に美咲を案じていてくれたのだろう。

「あ、そうそう」

不意に理美は、何かを想い出したように声を小さく上げ、胸の前で両手を合わせた。

「今ね、我が家にもう一人家族がいるのよ。あ、お父さん以外にね。美咲はもちろんだけど、和海君達も、一度逢っているはずの子よ」
「え？ 誰？」

小首を傾げながら美咲が訊ねた。

南條と雅通も、怪訝そうにしながら互いに顔を見合わせている。
と、その時だった。

「お客様ですか？」

理美よりも若い声が玄関先に聴こえてきた。同時に、声の主は四人の前に姿を現す。

それを目にした瞬間、美咲はギョツと目を見開いた。

「——みいちゃん……？」

感情のあまり籠らない声でそう口にしたのは、美咲そっくりの少女——朝霞だった。

第十章 第二節

こんなに早く、美咲達が聖地から戻って来るとは思ってもみなかった。朝霞も驚きを隠せなかった。尤も、そう思い込んでいるのは朝霞のみで、美咲達にはいつもと変わっていないように映っているであろうが。

「何で、アサちゃんがここに……？」

あからさまに眉を顰めながら美咲が訊ねてくる。

だが、理美は全く気に留めもしない様子で、「ちよつとね」と答えた。

「まあ、話すと長くなるから……。とにかく、長旅で疲れたでしょう？ 早く上がんなさい。あ、和海君達も休んでつて」

「え？ ですが……」

理美の誘いに、南條は遠慮している。勘の鋭い彼の事だから、何かを察したに違いない。

「いいから」

理美は先ほどの笑顔を消し、南條と雅通を真つ直ぐに見据えた。

「あなた達にも、十分に知る権利はあるから」

理美の先導で、朝霞と美咲、南條と雅通はリビングへと入った。

「お父さんも、もうじき帰って来るはずだから。悪いけど少し待っててくれる？」

理美はそう言いながら、それぞれの前に、冷たい烏龍茶と、個別包装された菓子を置いてゆく。

南條と雅通は小さく会釈をしながらそれを受け、美咲は自分の家だという安心感からか、周りの事など気にせず、包装紙を開けている。

部屋の中には、美咲が食べている菓子の包装紙の音しか聴こえない。

い。心なしか、辺りの空気がピンと張りつめている。

（絶対に、私が原因よね……）

朝霞は二人の客人同様、何にも手を付ける事なく、伏し目がちに俯いた。

こういつた雰囲気は、本家にいた時に常に味わっていたので慣れているつもりではあるが、やはり、多少なりとも気まずさを感じる。「お父さん、遅いわねえ！」

突然、理美がわざとらしく声を上げた。

「いつつもならば、とつくに帰っててもおかしくないのに……。それとも、珍しく仕事が長引いちやってるのかしら？」

理美はそこまで言うのと、周りの反応を窺うように、全員の顔をグルリと見回す。だが、彼女の期待とは裏腹に、誰一人として口を開かない。

「ま、まあ、そのうち帰って来るわね、きつと」

あはは、と空笑いをした理美は、今度は項垂れながら溜め息を吐く。

朝霞は、何とか場の空気を和ませようとした叔母が憐れに思えてきたが、生憎と、彼女には励ましの言葉をかけられるほどの度量は持ち合わせていない。

結局、叔父の貴雄が帰って来るまでの間、部屋には重苦しい沈黙が流れ続けた。

貴雄が帰宅すると、案の定、美咲と南條、雅通がいた事に驚いていた。だが、理美が事情を説明すると、すぐに納得したらしく、一度、着替えのために自室に引っ込んでから、再びリビングに姿を現した。

「待たせてしまったね」

貴雄は腰を下ろすなり、南條と雅通に向けて軽く会釈すると、美咲に「体の調子はどうだ？」と訊ねた。

「うん。体調は特に問題ないよ。——色々あったけど、南條さん達

がいつも力になってくれたから」

「そうか」

美咲の話に耳を傾けている貴雄の表情は、朝霞の父親——藍田史孝と同じ血を分けた兄弟とは思えぬほど、優しさに満ちている。そんな貴雄を見ると、朝霞は余計に美咲が妬ましく思える。

「美咲はどんな感じだ？」

貴雄は今度は、南條に視線を向けた。

南條は顎に手を添え、少し考えるような仕草を見せてから、「難しい所ですね」と答えた。

「美咲さん——正確には桜姫ですが——の能力は特殊ですからね。意識をして引き出すというのはなかなか出来ないようです。ただ……」

「兄が、桜姫の怒りを買ったようだね」

「——ご存知でしたか」

「ああ、朝霞が教えてくれたからな」

「なるほど」

南條は朝霞を一瞥した。分かっではいたが、どこか冷ややかさを感じさせる。

（私はこの人にも嫌われているものね）

朝霞はその視線から逃れようと、ゆっくりと目を逸らした。他人から嫌われる事には慣れているつもりでも、やはり、少しばかり辛いとも感じる。

「あの、お父さん……」

いつになく、美咲が遠慮がちに貴雄に声をかけていた。

貴雄は不思議そうに首を傾げた。

「どうした？」

「えっと……」

美咲は言葉を詰まらせながら、朝霞をチラリと見てきた。

その窺うような視線で、朝霞は美咲が何を言いたいのか、素早く察した。

「叔父様、みいちゃんはどうかやら、私がここにいる理由を知りたいらしいですよ」

朝霞が貴雄に告げると、美咲はあからさまに苦々しい表情を浮かべる。言い辛い事を代わりに言っただけなのに、と朝霞も不快に思っただが、敢えてその事には触れずに続けた。

「本来であれば、私はここにいるべき人間じゃありませんから、みいちゃんも驚いているんですよ。」

叔父様、説明して差し上げて下さい」

「——いいのかい？」

「ええ。どうせ、いずれは話さなければならぬ事でしょう？ 理美叔母様も、叔父様が帰って来る前に、皆さんに対して、『十分に知る権利がある』と言っただけだから」

「まあ、確かにそうだが……」

貴雄は両腕を組みながら難しい顔をしていたが、やがて「分かった」と頷いた。

「朝霞がそう言うなら、話そうか」

貴雄はわざとらしく咳払いを一つして、全員の顔を一通り見回した。

「実は、十日ほど前から、兄から急に『朝霞をしばらく預かってくれ』と連絡があつてね。尤も、こっちに来たいと言いついたのは朝霞本人らしいんだが。」

要は、兄と二人きりであの家にいる事に限界を感じてしまったようなんだ。確かにあの人は、我が兄ながら気難しくて扱い難いと俺も思っているぐらいだしね」

「え？ まさかそれだけ？」

拍子抜けしたと言わんばかりに、美咲は眉根を寄せながら貴雄を睨んだ。

そんな娘の視線をまともに受けた貴雄は、微苦笑を浮かべながら首を横に振った。

「いや、もつとややこしい事情だよ。」

本当は、話すべきではないのではと思ったんだが……、兄がとうとう、全てを語ってしまったらしくてね」

「――全て……？」

美咲は怪訝そうに首を傾げている。美咲同様、状況が全く掴めていない南條と雅通も、固唾を吞んで貴雄の話の続きを待っていた。

貴雄は、先を話すのを躊躇している。

無理はない、と朝霞は思った。無論、事実を知って衝撃を受けたのは他でもない朝霞自身だったが、貴雄は貴雄で朝霞に対して同情しているのも分かっていた。だが、だからと言って、いつまでもだんまりを続けられても困るであろう。

「私は、死んだ母の子ではないんですって」

言い辛そうにしている貴雄に代わり、朝霞自身が言った。

その一言に、言い躊躇っていた貴雄はもちろん、それ以上に、美咲と南條、雅通が目を剥いてあからさまに驚いていた。

ただ一人、理美だけは表情が全く変わっていない。

「――それじゃ、アサちゃんは一体……？」

絞り出すように美咲が口を開いた。

朝霞は美咲を真っ直ぐに見据え、ゆつたりと語り出した。

「どうやら私は、理美叔母様と血の繋がりのある人との間に出来た子供らしいです。」

でも、これでやっと合点がきました。父親だけではなく、母親も同じ血筋同士なのであれば、私とみいちゃんが似ていておかしくはないでしょうね。と言っても、かなり低い確率だと思いますけど……」

そこまで言い切ると、朝霞は各々の反応を窺うつもりで、一通り見回してみる。

貴雄と理美は、全ての事情を知っているからともかく、美咲と南條、雅通に至っては、まだ何か訊きたそうにしているが、三人共、どう切り出して良いのか悩んでいるように見えた。

「みいちゃん、他に訊きたい事はある？」

敢えて、朝霞から美咲に振ってみた。

美咲は弾かれたように顔を上げ、朝霞の瞳をじっと見つめてきた。

「——アサちゃんの、産みのお母さん、は……？」

美咲の質問を聞いて、朝霞は、やっぱりそこを訊いてきたか、と苦笑した。

「——産みの母親も、亡くなってるよ……」

そう答えたのは、貴雄だった。

朝霞は、自分で言うつもりでいたので、少々驚きはしたものの、詳しい事情は貴雄の方が知っているのだから、彼に話して貰った方が良いだろうと判断した。

貴雄は続けた。

「朝霞の本当の母親だった人は、理美——お母さんの双子のお姉さんだったんだよ。俺とお母さんがまだ付き合っていた頃、偶然にも兄と知り合ったらしい。——ただ、兄もその頃は既に、今まで朝霞の母親だと偽っていたあの女性と結婚していたんだが、美咲や朝霞にも何度か話した事があるように、あの人は元々、あまり体が丈夫ではなかったからね。子供を授かったと思っても……、無事に生まれて来る事は一度もなかった……」

そこまで言うのと、貴雄はまたしても言い淀んでしまった。

無理はない、と朝霞も思う。しかし、ここまで話してしまったのだから、途中で止めてしまうのも如何なものだろうか。それに、本音を言えば、朝霞の口からはあまり言いたくはない。

朝霞は貴雄から続きを待つ一方で、再び美咲達を一瞥した。

案の定、全員が示し合わせたように、奥歯に物が挟まったような表情をしている。

また、気まずい沈黙が流れてしまうのだろうか。朝霞がそう思った時、今まで、貴雄の隣で大人しくしていた理美が、「私が話しましょう」とすかさず割って入ってきた。

その声に、全員が一齐に同じ方向へ視線を注いだ。

「史孝さんの正妻さんはほんとに可哀想な人でね、身体が弱いのに、

本家に一番近い家柄の血筋だという理由だけで無理矢理嫁がされてしまったから……。何度も子供を流産させているせいで周りからの風当たりも相当酷かったし、それに……。姉との事も正妻さんを更に追い詰めていたんでしょね……。――最期は、自殺同然の形で亡くなられてしまったから……。

姉もとても責任を感じていたわ……。姉は正妻さんを不幸に陥れるつもりは毛頭なかったし、そもそも、姉自身が史孝さんを愛してなかったのだから。寧ろ、異常とも思えるほど嫌悪していて、史孝さんが自分の前に現れるのをとにかく恐れていたのよ。

後は……。姉は本来であれば、子供は作ってはならなかった……。――姉の産む子は、媒と呼ばれる宿命を背負う事になるから……。」

「――ナカ、ダチ……？」

途切れがちに訊ねる美咲に向けて、理美はゆっくりと頷いていた。

「そう。媒体の媒と言う一文字でナカダチ。

後になってから知ったのだけど、姉も能力者だったから。ただし、和海君達のようににはつきりした属性ではない――つまり、無だったわけだけど。

私はこの通り普通の人間だけど、どうやら私の実家も、わずかながらでも能力者の血が流れていたみたいね。過去にも、姉のように霊力を持った人がいたそうだから。――と、ちよつと無駄話をし過ぎたわね。話を戻しましょうか」

理美は、フウと息を吐いてから、再び続けた。

「今言った媒だけど、これは、鬼王や桜姫の復活と同時に現れる存在らしいわ。そして、桜姫と媒は、私と姉のように、女同士の双子からそれぞれ生まれた子がどちらかの魂を受け継ぐようになっている。

これはあまり言いたくなかったけど……。媒も桜姫と同様に危険視されていたみたいね。――媒は、自らが持つ霊力を発動させる事が出来ない代わりに、桜姫の霊力を増幅させる事は可能ら

しいから……。

つまり……、美咲だけではなく、アサちゃんも、同様の運命を辿る事となる……」

理美は貴雄と違い、最初から最後まで毅然とした態度で話をした。本当は、自分の片割れとも言うべき姉の過去を話すのは断腸の想いだっただけに違いないが、何より、美咲達には真実を知っておいて貰いたい、という強い信念が彼女をそこまで駆り立てたのだろう。それを考えると、この叔母は本当に強い人だ、と朝霞は心の底から感心した。

一方、理美から全てを聞き終えた美咲は、口を小さく開けたまま呆けている。恐らく、またしても状況が複雑化していったので、頭の中で色々と整理を始めているのかも知れない。

確かに、朝霞も藍田から全てを聞かされた時は、衝撃よりもまず、また随分と面倒な事が、と茫然としてしまった。そして、もしかしたら、他にもまだ、朝霞が知らない真実が隠されているのではないかとも思った。

「大変失礼な事をお訊ねしますが」

今まで黙っていた南條が口を開いた。

理美はそれに反応して彼を見遣った。

「何かしら？」

「彼女は桜姫と並んで脅威となる 媒 と呼ばれる魂を受け継いでいると言うのはよく分かりました。しかし何故、藍田氏は、その媒 の魂を持つ朝霞さんを引き取ったんでしょうか？ もしかしたら、自分の血を絶やしたくなかったから、という気持ちもあったのでしょうか、俺にはどうも、その辺が理解し難いのですが……」

理美は、今度は貴雄に視線を移した。

「——ただの興味本位だろうね」

あからさまに顔を顰めながら、貴雄が答えた。

「和海君の指摘通り、あの人は血筋に以上に拘る人だから、唯一、同じ血を分けた娘である朝霞を引き取ろうと考えたのも本当だろう。」

だが、それ以上に 媒 という存在が如何なるものを、あの人自身の目で確かめたかったのかも知れない。その証拠に、あの人は、朝霞自身へ対する愛情は一片も感じられなかったからね」

貴雄は瞼を閉じ、小さく溜め息を漏らした。

「俺が言うのも何だが、藍田本家と本家筋の連中は腐っている。自分達の血を守るためには手段をも選ばない。——和海君の父親である博和さんも、本当は……」

「——藍田家の人達に殺されたんですね？」

南條の言葉に、貴雄だけではなく、そこにいた全員がギョツとした。

「——知っていたのか？」

絞り出すように訊ねる貴雄に、南條は「いえ」と首を振った。

「話の流れからそう思っただけです。それに、冷静になって考えてみたら、父ほどの人間が低級の妖鬼に命を奪われるなんて有り得ませんからね。」

鬼姫に殺された、という可能性も思い付きましたが、鬼姫は、苦しみ は与えられても、死 を与えるだけの靈力は持っていないでしょう」

表情一つ変えず語る南條に、貴雄は、降参だ、と言わんばかりに両手を上げた。

「君には敵わないよ、本当に。」

博和さんが亡くなるまでの経緯については追々教えるが、とにかく、これだけは忠告しておくよ。——少しでも、藍田に仇なす存在だと危険視されたら……、君も、君と行動を共にしている能力者達も狙われる。さっきも言ったが、藍田の連中は、自分達を守るためなら人殺しも容易くやってしまうからね」

貴雄はそこまで言い切ると、南條を窺うように、彼の目をジッと見据えた。

第十章 第三節

難し過ぎる話を一気に聞かされたせいで、美咲の脳内はパンク寸前となっていた。

今まで隠され続けていた朝霞の出生の秘密。もしかしたら、本人が一番ショックを受けたに違いないが、美咲もまた、自分の事のように胸が酷く痛んだ。心なしか、朝霞に秘められた心の声が届いてきたかのように。

朝霞は昔から、無愛想な所があつて苦手だと思つていたが、よく考えてみると、あの父親の元にずっといたら、美咲も朝霞のようになつていただろう。

父である貴雄と違い、藍田は誰に対しても愛想を振り撒こうとは絶対にしない。笑いはするが、それは他人を嘲る時だけだった。

（私、随分とアサちゃんを傷付けちゃつてたんだな……）

今更のように後悔の念が湧き、美咲は、自室のベッドの上で、両膝を抱え込む姿勢で蹲った。

謝罪をしたいと思う。しかし、今の気持ちをどうやって伝えたら良いかも分からない。

そして、もう一つ衝撃を受けたのが、南條の父——博和の死の真相だった。

雅通が以前に、『博和さんは鬼姫に闇に落とされたのかも知れない』と言つていたので美咲もそれを信じていた。だから、藍田の親族によって消されたのだと分かった時は、彼らと同じ血を引く者として、ただただ、申し訳ないという気持ちで一杯になった。同時に、人殺しの血が自分にも流れているかと思うと、何とも言い難い不快感が全身を襲う。

（お父さんもきっと、南條さんのお父さんが殺される所を見ていたんだ……）

貴雄の事だから、直接手は下してないだろうが、それでも、黙

って遠巻きに見ていたであろう事が何より許せない。

（やっぱり、私は南條さんの側にいちや駄目なんだよ……）

そう思った時だった。

部屋のドアが、コンコン、と遠慮がちにノックされた。

美咲は頭をもたげ、ベッドから降りると、ドアに近付いてゆつくりと開く。

そこにいたのは、南條だった。

本当は雅通と共に自分の家へ帰るつもりだったらしいが、理美が引き留めたために、深夜にも近い時間帯にも拘わらず、同じ屋根の下にいる。

「——今、いいか？」

南條に問われた美咲はコクリと頷き、「ここでは何ですから」と部屋に招き入れた。

南條は躊躇う事なく、中に足を踏み入れる。

「そう言えば、美咲の部屋に入るのは初めてだったな」

南條は興味深げに辺りを見回している。

「あの、あまり見られるのはちょっと……」

美咲はそう言って、どうにか自分に注意を向けさせようとしたら、南條は不思議そうに「何故？」と首を傾げた。

「——いえ、散らかってますから……」

「そうか？ 俺は別に普通だと思うが」

「でも、ほんとに汚い場所は汚いので……」

「——そんなに気にするほどじゃないけどな」

南條は微苦笑を浮かべると、やっとで部屋のチェックを止めてくれた。

「あ、良かったらこれに座って下さい」

美咲は慌てて、キャスター付きの机の椅子を南條の側まで転がした。

「ありがとう」

南條は礼を述べてから、自分の膝元まで椅子を引き寄せて腰を下

ろした。

美咲は彼と向かい合わせになるように、ベッドの端に坐る。

このシチュエーションは、聖地にいる時にも一度だけあった。違っているのは、ここが、美咲の実家の部屋であり、坐っている場所も、全く逆だという事だ。

「また考え込んだんじゃないか？」

椅子に落ち着くなり、南條が美咲を真っ直ぐに見据えながら口を開いた。

「さっきの貴雄さんと理美さんの話には、俺も驚く事ばかりだったからな。あの彼女自身も、真実を知ってしまった時の衝撃は相当だっただろう。」

俺の親父の事も、藍田氏と対面した時から薄々と勘付いていた。

——許せるかどうかと問われれば、許せない、と思うのが本音だが、だからと言って、今更、誰かを恨む感情も湧かない」

南條は目を細めると、口許に小さな笑みを湛えながら美咲の頬に優しく触れてきた。

「美咲が側にいてくれるから、俺も強い信念を持ち続けていける。」

——偉そうに振る舞っているように思われるかも知れないが、俺はどうしようもなく弱い人間だ。だから、初めて本家へ行った時、鬼姫に闇に落とされかけてしまった……。

でも、お前は違う。自分の意思で、自分自身と戦っている。桜姫との戦いも、俺が想像している以上に大変なものなんだろう……」

「それは……」

美咲が言いかけた時、南條が椅子から降りた。

一体どうしたの、と思いながら見上げると、美咲は南條の腕の中に包まれた。

「こんな場面、貴雄さんや理美さんに見られたら大変だな」

そう言いながらも、南條は美咲を解放する気は全くないらしく、それどころか、更に力を籠めて抱き締める。

美咲は何も言葉が出てこない。恥ずかしい、と言うよりも、南條

に抱かれている事に幸せを感じ、ただ、胸の中に顔を埋めながら、
瞼をゆつくりと閉じた。

「しばらく、このままでいさせてくれるか？」

さざ波のような南條の囁き声に、美咲は黙って頷く。

「悪いな」

南條は右手で美咲の身体を支えたまま、左手で髪を梳く。まるで、
脆く儚いガラス細工を扱うように、丁寧に触れていた。

（南條さんも、みんなも、これから傷付く事のないように……）
祈る想いで、美咲は南條に身を委ねていった。

南條が美咲の部屋にいた頃、雅通は寝付けぬまま、布団に仰向け
になりながら天井を見上げていた。

今回の一時帰省は単なる偶然か。いや、偶然ではない、と雅通は
思った。もしかしたら、何か、見えない 運命の糸 に手繰り寄せ
られたのかも知れない。

（樋口さん達、また仰天するだろうな……）

茫然とする樋口と、対照的に、熱くなる江梨子の姿を想像すると、
思わず苦笑が浮かんでくる。

雅通はもちろん、彼らも知らない事が多過ぎる。

それは、藍田本家の直系であるかどうかという以前に、藍田家が
長きに渡り、真実をひた隠しにしていた事が何より大きいだろう。

本家の後継者である朝霞ですら、今の今まで、自分の出生の秘密
を知らずに育ってきたと言っただから。

（彼女も可哀想な子だよな……）

能面のように、表情が殆ど動かない朝霞を彷彿しながら、雅通は
ふと思った。

正直な所、彼には、媒 がどんな存在であるかが、完全に理解
出来ていたわけではない。

藍田家の系図はあまりにも複雑だ。

あの後、貴雄から聞いた話によると、理美もまた、わずかだが藍田との血の繋がりとあると言う。

確か、貴雄と南條の父親も従兄弟同士だったと南條から聞いた事がある。

それを考えると、能力者の家系に生まれた雅通も、樋口夫妻も、そして藤崎達もまた、どこかで藍田と繋がっているのかも知れない。（結局、何のために能力者は存在したんだか……）

そんな疑問が頭を過ぎる。

幼い頃から、宿敵は鬼王 だと教え込まれた。しかし、真実が明るみになるにつれ、本当の敵は鬼王ではなく藍田家だと思い知らされた。

藍田史孝の嘲笑は、未だに頭から離れない。虫唾が走り、同時に背筋が凍り付くような感覚を覚えた。あれはもう、常人ではない。貴雄の言う通り、例え、身内であろうとも人を殺す事を厭わない。そんな濁った感情は、雅通にもありありと伝わってきた。

「気分悪くなってきた……」

雅通は顔を顰めると、勢いよく身を起した。

「少し出るか」

そう呟き、電気を消して静かに部屋を出た。

梅雨に入ってから、ジメジメとした重い空気が全身に纏わり付く。空を仰げば、重苦しい雲が辺りを覆っている。

（ひと雨来るかな）

そんな事を考えながら、玄関の扉を閉め、門扉の所まで歩いた。と、そこで雅通はピタリと足を止めた。

そこには、蹲るような格好で、朝霞がしゃがみ込んでいた。

まさかの先客に驚き、雅通は茫然としながら朝霞を見下ろしていたら、彼女は彼の存在に気付き、そのままの姿勢で、頭だけを動かして見上げた。

「——何、してんの……？」

躊躇いがちに訊くと、朝霞は「別に」とだけ答えて、雅通から視線を外す。

本家で逢った時は、このあまりの無愛想さに苛立ちを覚えたが、真実を知った今となつては、そんな感情もどこかに消えてしまっている。

ただ、 憐れ としか思えない。

（どうしたもんか……）

取り付く島もないような空気を纏っている朝霞の前に、雅通は戸惑いを隠せずにいた。かと言って、彼女を置き去りにする事も出来ない。

「少し、その辺を歩かない？」

口に出した後で、これじゃあまるでナンパじゃねえか、と内心焦ったが、一度出てしまった言葉は戻せない。

雅通は息を吞んで、朝霞の返事を待つ。寧ろ、断られてしまふのを覚悟していたのだが――

「いいですよ」

迷う様子も見せず、朝霞は雅通からの誘いをあつさり了承した。

「――いいの？」

「いいも何も……。誘つて来たのはあなたの方じゃないですか」

呆れがちに答える朝霞の前に、「いや、そうだけど」と雅通は自分の頬を指先で搔く。

「あんまり男からの誘いに軽々しく乗るのって、危険じゃない？」

そう口にする、朝霞は小首を傾げながら雅通を真っ直ぐに見据えた。

「あなたからは、危険な匂いは全くしませんから」

頼りない街灯の下を、雅通は朝霞と並んで歩いている。自分から朝霞に誘いかけたとは言え、何とも奇妙なシチュエーションだ。

だが、一緒に歩いているだけで、どちらも一向に口を開く気配はない。

朝霞は元々、あまり話す方ではないだろうから当然だが、雅通は、どちらかと言うと賑やかな雰囲気好む。だから、どうにか話題を探そうと思うのだが、朝霞が相手では、何を話したら良いか全く想像が付かない。

（これが美咲だったらなあ……）

朝霞を横目で一瞥しながら、ふと、そんな事を考える。

背中まで豊かに流れている黒髪をバツサリ切れば、完全に美咲と瓜二つになりそうだ。ただ、やはり性格までは変えられないから、ちよつと付き合いが長ければ、朝霞と美咲の見分けはすぐに付くだろう。

「——みいちゃんとそっくりなのが堪らなく嫌でした」

今まで黙っていた朝霞が、まるで、雅通の心を読んだかのように、不意に口を開いた。

雅通は目を見開いて、改めて朝霞を凝視する。

朝霞は雅通には顔を向けず、あらぬ方向に視線を彷徨わせながら続けた。

「事ある毎に、私はみいちゃんと比べられていましたから。——亡くなった祖父母もいつも、天真爛漫なみいちゃんの事は、目に入っても痛くないほど可愛がっていたのに、私には、笑いかけるどころか、目を合わせようともしてくれませんでした。

そんな中で唯一、貴雄叔父様だけは、みいちゃんと分け隔てなく接してくれました。

父が冷たかった分、私は密かに、貴雄叔父様が本当のお父さんだったらば、と何度も考えた事もありました。——でも……」

朝霞はそこまで話すと、急に足を止め、俯きがちに、再びゆっくりと言葉を紡いだ。

「私は結局、父から解放される事はないのでしょうか。——鬼王にも拒絶され……、貴雄叔父様も……」

「——鬼王に……？」

雅通は眉間に皺を寄せながら、「どういう事だ？」と訊ねた。

朝霞はチラリと雅通を一瞥する。そして、少し間を置いてからはっきりと口にした。

「鬼姫 に、なるつもりでした」

まさかの告白に、雅通は啞然とした。

口を小さく開けたままの状態で朝霞を見つめていたら、朝霞がわずかに眉根を寄せた。

「自ら闇に堕ちる事を望んだ私を、軽蔑しますか？」

抑揚のない声音で訊ねてくる朝霞。

雅通はどう答えたら良いか分からず、ただ、木偶の坊のように立ち続けている事だけで精一杯だった。

朝霞を軽蔑するつもりはない。彼女のこれまでの境涯を考えれば、現の世界で生き抜くよりも、鬼姫である珠璃と同じように、肉体を棄て、魂だけの存在になった方が楽になれると思っても当然だ。

「——何故、鬼王は拒否したんだ？」

自分でも、とんでもない質問をしている事は分かっていた。だが、美しいものを、殊に美咲とそっくりな朝霞を拒絶した理由が理解出来なかった。もちろん、闇に落とされなかった事は安堵すべき所ではあるが。

朝霞は、フウと小さく息を吐いてから、「私のような女は必要ないんですって」と答えた。

「でも、鬼王の考えている事は私も分かりませんでした。数多の亡霊を統べる最強の王だからでしょうが、何より、鬼王は完全に心の扉を閉ざしている。

その点、瀧村さんは分かりやすい、と初めて逢った時から思いました。——真っ直ぐで、心から南條さんを尊敬していて、変に口達者で生意気そうに見えるのに、本当は、人一倍優しくて努力家。

瀧村さんは、私のない物を全て持っていて、とても羨ましく思えました……」

そこまで言い切った後、朝霞の頬の筋肉がわずかに動いたように見えた。だが、やはり、あまり大きな変化はなく、普段の無表情の

ままだった。

「――笑うの苦手、とか？」

まさかと思い、つい訊いてしまった。

朝霞は躊躇う事なく、「ええ」と頷く。

「それでも、感情は人並みに持つているんです。でも、子供の頃から同じ表情ばかりをしてきたせいか、他の人から見たら、私の顔は面を被つていっているように映るみたいで……。私自身は、表情を変えていくつもりなんですけど……」

そう口にした朝霞は、表情こそ変わらないものの、どこか淋しげに感じる。

顔がそっくりでも、境涯がまるで逆な朝霞と美咲。

美咲は優しい両親に囲まれ、何不自由なく育ってきたのだろうが、朝霞は違う。貴雄も言っていたが、愛情を、欠片ほども貰えなかった。

そう言えば、と雅通は不意に、自分の母親の言葉を想い出した。

「自分と他人を比較する必要なんてないんじゃないかな」

雅通の言葉に、朝霞は真っ直ぐに彼に視線を注いだ。

それをまともに受けた雅通は、微苦笑を浮かべて続けた。

「今のは、俺がお袋によく言われ続けていた事だったんだけどな。庭のちっこい花壇を指差しながら、『あの子達を見てごらん。色や形は違えども、あの子達はそれぞれ、一生懸命自分の花を咲かせている。あんたも、あの子達のように、精一杯自分を誇れる人間になりなさい』って。」

俺だって最初の頃は、兄弟子だった南條さんに嫉妬してばかりだった。あの人は、ガキの頃から潜在的に高い霊力を持っていて、何の苦もなしに霊力を引き出す事が出来ていた。

それに比べて、俺はどんなに頑張っても南條さんみたいにはなれない。――悔しくて堪らなかったけど、そのたびに、お袋の言葉を想い出してた。と言つても、最近じゃ割り切っちゃまっていくからか、お袋の名言もすっかり頭から抜けちゃまってたんだけど」

雅通は苦笑いはそのまま、わずかに肩を竦めて見せる。

朝霞は無言でそれを見つめ続けていたが、少しの間を置いてから、ゆっくりと口を動かした。

「ご苦労、されたんですね」

「いや、あんたに比べたら大した苦労なんてしてないと思うけどなあ……」

雅通は胸の前で両腕を組みながら首を捻った。

「俺はあまり、物事を深く考えない方だしな。もちろん、年がら年中能天気ってわけでもねえけど。」

後は、どんな事があっても前向きな姿勢でいる事。何かあるたびに後ろを振り返ってばかりじゃ、いつまで経っても成長なんて見込めない。俺のような奴は特にね」

「どんな事があっても、前向きに……」

朝霞はそう口にする、真剣な眼差しで雅通を見つめてきた。

「どうしたら、そんな風に前向きになれるんですか？」

まるでガキのように素朴な質問を投げかけてくるな、と雅通は思った。だが、朝霞の場合、普通ではない生活が続けてきたのだから雅通達にとっては当たり前でも、朝霞には全てが珍しい事なのだと感じて無理はない。

「何があっても、一々クヨクヨしない事、かな」

雅通が答えると、朝霞はわずかに目を見開いた。

「クヨクヨしない事、ですか？」

雅通は「ああ」と頷いた。

「さっき言った事と殆ど同じだけど、他人と自分を比較したってどうしようもねえから。俺には俺にしか出来ない事があるだろうし、あんたもあんたで、絶対に良い物を持つてはらずだ。強くなるうと思えるようになれば、自ずと自分に出来る事が何なのかも見えてくるんじゃないかな？」

「——でも、私には何も……」

「だからそれが駄目なんだって！」

朝霞が言いかけた言葉を、雅通は強い口調で遮った。

「いいか？ とにかく自分を信じる事が大切だ。あんたもあんたで、美咲と同じような宿命を背負ってるから、不安で押し潰されてしまっ
いそうになると思う。ただ、俺はあんたの不安を全て理解出来るわけ
じゃないというのが正直な所だ。でも、美咲だって自分自身と戦
っている。だから、あんたにも最後まで戦い抜いて欲しいんだよ」
そこまで言い切ってから、雅通はハッと我に返った。

「——わ、悪い。ちよつと調子に乗り過ぎた……」
気まずい思いで謝罪を口にした。

朝霞は呆気にと取られていたようだったが、少しの間を置いてから、
首を振って、ゆっくりと口を動かした。

「いいえ。瀧村さんの仰る事は間違っていないから。寧ろ、そこ
まではつきり言ってくれる人が周りにいなかったたので嬉しいです。

——ありがとうございます」

朝霞に深々と頭を下げられてしまった。

南條や江梨子に怒られたり、樋口にからかわれたり、美咲に暴言
を吐かれる事が普通になっているため、どうにもこそばゆい。

雅通はあらぬ方向に視線を向け、頭をポリポリと掻いた。

そんな雅通を、朝霞はどう思ったのだろう。表情の変化が窺えな
いのはつきりとは分らないが、それでも、どこか柔らかな空気を
纏っているように感じた。

雅通と朝霞は、近所をグルリと一周してから家に戻って来た。

「付き合わせて悪かったな」

「全然。色々な話が聞けて楽しかったです」

「ならいいけど……」

雅通は小さく笑むと、玄関のドアノブに手をかけた。

「あの……」

すぐ後ろで朝霞に呼び止められ、雅通は肩越しに振り返った。

「何？」

「——お願いが、あるんですけど……」

「お願い？」

「ええ」

雅通は怪訝に思いながら首を傾げていると、朝霞は一呼吸吐いてから口を開いた。

「私の事、『朝霞』って呼んでくれませんか？」

予想だにもしなかった注文だった。もちろん、あんた 呼ばわりは失礼だという自覚もあったが、かと言って、いきなり下の名前も呼び辛い。相手が朝霞だと思つと尚更だった。

雅通は顎を擦りながら朝霞を見つめると、朝霞は無言で視線を注ぎ込んでくる。

「——藍田さんじゃ、駄目？」

雅通の問いに、朝霞は大きく頭を振った。
かぶり

「それじゃ、誰が呼ばれているのか区別が付きませんよ。——それに、瀧村さんは、みいちゃんを『美咲』って呼んでるじゃないですか」

「いや、確かにそうだけど……」

「みいちゃんは良くて、どうして私は駄目なんですか？」

先ほどのまでの朝霞からは想像も付かないほど、やたらと雅通に噛み付いてくる。

雅通は少し考えていたが、そのうち「分かったよ」と両手を上げて降参した。

「じゃあ、これからはあんたを『朝霞』と呼ばせて貰うよ……」

「——ほんとですか？」

「俺はいつも、自分に正直に生きてる」

雅通が言つと、朝霞の表情が、わずかだが柔らかくなったように感じた。多分、本人は笑顔を浮かべているつもりなのかも知れない。

「ありがとうございます、瀧村さん」

またしても、朝霞に丁寧な礼を述べられてしまった。

「何か、礼を言われる事ってそうそうないから変な気分だ」

つい、率直に思った事を口に出してしまった。

朝霞は不思議そうに首を傾げながら「そうなんですか？」と言った。

「瀧村さん、とてもしっかりされているのに……。他の人は、見る目が全くないんですね」

「——いや。見る目どうこうより、俺はどうも、周りから虐げられるような星の下に生まれてしまったらしいし。年下の美咲にまで、普通に喧嘩を吹っかけられるしなあ……」

「みいちゃんに、ですか？」

「ああ。あいつはとにかく気が強いからな。初対面で、いきなり怒鳴り付けられたほどだ。——ま、原因は俺にもあったんだけど」

雅通はおどけた調子で肩を竦める。だが、そんな彼とは対照的に、朝霞の表情が翳りを見せた。

「——羨ましいです」

ポツリと口にした。

「私も、喧嘩出来るような相手が欲しかったです」
消え入りそうな声音だった。

もしかしたら、このまま泣き出してしまうのでは、と雅通は半ば本気で心配になって朝霞を見つめたが、幸いにも、涙が零れ落ちるような様子はない。だからと言って、心からホッと出来るわけでもなく、神妙な顔付きで「ごめん」と謝罪した。

「——謝らないで下さい」

先ほどの表情はそのまま、朝霞はゆっくりと首を振った。

「悪いのは、勝手に嫉妬した私なんですから……」

「——え……？」

朝霞の言葉に、雅通は目を丸くさせる。

「それ、どういう意味？」

恐る恐る訊ねてみたが、朝霞は「さあ」と短く答えただけだった。
「そろそろ、入りませんか？」

まるで、はぐらかすように言う朝霞。

雅通は胸に物が痞えたような不快感を覚えたが、朝霞からは、もう、何も言う事はない、といった空気を感じたので追及はしなかった。

第十章 第四節

翌日、南條は貴雄の家で朝食を摂ってから、そのまま実家に向かう事にした。

本音を言えば、母親と顔を合わせるのは非常に気まずい。家出同然で出て行ったのに、どの面下げて行けばいいんだ、という迷いもあったが、半面で、今、母親に逢っておかなければならないような気もしていた。

「南條さん！」

スニーカーを履き、玄関の扉を開こうとした時、美咲に呼び止められた。

「どうした？」

南條が訊ねると、美咲は一呼吸置いてから口を開いた。

「ここにはいつまでいるんですか？」

美咲の問いに、南條は「そうだな……」と考えを巡らせた。

「大体一週間かな。それぐらいが丁度いいだろう」

「——一週間、ですか……」

「何だ？ 短いかな？」

「いえ。そんな事はないですけど……」

美咲は何かを訴えるように南條を見つめてくる。

南條は微笑を浮かべると、美咲の頭に手を載せた。

「大丈夫だ。何かあったら、俺も瀧村も、すぐに駆け付けられるようにする」

そう言っ、ドアノブを捻った時だった。

美咲が、空いている左腕にしがみ付いてきた。まるで、行かないで、と言わんばかりに。

南條もこれには困惑を隠し切れなかった。

貴雄は既に出勤しているからともかく、理美はいつも家にいるのだから、うっかりすると見咎められてしまう。

だからと言って、美咲の手を無下に振り解く事も出来なかった。

「――来るか？」

自分の意識とは裏腹に、口にしていた。

美咲は、南條に腕を絡めたままの状態で瞠目する。

南條は口許に笑みを湛えると、ドアノブから手を放した。

「これから、実家に行こうかと思ってたから。かれこれ十年近くは母親と逢ってなかったから、どんな顔されるか分からないけど」

「――いいんですか？」

「美咲さえ良ければな」

南條の答えに、美咲の目はパツと輝いた。

「行きます！　すぐ準備するから待ってて下さい！」

美咲は南條から離れると、埃を舞い上がらせてしまいそうな勢いで階段を駆け上がって行った。

玄関の扉の前で待っていたら、五分弱で美咲が戻って来た。

同時に、南條は思わずギョツとした。

美咲の事だから、ジーパンにＴシャツというラフな格好で来ると予想していたのだが、目の前にいる美咲は、紺色のワンピースを纏い、更に上から薄地のカーディガンを羽織っている。

スカート姿は制服で何度も目にしていたものの、私服では初めてだったので、南條が驚いてしまうのも無理はない。

「――どうしたんですか？」

ぼんやりとしている南條を、美咲は首を傾げながら見つめている。

「あ、いや、何でもない」

南條は動揺を悟られまいと、努めて冷静を装った。

「そうですか」

美咲はなおも怪訝そうにしていたが、それ以上、問い詰める気もなかったのか、すんなりと引き下がってくれた。

美咲を助手席に、雅通を後部座席に乗せてから、南條は車をスタ

トさせた。

因みに雅通は、駅から電車に乗り換えて実家に戻る事となっている。

「いきなり帰ったら、どんな顔して迎えられるんだろ……」

車に揺られながら、雅通がボソリと口にする。

それを耳聡く聴き取ったらしい美咲は、「憂鬱そうだね」と言った。

「何か、家に帰るの、あんまり嬉しそうじゃないんだけど」

「いや、別に嬉しくないわけじゃねえけどさ。——ただ、兄貴に逢うのが堪らなく嫌なだけだ……」

「あれ？ 雅通って一人っ子じゃなかったんだ」

「ああ。俺と兄貴の二人兄弟」

「ふうん……。で、どうしてそのお兄さんに逢いたくないの？」

「——まあ、色々とな……」

雅通はそれっきり、会話を止めてしまった。

（言いたくないのも無理ないな）

訝しげに眉を顰めている美咲を横目に、南條は口の端を上げた。

雅通の兄は、言うなれば 変人 だ。樋口と、いや、もしかしたら樋口以上に強烈な性格の持ち主ではないかと南條は思っている。

おまけに、たった一人の弟である雅通を異様なほど溺愛しているらしく、常に行動を共にしていた南條を敵視しているようにさえ映った。

（俺はノーマルだって言うのに……）

南條は、バックミラー越しに雅通を見る。すると、あからさまに表情を曇らせている彼の表情が、真っ先に飛び込んできた。

（こいつはどうやら、一癖も二癖もある人間に付き纏われる傾向があるようだな）

これも運命だな、と思いながら、南條はミラーから視線を外し、アクセルを踏み込んだ。

雅通を駅で降ろしてから、そのまま真っ直ぐに実家へと車を走らせた。

南條の実家がある場所は、美咲の実家のある地域に比べたら結構な田舎だ。それでも、藍田本家のある辺りよりは、それなりに開発は進んでいる。

ふと、美咲を一瞥してみると、彼女は南條に後頭部を向けて流れる景色を眺めている。

表情が見えないから、何を考えているのか分からない。しかし、随分と田舎だと思われるのは間違いなかった。

更に十分ほど経つと、平屋の木造作りの市営住宅が見えてきた。新しい家が次々と建てられている中で、そこだけは、まるで時代に取り残されたような侘しい空気が漂っている。

南條の実家はまさに、この住宅の中にあつた。父親である博和が生きていた頃は、もう少し綺麗なアパートに住んでいたのだが、亡くなってからは、急に生活が苦しくなり、たまたま、市役所で市営住宅の住居人を募集していたのを目にした母親が抽選に参加。そして、当選したのを機に、今の実家へと越して来た、というわけだ。「ここが、南條さんの実家ですか」

家の前の小さな駐車スペースに車を入れてから、まるでタイミングを計っていたかのように美咲が口にした。

「こういう家、初めて見たような気がしました」

あまりにも正直過ぎる反応に、南條は思わず苦笑した。

「ビックリしたか？」

南條が訊ねると、美咲は「いえ。そんな事は……」と言ったきり、口を噤んでしまった。どうやら図星だったらしい。

（肯定はし辛いよな、確かに）

南條はそう思いながら車を降りると、それに倣うように、美咲もシートベルトを外して外に出て来た。

二人は肩を並べて玄関の前まで歩き、南條が、今時には珍し

い、ガラスの嵌められた引き戸を引く。藍田本家も同じような引き戸ではあったが、彼の実家のは、まるで比べ物にならない。開けるたびに、ガラガラと建て付けの悪そうな音が煩いほどに響く。

戸が半分ほど開いた時、ギシギシと古めかしい床の音が近付いてきた。その音を鳴らしている主は、考えるまでもなかった。

「——和海？」

南條の名を呼んだのは、彼の母親——沙代子さしろだった。

中に入ると、沙代子を先頭に、南條が続き、その更に後を、遠慮がちに美咲が歩いて来る。とは言え、美咲の実家よりもうんと狭い家なので、数歩歩いただけで、六畳ほどの茶の間に着いた。

沙代子は部屋に通すなり、二人に座るように促すと、自らは一度台所に引っ込み、人数分の緑茶を淹れて戻って来た。

「どうぞ」

客という事で、まず先に、美咲の前に茶の満たされた茶碗を美咲の前に差し出してきた。

「ありがとうございます」

美咲は正座したまま軽く会釈するも、緊張しているのか、膝の上に握り拳を載せたまま、それ以上は微動だにもしない。

一方の南條には、沙代子は何も言わずに茶碗を静かに置く。

全員に茶を配り終えてから、沙代子は台所を背にして正座し、二人を流すように見比べる。特に美咲には何か勘付いたのか、心なしか、鋭い視線を注いでいた。

美咲は俯いていた。意気込んで『行きます！』とは言ったものの、沙代子と対面した途端、恐怖心が急激に湧き起こってしまったのかも知れない。

「元気だった？」

気まずい沈黙を破ろうと、敢えて南條から話しかけた。

沙代子はニコリともせず、「ええ」と答えたきり、口を真一文字に結んだまま黙り込んだ。

（こういう時、樋口さんや江梨子さんがいれば……）

ふと、そんな事を考えた。

口下手な南條と違い、樋口夫妻ならば、上手い具合に場を和ませる事が出来たであろう。しかし、その頼みの二人も、この場にいるわけではないし、後から現れるという予定もない。だから、ここは何とか自分が頑張るしかない、と思ったのだが――

「俺も、どうにかやってたから。心配しなくても大丈夫だから」

これしか言葉が出てこなかった。完全に、沙代子の空気に吞まれてしまっている。

（最悪だ……）

南條は眉を顰めながら、俯き加減になって自らの手を忙しく弄んでいた。

このまま、何もせずに終わってしまうのだろうか。そう思った時だった。

「そちらのお嬢さんは」

今まで口を開く気配すらなかった沙代子が、南條に向かって訊ねてきた。

「藍田貴雄さんの娘さんね？」

今更、嘘を吐く必要もないと思い、南條は「そうだよ」と答えた。「今日は、俺が敢えて彼女をここに連れて来た。今、俺達がどんな状況に置かれているか、母さんにも知って貰いたいと考えたから。」

母さんがどれほど、貴雄さんを、靈力を憎んでいるかは俺も分かっているつもりだ。でも、母さんにどんなに思われようと、俺はこれからずっと、俺の力でこいつを守ると決めた。――もちろん、父さんの仇も討つ」

沙代子はそこまで聞き終えると、フウと小さく吐息を漏らした。

「和海は、お父さんの死の真相を知ってるのかしら？」

「大体は。昨日、貴雄さんが教えてくれたから」

「そう」

沙代子は短く答えると、茶で口を湿らせ、再び南條を鋭く睨んだ。

「正義感が強いのは結構な事だと思うわ。けどね、あなたは 藍田という家を甘く見過ぎている。貴雄さんから聞いたと思うけど、あの連中は、人の命を奪う事に何の感情も抱いていないのよ。

本心を言わせて貰えば、私は、あなたには藍田家に逆らって欲しくない。——もう、これ以上は、大切なものを失いたくないなどの……」

「——母さんの言いたい事は分かるよ」

沙代子の言葉に対し、南條は静かに、だがはっきりと言った。

「でも、俺だって、大切なものを失いたくないと思っているんだよ。

——美咲だって、望んで桜姫の魂を受け継いでしまったんじゃない。

美咲は、自分の 宿命 と戦うと自分で決めた。それなら俺も、こいつのために精一杯の事はしてやりたい。——美咲の幸せは、俺の幸せでもある。そう思っているから……」

本心を包み隠さず打ち明けた南條は、沙代子の反応を窺うように、彼女をジッと見据える。背中に、冷たい汗が流れ落ちるのを感じた。

「ミサキさん」

沙代子は美咲の名を呼びながら、彼女に視線を移した。

美咲はビクリと肩を上下させたが、それでも、目を逸らしたままでは失礼だと思ったのか、思い切ったように沙代子を見つめた。

「あなたには酷だと思うけど、はっきり言わせて貰います。

私はずっと、夫を死に追い遣った藍田家を憎んでいました。霊力なんてものを全く持っていない私には、鬼王という存在などどうでも良い。その考えは今でも変わっていません。

そして、あなたが望んでいなかったとしても、和海をあなた達の下らないいざこざに巻き込んだ事も、決して許せる事ではありません。

ですが、私が憎んでいるのは 藍田家 であって、あなた自身ではないです。それに、和海の話聞いていたら、あなたをどれほど愛し、大切に想っているかが伝わってきましたから、これ以上は何も言いません」

沙代子はそのままで言うと、先ほどまでは打って変わり、穏やかな表情を見せた。

「こうなったら、最後まで戦い抜きなさい。でも、その代わり、お父さんのように命を落とす真似だけは絶対にしないで。お父さんだって、和海が死ぬ事なんて望んでいないのだから。」

和海も、ミサキさんも、生きるために戦いなさい」

沙代子から、微かに笑みが漏れた。

美咲はそれを茫然として眺めていたが、やがて、意識を取り戻したように「はい」と頷いた。

「私も、なんじょ……、和海さんを犠牲になんてしたくないです。もちろん、私自身も、絶対に死んだりしません」

そう沙代子に告げた美咲の瞳は、強い想いが溢れていた。今の言葉に嘘偽りは一切ない。それは、南條が一番分かっていた。

そして、沙代子にも彼女の想いはしっかりと伝わったらしい。先ほどよりも更に、満足そうに笑んでいた。

美咲が暇を告げてから、沙代子は彼女に、博和に挨拶する事を勧めていた。

「いずれ、長いお付き合いになるかも知れないものね」

沙代子の台詞の意味を察した南條はギョツとしたが、美咲は深く捉えなかったらしく、「そうですね」と呑気に微笑んでいた。

仏壇の置かれている部屋に行くと、南條が先に仏前に正座して祈りを捧げ、続いて、美咲に場所を譲った。

美咲は瞼を伏せ、静かに手を合わせている。もしかしたら、心の中で博和に何か語りかけているのかも知れない。

「お父さんらしいお父さんですね」

顔を上げた美咲は、遺影を見上げながら不意に口にした。

「何か、凄い威厳みたいなものを感じます」

美咲の言葉に対し、沙代子は「そうね」と答えた。

「実際、自分にも他人にもとても厳しい人だったわね。責任感も人

一倍強かったし」

「そうだったんですか……」

美咲はそう言ったきり、感慨深げに博和の遺影を眺め続けていた。美咲が何を考えているのか、南條は気になっていたが、母親の手前、余計な事は一切口に出さなかった。

美咲を南條の車に乗せ、二人は実家を後にした。

美咲は、『最寄りの駅まででいいですから』と言っていたが、そんな中途半端な場所で美咲を降ろしたと沙代子に知られたら、何を言われるか分かったものではない。それに、南條自身が、美咲と少しでも長く一緒にいたいという気持ちが強く働いていた。

「かえって、手間をかけさせちゃいましたね」

運転する南條の隣で、美咲が申し訳なさそうに頭を垂れている。
luck

南條はチラリとそれを一瞥しながら苦笑した。

「そんな事は気にするな。寧ろ、お前に余計な気を遣わせてしまった。——すまなかったな」

南條の言葉に、美咲は「いいえ」と首を横に振った。

「確かに、南條さんのお母さんに逢って緊張しました。けど、お母さんの気持ちを直接聞けて良かったと思ったのも本当です。」

それに、南條さんの意外な一面を見る事も出来ましたから」

「俺の、意外な一面？」

怪訝に思いながら、南條が鸚鵡返しに訊ねると、美咲は小首を傾げながら、悪戯っぽく笑んだ。

「南條さん、お母さんには凄く弱いでしょ？」

美咲の鋭い突っ込みに、南條は思わずハンドルを切り損ねそうになった。

「何で、俺がお袋に弱いと思ったんだ？」

心の中ではまだ動揺していたが、努めて冷静に訊ねる。

美咲はそれを面白そうに眺めながら、「だって」と言葉を紡いだ。「言葉遣いが、普段と全然違ってましたもん。よそよそしい、とい

うのとも違うと思いますが、ちょっと遠慮しているような」

「そりゃあ、遠慮がちにもなるさ」

これ以上は誤魔化しても無駄だと悟った南條は、半ば諦めたように話し始めた。

「俺には、お袋の猛反対を振り切って家を出てしまった前科があるからな。あの頃は俺もまだまだガキだったから、お袋がどんな気持ちで修業をさせまいとしたか、全然分かってなかった……」

「――後悔、してますか？」

反応を窺うように訊ねてくる美咲に、南條は口許に小さな笑みを湛えながら首を横に振った。

「後悔はしていない。美咲を守る事は俺の使命なんだと、そう思っているから」

南條はそこまで言うと、今度は運転に集中しようと、完全に美咲から視線を逸らした。

美咲が自分を見つめているのには気付いていた。しかし、ここで美咲と視線を合わせてしまったら、自分でも何をしでかしてしまうか分かったものではない。

（いや、もう、後戻り出来ない所まで来てしまってるか……）

南條は自らを嘲るように口の端を上げ、ゆっくりとアクセルを踏み込んだ。

第十一章 第一節

南條の一声で聖地から実家に戻って来てから、もうじき一週間が経とうとしていた。

家族と過ごした時間はあっという間で、明日には聖地に戻らないといけないと思うと、やはり淋しさを感じてしまう。

（でも、私にはまだまだやるべき事があるんだから）

美咲は自分に言い聞かせた。

その日の昼過ぎ、美咲は睡魔に襲われた。空腹が満たされた上、部屋の室温も昼寝するにはちょうど良い感じた。

「少し寝よ……」

そう呟くと、美咲はベッドに仰向けに倒れた。

数分と経たないうちに、意識が遠のいてゆく。

夢と現の狭間で、自分と呼ぶ声を聴いたような気がした。

（誰……？）

美咲は瞼を閉じながらも、それに意識を集中させる。

「こんな所でも寝るな」

今度は、はつきりと耳に飛び込んできた。その声には、聞き覚えがある。

美咲はゆっくり目を開ける。眼前には、靄がかかったかのような白い景色が広がっていたが、声の主はどこにも見当たらない。

「——桜姫？」

眉を顰めながら、姿なき者に訊ねた。

すると、声の主——桜姫は、どこからともなく美咲の前に姿を現した。

「全く……。そなたは呑気と言うか……」

挨拶もそこそこに、呆れたように口にする桜姫。

美咲は口を尖らせながら、「悪かったわね」と返した。

「けど、急に眠くなっただんだもん。仕方ないでしょ。それに、私は年がら年中能天気に通ごしちゃんないわよ」

「やれやれ……。相変わらずだのう……。」

桜姫は溜め息交じりに言うと、右頬に右手を添えた。

「そなたは日に日に気が強くなっていくから、こつちも扱い辛くて堪らん……。もう少し、淑やかになろうとは思わんのか？」

「気が強く、って……。私の神経を逆撫でしてるの、一体誰だと思ってるの？」

逆に問い返すと、桜姫は、少しばかり思考を巡らせるように目を左右に泳がせていたが、「知らん」と、半ば投げ遣りな口調で答えた。

「私が興味を持っているのは鬼王とそなた自身だけだ。それ以外の事に関しては、知らうとも思わぬ」

「あ、そう……」

あまりにもきつぱりと言われてしまい、美咲も口角を引き攣らせる事しか出来なかった。

（その張本人は、誰でもない桜姫だつてのに）

美咲は心の中だけで言い、すぐに別の話題に切り換えた。

「ところで桜姫、今日は私に何の用？」

「ん？ 何故、私がそなたに用があると思った？」

「別に。何となくそう思っただけだよ。——まあ、ただの気紛れのような気もしなくもないけどね」

美咲の言葉に、桜姫は眉根を寄せながら小首を傾げた。

「ほんとに可愛げのない娘だのう」

「そんなのはいいから、とつとと用件を話して」

桜姫の嫌味も無視して、美咲が催促すると、桜姫は、微苦笑を浮かべながら話し出した。

「私もここしばらくはずっと、そなた達の事を黙って観察してきた。ナンジヨウと同じ金属性の者に襲われかけたのも知っておる。

私がちよつと靈力を使えば、あの程度の男であればすぐに撃退出来たはずなのに、何故かそなたが私を抑え込もうとするから、さすがの私も自由が全く利かなかった。

ナンジヨウがそなた達を追って来ていたから良かったものの、そうじゃなければ、そなた、確実にあの男に食われていたぞ？」

桜姫が言わんとしている事は、美咲もすぐに理解した。同時に、桜姫の言う通り、南條さんが、もし現われなかったら、と考えたら、今更のように全身に鳥肌が立った。

（あの男になんて、触れられるのだけでも気持ち悪いってのに！）美咲が、自らの身体を抱き締めながら両腕を擦る姿を、桜姫は、口の端を上げながら見つめている。

「まあ、あの男が気持ち悪いと思うのは私も同感だ。あれならまだ、ナンジヨウの方がまだ許せる」

そう言ってから、桜姫は最後に「どちらかと言えば、だがな」と付け足した。

（いや、そこまで強調しなくても分かってるし）

心の中で突っ込みを入れると、桜姫にもそれが伝わったのか、困ったように眉根を寄せた。

だが、桜姫はすぐに表情を一変させ、刺すような眼差しで美咲を睨んだ。

その急な豹変振りに、美咲も息を呑む。

「あの娘も、とうとう自分の課せられた 運命 を知ってしまったな」

一瞬、何の事を言っているのか分からなかったが、少し考えてから、あの娘 とは、朝霞の事を指しているのだと察した。

桜姫は続けた。

「あの娘も、実に憐れだのう。多少の靈力を持っている以外は、至って普通の人間と変わらぬとずっと信じていたであろうに……」

しかも、産みの母親はすぐに亡くし、実の父親であるはずのアイダからも、愛情を全く貰えずに育ってしまったのだからな。

アイダは結局、あの娘を ヒト として見ておらぬ。ちよつと觀察して楽しんだ後、その辺にいる虫けら同様に踏み潰す氣でいるつもりだ。もちろん、私の魂を持つそなた自身もな。

私は、長きに渡つて転生を繰り返してきたからよう分かる。――あの連中は、自分達の血を守るためならどんな事でもする。私の器 や媒の娘、そして、私達を庇い立てした者達をを殺す事を『誉れ高き殺人』だと賞賛されていたほどだ」

そこまで言うと、桜姫は顔を顰めて不快感を露わにした。

美咲はそんな桜姫を見つめながら、不意に、南條博和の事を想い浮かべた。

南條の実家で見た、博和の遺影。南條とは違つた精悍さがあり、どこか力強さを感じさせた。

（南條さんのお父さんもきつと、 誉れ高き殺人 の犠牲となつてしまつたんだね……）

忘れかけていたものが、桜姫の話によつて、再び美咲の中に蘇つてきた。

自分はその 殺人 に関与していない。しかし、直接関わつていなくとも、同じ血縁の者によつて消されたのだから、忘れるなんて事は決してはいけない。

南條の母親である沙代子もまた、美咲の前では氣丈に振る舞つていたが、実際は、どれほど苦しみ、藍田家を憎み続けたか知れない。「これ以上、哀しみを増やしちゃいけないよね……」

美咲がポツリと口にすると、桜姫は何も言わず、俯き加減で神妙な面持ちとなつた。

鬼王の事以外で、桜姫がこんな表情を見せるのは初めてかも知れない。ちよつと前の桜姫であれば、馬鹿な事を、と一笑に付していたであろう。

「桜姫」

美咲は桜姫を呼んでみた。

桜姫は、ハツとしたように顔を上げ、美咲を見つめる。

「どうした？」

「別に、ちよつと呼んでみただけだよ。何だか、急に元気がなくなつたみたいだし」

「まさか、私がそなたに心配されてしまうとはな」

桜姫はいつもの調子で、鼻をフンと鳴らして笑った。

「今はちよつとばかり、考え事をしていただけだ。そなたが心配するような事は何一つない」

桜姫は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

この横柄な態度は腹立たしいが、桜姫が変に大人しいのもまた、調子が狂ってしまう。それを考えると、やはり、偉そうに踏ん返り返っている桜姫の方が、よっぽど彼女らしい、と美咲は思った。

「ミサキ」

桜姫が美咲を名前で呼んできた。

今までになかった事だったので、美咲は少々驚きつつも、「何？」と訊ねた。

桜姫は美咲を見据えたまま、一呼吸置いて、再び口を開いた。

「これからは、私を抑え込もうとするな。そなたは自分独りの力でも戦えると考えているであろうが、それは違う。——この際だから言わせて貰うが、そなた自身は靈力を全く持っていない。私がいるからこそ、靈力が発動出来るのだ。

いいか、もう一度言うぞ？ 何かあったら、必ず私にそなたの身体を譲れ。さもなければ、そなたは私と共に、滅びの道を辿る事となる」

桜姫の言葉に対し、美咲は異を唱えようとしたが、口がまるで、閉ざされた貝のように動かない。

もしかしたら、桜姫が靈力で美咲の口を封じてしまったのかも知れない。桜姫は最強の巫女姫だったらしいから、そんな事は造作でもないのだろう。

口の利けなくなった美咲を、桜姫は満足げに眺めている。

「やはり、そなた如きが私の意思に逆らうなど無理な事だな」

桜姫がそう告げたのと同時に、美咲の全身が、再び、濃い靄に包まれた。

夢から現に戻って来た美咲は、目を覚ますなり、ベッドの上に置いていた携帯電話に手を伸ばして掴んだ。

開いて時間を確認すると、表示されているデジタル時計は、
7:00 丁度を差していた。 1

夢の中とこちらとでは、時間の流れ方が違うのだろうか。桜姫と話していた間は、それほど時間が経っていたようには感じなかったが、どちらにしても、寝過ぎてしまったのには代わりない。

美咲は携帯を閉じると、ムクリと起き上がってベッドから降りた。

リビングに入ると、キッチンから、包丁のリズミカルな音が聴こえてきた。理美が夕飯の支度を始めているらしい。

「お母さん、何か手伝おうか？」

キッチンに入り、理美に声をかけてみる。

すると理美は、目を大きく見開いて、美咲に視線を注いできた。

「どうしたの？ いつもなら、自分から進んで手伝いなんてしよう
としないのに。——何事も起きなければいいけど……」

「失礼な」

理美の発言に対し、美咲は恨めしい気持ちで睨みながら口を尖らせた。

「私だって、たまには手伝いたい気分になる事もあるよ。そりゃあ、
ほんとはあんまり好きじゃないけど……」

けど、これでも聖地では、江梨子さんって人の手伝いを結構やってたんだよ。サラダの盛り付けとか、洗い物とか……」

「へえー！ あんたにしてはよくやってるのねえ」

この口振りは、美咲の言っている事を殆ど信用していない。

美咲の不満は更に倍増したが、ここでムキになっても仕方ないと思っ直した。

「とにかく、手伝うから何でも言つて。何すればいいの？」

そう訊ねると、理美は「そうねえ」と少し考えていた。

「じゃあ、取り敢えず、食器の用意をしてくれる？　今夜はビーフシチューだから、それ用のね」

「了解」

美咲は理美に背を向け、食器棚を開ける。

そのすぐ後ろでは、理美が口許に笑みを湛えながら、せっせと野菜を切っていた。

「そう言えば」

食器棚からシチュー用の器を取り出している美咲に、理美が話しかけてきた。

「アサちゃん、まだ帰って来ないのよねえ」

理美に改めて言われてみて、美咲も、あ、と思った。

今日は平日だから、高校生である朝霞は、朝から学校に行っている。この数日間、朝霞と一緒に過ごしていて分かったのは、朝霞は夕方五時前には必ず家に帰って来る。特別に親しい友人もいないそうだから、当然、寄り道なんて絶対にしない。

その時、突然、全身の力が抜けた。理由は分からない。ただ、美咲の中で警鐘が鳴り響いている。

（な、何だつての……？）

全身が震え出した。手に持った器も、それに合わせてカチャカチャと暴れ始めた。

「美咲？」

理美もただならぬ気配を察したらしく、作業していた手を止め、美咲から素早く器を取り上げた。

「大丈夫……？　顔、真っ青よ？」

「う、うん……」

平気、と答えたかったが、震えは相変わらず止まらない。

美咲は、自由になった両手で自らの身体を抱き締め、その場に蹲った。もう、立っている事も間々ならなくなっていた。

そんな美咲を氣遣ってか、理美は彼女に合わせてしゃがみ込むと、「少し休みなさい」と優しく背中を擦った。

「でも……、手伝いは……？」

「そんなのはいいから。ね？」

ここは素直に言う事を聞くべきだと思った。

美咲は、理美に支えられながら立ち上がり、リビングに連れて行かれた。そして、クッションを枕代わりに、そのまま横になった。

「部屋に戻って寝たら？」

「……ううん。大丈夫……」

「——そう？　なら、ちょっとここで横になつて。あんまり酷いようならすぐに言いなさい。お父さんが帰って来たら、病院に連れて行って貰えるようにお願いするから」

「……ん……」

美咲は短く答えると、膝を折り曲げた姿勢で丸くなった。

それからほどなくして、貴雄が帰宅した。

貴雄はリビング入るなり、挨拶もそこそこに、「美咲、どうしたんだ？」と訊ねてきた。

「どうも体調が優れないみたいなのよ」

そう答えたのは、キッチンにいた理美だった。

「けど、ほんとに突然だったわね。ちょっと前までは顔色も普通に良かったのに……」

どうしたのかしら、と理美は首を傾げながら手を頬に添えている。

「美咲」

美咲のすぐ耳元で、貴雄の声が聴こえてきた。

うつすらと瞼を上げると、貴雄が、美咲の前に座って見つめている。

「身体はどんな感じだ？」

貴雄に問われ、美咲は、ぼんやりとしている頭で思考を巡らせた。

「……よく……分かんない……。けど……」

「『けど』、何だ？」

「……何だか、凄く不快な気持ち……。怖いような……憎らしいような……」

自分の今の気持ちを上手く表現出来ない事にもどかしさを感じつつ、それでも、貴雄にありのままを伝えた。

貴雄は眉根を寄せたまま黙っている。何か思い当たる節でもあるのか、顎を擦って目を左右に泳がせていた。

と、その時だった。

部屋の静寂を破るかのように、リビングに置かれた電話が鳴り出した。

貴雄と理美は、同時にビクリと身体を反応させた。

「俺が出る」

貴雄は立ち上がると、電話の元まで近付き、受話器を取った。

「はい。藍田です」

名乗った後、貴雄はそのまま一気に硬直した。

それに呼応するように、美咲の全身も粟立つ。歓迎出来るような電話でないのは貴雄の様子を見ても一目瞭然だが、それだけではないと直感した。

美咲は重い身体をどうにか起こし、貴雄の会話に耳を傾ける。

「……ほんとに、あなた達は一体何を考えてるんですか？」

普段の貴雄からは信じられないほど、彼は電話の相手に向かい、苛立ちを露わにして抗議している。

「あの時は、我が家で預かる事を承諾してくれたじゃありませんか。それを突然、そちらに帰すって……」。

そもそも、朝霞の意思はどうなるんですか？ 朝霞は、あなたの元にいる事に堪えられなくなったからこそ、本家を出たいと言っていたのに……」

（まさか、電話の相手って……、史孝伯父さん？）

美咲は息を呑み込んだ。

突然の身体の不調、言いようのない不快感、もしかしたらそれは、

桜姫か、はたまた別の何かが、朝霞の身の危険を教えようと警告を与えてきたのかも知れない。そう考えると、全てに納得がいく。

美咲は電話が終わるまでの間、貴雄の背中を険しい表情で睨み続けた。正確には、電話の相手である藍田にだが。

「……俺はもう、あなた達の考えには着いてゆけない……」

身体を震わせながら、貴雄は藍田に言った。

「これ以上、哀しみを増やすのはたくさんだ……。美咲だって朝霞だって、望んで 宿命 を背負って生まれてきたわけじゃない……。あの子達にだって、ヒト として生きる権利は十分にあるんだ。博和さんだって、あの子達が生まれる前に亡くなってしまったが、それでも、あの子達の明るい未来をしっかりと見極めておられた……」

……

貴雄は一呼吸置くと、藍田に向かってはつきりと告げた。

「俺は、博和さんの遺志を継がせて頂きますよ。——娘達のためにも、和海君や沙代子さんのためにも……」

そこまで言うのと、貴雄は受話器を置いた。

「——アサちゃんは？」

タイミングを見計らい、美咲が訊ねた。

貴雄は背を向けたまま、「外には出さないそうだ」と答えた。

「どうやら、兄さんが雇っている能力者に、朝霞を連れ戻すように命じたらしい。ただ、朝霞は断固として拒否したようだ……」

貴雄の話を聴きながら、美咲は真っ先に、その能力者が藤崎達である事を察した。

（あいつが……）

不意に、聖地で襲われかけた夜の事を想い出した。あの時、南條が異変に気付いて美咲達を着けて来てくれたから良かったものの、追って来ていなければ、と思うとゾツとする。

刀を手に、美咲に向けて、ニヤリと口許を歪められた藤崎の表情は、忘れたくとも忘れられない。

「——美咲？」

貴雄に呼ばれ、美咲はハツと我に返った。いつの間にか、彼は美咲の側で胡坐を掻いている。

「大丈夫か？ まだ気持ち悪いのか？」

「ううん、平気……」

少し強がってみたものの、本音を言えば、まだ体調が優れない。こうしている間にも、朝霞が、藍田や藤崎達に何をされるかわからない。そう思うと、余計に苦しさが増してゆく。

「――アサちゃんを、助けられないの？」

美咲は貴雄を真っ直ぐに見据えた。

貴雄は苦虫を噛み潰したようなような表情を浮かべて、何やら考え込んでいたが、やがて、意を決したように言った。

「もう、黙って指を銜えて見てるわけにはいかないだろ」

今までだったら、絶対に口にしようともしなかった事だった。

貴雄の変化に美咲は驚いたが、それ以上に、嬉しさの方が勝っていた。

「少し、行つて来る」

貴雄が立ち上がるうとした所で、美咲は、「待つて」と引き止めた。

「私も、行く」

そう告げると、貴雄は途端に目を剥いた。

「そんな状態で行けるわけないだろ……。それに何より、今は本家に近付くのは危険だ。ここは家で大人しく……」

「嫌だ」

貴雄が言いかけた言葉を、美咲は遮った。

「私にだって、アサちゃんを助ける権利がある。ううん、私が行かなきゃ駄目なんだ。アサちゃんはきっと、私に救いを求めている。」

桜姫だつてきつと、同じ事を考えたからこそ、こうして警告を出してきたんだから」

「しかし……」

否定しかけた貴雄だったが、美咲の強く鋭い視線をまともに受け、

そのまま絶句してしまった。

暫しの間、二人は目を合わせた状態のまま、微動だにしなかった。
「――お前はほんとに、どこもかしこも母さん似だな……」

深い溜め息を吐いた後で、貴雄は困ったように何度も頭を掻いていた。だが、すぐに真顔になり、いつになく真剣な眼差しで、美咲に、「いいんだな？」と念を押してきた。

「今回ばかりは、兄さん達もお前に容赦しないぞ？」

「そんな覚悟、とつくに出来てるよ」

美咲は口の端を上げた。

「聖地にいた間にだって、南條さんと一緒に本家に行つて、史孝伯父さんに打ちのめされて、かえつて鍛えられたもん。――怖くない、つて言つたら嘘になる。けど、逃げて後悔するよりは何十倍も何百倍もマシだよ」

強気で語る美咲を目の当たりにした貴雄は、「やれやれ」と、再び溜め息を漏らした。

「それじゃあ、早速行くか」

「うん」

美咲は大きく頷くと、ゆっくりとその場から立ち上がった。

不快感は未だに残っている。しかし、朝霞を救うためならば、と思つと、自然と身体も軽くなってゆくような気がした。

第十一章 第二節

美咲は貴雄の運転する車の助手席に乗り、本家へと向かった。

今回は、敢えて二人だけで行こうという事になったので、南條達には一切連絡していない。それに今日は、実家で過ごせる最後の日だ。出来る事なら、今夜ぐらいいはゆっくりさせてあげたい、という貴雄のささやかな配慮だった。

「史孝伯父さんって、怖いよね」

ハンドルを握る貴雄の横で、美咲は口にした。

「本家に行った時にも感じたけど、私達と同じ血の通った人だとは到底思えなかった。鬼王と同じ——ううん、鬼王以上に人間味がなかった」

「そうだな」

貴雄は神妙な顔付きで頷いた。

「あの人は、藍田家の最高権力者だというのももちろんあるだろうが、元々が冷酷で非情だったからな。俺が知る限り、兄さんは昔から、他人に愛想を振り撒くようなタイプじゃなかった。——母さんの双子のお姉さんにも……」

そこまで言いかけて、貴雄は口を噤んだ。

美咲は続きを催促しようとしたが、止めた。

貴雄が言い淀んだ理由、それがどういう事なのか、何となく察しってしまったのだ。

貴雄は美咲の父親。父親である彼が、娘に生々しい過去を言えるはずもない。

美咲自身も、想像するのもおぞましい、というのが本音であった。
「今はまず、朝霞の安否が最優先だ」

気まずい空気を払拭するように、貴雄が話題を変えた。

「あの子もウチに来てからは、少しずつ変わってきていた。まだ、感情を表に出す事だけは苦手みたいだけだな。でも、あの家に縛り

付け続けるよりは数段良いはずだ。

そう言えば、美咲が帰って来てからは、またちょっと明るくなってきたような感じだった」

貴雄の話に耳を傾けながら、美咲も、朝霞が微妙に変化を遂げていたと、改めて思った。ただ、そのきっかけを作ったのは美咲ではない事は確かだ。

朝霞は、美咲にコンプレックスを抱いている。以前ほどではないにしても、まだ、わだかまりが残っているであろう事は否定出来ない。

そうになると、南條が雅通が、自分の知らない所で朝霞と接触するかしたか、だ。

（もし、南條さんだったら……）

そう思ったら、急に胸の奥が疼き出した。

こんな状況で、朝霞に嫉妬するのはどうなんだろうと自分でも呆れてしまったが、それでも、南條を誰にも奪われたくないという独占欲は、どうあっても拭い切れるものではないらしい。

（勝手に焼き餅を妬いてる私を見たら、南條さん、また呆れちゃうかも知れない……）

不意に、南條の渋面が脳裏に浮かんだ。

馬鹿な事は考えるな――

頭の中に存在する南條は、厳しく美咲に叱咤しているように思えた。

南條という男は、公私混同は絶対にしない。それは美咲もよく分かっている。

（いつまでも、南條さんに甘えてばかりじゃ駄目だ）

美咲は瞼を閉じ、邪念を振り払おうとする。

本家では、何が起こるか予想が出来ない。もしかしたら、無事に家に戻る事も叶わないかも知れない。

（精一杯、出来る事を……）

美咲は強く思いながら、小さく深呼吸を繰り返した。

聖地から戻って来た翌日以降、南條は、そのまま実家で過ごした。取り敢えず、ゆっくり出来るのも今日までだ。今まで好き勝手してきた分、少しでも母親孝行をしようとしたのだが、『余計な手出しをしないでちょうだい』と一蹴され、結局、いつも以上にだらけた毎日を送ってしまった。

そして今も、沙代子がいそいそと夕飯の支度をしている中、暇を持て余し、テレビのニュースをぼんやりと眺めていた。

そんな時だった。突然、側に置いていた携帯電話が鳴り出したのは。

けたたましい電子音に、南條はハッと我に返る。

少しばかり間を置いてからディスプレイを見ると、そこには、一般電話の番号と共に、藍田の文字が表示されていた。

一瞬、美咲だろうか、と思ったが、彼女は携帯を持っているし、わざわざ家の電話を使ってくるはずもない。

（貴雄さんか……？）

怪訝に思いつつ、南條は通話ボタンを押した。

「はい。南條です」

美咲や雅通ならともかく、相手は目上の立場となる人物だ。念のためにも、と思い、自らの苗字を名乗った。

『もしもし、和海君？』

だが、電話の向こうから聴こえてきたのは、藍田貴雄とは正反対の高めな声だった。かと言って、美咲とも違うような感じだ。

「理美さん、ですか？」

確信はあったが、改めて確認してみる。すると、相手は『ええ』と答えてきた。

（珍しいな）

心の中で呟きつつも、それを口に出す事はせず、「どうしたんですか？」と、いつもの調子で訊ねた。

『ええ。ちょっと……』

理美はそこまで言って、急に言葉を詰まらせた。

電話をしたものの、本当に言って良いものかどうか悩んでいるのが、電波を通してでも伝わってきた。

「美咲さんに、何かありましたか？」

南條が言つと、理美は少しの沈黙の後、『和海君には敵わないわと、フウと息を吐いた。

『その通りよ。正確には、アサちゃんが なんだけど』

「朝霞さんが……？」

『ええ』

理美はそこで、電話をかけるまでの経緯を話してきた。

どうやら朝霞は、自分の意志とは裏腹に、無理矢理本家へ連れ戻されてしまったらしい。

それを知った貴雄は、朝霞を奪還すべく、本家へ向かったとの事。本来は独りで行くつもりだったようだが、美咲もいても立ってもいられなくなつたのだろう。貴雄の反対を押し切り、彼女も一緒に着いて行ってしまったらしかった。

頑として自分の意思を貫き通す所は、美咲らしい。必死になって訴える彼女を想像した南條は、思わず苦笑いを浮かべた。

『ごめんなさいね』

一頻り説明を終えてから、理美は申し訳ないとばかりに、謝罪を口にした。

『明日からは聖地に戻るし、ほんとはゆっくりとしたかったでしょうに……』

「そんな事は気にしないで下さい」

南條は首を横に振った。

「それに、あの二人だけで本家へ乗り込むのは危険です。史孝さんだけならまだしも、あそこには……」

美咲さんを執拗に狙っている奴がいます、とはさすがに言えず、言葉を呑んだ。

南條自身も、自分と同じ能力を持つあの男の事は、考えるだけでも気分が悪くなる。

「とにかく、俺もすぐに本家へ向かいます。瀧村にも連絡を取ってみますので」

『ありがとう。——でも、ほんとに大丈夫？』

いつになく慎重に訊ねてくる。普段は、これ以上はないほどポジティブに振る舞っている理美だが、そんな彼女も、今回ばかりは、よほど夫と娘が心配なのだろう。

「ほんとに大丈夫ですよ」

不安に押し潰されそうになっているであろう理美を安心させようと、南條は、柔らかな口調で言った。

「美咲さんを守るのは俺の役目です。それに、ここで見て見ぬ振りをしてしまったら……、後が怖いですから」

そこまで言うと、南條はチラリと、台所に立っている沙代子を一瞥した。

相変わらず、黙々と作業を続けている。

「それじゃあ、そろそろ支度して出ます。貴雄さんと美咲さん、そして朝霞さんは、責任を持ってそちへお帰ししますから」

『ありがとう。じゃあ、悪いけどお願いね』

「分かりました。では、失礼します」

南條は通話を切ってから、静かに沙代子の所へ向かった。

「ちゃんと聴こえてたわよ」

声をかけようと思ったまさにその時、沙代子はこちらに顔を向けてきた。

「行くなればさっさと行つてらっしゃい。ちよつとでも遅れて、美咲さんに何かあったりしたら大変でしょう？」

沙代子の言葉に面食らいつつも、南條は「ああ」と頷いた。

「じゃあ、悪いけど行つて来るよ。——なるべく、早く戻れるよう

にする」

「期待しないで待つておくわ」

最後の嫌味に南條は苦笑した。だが、心の中では、南條達を案じているのはちゃんと分かっている。

「行つて来ます」

南條は踵を返すと、携帯の履歴から雅通の番号を探し当てて電話をかけた。

三十分弱ほどで、美咲と貴雄は本家へ到着した。

改めて考えてみると、初めて南條と逢ったあの日、美咲はここまですぐで来てしまったのだ。幾ら、あの時の女性が気になったとはいえ、よくも歩き切ったものだと思心してしまう。

南條に至つては、一体どこから女性を追っていたのだろうか。

（つて、想い出に浸つてる場合じゃないでしょ！）

美咲は、心の中で自分に突っ込みを入れながら、車を降りた。

それにしても、本家の敷地の広さには、いつも啞然とさせられる子供の頃などは、誰か大人が側にいないと、うっかり迷子になってしまう事も珍しくなかった。

貴雄の後を追うように玄関に辿り着くと、貴雄が呼び鈴を鳴らす。建物の外観に似合わず、現代的な電子音が響き渡る。

それから、少しの間をおいて、家の奥から足音が微かに聴こえてきた。

「どなたです？」

扉越しに女の声が訊ねてくる。朝霞のものではないのは確かだが、どこかで聞いた記憶がある。

美咲が怪訝に思っている側で、「史孝の弟の貴雄と娘の美咲です」と貴雄が応答していた。

すると、扉がゆっくりと開かれた。

「あら、ほんとに史孝様が仰っていた通りですね」

玄関先で出迎えてきた女性は、二人に向けて、愛想笑いを振り撒いてきた。

（あれ？ この人……）

美咲は少し考えてから、やがて、あつ、と思い浮かんだ。

「神山さん、でしたっけ？」

美咲が確認するように訊くと、女性――綾乃はずかに目を見開いた。

「私の事、憶えていたのね？」

「ええ。その節は大変お世話になりました」

別に世話になんかなってない。寧ろ、迷惑をかけられたぐらいだけれどね、と内心想いつつ、建前として挨拶しておいた。

「いいえ、こちらこそ」

綾乃はどうやら、美咲の言葉が皮肉だと勘付いたらしい。口許には笑みを浮かべているが、目が全く笑っていない。

「えつと、君は？」

綾乃とは初対面となる貴雄は、彼女に改めて自己紹介を求めた。

綾乃は、即座に美咲から視線を外すと、今度は貴雄に向けて小首を傾げて見せた。

「初めまして。わたくし、神山綾乃と申します。貴雄様の事は、史孝様からお伺いしておりました」

「はあ……」

貴雄はすっかり、鳩が豆鉄砲でも食らったかようになってる。

美咲も同様だった。

（幾ら何だって様 はないでしょ、気色悪い）

本人には直接言えないので、心の中で突っ込みを入れるのが精一杯だった。

一方で、綾乃は口の端を上げながら、目だけを動かして、二人を交互に見比べていた。外見が綺麗なだけあって、眼力に凄味がある。「取り敢えず、ここでは何ですから」

まるで、自分の家のように振る舞う綾乃。

貴雄は苦笑を浮かべつつ、それでも黙って彼女に従っていた。

二人が通された場所は、以前、南條と本家を訪れた時と同じ客間だった。

綾乃は案内を終えてから、役目を終えたばかりに、すぐに姿を消した。

残された美咲と貴雄は、正座したまま、視線をあちこちに彷徨わせる。

「さっきの子、もしかして能力者なのか？」

貴雄が訊ねてきた。

美咲は貴雄に視線を移すと、「そうだよ」と頷いた。

「あの人確か、雅通と同じ火属性だって言ってた」

「なるほど」

貴雄は、独りで何かを納得したように、綾乃が閉めた障子を睨んでいた。

「他の能力者の事は知ってるか？」

「うん。後は、私と同じ年ぐらいの水属性の男の子もいたね。それと……、金属性の男も……」

口にした途端、再び、藤崎の事が頭を過ぎった。

綾乃がいたという事は、間違いなく、藤崎もこの家のどこかにいる。もしかしたら、美咲達のすぐ近くにいても知れない。

（やっぱり、あいつだけは嫌だ）

美咲は眉を顰めながら、自らの身体を抱き締めた。

「それにしても、よくもそこまで能力者を集められたもんだ」

美咲が恐怖心に支配されている側で、貴雄は苦々しい表情で呟いた。

「確かに、能力者は探せばいない事もない。だからと言って、そう易々と見付かるもんでもないと思うんだが……」。

和海君達同様、たまたま近くにいたって事なのかな」

まるで、自分に納得させるように言い聞かせている。

美咲は、肯定も否定もする事なく、ただ、黙って貴雄を見つめ続けた。

その時、部屋の外側から床の軋む音が響いた。美咲の全身に戦慄が走る。

ほどなくして、軋みはピタリと止んだ。同時に、二人がいる部屋の障子が乱暴に開かれる。

嫌な予感、見事なまでに的中した。

「——藤崎……」

不快感を露わにして、目の前にいる男の名を口にした。

第十一章 第三節

男——藤崎は、「へえ」と満足そうに口許に笑みを乗せる。

「俺の事、ちゃんと憶えてたんだな？」

「ついさっきまでは、綺麗さっぱり忘れてたけどね」

吐き捨てる勢いで美咲が告げると、藤崎は、わざとらしく肩を竦めて見せた。

「んな怖い顔すんなよ。折角の可愛い顔が台無しだぜ？」

「あんたに『可愛い』って言われたって、ちつとも嬉しくないわ」

「ったく、ほんと釣れねえなあ。南條和海の前では、すぐに女になっちまうくせに」

「余計なお世話よ。それよりあんた、ここに何しに来たの？ アサちゃんはどうしてんの？ 史孝伯父さんは？」

貴雄が側にいる事も忘れ、美咲は矢継ぎ早に質問を投げかける。

「そんな一遍に訊いてくんないよ。物事には、順番つつもんがあるだろう？」

藤崎は眉根を寄せながら、苦笑いを浮かべた。

「まずオッサ……、失礼。ここのご主人さんは、朝霞を連れて来てから、ずーっと部屋に籠りっ放しだ。綾乃があんたらの到着を知らせても、『ああ』と答えたっ切りだったとよ。」

朝霞の方は、今は自分の部屋にいる。気味わりいぐらい大人しくしてるよ。——ま、元々愛想のない奴だったから、さほど変わりやしねえけど」

「——あんたがアサちゃんをそんな風に言う資格なんてないでしょ」
美咲の気分は一層悪くなり、眉間に深い皺が刻まれた。

「それにアサちゃんは、自分の部屋にいたとしても、状況的に軟禁してるのと同じ事じゃない。お父さんにも聞いたけど、これからは更に、この辛気臭い家に縛り付けとく気なんですよ？」

ほんと、あんたらの考える事は最低だわ！ これで余計、アサち

やんが自分の殻に閉じ籠もるようになったらあんだ、どう責任を取ってくれんのよっ？」

「おっ、俺を責めんな！ 言い出しっぺはご主人さんだ。文句ならご主人さんに言えよ！」

「だったら今すぐここに連れて来なさいよ！ 文句に加えて、あの顔一発引っ叩いてやる！」

「落ち着け、美咲」

美咲を宥めてきたのは、二人の遣り取りを黙って傍観していた貴雄だった。

「気持ちは分かるが、彼の言う通り、彼を責めるのは筋違いだ」

「ふうん……。娘と違って、親父さんの方は物分かりがいいみてえだな」

藤崎は口許を歪めながら、美咲と貴雄を興味深げに見比べる。

あまりにも不躰な態度に、さすがの貴雄も、ピクリと眉を痙攣させた。

「まあ、ご主人さんも、気が向けばそのうち来るんじゃないの？」

——と、その前に……」

藤崎は貴雄に近付くと、急に、彼の鳩尾を殴打した。

「ぐっ……」

貴雄が小さく呻き声をあげる。

それを満足げに眺めながら、藤崎は貴雄の耳元で「わりいな」と囁いた。

「別にあんたは嫌いじゃねえけどよ、俺が用があんのは、あんたの娘だけだからな」

藤崎の言葉を最後まで聞き終えたかどうかという所で、貴雄はその場に崩れ落ちた。

美咲は目を見開いたまま、意識を失ってしまった父親を傍観する。この一瞬で何が起こったのか、理解するまでに、少しばかり時間を要した。

「さて」

藤崎が、貴雄から美咲に視線を移してきた。その妖しい眼光は、聖地で襲われかけた時と同じだった。

美咲は立つ事も間々ならず、座ったまま、畳の上を這いずった。今度こそ、この男からは逃れる事なんて出来ないかも知れない。

藤崎の手元に注目すると、そこからは、仄かに光が発せられ、靈力の源とも言える刀が形作られてゆく。

「大丈夫だ。俺はお前が気に入ってるからな。死なねえ程度に留めといてやるよ」

藤崎は刀を構え、その切っ先を、美咲のすぐ目の前へ向けた。

『何かあつたら、必ず私にそなたの身体を譲れ』

美咲は不意に、夢の中で桜姫が言っていた事を想い出した。

桜姫に支配されたくない。しかし、桜姫の言う通り、美咲自身は何の力も持っていない。

（ミサキ）

頭の中に、女の声が飛び込んできた。その声の主は、考えるまでもない。

（早く私と代われ。あの時も忠告したはずじゃ。このままだと、本当に、私もそなたも滅んでしまうのだぞ？）

（そんな事言われたって、あんたを簡単に開放出来るわけないでしょ！ 大体、あんたは限度つてものを知らないから……！ 前だつて史孝伯父さんを殺しかけてしまったじゃない）

（そんな甘い事ばかり言っておつたら、それこそ、その男の思う壺じゃないのか？）

声の主——桜姫に必死に抵抗しようとするも、最後の台詞で、美咲はグツと唇を強く噛んだ。

確かに、桜姫の言う事は尤もだ。

藤崎は、『死なねえ程度に』などと言ってはいるが、とても信用出来ない。靈力については全て理解していないものの、それでも、

南條のように、命を奪わない程度に身体を貫くのが高度な技である事は、美咲も分かるような気がした。

「――殺されちゃうぐらいなら……」

自分にも、聴こえるか聴こえないかといった声音で呟くと、桜姫の満足げな声が響いた。

（ようやく決心が着いたか）

「仕方ないじゃない……。――けど、ちょっとだけだからね？」

最後にしつかり念を押した。

（久々に楽しめそうじゃ）

美咲の言葉を聞き入れたかどうかは分からない。桜姫はクスクスと笑うと、少しずつ、藍田美咲という器に自らの魂を憑依させた。

完全に桜姫に乗っ取られてからも、美咲の意識は残っているものの、彼女の身体は桜姫の支配下にあるため、自由は全く利かなくなっている。

「――美咲……？」

藤崎も、美咲の異変に気付いたらしい。刀は相変わらず構えた状態のままにいるが、その表情は訝しさに満ちていた。

そんな藤崎を、美咲――否、桜姫は冷ややかに見つめながら口の端を上げる。

「フン。そなたのような低俗な男の手にかかるくらいなら、ナンジヨウに殺された方がまだ良いわ」

「……んだとてめえ！」

桜姫の挑発に、藤崎は怒りを爆発させた。室内であるにも拘わらず、刀を無闇に振り乱し、幾度となく桜姫に斬りかかってくる。

だが、桜姫はその動きを完全に見切っていた。不敵な笑みはそのまま、刀が振り落とされるたびに、まるで舞いでも踊っているかのように、軽やかに躲けてゆく。

「そなたもまだまだ青いのう」

ムキになって挑んでくる藤崎がよほど面白いのか、桜姫はなおも、

藤崎の神経を逆撫でさせそうな事を口走る。

案の定、藤崎は更に顔を上気させていた。

（桜姫！）

桜姫の行動を見かねた美咲が、苛立ちを籠めて桜姫に怒号を浴びせた。

（あんた、何藤崎を弄んで楽しんでんの？ しかもここは家の中だし、お父さんだつてすぐそこにいるんだよ？ お父さんを巻き添えにしないためにも、せめて場所を移すぐらいの配慮ぐらいしなさいっ！）

「ああ……、一々煩い……」

美咲からの説教に、桜姫は苦々しく顔を顰めた。それでも桜姫は、美咲と意識下で会話しながら、余裕で藤崎の攻撃を避けている。

「——分かった。そなたの言う通りにしてやる」

面倒臭そうに答えると、桜姫はサツと身を翻し、障子を開けて部屋を出た。

「おいてめえ！ 逃げんじゃねえ！」

辺りの埃を舞い上がらせんばかりの勢いで、藤崎が後から走って来た。

「やれやれ……。まだ本調子じゃないから、使える靈力も限られておるんだが……」

桜姫は、縁側の窓を素早く開けて、そのまま中庭へと飛び出した。不意を衝かれた藤崎は、それを追おうとしてきたが、突然、外に出る事を躊躇してしまった。

「どうした？ もう終わりか？」

桜姫が立ち止まって藤崎に問う。

藤崎は悔しそうに唇を噛み締めていたが、やがて、意を決したように追い駆けて来た。

「さて、ちよつと良い場所にあの男を連れて行ってやるかの」

桜姫は再び駆け出した。

それにしても、桜姫の身体能力の高さには驚かされる。藤崎も決

して足が遅いわけじゃないのに、距離を縮められる事が全くない。

（あんた、絶対運動音痴だと思ったのに……）

「ウンドウオンチ……？ 何じゃそれは？」

（この場合、走るのが遅い人、とでも言った方がいいかな？）

美咲が説明すると、桜姫は「私も随分と見縊られたもんだな」と返してきた。

「とにかく今は、少し黙っておれ。走っている最中に話していたら、余計に体力を消耗してしまう」

桜姫はそれを潮に、美咲との会話を遮断してしまった。

美咲としては、まだ言い足りなさを感じていたが、桜姫の言い分も尤もだと思い直し、しばらく口を噤んだ。

第十二章 第一節

理美から連絡を受けてから三十分後、南條は、ようやく本家の敷地内へと到着した。

車から降りると、辺りは静寂に包まれ、異様な気が漂い続けている。

（まあ、この一帯は、元から陰気臭さはあったが……）

南條は眉を顰めながら、その場で雅通の到着を待つ。

あれからすぐに、雅通にも連絡を入れたから、もうじき着くであろう。

そう考えていた、まさにその時だった。

本家の母屋のある方向から、何かがこちらに向かって来た。

「何だ……？」

南條は怪訝に思いながら首を捻った。それは徐々に距離を縮めてくる。人である事は、遠巻きであつても一目瞭然だったが、顔が確認出来る所まで近付いて来た途端、ギョツとした。

美咲が、抜き身の刀を握った藤崎に追われていた。よほど慌てていたのか、二人とも靴を履いていない。

だが、驚いたのはそこではなかった。

全速力で追つて来る藤崎を相手に、美咲は涼しげな表情で走っている。しかも、一定の距離を保ったまま、詰められもしなければ離されもしない。

茫然とその様子を眺めていたら、美咲は南條の存在にすぐ気付き、彼の前まで来ると、ピタリと足を止めた。

藤崎もまた、少し離れた場所で立ち止まり、ゼイゼイと息をしながら二人を睨んだ。

「やはり来おつたか、ナンジヨウよ」

体力を消耗し切っているであろう藤崎を無視し、美咲は、目を細めながら南條を見上げた。

その冷やかな視線に、南條の中で戦慄が走るのを覚えた。
いつもの美咲ではない。それはすぐに察した。

「——まさか……、桜姫か……？」

南條の問いに、美咲——いや、彼女を 器 とした桜姫は、口の端を上げた。

「こうしてそなたと対面するのは二度目じゃな。尤も、最初はミサキが私を力尽くで抑え込んでしまったから、実際には初対面となるかの」

「美咲はどうした？」

出来る限り、感情を押し殺しながら南條は訊ねた。

桜姫は「やれやれ」と深い溜め息を漏らす。

「そなたも心配性じゃのう。」

安心せい。美咲には何も危害を加えておらん。それに、この 器 を明け渡したのは美咲の意思でもある。——執拗に迫ろうとしてきた、あの男から逃れるために、な」

桜姫は藤崎を一瞥したが、興味が無いと言わんばかりに、すぐに南條へと視線を戻した。

その桜姫のあからさま過ぎる態度が、よほど腹に据え兼ねたのだろう。藤崎は桜姫に向けて、「おい！」と声を荒らげた。

「てめえ、人をおちよくるのも大概にしやがれ！俺だってな、この南條と同じ霊力を持つてんだから、ちよつと本気を出せば、てめえを消す事ぐらい造作でもねえんだよ！」

「ああ……。弱い犬ほどよく吠えるわ。少し黙っておれんのか」

「こんの……！」

怒りに任せて、藤崎が、背を向けた状態の桜姫に突進して刀を振り下ろそうとした。

（不味い……！）

南條は咄嗟に、桜姫を自分の後ろに回して庇うと、藤崎の右手首を強く握り締めた。

「て、め……」

手首に重圧を加えられた藤崎は、しかしなお、桜姫に斬りかかる
うと必死になっている。

（動物以下だな）

憐憫の情を籠めた眼差しで藤崎を見ながら、同時に、これが俺と
同じ能力者とは、と心底呆れた。

「少し頭を冷やせ、藤崎」

表情一つ変えず、南條が口を開いた。

「何があつたか知らないが、下らん事で周りが見えなくなるようじ
や、お前もまだまだだな」

「て、てめえまで……！」

必死で手を振り払おうとする藤崎だったが、南條も、握り締める
それに更に力を籠める。

「はっ、離せ……！ 血が止まる……！」

「だったら今すぐ、その刀を引っ込めろ」

「くっ……。わ、分かったよ……！」

よほど痛みに堪えかねたのか、思いの外、素直に刀を消した。

南條はそれを確認してから、ようやく藤崎を解放した。

「ったく……。加減つつもんを知らねえのかよ……」

ブツクサとぼやき、藤崎は自らの右手首を何度も擦っていた。そ

こには、見事に南條の手の痕が残っている。

「余計な真似をしおって」

南條の背後から、忌々しげに呟く声が聴こえてきた。

肩越しに振り返ってみると、桜姫が眉根を寄せて睨んでいる。

「別にそなたに庇って貰わなくとも、その男の相手ぐらい、私一人
でも出来たというのに……。せつかくの楽しみが台無しじゃ」

桜姫は大袈裟なほど、深い溜め息を漏らす。この様子だと、わざ
と藤崎を挑発して怒らせたように思える。

「桜姫」

南條は真っ直ぐに桜姫を見据え、口を開いた。

「俺はお前がどうなるうと知った事じゃない。けどな、お前の魂は

美咲に繋がっているから、危機に陥ったら、黙って見ていられるわけがない」

「ほう」

桜姫の目が細められた。

「そんなにミサキが大切か？」

「考えるまでもない」

迷いもせず、南條ははっきりと告げた。

「美咲は俺にとって、かけがえのない存在だ。美咲が側にいて幸せそうにしてくれているだけで、俺も満たされる。——桜姫、お前だって、その気持ちは分かるんじゃないのか？」

「——そうじゃな」

桜姫は、愛しい者の存在を想い浮かべたのか、一瞬ではあったが、表情が和らいだ。最強の巫女姫であろうとも、大切な者を想う気持ちは、普通の人間と何ら変わりはないのだろう。

「おい」

すっかり除け者にされた藤崎が、不満を露わにして二人の間に入ってきた。

「てめえら、いちゃつくんだったら余所でやれよ。つうか、俺はもう戻るぜ？」

藤崎はそう言っ、踵を返そうとした時だった。

「まあ、待て」

桜姫が呼び止めた。

「まだ何かあんのかよ？」

つつけんどんに訊ねる藤崎に対し、桜姫は口角をわずかに上げた。「そなた、どうせ戻っても暇を持て余すだけなんじゃろう？ だったら少しばかり付き合え。もちろん、ナンジョウもだ」

勝手に決め込むと、桜姫は藤崎の答えも聞きもせず、背を向けて歩き出した。

南條に異論はない。桜姫に何か考えがあるのだろーと思ひ、彼女に並んだ。

「仕方ねえな！」

藤崎はわざとらしく声を上げると、二人を追うような形で歩を進めた。

雅通が自前のバイクを飛ばして藍田本家へ到着すると、敷地内には、既に南條の車が停められていた。

「あれ？　もしかして先に母屋に行っちゃったのか？」
車を凝視しつつ独りごちた。

その時だった。

「彼は母屋にはいないわよ」

どこからともなく、鼻を突く強い芳香と共に、透き通るような女の声が聴こえてきた。

瞬間、雅通の全身が粟立った。その匂いと声の主の正体は、考えるまでもない。

「――琉璃？」

思い付いた名を口にすると、その者は、どこからともなく雅通の前に姿を現した。

「お久し振りね」

琉璃は雅通と顔を合わせるなり、以前のように、小首を傾げながらニコリと愛想笑いを見せる。

だが、雅通は笑えない。初めて琉璃と逢った時は、あまりの妖艶さに魅了されてしまったが、今となつては、美しくも残酷な鬼女きじよとしか思えなくなっている。

「あなた、南條さんの居場所を知ってんのか？」

極度の緊張で、身体中が脈打っているのを感じつつ、静かな口調で琉璃に訊ねた。

「ええ、もちろん」

雅通とは対照的に、琉璃はどこまでも落ち着き払っている。琉璃にとって、雅通は恐るるに足りない存在であるから、どこまでも余

裕でいられるのは当然の事だろう。

「どこに行ったか、気になる？」

珠璃の問いに、雅通は少しばかり、顎に手を添えながら考えたが、南條よりも気になっていいる事を口にした。

「美咲と朝霞はどうなんだ？」

「桜姫は彼と一緒にいるわよ。でも……、朝霞はまだ、この家の中ね」

「まさか、朝霞を置き去りにした、なんてねえよな？」

「それはないと思うわ」

珠璃はきっぱりと言い放った。

「桜姫は桜姫で、ちよつと面倒に巻き込まれてしまったようだから。いえ、正確には、桜姫自ら、敢えてその種を撒いたようだけど」

珠璃の言っている事は、雅通にはさっぱり理解出来ない。しかし今は、中で独り取り残されてしまっているであろう朝霞を連れ出す事が最優先だ。

「独りで乗り込む気？」

雅通の心を読んだように、珠璃が訊ねてきた。

「仕方ねえだろ」

珠璃を真つ直ぐに見据えながら、雅通が答えると、珠璃は思わぬ事を口にしてきた。

「私もちよつと付き合わせてくれないかしら？」

「付き合わせろ、って……。あんた、何企んでやがんだ……？」

雅通は警戒心を剥き出しにする。

そんな雅通の視線をまともに受けた珠璃は、わざとらしく肩を竦めて見せた。

「大丈夫よ。今回ばかりは、あなたに危害を加えるような事は絶対にさせないから。もちろん、朝霞にもね」

そうは言つものの、やはり、端から信用出来ない。だが、独りで無闇に乗り込むよりは、危険も幾分か回避されるだろう。それに今は、目の前の鬼姫よりも、藍田史孝と、彼が呼び寄せた能力者

達の方が、よほどタチが悪く思える。

「ほんとに、変な真似すんなよ？」

雅通が念を押すと、琉璃はそれに答える代わりに苦笑いを浮かべた。

母屋に足を踏み入れると、外気とは打って変わり、ヒヤリとした空気が雅通の全身を覆い尽くした。

南條と初めて訪れた時も思ったが、この家は死んでいる。確かに人はいるはずなのに、まるで、その気配が感じられない。

「それにしても」

不気味なまでの沈黙に堪えかねて、雅通が口を開いた。

「勝手に上がり込んでやって良かったのか？ これじゃあ、不法侵入で訴えられても無理ねえよ……」

雅通のぼやきに対し、琉璃は無言で雅通を睨む。黙って歩け、という事かも知れない。

雅通は琉璃から視線を逸らすと、今度は、何も言わず歩を進めて行く。そのたびに、年季の入った床は、どんなに気を遣っても、ギシギシと軋んだ音を立てる。

その一方、琉璃からは足音が全く聴こえない。

雅通は一瞬、不思議に思った。しかし、よくよく考えてみると、琉璃は、見た目だけなら普通と人間と何ら変わりはないが、鬼王に全てを委ねた時点で、ヒトではなくなってしまうている。言葉は悪いが、感情を持つ 人形 と言ってしまった方が正しいだろう。「お喋りが過ぎるわね」

今まで黙っていた琉璃が、突然話しかけてきた。

雅通はギョツとしつつ、だが、自分は何も喋っていないかった事に気付き、怪訝に思った。

「私が言ったのは、この事よ」

琉璃は自らの胸元を軽く叩いた。

「あなたの場合、心の戸を開き過ぎよ。口もよく動くみたいだけど

……。

とにかく、心で独り言を話すのも、出来る限り控えなさい。人間でも、勘の研ぎ澄まされた者であれば、すぐに考えを読んでもしまうわよ？」

「――すいません……」

本音を言えば、人の心を勝手に読みやがって、と文句の一つも付けたい所だったが、珠璃に鋭い眼光を向けられた途端、思わず謝罪を口にしていた。

美女に弱いから、というのももちろんあるが、それより、珠璃から放たれる冷やかな気が、雅通を完全に怖気付けさせている。

（けど、こつちとしちゃ、まだ訊きたい事があるんだけどさ……）
心を読まれると分かった雅通は、敢えて、心の中で珠璃に話しかけてみた。

案の定、珠璃は即座に反応した。

「今度は何？」

あからさまに嫌そうな表情を浮かべながら、それでも、話に耳を傾ける姿勢を見せた。

雅通は、これ幸いとばかりに、一番疑問に思っていた事を口にする。

「あのさ、あんたは何で、朝霞をそんなに気にかけるわけ？」

「何故、私が気にかけているように思うのかしら？」

「いや、何となく……」

「ふうん……」

口では無関心を装ってはいるが、ほんの一瞬、珠璃の瞳が揺れたのを雅通は見逃さなかった。

「――私も朝霞と同じだから、とでも言っておこうかしら」
少しの間をおいて、珠璃が言った。

「あんたが、朝霞と同じ……？」

雅通は復唱してから、あつ、と思った。

「まさか、あんたも媒だったのか……？」

「あら」

これは予想外だったのか、琉璃はわずかに目を見開く。

「和海はともかく、てつきり、あなたは知らないとはかり思ってたわ」

「——あんた、俺を馬鹿にしてんのか……？」

口角を引き攣らせながら、雅通は琉璃を一瞥すると、彼女は平然と「ええ」と頷いた。

「分かつちやいたけど……、嘘でも否定して欲しかったよなあ……」
深い溜め息と同時に、ガツクリと肩が落ちる。

そんな雅通を目の前にしても、琉璃は相変わらず、表情を全く崩さない。元々、雅通よりも南條への興味が大きいんだから無理もない。

「一々落ち込まないで。さあ、行くわよ？」

琉璃に促された、まさにその時だった。

「誰が家に上がっていいと言ったの？」

背中越しに、女物の声が飛び込んできた。

一瞬、琉璃かと思ったが、ゆつたりと流れるような彼女の口調と違い、刺々しさを感じさせる。

「ほらね。やっぱり私も一緒に連れて来て正解だったでしょう？」

女の声を耳にした途端、琉璃は振り返りもせず、得意気にクスクスと笑い出した。

「しかも、とても遊び甲斐のありそうな子ねえ。私を存分に楽しませてくれそうだ、わ！」

最後の、『わ』の一声と共に、琉璃はフワリと身体を宙に浮かせた。

雅通は驚いて振り向くと、そこには、自分の背丈よりも大振りな槍を手にした女が立っていた。

（こいつ、前に聖地に来た女じゃん）

咄嗟に思った。彼女は確か、綾乃という名前だった。

「何であんたがここにいるんだ？」

雅通の問いに、綾乃はニヤリと口の端を上げた。

「『何で』？ そんなの確認するまでもないんじゃないかしら？
けど驚いたわね。まさか、鬼姫まで連れ込むなんて、さすがに予想
もしなかったわ」

綾乃は槍を構え直すと、珠璃に視線を移した。

「鬼姫、あなたも随分と運がなかったわね。言っとくけど、私は同
性には容赦しないの。あなたのような化け物には特にね」

「化け物、ですって……？」

珠璃の眉が、ピクリと痙攣した。

「どうやらあなた、よっぽど痛い目に遭いたいらしいわねえ？」

珠璃は、浮いた身体を地に着かせると、「そろそろいらっしやい
！」と声を張り上げた。

雅通が呆気にと取られている間に、妖鬼に憑かれた人間が、どこか
らともなく湧いて来る。その数は、ざっと見積もって十匹はいた。

「最近の人間って、随分と病んでいるのねえ。私がちょっと誘惑し
ただけで、この通り、すぐに堕ちてくれちゃうんだから」

ニツコリと余裕の笑みを浮かべる珠璃に対し、綾乃は忌々しげに
唇を噛み締めている。

珠璃はそれを、楽しげに見つめながら続けた。

「そんなわけだから、あなたには彼らの相手をして貰うわね。霊力
はそこそこ高そうだし、これぐらいは余裕でしょ？」

「私はあなたと戦う気でいたんだけど？」

「それは断るわ。疲れる事って、ほんとに嫌いなもの」

その台詞が、綾乃の怒りを増幅させたらしい。目をギラリと光ら
せ、珠璃に向かって、槍を振り落とそうとしていた。だが、それは
全て、珠璃が呼び寄せた妖鬼によって阻まれてしまう。

「チッ！」

綾乃は仕方なしとばかりに、妖鬼に槍を突き立てた。

南條には劣る。しかし、動きに無駄が一切ない。

雅通も綾乃と同じ能力を持っているが、綾乃の方が格段に強い。

綾乃の戦い振りを目にした途端、雅通の中で、沸々と劣等感が湧き起こった。

（しかも、女に負けてるって……）

複雑な想いを抱きながら、戦いを傍観していた時だった。

「早く行きなさい」

琉璃が雅通に促してきた。

「ここにいたら、あなたも巻き込まれるわよ」

「でも……」

「グダグダ言わないで！」

これまでの琉璃のイメージからは想像も付かぬほど、鋭い口調だった。

「あなた、ここに何しに来たの？ 朝霞のためでしょ？ だったらすぐに行つてあげなさい！ こんな所でグズグズしている間に、朝霞がどうなるか……」

んな、大袈裟な、と言いそうになったが、とても口に来るような空気ではなさそうだと察し、雅通は黙って琉璃の言う通りにした。それに、朝霞を心配する気持ちは琉璃と一緒に——いや、彼女よりも大きいかも知れない。

（南條さんもないんじゃない、俺がどうにかするしかねえだろ！）

心の中で言い聞かせ、雅通はその場から離れて行った。

仄暗くなつた廊下を歩いていると、一箇所だけ、明かりの漏れている場所を見付けた。

（まさか、あそこに朝霞が……？）

雅通は音を立てて唾を呑み込むと、息を殺して、一歩、また一歩と近づく。そして、部屋の前に着いてから、障子に手をかけ、一気に開け放った。

「……………」

目に飛び込んできた光景に、雅通は言葉を失った。

朝霞は確かにいる。しかし、そこにはもう一人、雅通としては非

常に有り難くない人物の姿もあつた。

「おや？ 君が来るとは意外だったな」

その人物の言い回しは、あからさまに雅通を馬鹿にしている。琉璃にも見下されるような態度を取られたが、目の前の人物にされる方が、比較にならないほど不快感があつた。

「どうした？ 朝霞を取り戻しに来たんじゃないのかね？」

「分かつてんなら、そこをとっと退け。——藍田さんよ」

苦虫を噛み潰したように眉を顰めながら、雅通は相手の名を口に
した。

だが、藍田は退けるどころか、今度は乱暴に朝霞を掻き抱く。

朝霞は全く抵抗する様子がない。が、よく見てみると、彼女の瞼は閉じられ、投げ出された両腕もダラリと垂れている。

「——あんた……、朝霞に何したんだ……？」

震える唇で言葉を紡ぐと、それを見た藍田が口角を歪めた。

「別に何もしてないよ。記憶を操作させるために、ちよつとばかり眠らせてやっただけだ」

「記憶を、操作……？」

「その顔は、どうやら信じていないようだな」

「当たり前だろ。つつか、あんたら確か、俺達よりも霊力が劣るんじゃないかつたっけ……？」

雅通の投げかけた疑問に、藍田は「そうだよ」とあっさり肯定した。

「君の言う通り、藍田の直系は霊力が低い。だが、私達にはそれを補えるだけの物を持っている」

「何を……！」

言いかけて、雅通は目を見開いた。

いつの間に出したのか、藍田の右手には短刀が握られてる。その切っ先は朝霞の喉元に突き付けられ、ちよつと動いただけで彼女を傷付けてしまいそうだった。

「——自分の娘を殺す気か……？」

雅通の問いに、藍田は「人の話を落ち着いて聞けんのかね」と呆れていた。

「確かに、見た目は普通の短刀だが、生身の人間に刺しても害はない。君達が靈力で精製する武器と同じような物だと考えて貰った方が早いかな。」

これは、靈力の低かった我々の祖先が、全ての力を集結させて作り上げた物だ。君達のように、自在に武器を出現させたり消したりするのは不可能だが、その代わり、どの能力者の力も発動出来る。

——本当は、これは藍田家に代々伝わる秘宝だから、あまり君達の目に触れさせたくはなかったのだが、止むを得んな」

藍田の手に握られた短刀が、ゆっくりと朝霞を貫いてゆく。

「……んっ……くっっ……」

意識を失っていても、苦しみだけは感じるのか、朝霞が小さく呻いた。その表情も、いつになく歪んでいる。

「ああ、この表情、あの女とおんなじだ……。見ていだけでゾクゾクする……」

藍田は喉の奥を鳴らして笑うと、更に深く短刀を突き刺した。彼から放たれるオーラは狂気に満ち、朝霞が苦渋に顔を歪ませるたびに、恍惚の表情を浮かべる。

「止せ！ほんとに死んじゃうっ！」

雅通は藍田から短刀を取り上げようとするも、藍田の握力は、外見からは想像も付かぬほど強い。

「くっ……」

雅通は奥歯を噛み締めながら、それでも何とか、藍田の腕は抑え込んだ。

「どこまで邪魔をする気だね、君達は？」

藍田は力を緩める事なく、忌々しげに吐き捨てる。

「君達は本来、鬼王と桜姫を封じるために、何度も転生を繰り返しつつ存在する。それに、君達の力は、ヒトとして生きる者には羨望されている。ヒトよりも超越した素晴らしい力、それを、

我ら人間の繁栄のために使おうとは考えないのか？」

「——何、言つてやがる……！」

異常とも思える藍田の言動に、雅通の怒りが頂点に達した。フェアじゃないと分かりつつ、藍田の脇腹を力任せに蹴り上げて突き飛ばし、腕の力が緩んだ隙に、朝霞を自らの元へと引き寄せた。

（悪い。ちよつと朝霞も巻き込んだ……）

心の中で朝霞に謝罪すると、彼女を片腕で抱き締めたまま、畳の上で蹲っている藍田を見下ろした。

先ほどまで偉そうに踏ん返っていただけに、その光景はとてつもなく滑稽なものに映っている。

（このクソオヤジ！ もう一発蹴散らしてやるか！）

そう思い、脚を振り上げた時だった。

「やめなさい」

真後ろから飛び込んできた声に、雅通の片脚は宙に浮いたまま止まった。

声の主は、ゆっくりとした足取りで部屋に入り、雅通の前に立った。

「無抵抗の人間に、これ以上、手荒な事は止めてくれないか？ 朝霞も奪還出来たんだ。それで十分だろう？」

穏やかな口調で諭してきたのは、美咲の父親であり、藍田の弟にも当たる貴雄だった。

貴雄は、朝霞を助け出すためにここに来たはず。それが何故、今は藍田を庇うような真似をしているのか。

貴雄の不可解な行動に、雅通は苛立ちを露わにさせた。

「貴雄さん……。あんた、結局どっちの味方なんだ？ 俺は南條さんから、あんたと美咲が朝霞を連れ戻しに行ったって聞いたから駆け付けたつてのに……」。

そうか。やっぱりあんたも、所詮は本家の人間だって事だな？

自分の娘や姪の命より、藍田の血を守る事が最優先。——そうなんだろう？」

「早合点もいい所だ」

さすがの貴雄も、雅通の無遠慮な言い方に、露骨に顔を顰めた。

「俺は、美咲と朝霞を守るためなら、本家と縁を切ってもいいと思っ
っているほどだ。だからと言って、無闇に暴力を振るう真似だけは
絶対にしたくない。」

雅通君、君は力で人を支配出来ると思っているのか？」

「——それは……」

雅通は返す言葉が見付からず、ただ、一点をジッと睨み続ける。
その傍らで、貴雄は藍田の側へ行つて屈み込み、彼の身体を起こ
した。

「一番非があるのはあなたですよ、兄さん」

穏やかだが、どこか陰のある口調で藍田に言った。

「朝霞の母親だけではなく、娘にまで手を出そうとするなんて……。
あなたの所業、あの二人はどんな思いで見ている事が……」

「お前の同情などいらん」

藍田は、貴雄の手を乱暴に振り払うと、雅通に視線を注いだ。

「全く、とんでもない奴だ。幾ら何でも、足蹴にするのは反則じゃ
ないか」

「それを言うなら、あなたの所にいる金属性の彼ですよ」

貴雄は苦笑を浮かべた。

「さっきまで、彼に鳩尾を殴られて、不覚にも気を失ってましたか
ら……。彼には申し訳ないが、雅通君よりも始末が悪いですね」

「まあ、それに関しては否定はせんよ」

蹴られた脇腹を押さえながら、藍田は、フンと鼻で笑った。

貴雄が言った 金属性の彼 とは、考えるまでもなく藤崎の事だ
ろう。

（にしても、藍田のこの様子を見る限り、藍田も藤崎をよっぽど持
て余してんだろうな……）

雅通は、聖地で少しだけ関わっただけだが、それでも、非常に面
倒臭そうだという印象だけははっきり残っていた。

「さて」

いつの間にか、貴雄が雅通の隣に立っていた。

「朝霞は、ウチに連れて帰りますよ。やはり、ここに置いておくのは非常に危険だ。また、あなたに変な気を起こされたりしたら、こっちも気が気じゃありません。——何より、理美が非常に胸を痛めるでしょうから……」

貴雄の言葉に、藍田は、投げ遣りな口調で「勝手にするがいい」と答えた。

貴雄はそれを見届けると、雅通に向き直った。

「では、そろそろ行こうか？」

そう促され、雅通は歩き出そうとしたが、朝霞が気を失っていた事に改めて気付いた。

（どうすっかな……）

少し考えた結果、朝霞を横抱きにした。本当は恥ずかしくて堪らなかったのだが、だからと言って、他に彼女を運び出す手段が全く思い浮かばなかった。

（目を覚ましちまったら、どんな反応されんだか……）

せめて、外に出るまでは大人しくしてくれ、と心の中で念じながら、雅通は、貴雄と共に部屋を後にした。

第十二章 第二節

雅通が藍田と対峙していた頃、南條と藤崎は、桜姫の案内の下、本家母屋の裏手に来た。

そこは、鬱蒼と木々が被い繁り、鬼王が封じられている 神の宿り場 とは、全く違う雰囲気を醸し出している。

何故、こんな場所に連れて来られたのか、南條は疑問に思っていた。

藤崎もまた、南條同様、訝しげに眉を顰めて首を捻っている。

「そなたら、何か言いたそうじゃの？」

二人の男を交互に見比べながら、桜姫が言った。

それに対し、真っ先に口を開いたのは藤崎だった。

「言いてえ事だらけだよ。」

桜姫、ここは一体何なんだ？ つうか、こんな所に何の用があるってんだ？ そもそも俺は、あんたを追っ駆けたせいで靴も履いてねえんだ。いい加減、足が痛くなってんだけどよ」

「だらしないのう」

桜姫は深い溜め息と共に、藤崎を横目で睨む。

「ちよつと足が痛むぐらいでグダグダと……。だからいつまで経っても、そなたは成長しないんじゃないか？」

「——てめえ、俺とは今日、初めて逢ったばかりじゃねえかよ？」

「フン。そんなの、さっきちよつと相手してやっただけですぐに分かったわ」

桜姫が小馬鹿にしたような笑みを浮かべると、藤崎はまたしても彼女に掴みかかりそうになった。

「いい加減にしろ」

そこへ、南條が仲裁に入った。

「藤崎、まだ懲りないのか？ 挑発する桜姫も桜姫だが、それに乗るお前もお前だ。——少し黙ってろ」

「てめ……」

藤崎は齒を剥き出しにして、南條に口答えしようとしていたようだが、南條はそれを、ギロリと睨み付けて黙らせた。

「ケツ！」

負け惜しみのように吐き出した藤崎は、南條から目を逸らせる。

南條はそれを一瞥してから、今度は桜姫に向き直った。

「桜姫、藤崎じゃないが、俺もどこへ向かっているか気になっている」

「来れば分かる」

藤崎の時よりも、明らかに語調が柔らかい。もしかしたら、少しは桜姫に気に入られたのだろうか。自惚れているようだが、そう思わずにはいられない。

「ここじゃ」

桜姫が足を止め、ある一点を指差した。

そこは、他の場所と違い、土が異様に盛り上がり、その周囲には、両手で余るほどの石が無造作に埋め込まれていた。

「これは……？」

眉根を寄せながら南條が訊ねると、桜姫は表情一つ変えず、「私の塚じゃよ」と答えた。

塚 という名詞が、一瞬、理解出来なかったが、よく考えてみると、塚は墓の意味もあると気付いた。

それにしても、改めて言われなければ、こんな所に墓があるなどとは想像も付かない。手入れも全くされていないようだし、完全に誰からも見放されてしまっていた事が、その様子からも窺える。

「ここにるのは私の 抜け殻 だ。それを塚に葬られたのも、人間共の気紛れに過ぎん。

ほんとに滑稽な話じゃ。魂の抜けた肉体は朽ち果て、土に還ってしまうだけだと言うのに……」

桜姫は口の端を上げながら、自分のために造られた塚を見下ろしている。その表情は、どこまでも冷やかなものだった。

側にいた南條は、複雑な心境だった。確かに桜姫の言ってる事は尤もだと思う。しかし、形ばかりでも、こうして弔って貰えたという事は、少なからず、桜姫の死を悼んでくれる人間がいたという証拠ではなからうか。

だが、桜姫の心は、そんな人間の優しさにも気付けなくなっていたほど、傷付き、荒んでしまっていたのも事実だっただろう。

（鬼王を愛したのが、何よりの証拠だろうな）

ふと、南條は思った。

たった一人でも、桜姫を理解し、支えとなってくれる人間。彼——もしくは彼女がいただけでも、桜姫の未来は、また違ったものになっただけかも知れない。

美咲も、鬼王や藍田家の闘争に巻き込まれず、普通に人生を送る事が出来たであろう。

「まだ、人間への恨みは消えないか？」

口を閉ざしたままの桜姫に、南條は訊いた。

桜姫は、塚から視線を外すと、南條と藤崎に向き直る。

「憎しみを越えてしまえば、私の魂は、とっくにこの世から消えておる」

当然の如く答えた。

「私は鬼王と逢ったあの日から、ヒトとして生きる道を棄てたのだ。鬼王から賜った生命があるからこそ、封印はされても、完全消滅させられる事はない。

私を完全に消す事が出来るのは、生命を与えて下さった鬼王のみ。——所詮、私はヒトガタにしか過ぎんのだからな」

そう語る桜姫に、憂いなど全く見受けられない。鬼王から最高の寵愛を受けているという自信からか、それとも、例えば、桜姫の片恋であったとしても、愛する鬼王に消されるのは本望だと思っているのか。

「俺は、ヒトとして人生を全うしたい」

気が付くと、南條は口にしていた。

「愛の形は人それぞれだ。他人がとやかく言う事じゃないのも分かってる。しかし、愛する者のために犠牲になる事は、決して美談なんかじゃない。寧ろ、哀しみを増やすだけだ。」

桜姫、お前はきつと、俺の考えを　綺麗事　だと嗤うだろうが、俺は、美咲と共に生き抜いてやる」

南條の言葉に耳を傾けながら、桜姫は暫しの間、彼をジッと見据えていた。

「そなたも、ミサキと同じだな」

桜姫から、フツと小さな笑みが零れた。

「私には、何故、ミサキがそなたに惹かれたのかが理解出来なかった。私にとって、人間の能力者——殊に、金属性の能力者は最大の敵だ。」

だが、こうして改めてそなたと話してみると、人間だった頃を思い出せるような気がする。——悔しいが、ミサキは、私以上に、見る目があつたようだな……」

桜姫はそこまで言うと、ゆっくりと瞼を閉じる。それと同時に、力が抜けたように、身体が南條の元へと倒れ込んだ。

南條は、咄嗟に彼女の身体を支える。

「……ん……」

南條の腕の中で、桜姫が小さく呻いた。

「大丈夫か？」

南條が彼女の顔を覗き込むと、ギョツと目を見開いていた。

「な、南條、さん……？」

この反応は、明らかに桜姫ではない。

「え……？　桜姫は……？」

魂を戻された美咲は、忙しく目を泳がせている。

「美咲が戻ったという事は、お前の中に還ったんだろう」

そんな彼女を見下ろしながら、南條は、笑いたいのを必死で堪えていた。

美咲は、少しばかり考えるような仕草を見せてから、「そ、そう

ですよね」と答えた。

「藤崎に追い駆けられてた所までは憶えてるんです。けど、それからの記憶は殆どなくなってる……」

藤崎という名前を聞いて、南條はハツとした。

すぐ脇に視線を遣ると、除け者にされた藤崎が、懨然として二人を睨んでいた。

「——てめえら、俺を忘れてんじゃないよ」

すっかり呆れ果てている藤崎と目が合った途端、美咲は、慌てふためいたように南條から離れた。

南條も、内心では動揺していたが、冷静を装って微苦笑を浮かべる。

「桜姫のお陰で、思わぬ展開になってしまったな。また、真実を知る事が出来たのも確かだが。」

藤崎も、ある意味良い経験をしたんじゃないか？

「良い経験、だと？　フン！　こっちはとんでもねえとばかりを食らった気分だよ」

美咲が桜姫の魂と入れ替わるきっかけを作ったのは、どう考えても藤崎じゃないか、と南條は思ったが、言う事自体が面倒臭くなり、敢えて黙っていた。

「そう言えば」

美咲は不意に口を開いた。

「お父さんとアサちゃんは……」

紡がれた言葉を耳にした南條は、本来の目的をすっかり失念していた事を想い出した。

「——不味いな。急いだ方が……」

そう言いかけた時だった。

「心配は無用よ」

どこからともなく、女物の声と、一緒に、強い芳香が匂ってきた。

「——珠璃？」

美咲が名を口にすると、その主は、三人の元へと降り立って来た。

「お久し振りね。——あ、そちらは 初めまして になるわね」

琉璃は南條と美咲に微笑んでから、藤崎に顔を向けた。

突然の琉璃の登場に、藤崎は呆氣に取られている。

「心配無用、とはどういう事だ？」

当然の事ながら、琉璃の言っている意味が分からず、南條は疑問を投げかける。

すると、琉璃は「その言葉の通りよ」と、事もなげに言った。

「朝霞の事は、火属性の彼が助けてくれたし、桜姫——いえ、美咲だったわね？ あなたの父君も無事よ。

ついでに、朝霞は衰弱していたから、三人に、先に帰るようにとも言っておいたわよ。——桜姫の事は、和海に任せなさい、ってね」ニツコリと語る琉璃の言葉を、南條は、半信半疑で聴いていた。

「——何か、琉璃も私達を助けてくれたみたいね」

南條の気持ちに代弁するように、美咲が言った。

琉璃は、困ったように苦笑している。

「私はただ、桜姫を守るようにと鬼王から命じられているから。それと、個人的に朝霞も救いたかったからね」

「前者は分かるが、後者の意味が分からない」

南條は、怪訝に思いながら眉を顰めると、琉璃は、「考える必要はないわ」と、あっさり一蹴してしまった。

「さて、伝言は伝えたし、今日はこの辺で戻るわ。——あ、そうそう」

立ち去ろうとした琉璃が、藤崎を見た。

「あなたの所の火属性の彼女、私の可愛い子達と遊んでくれたお陰で、ちょっと疲れてしまったみたいね。後で、様子見に行った方が良くてよ？」

最後にそう言い残すと、今度こそ、琉璃はその場から姿を消した。藤崎は、暫し茫然と立ち尽くしていた。琉璃の言葉の意味も理解していない様子だったので、南條は、仕方なしに教えてやった。

「恐らく、一人で妖鬼を相手したんだろ。雑魚が相手でも、数が

多ければ、それだけ身体への負担も多くなるはずだ」

「って！ それを早く言えよ！」

藤崎は、消え去った珠璃に悪態を吐くと、土を蹴りながら駆け出した。

塚の前には、南條と美咲だけが取り残された。

「俺達もそろそろ……」

南條は言いかけて、不意に、美咲の足下に視線を落とした。

「足、痛くないか？」

「え？ —— あっ！」

南條の問いに、美咲は、今頃になって靴を履いていなかった事を思い出したらしい。

「やだ……。桜姫、このまんま外に出ちゃったから……」

片足だけ爪先を立て、自らの足を見下ろしながら、眉根を寄せている。

それを眺めていた南條は、頭で考えるよりも先に、美咲の身体を抱き上げていた。

地から足が離れた美咲は、何が起こったのか、と言わんばかりに、瞠目しながら絶句している。

「この状態で歩くのは不便だろ？」

美咲に向けて、ニヤリと不敵な笑みを見せる。

美咲は答えに窮しているようで、南條から視線を逸らしてしまっ

た。

それを見ていたら、更に意地悪してやりたい気持ちが生えてきた。

「折角だから、もっといい事をしてやるか？」

耳元で囁くと、美咲は困惑したように、面白いほど頬を赤らめる。予想通りの反応に南條は堪え切れなくなり、喉を鳴らして笑った。

第十三章 第一節

美咲と南條が藍田本家から戻ると、桜姫の塚の前で珠璃が言っていた通り、朝霞は貴雄と雅通によって救出されたく、部屋のベツドの上で眠っていた。

美咲は朝霞の無事にホツとしたのも束の間、朝霞を置いて、聖地に戻る事に躊躇いを覚えた。

自分はまだ、聖地でやるべき事が残っている。それはよく分かっていたが、だからと言って、心配を抱えた状態のままで修行に打ち込めるとはとも思えない。

未だ眠り続ける朝霞の前に、美咲は複雑な心境だった。

「――聖地に戻らない方がいいかもな」

不意に聴こえてきた低い声に、美咲はビクリと肩を上下させた。

声の主は、ずっと美咲の側にいた南條だった。

ゆっくりと首を動かして南條を見ると、彼は表情一つ動かさず、美咲に視線を向けている。

「失礼を承知で言うが、貴雄さん程度の力では彼女を守り切れるはずがないだろう。それに、藍田史孝はどこまでもしたたかな男だ。お前の事も含め、大人しく引き下がるとは考え難い」

「俺もそう思います」

南條の言葉に同調したのは、部屋の隅で胡坐をかいている雅通だった。

「しかも奴は、朝霞の記憶を操作させるとか、とんでもない事を言っていましたからね。――その話、丸々信じたわけじゃないですけど、でも、奴が手にしてた短刀、あれからは確かに、俺達能力者と同様の強い気を感じました。いや、もしかしたら、俺達が精製する武器より厄介かも知れない。――得体が知れないから、尚更……」

そこまで言うとは、雅通は両腕を組んで眉を顰めた。彼は、気を失っていた朝霞が、藍田の言う 秘宝 によって貰われる状況を目の

当たりにしていたのだから、余計に胸が痛んだに違いない。

「――伯父さん、ほんとに何を考えてるんだろ……」

南條から視線を外し、美咲は再び朝霞に向き直った。

「何となくだけど、本来の目的を忘れてるような気がする。あの人の狙いは、桜姫の魂を持った私を消す事だけだったはず。それなのに、どうしてアサちゃんの記憶を操作する必要があるの？」

鬼王完全復活の鍵となる私を金属能力者に始末させ、その上で鬼王を再び封印しちやえばそれで全てが終わるのに……」

本心としては、あまり言いたくなかった。何より南條が、後ろ向きな美咲を好まないのを分かっていたから。

だが、南條は美咲の気持ちを理解したのか、彼女を詰るような台詞は一切口にせず、静かに「そうだな」と頷いた。

「俺も瀧村の話を聞いていたら、単に美咲を消す事だけを考えているとは思えなかった。だからと言って、美咲の言う通り、奴の真の目的が全く分からない……」

これを汐に、三人の会話は途切れた。

美咲は朝霞を見つめたままだし、南條と雅通に至っては、各々、何か思う所があるのか、俯き加減に口を噤んでいる。

と、その時だった。

部屋のドアが二回ほどノックされてから、「ちょっと開けて」と声が聴こえてきた。

美咲は弾かれたように顔を上げると、ドアの側まで行って開いた。現れたのは、母親の理美だった。

「みんな、夕飯まだでしょ？ 少しでも食べないと」

そう言う理美の手許には、ほかほかの湯気を上げたビーフシチューと白飯が三人分、上手い具合に載せられた盆が握られている。

「そっか。食べる前に出かけちゃったから……」

現金なもので、ビーフシチューの匂いを嗅いだ途端、急激に空腹を覚えた。

美咲は「ありがと」と礼を言い、理美から盆を受け取る。

「食べ終わったら持っていくから」

「ええ。お願いね」

理美は短く答えると、三人を気遣ってか、すぐにその場を去った。理美がいなくなってから、美咲は男二人を振り返った。

「さ、食べましようよ。お母さんのシチューはほんとに美味しいですから！」

先ほどとは打って変わって明るく言いながら、部屋を中心に置かれた小さなテーブルに、それぞれの器を並べてゆく。

最初は微動だにもしなかった男達だったが、美咲に「ほら！」と催促され、渋々ながらテーブルに移動してきた。

「それじゃ、頂きまーす！」

美咲は両手を合わせてから、そそくさとスプーンを手にし、熱々のシチューにそれを潜らせる。そして、フウと何度か息を吹きかけて冷ますと、ゆっくりと口に運んだ。

「折角だから食うか」

苦笑を浮かべつつ、南條はスプーンを取ってシチューを黙々と食し出す。

すると、雅通も釣られたように食べ始めた。

「どうです？ 美味しいでしょ？」

スプーンを握ったまま、美咲は男達に同意を求める。

「ああ。美味しいな」

そう答えたのは南條だった。

「俺は一人暮らしが長かったからな。一応、たまには自炊してたものの、自分で作った飯は決して美味しいとは思えなかった。――後は、独りで食ってるって虚しさも、どこかであつたのかも知れない」

南條の表情に、ほんの一瞬ではあつたが翳りが差した。

早くに父親を亡くし、母親に、半ば反発するような形で家を出てしまった南條には、美咲の境遇が羨ましく思えたのかも知れない。
(悪い事しちゃったかな……)

美咲は動かしていた手を止め、シチューに視線を落とす。

すると、美咲の頭に何かが優しく触れた。それは、南條の手だった。

「悪いな」

南條は髪を撫でながら、静かに口を開いた。

「つい、変な事を言ってしまった。でも、俺は別に嫌味じゃなくて、素直な気持ちを言っただつたんだが……」

顔を上げると、困ったように笑みを浮かべる南條と目が合った。

美咲の鼓動が、トクトクと脈打つ。

そのまま、南條に身を預けそうになったが――

「いちやつくのは勝手だけどさ」

咳払いと共に聴こえてきた声に、美咲はハッと我に返った。

声の主――雅通を見ると、彼は冷ややかな視線を注いでいる。

「少し場を弁えたらどうよ？ 朝霞は寝ているからともかく、バツチり起きてるこっちは、嫌でもあんたらが目についちまう。――てか、それ以前に、そんなに二人だけの世界を作りたいってんなら、ここを出たらどうだ？」

雅通の言う事は尤もだ。だが、まだ食事中だから出るに出られない。

「――食べたらずく出るよ」

雅通に向けて言うと、美咲は再びスプーンを動かす。

南條もまた、雅通の視線を相当意識しているらしく、美咲同様、そそくさと食事を続けた。

食事を済ませてから、美咲と南條は予告通り、朝霞の部屋を辞去した。

一方、雅通はまだ残っている。

雅通曰く、『朝霞が心配だから』という事だが、それにしても、いつの間に二人は親しくなったのだろうかと美咲は思った。半面で、朝霞が少しずつ変わってきた理由も明確になり、内心ホッとした。

「美咲」

キッチンで洗い物を済ませたのと同時に、南條が声をかけてきた。美咲は食器を水切りカゴに載せてから、南條に視線を向けた。

「何ですか？」

「お前、これからどうする？」

「は？」

南條の問いに、美咲は口を小さく開けながら目を丸くさせた。

「何って……、後は自分の部屋に戻ろうと思っていましたけど。――どうかしましたか？」

重ねて訊ねてみると、南條は一呼吸置いてから徐に口にした。

「ちよつと、俺に付き合ってくれないか？」

「え？　今からですか？」

「ああ。でも、もし疲れてるなら無理にとは言わない」

いつになく遠慮がちだ。美咲は不思議に思いながらも、「いいですよ」と頷いた。

「でも、お父さんとお母さんに言わないと……。南條さんが一緒にら反対される理由なんてないと思いますけど、一応」

これには南條も納得したらしく、「そうだな」と口許に笑みを湛えた。

「それじゃあ、一言言ってから出るか？」

南條のこの言葉を合図に、二人はキッチンを出て、両親の部屋へと向かった。

外に出ると、ほどよく涼しい風が二人の前を吹き抜けてゆく。

それにしても、大丈夫だという確信があつたとは言え、両親から外出許可を貰えたのは、嬉しいよりも拍子抜けしてしまった。ほんの少しでも渋られるのでは、と美咲は心の奥で懸念していたから尚更だった。

「あの、南條さん？」

南條の行動を目にした途端、美咲は目を大きく見開いた。

それと言つのも、南條は何を思つたのか、自分の車のドアにキー

を差したからだった。

「まさか、車に乗るんですか？」

美咲の問いに、南條は「そうだ」と答えた。

「俺のアパートまでは、さすがに歩いて行けないからな」

「……………」

当然の如く言葉にした南條に対し、美咲は絶句した。

南條はそれを見つめながら、わずかに肩を竦めて苦笑を浮かべた。
「大丈夫だ。別にお前に何かしようとは思ってないから」

南條に言われるがまま、車に乗ってから約二十分ほどして、彼の
アパートに到着した。

美咲は南條に初めて逢った日、そして、雅通と引き合わされた日
と、合わせて二回訪れているが、何故か、初めて来たような不思議
な感覚を覚えた。

あの時は日中で、今は遅い時間だからという違いもあるからだろ
うか。

それにしても、南條が、わざわざ美咲をアパートに連れて来よう
とした真意が分からない。

（『何もするつもりはない』って言ってたけど……）

南條は真面目な男だ。どんな状況に陥ろうとも、変に手出しはし
てこないと信じている。信じているつもりだが、心の奥底では疑念
が湧いている。

一方、南條は、途中のコンビニで調達したペットボトル烏龍茶の
入った袋を手を持ち、黙々と鉄製の階段を上って行く。

辺りが静まり返っているから、その足音は、一層響き渡った。

部屋の前に着くと、南條は手にしていたキーの束から一つを選び
出し、それを鍵穴に差し込んだ。

カチャリ、と鍵の外れる音がした。同時に、美咲は息を呑む。先
ほど以上に緊張が全身を走った。

「大丈夫だ」

よほど強張った表情をしているように見えたのだろうか。美咲を見るなり、南條は困ったように笑んだ。

「ただ、この方がゆっくり話を出来ると思ったから連れて来ただけだ」

そう言うのと、南條は美咲から視線を逸らし、靴を脱いで部屋の奥へと入って行く。

美咲は一瞬躊躇ったが、ここまで来ちゃったんだし、と意を決して、南條の後を追った。

電気が点けられると、見覚えのある光景が目飛び込んだ。家具の位置も、年季の入ったテーブルもそのまま、主人の帰りを待ち侘びていたかのように整然としていた。

「どうした？ 立ってないで座れ」

南條に言われ、美咲はハッと我に返った。

「ご、ごめんなさい！ ちょっとぼんやりしちゃってました」

慌てて手近な場所に座ると、南條は「変な奴だな」と可笑しそうに口許を歪めながら、美咲の前に、ペットボトル烏龍茶を一本置いた。

「呑めば少しは落ち着くだろう？」

「あ、はい。ありがとうございます」

美咲は、小さく頭を下げてからペットボトルを手に取り、力を入れてキャップを捻った。

「――桜姫の墓に行つて」

烏龍茶を三分の一ほど呑んでから、南條が口を開いた。

「少しばかり、彼女の本心を聞いた。上辺では気丈そうに振る舞っていたが、美咲の肉体を通して発せられた桜姫の声は、どこか哀しみに満ち溢れていたのを感じた。

鬼王に心酔し、そして、人を憎む事でしか存在価値を見い出せない。――実に憐れだ……」

南條の言葉を聴きながら、美咲は不意に、胸が締め付けられるような苦しさを感じた。

美咲の中の桜姫は何も言わない。しかし、口に出さないだけで、器 となっている美咲に、自分の心の叫びを訴えようとしているのだろう。

「——どこで道を誤っちゃったんだろう……」
殆ど無意識に口にしていた。

南條はペットボトルから口を放し、美咲に真剣な眼差しを向ける。そんな南條と視線を交わしながら、美咲は徐に続けた。

「今更、こんな話をするのも変だって自分でも思います。けど、ほんの少しでも、桜姫の辛さと苦しみを理解してくれる人がいたならば、って……」

桜姫は確かに怖い。それは、魂を共有している私が一番よく分かっています。分かっているからこそ……」

そこまで言うのと、瞼の奥に熱いものが込み上げてきた。それは、何色にも染まらぬ透明な雫となり、美咲の頬を伝ってゆく。

「——あ……」

美咲は涙を止めようとした。しかし、滾々と湧き出る泉の如く、留まる所を知らない。

ふと、南條の手が美咲の頬に伸びてきた。長い指先は、優しく、労わるように涙を拭う。

美咲は堪え切れず、南條に身を委ねた。桜姫の痛みは自分の痛みも同様だ。だから、どんな形でもいいから癒して欲しいと思った。

そんな美咲を、南條は何も言わずに抱き締めてくれたが、美咲は物足りなさを感じていた。

「キス、してくれないんですか？」

いつもならば、美咲からは絶対に口にしない台詞だ。だが、今の彼女には、羞恥心などというものは一切湧かなかった。もしかしたら、誰もいない密室に二人きりであるという状況に酔い痴れてしまっているのだろうか。

南條は、美咲を自らの胸に掻き抱いたまま、微動だにもしなかった。

恨めしい気持ちを抱えつつ、上目で南條を睨むと、眉根を寄せている彼と視線が合った。

「私を軽蔑してます？」

美咲は、自分でも驚くほど冷静に訊ねていた。

わずかな間、南條は思考を巡らせるように目を泳がせていたが、やがて、「いや」と首を横に振った。

「美咲を軽蔑する理由は、俺にはない」

南條は美咲の顎に手を添えると、ゆっくりと顔を近付けてきた。

美咲から南條にキスを催促したはずなのに、やはり、唇が重なる瞬間は胸の鼓動が速度を増す。

南條の口付けはいつになく長く、そして、深かった。

息苦しさを覚え、美咲は離れようとするものの、南條はそれを決して許さず、力尽くで彼女の頭を強く押さえ付けている。

美咲から、徐々に力が抜けてゆく。意識が朦朧とし始め、このまま、南條に全てを投げ出しても良いとすら思った。

しばらくして、南條は唇を離した。

「すまない」

南條の口から、謝罪の言葉が出た。

美咲は瞠目したまま、涙で濡れた瞳を南條に向けた。

「どうしてですか？」

やや非難を籠めて訊ねると、南條は困惑したように複雑な表情を浮かべた。

「——やっぱり、お前は最後まで抱けない」

南條の言葉に、美咲は不満を露わにした。

「そんな目で見な」

南條は苦笑しながら、そっと美咲の髪に触れる。

「俺も所詮はただの男だ。好きな女と二人きりでいて落ち着いていられるわけがない」

「だったら……」

「いいから聞け」

南條は諭すように言いながら、自らの人差し指を、美咲の唇に近付けた。

「俺は、心の底から美咲が大切だと想ってるんだ。だからこそ、軽率な事をして美咲を傷付ける真似だけは絶対にしたくない。それに今は、まだその時じゃない。藍田本家、そして、鬼王との決着が着くまでは、な」

南條の口許が綻ぶ。包み込むような眼差しで美咲を見つめながら、再び、頬を優しく撫でた。

「前にも言ったが、俺は独占欲が強い。一度手に入れた物は、どんな手を使っても守り抜く。」

美咲の事は、他の男になんて指一本触れさせやしない。——鬼王にもだ」

南條の真摯な想いは、美咲の胸にゆつくりと広がった。

考えてみたら、こうして真剣に気持ちを伝えられたのは初めてだった。だからこそ、喜びも一層大きい。

「私も、南條さんが好きです」

南條を真っ直ぐに見据えながら、美咲も想いを告げた。

「南條さんは大人で、私はまだまだ子供だけど、これから南條さんに見合うようないい女になります。——南條さんを想う気持ちは、誰にも負けないって自信がありますから」

美咲が言い終えるのと同時に、南條は驚いたように目を丸くさせた。

「敵わないな、美咲には」

南條は喉の奥を鳴らして笑いながら、額を美咲のそれに軽くぶつけてきた。

「お前を困らせてやるつもりが、知らないうちに、俺の方がお前に翻弄されてる。——もう、お前なしの日常なんて考えられなくなってるしな」

「そんなに、ですか？」

「——お前は違うのか？」

美咲に問い返してくる南條。心なしか、少し拗ねたような雰囲気
が伝わってきて、つい、笑いが込み上げた。

「——何が可笑しいんだ？」

「だって、南條さんが可愛いから」

「可愛い……？」

怪訝そうに眉を顰める南條に、美咲は「はい」と頷いて見せた。

「感情的な南條さんって、なかなか見られるものじゃないですから
南條さんのお母さんに委縮している南條さんも意外でしたけど。

普段は私だけがヤキモキしていますから、逆に南條さんを困らせ
てみたいです」

「美咲」

不意に、南條から笑みが消えた。同時に、瞳が妖しい光を帯びた。
「調子に乗って、男をからかうもんじゃない」

どこまでも冷やかな物言いに、美咲は息を呑んだ。言いようのな
い恐怖に鼓動は高鳴り、唇も小さく震えている。

「あ、あの……」

辛うじて口を開いた時だった。

「……ククツ……」

美咲から顔を背け、南條は肩を震わせながら笑い出した。

「だから言っただろ？」

南條は美咲を一瞥した。

「俺もギリギリの所で抑えているんだから、どこで理性が打つ飛ぶ
か分からない。これからは不用意な言動は慎む事だ。——いいな？」
まるで他人事のように言う南條に呆れつつ、かと言って、返す言
葉も見付からなかったので、美咲は黙って頷く。

それを確認した南條は、満足気な表情を浮かべていた。

美咲と南條が朝霞の部屋を出て行ってから、一時間ほどが経過し

ていた。

雅通は変わらず、深い眠りに就いている朝霞の側にいる。

本家で目の当たりにした藍田の表情。あれはもう、常人のもではなかった。

藍田は狂っている。そんな事は、初めて対面した時にも感じてはいたが、今回はその比ではない。

（あの男、ほんとに何考えてやがんだ……？）

雅通は眉根を寄せつつ、朝霞を見つめた。

意識を失っていながらも、苦しげに顔を歪めていた朝霞。あれは、想い出ただけで胸が酷く痛む。

「美咲にも朝霞にも、生きる資格は十分過ぎるほどあるってのに……」

雅通は独りごちると、そつと、朝霞の頬に触れる。指先を通して伝わる、ほんのりとした温もり。朝霞も自分と同じ ヒト なのだと、改めて思う。

「俺は、どうしたらいい？」

答えなど返ってくるはずもない。分かっているながら、訊ねずにはいらなかった。

美咲と朝霞を救いたい。しかし、雅通は自分が無力である事を誰よりも理解していた。

不意に、南條の事が頭を過ぎった。

生まれながらにして最強の霊力を持ち、その上、周りからの信頼も厚い。むろん、雅通も南條を尊敬しているが、その半面で、自分にはない物を全て持っている彼が少し羨ましく感じた。

そして、同じ能力を持っている神山綾乃。彼女の圧倒的な力を目の当たりにした時も、雅通は自分の無力さをまざまざと思い知らされた。

雅通のように、潜在的な力がさほど強くない者は、ひたすら努力を重ねるしかない。もちろん、能力には限界があるのも重々承知している。

「ごめん……」

雅通は謝罪を口にする、手を朝霞の頬から手の平に移動させた。そして、空いていた方の手それも合わせて包み込む。

と、その時だった。

「……んっ……」

朝霞から、小さく呻く声が聴こえてきた。意識が戻ったのだろうか。

雅通は揺さ振り起こしたい衝動に駆られたが、どうにか抑え、固唾を呑んで様子を窺った。

そのうち、朝霞の眉間がわずかに動いた。と同時に、ゆっくりと瞼が開かれる。

「朝霞」

完全に目覚めたのを確認してから、雅通は朝霞の名前を口にした。朝霞は眼球だけを動かし、自分を見下ろしている雅通に視線を向けた。

「……瀧村……さん……？」

意識が戻ったばかりでぼんやりとしていたものの、雅通の事はすぐに分かったらしい。

雅通はホッと胸を撫で下ろし、口許に笑みを浮かべた。

「大丈夫か？」

「……はい。ちょっとたるさは残っているような気はしますが……」。——それより、ここは本家……、ではないようですね……」

「ああ、ここは本家じゃねえ。——帰って来たんだよ。お前が一番望んでいた居場所に」

「……私が……一番……望んでいた……」

朝霞は、雅通の言葉をそのまま繰り返すと、仰向けのまま、部屋の中をグルリと見回す。

「……ほんとに……大好きな場所です……」

いつもの如く、表情に全く変化が見られないものの、彼女の口調は喜びに満ち溢れている。それを感じた雅通も嬉しくなったが、す

ぐに表情を引き締めた。

「なあ、朝霞」

雅通に呼ばれ、朝霞は頭をわずかにもたげた。

「何ですか？」

無邪気な瞳を真つ直ぐに向けてくる朝霞。

雅通は胸が痛んだが、訊かないわけにもいかないと思い直し、意を決して口を開いた。

「お前さ、親父さんに拉致られてから何された？」

案の定、朝霞は表情を曇らせた。目を忙しく泳がせたかと思うと、部屋の一点に意識を集中させた。

「——私に……」

暫しの時間をかけて、重い口を開いた。心なしか、その唇は小さく震えているように見える。

「『私に』、何だ？」

先を催促する俺は随分と冷酷だ、と雅通も自覚していた。だが、少しでも、藍田に関する情報は知っておきたい。

急かされたものの、朝霞は、言葉を紡ぐのを躊躇っている。顔も次第に青ざめてゆき、うわ言のように、「いや……」を幾度も繰り返していた。

「大丈夫だから」

言っている本人が、何が大丈夫なもんか、と思っていたが、それ以上の言葉が見付からなかった。

「……せよって……」

掠れた声で朝霞が言った。

雅通は眉根を寄せながら、朝霞の口許に耳を近付けた。

「……私に、本家の意思に背く者は……、排除せよ……って……」
しっかりと聴き取った途端、雅通の表情が陰しさを増した。

自分に仇名す者は、何人なんびとであつても許すまい——

あの、冷酷無慈悲を絵に描いたような藍田であれば間違いなく言うだろう。分かってはいたが、改めて聴くと、衝撃が走る。

美咲は言うまでもないが、それ以上に狙われるのは、美咲と一番近い位置にいる南條。もちろん、南條ほどの男が、そう易々と消されるとは考えられないが、彼の父親——博和の例もある。

（そう言えば、どうやって南條さんの親父さんは殺害されたんだ……？）

不意に、雅通の脳裏に疑問が過ぎる。

藍田から、本家で鬼王と桜姫の過去の話聴いた後は、鬼姫に心を操られて闇に堕ちたのだと思い込んだが、真実が少しずつ明らかになるにつれ、本家が全面的に絡んでいる事が分かってきた。

しかし、まだ合点がいかない。何か、博和に隙を与えるような存在があったのだろうか、その存在自体がはつきりしない。

雅通は、朝霞から更に話を訊き出そうとして、止めた。

顔色を失った彼女に、これ以上の話をさせるのは無理があり過ぎる。いや、あそこまで言わせてしまった事に対し、既に後悔していたのだが。

「もういいから」

これだけ言うのが精一杯だった。

朝霞は、雅通の気遣いに安堵したのか、深い溜め息を吐くと、そのまま瞼を閉じた。

雅通は複雑な想いを抱えたまま、寝息が聴こえてくるまで唇を強く噛み締めた。

第十三章 第二節

日付が変わろうとしていた頃、美咲は、南條と共に帰宅した。着くまでの車中、二人は、会話らしい会話を交わす事は殆どなかった。自室に戻った途端、緊張の糸が切れ、美咲にドツと疲れが押し寄せた。

これなら、すぐにでも深い眠りに堕ちるかも知れない。そう思いながら、ベッドに倒れ込んだ。

暫しの時が流れた。

美咲は、仄かな芳香を感じ、ゆっくりと瞼を開ける。と、目の前の光景は、自室とは全く異なるものだった。

（ここは……？）

訝しく思いながら、辺りをグルリと見回す。

どこまでも続く草原と、辺り一面に咲き誇る色とりどりの花々。

すぐ目の前では、穢れ一つない小川が、涼しげな音を立てながら穏やかに流れている。

どう考えても、鬼王が封じられている 神の宿り場 ではなさそうだし、夢で桜姫と逢っている時の、靄だけの世界でもなさそうだ。「私がまだ、佐久良之姫 だった頃の時代だ」

肩越しに急に声をかけられ、美咲の心臓は大きく跳ね上がった。胸を手の平で押さえながら、ゆっくりと首を動かすと、そこには、予想通りと言うべきか、桜姫が添うように立っていた。

「桜姫が、佐久良之姫 だった頃の……？」

まさか、と思いつつ眉根を寄せたら、桜姫は、「信じておらぬようじゃな」と、困ったように微笑を浮かべた。

「だが、これからそなたに見せるのは、紛れもない 事実。本当は、こんな事はしなくなかったのだが、そなたは筋金入りの頑固者じゃからな。——いや、心のどこかでは、そなたに知って貰いたい

と思っていたのかも知れぬ……」

そこまで言うと、桜姫は、美咲の横を擦り抜けて歩いて行く。

美咲はわずかに躊躇ったが、桜姫がここまでする理由を知りたいという気持ちが強く働き、彼女に着いて行く事にした。

数分ほど歩くと、ようやく、人が住んでいるらしい集落に辿り着いた。

「ねえ、桜姫」

美咲は一つの不安を感じ、桜姫に声をかけた。

「どうした？」

「あのさ、桜姫が 佐久良之姫 だった時代って事は、私、相当浮いてるんじゃない？」

「何故そう思う？」

「——だって……、これ……」

美咲は、出かけた時のままの自らの着衣を指差した。そう、今、美咲達がいるのは現代ではない。美咲が桜姫に違和感を覚えたように、逆に古代人の彼らにとっては、美咲の格好は奇妙なものに映るであろう。見咎められたら、間違いなく異端者扱いされる。

だが、そんな美咲の心配を余所に、桜姫は、あはは、と声を上げて笑った。

「気にする事はない。そもそも、これは私の心象——いわゆる夢なんだからな」

「ああ、なるほど」

桜姫の説明で、美咲も納得した。つまり、彼女の過去の記憶を映像化して見せてくれている、という事なのだろう。

（楽しみ、なんて思っちゃいけないんだろうけど……）

美咲は今、新たな真実を知る事に気持ちが昂ぶっている。

桜姫にもそれが伝わったようで、「そんなに楽しいものじゃないんだがな」と呆れられた。

「とにかく、その目でしっかりと真実を見届けるといい」

桜姫が言い終えるのと同時に、誰かが、こちらに向かって歩いて来る。遠目でははっきりと顔が見えないが、何となく、見覚えがあるような気がする。

美咲は小首を傾げながらその人物を凝視し、徐々に距離が近付いて来た途端、目を見開いた。

「――な、南條……、さん……？」

思わず口にした名前に、桜姫は複雑な表情を浮かべる。

美咲が『南條』と呼んでしまった青年は、髪長さこそ違えども、強い意志を秘めた鳶色の双眸も、中性的な美しい顔立ちも、まさに南條そのものだった。

「驚くのはまだ早いぞ」

桜姫がそう言うや否や、今度は、「兄様！」と、鈴の鳴るような声が聴こえてきた。

南條によく似た青年は、声に反応し、ピタリと足を止めて振り返る。

美咲も、釣られるようにそちらに視線を向けた。

すると、桜姫同様、ダボダボの着衣に、薄い生地で作られたシヨールをかけた少女が、青年目がけて小走りに遣って来る。

動き辛そうだな、などと暢気な事を考えていた美咲だったが、またしても、少女の顔がはつきりと分かった途端、ギョツとした。

（――こ、今度は桜姫？）

驚いている間にも、少女は距離を縮め、青年の前に辿り着いた。

「どうした？」

青年から発せられた柔らかなバリトンの声に、美咲の胸は急激に高鳴った。それも、いつも美咲が耳にしている南條の声と全く同じ物だったから。

「また、行かれるのですか？」

少女の問いに、青年は、肩を竦めながら微苦笑を浮かべた。

「あれは、いつも独りぼっちで淋しいだろうから。せめて、兄である俺が少しでもあれの慰め役になってやらんと。――お前にとって

も、あれはたった一人の妹だろう？」

「それは分かりますけど……」

青年の言葉に、少女の表情は翳りを見せた。

「でも、あれは我々一族に——いえ、この国そのものにとっても脅威となる存在です。本来であれば、あれの霊力が覚醒した時点で黄泉に送り届けねばならなかった。——そんな危険分子に逢いに行こうとする兄様も兄様ですが……、無意味に生かし続けている父上も……、どうかしている……」

言葉を紡ぐ少女の身体は、小さく震えている。更に分かったのは、少女は、桜姫と同じ顔をしていても桜姫ではない事。そして、桜姫はどうやら、この青年と少女の妹らしい。

美咲は、チラリと桜姫を一瞥する。しかし、桜姫は、二人を黙って見据えているだけだった。もしかしたら、敢えて美咲と顔を合わせまいとしているのかも知れない。

美咲は再び、二人に向き直った。

少女に詰め寄せられた青年は、先ほど以上に困惑を隠せずにいる。

あらぬ方向に視線を彷徨わせ、やがて、諦めたように深い溜め息を一つ吐いた。

「——父上の考えている事は、俺にも分からん」

青年が、ゆっくりと口を開いた。

「だが、あれはお前が思っているような娘じゃない。お前とあれは、物心が付くか付かないかの頃に引き離されてしまったから知らないだろうが、あれは、人一倍純粹で繊細だ。だからこそ、神もあれを愛し、数多の御力を授けて下さった」

そこまで言う、穏やかだった青年の表情が、次第に陰しさを増した。

「本来であれば、あれを閉じ込めてしまうなど、神に対する冒瀆だ。いや、もしかしたら父上は、祠に入れて、あれを祀っているつもりかも知れん。だが、俺には分かる。——神は、我々の行いに御心を痛め、そして……、酷く御怒りであられる……」

青年は、フイと少女に背を向けた。もう、話す事は何もない、と言わんばかりに、少女との距離を広げてゆく。

「兄様っ！」

青年に向かつて、少女が声を張り上げる。しかし、今度は、青年の足が止まる事はなかった。

「行くぞ」

二人の遣り取りを傍観していた美咲に、桜姫が小さな声で促してくる。

「え？」

美咲が、どこへ？ と問う間もなく、桜姫は、先に立って青年の後を追う。

美咲も慌てて、それに着いて行つた。

しばらくして、美咲達はある場所へ着いた。

そこには一本の桜の木が立ち、近くには、木造りの社が建てられている。

（あ、ここって……）

「神の宿り場 じゃよ」

心の声に、桜姫が即座に答えた。

「ミサキの時代には、社は既に取り壊されてしまつて跡形もなくなつておるが、神の宿り場 だけは、鬼王を封じるために残しておるようだからな」

「どうして、社だけ壊しちゃつたの？」

「そんな人間の身勝手な事情など知らん」

桜姫は、鼻をフン、と鳴らした。

「それよりも、あやつを見よ」

桜姫はそう言つて、青年に向かつて顎をしゃくる。

美咲は言われるがまま、青年に注目した。

青年は、社の前まで行くと、扉を封じている門を押し、ゆっくりと開く。そして、入り口の前で履き物を脱ぐと、中へと足を踏み入

れた。

美咲は一瞬躊躇した。だが、桜姫は美咲にお構いなしに、相変わらずマイペースに行動する。

（どうせ私達の姿は見えないって言うんだし）

覚悟を決め、美咲も一緒に中へ入った。

外観を見た時もあったが、内装はそれなりに広い。しかし、天井は低く、割りと長身な青年は、頭をぶつけないようにと、身を縮めながら先を進む。

美咲の身長でも、天井に頭が付くか付かないかといった状態だった。

一方、桜姫は小柄だから、天井の高さは全く気になっていない様子だ。元々、自分の住居とも呼べる場所だった事もあるのか、我が物顔で颯爽と歩く。

そのうち、眼前に、格子状の扉が目飛び込んできた。そこにも門がかけられており、暗がりの中で、燈台の頼りない灯りがぼんやりと揺らめいている。

「佐久良」

青年は、格子の前に屈み込むと、灯りに向かって静かに呼びかける。

すると、奥の方から、わずかに衣擦れの音が聴こえてきた。その主は、確認するまでもない。

「——兄様……」

格子の前まで来た桜姫——否、佐久良之姫は、青年を見るなり、困ったように眉根を寄せた。

「また、いらっしゃったのですか？　こんなに頻繁過ぎると、父上からお咎めを受けますよ」

佐久良之姫の口調に、美咲は、あれ？　と思った。今、美咲のすぐ側にいる桜姫は、こんなに丁寧で穏やかな話し方は決してしない。（でも、佐久良之姫って桜姫なんだよね？　それなのに、この差は一体……？　それとも、桜姫になってから急に変わったとか……？）

美咲の心の声は、確実に桜姫に届いているはずだ。しかし、桜姫は気付かぬ振りをしている。

（そんな疑問はどうでもいいって事かな……）

美咲はそう思い直し、青年と佐久良之姫に視線を向けた。

「父上に何を言われようと関係ない」

佐久良之姫の心配を余所に、青年はサラリと受け流した。

「それよりも、身体の方はどうだ？ 先達で、少しばかり咳をしていたが……」

「——気にかけていて下さいましたの？」

「当たり前だ。こんな所で病に罹っても、誰も看病などしてはくれぬからな。もちろん、お前に何かあれば、俺は何を置いても駆け付けるつもりだが」

「またそんな事を……」

佐久良之姫の表情が、哀しげに歪んだ。格子の隙間からほっそりとした腕を伸ばすと、その手で、青年の頬にそつと触れる。

「兄様、あなたには、この国を守るという使命がございます。私にばかり感じていてはいけません。——姉様だって、兄様が私に逢いに行かれる事を、大層お苦しみになっておられるでしょう？」

青年は、グツと唇を噛み締めた。心配しているはずの妹に諭され、返す言葉が何も見付からないのであろう。

そんな青年に、佐久良之姫は小さく笑んで見せる。

「私は、こうして生かして頂けているだけでも、十分過ぎるほど幸せですよ」

佐久良之姫が言葉を紡いだのと同時に、辺りに靄がかかった。

「お、桜姫……？」

美咲は困惑して、隣にいる桜姫を凝視する。

「何を怯えておるんだか……」

すっかり動揺している美咲に対し、桜姫は至って落ち着いている。「言ったであろう？ これは私の心象だ、と。それに、この世界では私の自由が利くから、好きなように、私の心を見せる事が出

来る」

「それは分かつてるよ。けど、幾ら夢だつて、ビクリするもんはビクリするし……」

口を尖らせながら言う美咲に、桜姫は「やれやれ」と呟く。

「まあ、それもそなたの良い所かも知れんがな」

桜姫がそう口にするのとはほぼ同時に、靄はゆつくりと消え、今度は夜に切り替わっていた。

辺りには不気味な静寂が立ち込め、不意に、鬼王と夢で逢い続けた時の事を想い出した。

と、その時だった。

祠に、何かが近付いて来た。

美咲は一瞬、あの青年かと思ったが、彼とは全く違う気を感じた。
(これって……)

美咲の全身に戦慄が走る。この言いようのない悪寒は、今までに何度も体験している。

(間違いない。あれは絶対……)

美咲は、ゆつくりとそれに近付いた。怖くないと言えば嘘になる。しかし、あの正体をこの目でしっかりと見極めておきたい、と強く思った。

恐る恐る、その前に回り込み、目の前に立った瞬間、やっぱり、思った。

人影は、癖のない銀系の髪に黄金色の双眸を持つ男——鬼王だった。

遙かな時代を経て年を取らないのか、鬼王は、姿も形も、美咲が現代で見てきた彼と変わった所は何一つない。そこにいるだけで周囲を圧倒する存在感も、全く同じだった。

ふと、鬼王がこちらを見た。

気付かれたの？ と美咲の心臓は跳ね上がった。だが、それはあっさりと杞憂に終わった。

何事もなかったかのように、すぐに視線を逸らすと、鬼王は、今

度は社をジツと睨み出した。

鬼王の考えている事は、美咲如きが理解出来るはずもない。ただ、この場で立ち尽くして終わりなのだろうか。そう思った瞬間だった。鬼王の身体が、辺りの情景が透けて見えるほど薄くなった。これだけでも十分驚きだったが、彼は今度は、透けた自らのそれで、社の中へと侵入して行く。もちろん、青年のように、手を使って門を開けるといった事は全くしてない。

（鬼王は私達とは違う。違うって分かっているけど、やっぱり……）
鬼王の姿が完全に消えてしまっただけから、美咲は、暫し茫然とする。

「ミサキ」

側で名前を囁かれ、そこでやっと我に返った。

「そなただけでも、この中に入ってみるといい」

桜姫の言葉に、美咲は、怪訝に思いながら首を傾げる。

「何で私だけ？ 夢でも鬼王の姿が見れたんだから、しっかり目に焼き付けたらいいのに……」

「いや。ここは美咲だけで十分じゃ」

意味分かんない、と思いつつ、桜姫の頑なな様子を見ると、無理強いも出来ない。

美咲は言われるがまま、門に手をかけようとした。

「そんな事をせんでも、そなたも鬼王と同じように中に入れる」

桜姫にやんわりと突っ込みを入れられ、納得した。確かに、今の美咲は幽体のようなものだ。

「じゃ、気を取り直して」

美咲は深呼吸を一つすると、鬼王と同様、溶け込むように扉を通過する。

内部はやはり暗い。日中でも異様なまでの暗さだったから、これでは、昼夜の判別を付けようがない。

（しかも、どこ歩いてんだか分かんないし……）

日中は、青年の先導と桜姫がいたから良かったものの、今は独り

だ。しかも、鬼王はとつくに最奥部まで行ってしまったのか、影も形も見当たらない。

（桜姫の馬鹿！ やっぱ一緒にいなきや意味ないじゃん！）

右も左も分らないほどの暗闇に、美咲はすっかり不安に苛まれている。だが、いつまでも同じ所に留まっているわけにもいかない。

「しょうがない！ 独りで行くしかないじゃない！」

怖さを紛らわすため、わざと声を張り上げた。幸い、どんなに喚いても、桜姫以外の耳には届かないのだから。

第十三章 第三節

壁伝いに歩きながら、ようやく目的の場所へと辿り着いた。いや、佐久良之姫の幽閉部屋までは一直線なのだから、幾ら暗闇の中であつても、右往左往してしまう方がどうかしているのだが。

（桜姫がいたら、絶対鼻で笑われる……）

桜姫のあからさま過ぎる呆れ顔を想像していたら、勝手に独りでムツとしてしまった。

（それに比べて）

美咲は、格子の奥に潜んでいる佐久良之姫と桜姫を比較した。

姿形は確かに同じだが、本当に同一人物なのかと疑ってしまう。

日中に垣間見た佐久良之姫からは、確かに強力な気を感じたが、同時に、柔らかく穏やかな気も纏っていた。

（ほんとに、何があつたんだか……）

そんな事を考えながら、今度は、目の前にある鬼王の背中を凝視した。

鬼王は、格子の前で片膝を折った姿勢のまま、微動だにしない。

一瞬、そのまま寝てしまったんだろうか、などと余計な勘繰りまでしてしまったほどだ。

（でも、鬼王って寝たり食べたりしてるの？）

緊迫した中でも、どうでも良い疑問が湧く自分に呆れてしまう。

少し前までは、暗闇に怯えていたというのに、鬼王の姿を見た途端、美咲もすっかり安堵したようだ。

「——誰……？」

格子の向こう側から、鈴の鳴るような微かな声が聴こえてきた。

と、思っていたら、衣擦れの音と共に、声の主——佐久良之姫が姿を現した。

「——どなた？」

鬼王を見るなり、佐久良之姫は、怪訝そうに眉を顰めた。この様

子から、どうやらこれは、鬼王と佐久良之姫が初めて対面するシーンだと改めて認識した。

「そなた……、この辺りの者ではございませんね？　その髪と目の色——渡来人ですか？　いえ、そんな事はどうでも良い。——それより、どうしてここへ入って来たのです？　ここは禁忌の領域。易々と足を踏み入れてはならぬ場所です」

丁寧ではあるものの、青年と接していた時とは対照的に、言葉の一つ一つに刺々しさが入り混じっている。見ず知らずの、しかも、異国の者であろう鬼王に対して強い警戒心を抱いているのは、美咲にも伝わってきた。

一方、鬼王は、相変わらず一言も声を発しない。

美咲はさすがに気にかかり、回り込んで、彼の表情を窺った。

当然ながら、寝てはいない。しかし、佐久良之姫を見つめたまま、眉一つ動かさない。

人形のように全く動かない鬼王に、佐久良之姫の顔色が、徐々に蒼褪めてきた。

「——何が目的です？」

恐怖が限界に達したのだらう。そう訊ねる唇は、まるで別の生き物のように小さく震えている。

佐久良之姫の言いようのない不安は、桜姫の器である美咲にも見事に伝播した。何度も鬼王と対峙し、強くなってきたと自負していたつもりだが、心のどこかでは、まだ、鬼王に畏怖を抱いているのかも知れない。

「——同じだな」

今まで身動き一つしなかった鬼王が、初めて口を開いた。低く、透き通ったその声は、美咲が幾度も耳にし続けてきたものと全く変わらない。

「同じ　とは、どういう事です？」

恐怖に支配されながらも、佐久良之姫は、気丈に鬼王に問う。

鬼王は、微苦笑を浮かべると、「そのままの意味だ」と答えた。

「私もずっと独りだった。気付くとこの世に存在し、そして、自分が何者かも分からぬまま、永い時を過ごしてきた」

鬼王の言葉に、佐久良之姫の瞳がわずかに見開かれた。同時に、少しずつ、鬼王に対する警戒心が和らいでいた。

「そなたの、家族は……？」

「カゾク？ そんなものは知らぬ」

淡々と口にする鬼王を、佐久良之姫は憐憫の眼差しで見つめる。それをまともに受けた鬼王は、「そんな顔をするな」と、困ったように眉根を寄せた。

「私は確かに独りだ。見ての通り、徒人^{ただひと}ではない。しかし、今更、自分の正体を知りたいとも思わぬ。——ただ辛いのは……、私は、永遠に生き続けねばならぬという事だけだ……」

そこまで言うのと、鬼王の顔が歪んだ。

時に冷酷、そして、絶対的な誇りを持つ、亡霊を統べる最強の長——鬼王。そんな男が、佐久良之姫を目の前にして、自分の胸の内を吐き出した。

鬼王にもわずかでも感情があるのは、美咲も最近になって分かってきたものの、それでも、ここまで本音を明かす姿を見るのは初めてだった。

（それだけ、佐久良之姫に心惹かれてたって証拠かな？）

そう思ったものの、初対面の相手に対し、ここまで気持ちを吐露出来るものだろうか、という疑問も湧く。だが、鬼王は佐久良之姫に、『同じ』だと漏らしている。その言葉通り、彼は確かに、自分と佐久良之姫との境遇を重ね合わせていた。

（けど、哀し過ぎるよね……）

複雑な想いを抱えながら、美咲は、黙って二人の遣り取りを見つめる。

「——可哀想……」

姿の見えぬ美咲を代弁するように口になると、佐久良之姫は、格子の隙間から手を伸ばした。そして、白く華奢なそれで鬼王の頬に

触れる。途端に、彼女の表情に驚愕の色が浮かんだ。

「――そなた……」

佐久良之姫が言いかけた言葉を察した鬼王は、困ったように目を細めた。

「言ったであろう？ 私は、徒人ではない、と。だから、ヒトと同じ温もりは私にはない」

「そんな……」

泣きそうになっている佐久良之姫の手を、鬼王は、そっと包み込みながら首を横に振った。

「余計な気遣いは不要だ。それよりも、私はお前が側にいてくれる事を望んでいる」

「私が、そなたの側に……？」

重ねて訊ねる佐久良之姫に、鬼王がゆっくりと頷く。

「私はずっと求めていたのだ。永遠の時を、共に過ごしてくれる者を……。長きに渡り、自分と同じ魂を持つ ヒト を探し続け、今、やっと見付ける事が出来た」

鬼王は一呼吸置くと、佐久良之姫に告げた。

「儚くも美しき魂を持つ薄紅の姫よ、私と共に生きてくれぬか？」

誇り高い鬼王が、佐久良之姫に跪く。これもまた、見慣れぬ光景だっただけに、美咲は驚きを隠せなかった。

（しかも今の言葉、紛れもないプロポーズ……、だよな……？）

まるで、自分が愛の告白を受けたように、胸の鼓動が急速に高鳴った。しかも、鬼王と佐久良之姫を、心の中で勝手に、南條と自分に置き換えてしまった。

（ああもうっ！ こんなトコで妄想に浸ってどうすんのよっ！）

そう自分に言い聞かせて、妄想を掻き消そうとするものの、意識すればするほど余計な事を考えてしまう。更に、桜姫の夢に誘われる前に南條に抱かれかけたから、尚更、その時の経緯が脳裏を過ぎった。

（とにかく、私と南條さんの事はどっかに置かないと……）

美咲は何度も頭を振ると、再び、鬼王と佐久良之姫に集中した。

「——一つ、訊いても良いですか？」

佐久良之姫の言葉に、鬼王は瞼を上下させる。

それを肯定と受け取ったらしい佐久良之姫は、静かに続きを紡いだ。

「もし、私がそなたに応えたら……、私はどうなるのです？」

この問いに、美咲の心臓が、ドクンと脈打った。彼女には、その後の佐久良之姫の運命が分かっているだけに、冷静でいられるはずがない。

美咲は、胸の辺りを衣服ごと強く握り締めながら、固唾を呑んで鬼王の答えを待った。

「——私の命を、お前に捧げよう」

佐久良之姫の眉が、わずかに痙攣した。

美咲もまた、鬼王が言わんとした事が分かかってしまい、先ほど以上に動悸が速くなった。

鬼王に命を与えられる——つまり、佐久良之姫はその瞬間からヒト ではなくなる。

「……私は…… ヒト として生きる価値はないのか……」

佐久良之姫の穏やかな気が、少しずつ歪み始めた。

「…… 本当は…… こんな所に閉じ込められたくなかった……。

力も別に欲しくなどなかった……。何の力も持たない徒人で、そして、兄様を独り占めしている姉様がとても妬ましくて……。でも……

……これも私の 宿命 なんだと思っていたから……。

どうして……。どうして私だけが……。！ 私はただ……。兄様の隣で笑っていられるだけで幸せなのに……。！」

鬼王のさり気ない一言が、佐久良之姫の中に眠る深い闇を呼び覚ました。堰を切ったように感情を剥き出しにし、嗚咽とも、忍び笑いとも区別が着かぬような奇妙な唸り声を発している。

美咲はこれ以上、佐久良之姫を直視出来なくなった。眼前の 真実 から目を背けようと、瞼を固く閉ざし、両手で耳を塞ぐ。

（鬼王が佐久良之姫に負の感情を流した？ ううん、それだけじゃない。——やっぱり、ここまで彼女を追い詰めたのは、自分達の保身しか考えない人間の身勝手さだ……！）

どんなに目を閉じても、どんなに耳を押さえようと、ドロドロとした佐久良之姫の感情は、美咲の体内に流れ込んでくる。

もしかしたら、桜姫が敢えて、美咲に戒めを与えているのかも知れない。

（やだ！ やだやだやだっ……！）

何の力もない美咲は、駄々っ子のように悶える事しか出来ない。

そのうち、立っている事も間々ならなくなり、ガクリと膝を床に落とした。

「……ん……」

美咲は小さく呻くと、ゆっくりと目を開けた。

真っ先に彼女の目に映ったのは、天井に取り付けられていた蛍光灯。

「——戻って……、来たの……？」

つい先ほどまで、桜姫の夢の中にいたせいで、現との区別が着かずにいる。しかも、仄暗かった社とは対照的に、カーテンの隙間から眩い陽光が差し込んでいた。

美咲はゆっくりと上体を起こすと、そのままの姿勢で、見てきた真実を想い返す。

見たくないものを見てしまった、と思う半面で、真実を見極められた事は良かったとも思う。もちろん、あれはほんの一部に過ぎないだろうが。

「やっぱり、私は全てを知る権利があるの、桜姫……？」

訊ねるも、答えは返ってこない。もしかしたら、桜姫は眠りに就いてしまったのだろうか。

「——可哀想……」

夢の中の佐久良之姫が鬼王に呟いたのと同じ台詞を、美咲も口に

する。

それは、桜姫や鬼王ではなく、ヒトとしての心を失いつつある伯父——藍田史孝へ向けたものであった。

第十四章 第一節

月明かりに照らされた桜の木側に、一人の男が静かに佇んでいた。

銀色の髪に金の双眸を持つ彼は『鬼王』と呼ばれ、徒人に畏怖を抱かせる存在だった。

だが、最近は少し変わってきた、と、鬼王より新たな命を吹き込まれた琉璃は思う。

琉璃が、ヒトとして生きていた時代よりも遙か昔より転生を繰り返し、生き永らえてきた最強巫女姫——桜姫。その彼女の器となったかつての娘達は、気付かぬ間に自らの身体を支配され、気付かぬ間に身を滅ぼされてしまった。

そして現代、桜姫の器となった美咲。

琉璃は美咲と逢うまでは、彼女に対し強い嫉妬心を抱き、また、異常なまでに嫌悪した。それはまさに、朝霞が美咲に抱いていた感情と全く同じだった。

鬼王からも聴いた事があったが、琉璃や朝霞を含め、媒となつた少女達は皆、桜姫の器を疎ましく思っていたという。更に遡れば、媒の起源となつた娘もまた、一族から危険視されていた桜姫——正確には佐久良之姫——を、すぐにでも抹消してしまいたいほど嫌っていたらしい。

ただ、起源となつた娘の場合、また違つた事情もあったようだ。さすがに、鬼王はその詳細までは教えてくれなかったが。

「面白くなってきたな」

不意に鬼王が口を開いた。

琉璃は弾かれたように、鬼王を見つめた。

鬼王は桜の木を仰いだまま、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「あのアイダも、本気で動き出している。これまでは、美咲とあの男を黙って泳がせていたようだが……」

「ええ」

琉璃も静かに頷いた。

「今までは、南條和海を消す事を躊躇っていたようですが、どうあつても、あの男の心を揺るがす事は不可能ですから。ただ、南條和海は、現存する能力者の中では最強だと私も思っております。——あの男が消えたら、鬼王に立ちほだかる敵はいなくなる。そうならばこの世は、鬼王の意の儘になりましょう」

「どうだろうな」

琉璃の言葉に、鬼王は謙遜を口にしつつも、その金の双眸には、絶対的な自信が満ち溢れている。

鬼王が 絶対 と認める相手は、桜姫を除けば、琉璃も挙げた南條和海ただ一人だ。他は眼中にない。

しかし、その一方で、アイダも酷く気にしている。嫌悪している、という意味で。

古来から、アイダの一族は、自分達こそ 正義 だと信じ切っている。だからこそ、彼らに相反する者達を抹殺する事を美化して憚らない。

鬼王も冷酷無慈悲だが、アイダほど卑劣ではないと琉璃は思っている。

鬼王は、ヒトの心を持たないからこそ、どこまでも純粹なのだ。彼が初めて心を通わせた桜姫を未だに慕っているのが、何よりの証拠である。

（鬼王が自分を曝け出せる相手は、結局は桜姫以外にはいないのだわ……）

鬼王に新たな命を吹き込まれてから、一心に彼を想い続けてきたが、やはり、桜姫には敵わない。だが今は、以前に比べると、とても心が穏やかだった。

琉璃は、一度だけ逢った美咲を思い浮かべる。

桜姫の暴走を止めるため、南條の刀に貫かれた彼女は、身体こそ衰弱していたものの、茶味を帯びた瞳だけは強い生命力が溢れてい

た。

珠璃がヒトだった頃に存在した 器 とは、見た目はもちろん、中身も似ても似つかない。いや、美咲ほどの強い 器 は、未だかつていなかったかも知れない。

そして何より、鬼王に畏れる事なく、自分の揺るがぬ意志を伝えてきた。あの瞬間だけで、珠璃は、南條が美咲に惹かれた理由もはっきりと分かった。

「どうする？」

ぼんやりとしていた珠璃に、鬼王が声をかけてきた。

珠璃はハツとして、再び鬼王に向き直る。

鬼王は、桜の木から、今度は珠璃に視線を注いでいる。

「私はここから離れられぬ。故に、あの者達と戦う事は出来ない。しかし珠璃、お前は自由が利く」

「——それは、私が鬼王の代わりに戦って来い、と？」

「私が命令せずとも、自らアイダの元へ飛び込むつもりであろう？」

——あの時のようにな」

珠璃はわずかに目を見開いた。さすがに、鬼王は全てを見通している。

「——申し訳ございません……」

恭しく頭を垂れる珠璃に、鬼王は、「気にせずとも良い」と静かに言った。

「お前も、たまには腕慣らしをしないと身体が鈍ってしまうだろう。私が分け与えた霊力、あの者達のために存分に使え」

「——宜しいの、ですか……？」

恐る恐る訊ねると、鬼王の口角が少しばかり上がった。心なしか、その表情も、いつになく穏やかに映る。

「鬼王のお心遣い、しかとお受け取り致しました」

珠璃はその場に跪き、深々と敬礼した。

朝霞の拉致、本家救出から二日が経過した。

あれから本家側には、動きが全く見られない。

「さすがにこれ以上は、暢気に構えてられないわね」

そう口にしたのは、樋口江梨子。彼女は、夫の樋口泰明と共に実家に戻っていたが、南條の知らせを受け、美咲の家を訪れて来た。

久々に逢った樋口夫妻は、全く変わっていない。と言っても、離れていたのは一週間ちよつとだから、劇的な変化がある方がよっぽど驚いてしまうが。

とにかく、美咲、南條、樋口夫妻、雅通が揃ってから、リビングで、今後についての話し合いを始めた。その中には、理美と朝霞も混ざっている。が、主の貴雄は、日中は仕事があるので不在だ。

「今、重視すべき事は藍田本家の動向だな」

この中ではリーダー的存在となる樋口が、いつになく、重々しい口調で言葉を紡ぐ。

「あつち側にも能力者が三人いる。ただ、北山航太郎は戦闘系の属性じゃないから心配ないし、藤崎拓馬も……、金属性でも大した事はなさそうだから問題はない。厄介なのは、神山綾乃という少女だ。あの子をどうにか抑えられれば、こつちもだいぶ戦いやすくなると思うんだが……」

そして何より一番は、当主だな。得体の知れない武器を持っているだけに、対処のしようがない」

そこまで言うと、樋口は、チラリと朝霞を一瞥した。

朝霞は、口を真一文字に結んだまま、微動だにしない。恐らく、樋口の視線に困惑しているのだろう。朝霞の微妙な変化は、美咲も最近、少しずつだが分かるようになってきた。

「だからと言って、ただ指を咥えて黙ってるわけにもいかないでしょう」

実に絶妙なタイミングで、南條が口を開いた。

樋口を始め、今度は全員が南條に視線を向ける。

その瞬間、朝霞は胸を撫で下ろし、フウと小さく息を漏らした。

「今は息を潜めている状態ですが、本家側は間違いなく、そのうちに大きな動きを見せるはず。あの連中——いや、藍田史孝は、すぐにでも美咲を亡き者にしようと企んでいる」

「となると、藤崎を使う気だろうか？」

「確かに、奴にも封じられるだけの力がありますね」

南條は、樋口の問いに答えた後、「ですが」と付け加えた。

「藤崎に美咲は殺せませんよ。奴は抹殺してしまうよりも、生きた美咲を自分の側に置きたがっているからです。——そっちの方が、かえって性質たぶが悪いですが」

一頻り話してから、南條は眉を顰めて不快感を露わにした。

美咲もまた、藤崎の、自分を舐め回すように見つめる視線を想い出し、無意識に自らの身体を抱き締めた。あの男に囚われるくらいなら、いつそ死んでしまった方がマシだと思う。しかし、どんな状況であれ、軽々しく 死 を口にしてはならない。

「——まさかとは思いますが……」

これまで黙っていた雅通が、不意に口を突いた。

「南條さんを使う、とか……？」

「瀧村君！」

江梨子が咄嗟に声を荒らげた。

「あんた、冗談でも言っていない事と悪い事があるでしょ？ 口を慎みなさい！」

「——すみません……」

雅通は謝罪すると、そのまま俯いてしまった。江梨子の剣幕に驚いた、と言うよりも、自分が口にしてしまった言葉に後悔しているようだった。

だが、南條を使うというのは、可能性として有り得なくもないと美咲は思う。もし、藍田が本当に他人を操作出来る能力があるとすれば、何らかの手段を使って、南條を知らぬ間に操り、美咲を殺させようとするかも知れない。

美咲にも分かる。桜姫を封じられるのは、南條ただ一人しかないな

い。藍田もそれに気付いているだろうから、どんな手段を使っても、南條を、自分の元へと引き寄せようとするに違いない。

（でも、私は信じてる、南條さんを。どんな事があっても、南條さんは簡単に自分に負ける人じゃないから……）

美咲は、自分の隣に座る南條の横顔を見つめた。

南條は何か思案に暮れているようで、美咲の視線に全く気付いていない。

雅通が発してしまった言葉を気にしているのか、それとも、また別な事を考えているのか。

（信じてますから）

心の中で、美咲は再び強調した。

その日の夜、貴雄が帰って来てから、全員で夕食を囲もうという事になった。

キッチンでは、理美を筆頭に、江梨子と美咲、そして朝霞も支度に取りかかる。その間、男連中は賑やかに酒を酌み交わしている。

「まさか、この家がここまで賑わうなんて考えた事もなかったわ」

サラダ用のキャベツを千切りしながら、理美が嬉しそうに言った。

「やっぱり、大勢いると料理も作り甲斐があるもの。それに今は、

江梨子ちゃんという現役主婦さんもあるし、家事全般得意なアサちゃんもいるし、ほんと助かるわあ」

「——お母さん、約一名の名前が抜けてる気がするんだけど」

不満を露わにして美咲が言くと、理美は、彼女を一瞥して口の端を上げた。

「そうだったわね。美咲も最近は、よくお手伝いしてくれるようになったものね。まだまだ手付きは危なっかしいけど、主婦業なんて慣れなんだから、そのうち、嫌でも出来るようになるわよ。ね？」

理美の言葉に、江梨子にはこやかに、朝霞は真っ直ぐな視線を向けながら頷く。

「さて！ そろそろ煮物もいい感じになってるかも知れないわね。

江梨子ちゃん、ちょっと味見してくれる？ それとアサちゃんは、オーブンのチキンの焼け具合を見てちょうだい？」

指示を出された江梨子と朝霞は、てきぱきと動いている。

美咲はというと、この中では一番の下っ端になるので、食器を準備するのがせいぜいだった。

全ての準備が整い、キッチンで忙しく動き回っていた女性陣も、ようやく食卓に落ち着いた。

「今日はまた凄いな」

所狭しと並ぶ料理の数々を見るなり、貴雄が感嘆の声を出す。

「もちろんよ。今日はお客様がたくさんいるんだもの」

理美は得意げに何度も頷くと、お客様に当たる南條と樋口、瀧村に料理を勧め、アシスタントを務めてくれた江梨子と朝霞にも、後はゆつくりするようにと促した。

「とにかく、今ぐらいいは楽しく過ごしましょう。美味しいものをたくさん食べて、お酒もガンガン呑みまくって。あ、言っとくけど、美咲とアサちゃんはアルコールは一切ダメよ？」

「——お母さんに言われなくなって呑まないよ……。て言うか、お酒ってちつとも美味しくなさそうだもん。ね？ アサちゃんもそう思わない？」

唯一の未成年同士という事で、美咲は朝霞に同意を求めると、朝霞はポツリと、「そうね」と呟いた。

「私も多分、進んでお酒を呑もうと思わないかも知れない」

「いや、そればかりは分かんねえぜ？」

すかさず口を挟んできたのは雅通だった。

「意外と、朝霞のようなタイプはザルだったりするからな。周りがブツ潰れても、一人だけケロッとしてそうだ。美咲は……、酒癖悪いと見た」

「——ちよつと雅通、それどういう意味？」

美咲が立ち上がると、それと同時に、雅通も立ち上がる。

「やる気かい？」

「ええ！ やったるわよ！ その減らず口、今すぐ閉じさせてやるっ！」

「てめえ……！」

和やかだったはずの宴会の中、美咲と雅通の口喧嘩が勃発してしまった。

周り――殊に、間に挟まれてしまった朝霞が、どうして良いのか分からずに戸惑っている事に、二人は全く気付いていない。

かと思えば、樋口はこの 余興 がよっぽど面白く思えたらしく、「もっとやれやれ！」と野次を飛ばしてくる。彼の場合、酔いが相当回っていたからというのもあったようだ。

だが、それからほどなくして、痺れを切らした南條が静止に入っ

た。
「いい加減にしろ。折角の飯に埃が入る。それでもまだ足りないなら、ここではなく外に出てやって来い」

南條の一声は、かなりの効果があった。

言い争いをしていた美咲と雅通だけではなく、野次馬根性丸出しだった、酔っ払い樋口すらも黙らせてしまった。

「さあて、呑み直そっかなあ」

南條に鋭く睨まれた雅通は、肩を竦めながら座り直すと、呑みかけていたビールに手を伸ばし、一気に呑み干し、美咲もまた、黙って元の場所に正座する。

それを見届けてから、南條も腰を下ろし、手酌で自らのコップにビールを満たしていった。

第十四章 第二節

藍田貴雄宅での宴会は、日付けが変わった午前一時過ぎまで続いた。

最初に、未成年である美咲と朝霞が零時を回った頃に抜け、続いて、江梨子と理美も各々の寝室へ引っ込んでしまった。

女性陣がいなくなってから、男達は、飽きる事なく酒盛りを続けていたのだが、そのうち、最年長の貴雄が、翌日の仕事を理由に途中退場し、続いて、樋口に酒を強要され続けた雅通が潰れ、仕舞いには、その樋口もダウンしてしまった。

最後まで残ったのは、底なしの南條だった。

周りが完全に酔っ払いと化した中、南條だけは、唯一、涼しい顔で酒を呷っていた。

実際は、それなりに酔いは回っているのだが、あまり表に出ない性質らしい。だからこそ、周りも調子に乗って南條に酒を散々勧め、本人もまた、それを有り難く頂戴する。

「さすがに呑み過ぎたか……」

そう呟きつつ、手は、意志とは裏腹に、日本酒の満たされたコップに伸びている。

南條は、そんな自分に呆れながら、コップ酒をゆっくりと流し込んだ。

彼の周りでは、樋口が巨体を横たえながら豪快な酄を掻いており、雅通は、酄こそ掻いていないものの、時折、ギリギリと歯軋りをしている。

二人の暢気な寝顔に、南條は、思わず苦笑いしてしまう。同時に、自分が寝顔を見られる立場にならずに済んだ事に、心底ホッとした。不意に、美咲の事が頭を過ぎる。

彼女もきつと、今頃は夢の中の住人となっているはずだ。安らかな眠りに就いているのか、それとも、気紛れな鬼王や桜姫に、夢で

振り回されてしまっているのか。
と、その時だった。

ブブブブブ……！

足元に置いていた携帯のバイブが、静まり返ったりリビングの中で
煩く響いた。

南條は、少々驚きつつ、携帯を手に取って開いた。

「非通知……？」

表示されていた 非通知設定 というデジタル文字に眉を顰めつ
つ、通話ボタンを押した。

「もしもし……？」

声を最大限まで抑え、また、不機嫌を露わにして相手に訊ねる。

『——南條さん、ですよ？』

わずかな間を置いて聴こえてきたのは、若い女の声だった。何と
なく、憶えがあるような気がするが、美咲ではない事だけは確かだ。

「——神山、綾乃か……？」

消去法で、綾乃の名前を出したら、電話の相手は、『あら、よく
お分かりになりましたね』と、わざとらしく声を1オクターブ上げ
た。

相手が綾乃だと確信した事、そして、彼女の言い回しに、南條の
苛立ちは更に増した。

「こんな時間に何だ？ いや、それよりもまず、何故、俺の携帯番
号を知ってる？」

『そんな事はどうでもいいじゃありませんか』

綾乃は、南條の質問には一切答えるつもりはないらしく、『それ
よりも』と、即座に話題を変えた。

『あなたにお話があります。外に出てきて下さいませんか？』

敬語を使っているが、その口調からは、南條に有無を唱えさせ
る気はないというのが、ありありと伝わってくる。

むろん、そんなものに黙って屈する南條ではない。

「お前に指図される覚えはない。もう切るぞ」

吐き捨てるように言い放ち、通話を切るうとした時だった。

『美咲さんがどうなっても良いのですか？』

美咲の名前を耳にした途端、南條は、わずかに目を見開いた。そして、再び携帯を耳に押し当てると、「どういう事だ？」と訊き返した。

南條が動揺した事は、綾乃もすぐに察知したらしい。笑いを含んだ声で、『そのままの意味ですよ』と答える。

『史孝様はね、あなたがこちらに来てさえくれば、美咲さんに手出しはしないと仰っているのです。でも、抵抗するようであれば…、藤崎を使って、すぐにでも始末させる、と』

「藤崎を……？ あいつは美咲に執心しているだろう？ 出来るわけが……」

『あなた、私と同じ火属性の彼から聞かなかったんですか？』

南條の言いかけた言葉を素早く遮った綾乃は、淡々と続けた。

『史孝様には、人心を操る力があるんですよ。確かに、藍田の直系は戦闘能力は低い。それでも、太古から私達の頂点に君臨し続けてきたのは、その能力故です。』

能力を受け継いだあの方に見たら、藤崎のような単純男を操るなんて容易い事。美咲さんに対する想いも全て忘れさせ、そこそ鬼神の如く、美咲さんを惨殺してしまうかも知れませんか』

他人事のように語る綾乃を、南條は、心底苦々しく思った。

「それで、俺がそっちに行けば、美咲を見逃してくれるのか？」

『それは史孝様次第、としか言いようがないですね』

期待はしていなかったが、こうもあつさり返されると、複雑な心境に陥る。

正直な所、素直に従って良いものかどうか悩む。しかし、ここで異を唱えたら、藍田の事だから、強硬手段に出る事は嫌でも分かる。それに、綾乃の言っている事が真実だとするなら、あの藤崎も、相

当な危険因子となりかねない。

「――分かった」

暫しの沈黙の後、南條は静かに口を開いた。

「今回は、お前達に従う。だが、指一本でも美咲に手を出したら……、その時は覚悟しておけ」

『分かりました。私の方は心得ておきましょう。ですが、史孝様に関しては私達ではどうにも出来ませんので、そのおつもりで』

電話を切ってから、南條はすぐに外に出て、貴雄の家の近くで待機しているという綾乃の車に向かい、促されるままに乗り込んだ。車には、所有主である綾乃と、北山航太郎という少年も一緒に着いて来たらしく、助手席からヒョッコリと姿を現した。

「こんばんは南條さん。お久し振りです」

緊張感の全くない声で挨拶され、南條は面食らったが、すぐに真顔に戻り、頭をわずかに動かした。我ながら、随分と無愛想だ、と思った。

ところが、航太郎にはそれが好印象に映ったらしく、身を乗り出した上、羨望の眼差しを向けてきた。

「ああ、やっぱり藤崎さんとは全然大違いだなあ。まさに、男の中の男　って感じですね。かっこいいよなあ」

航太郎にまじまじと見つめられた南條は、表面上は平静を装っていたものの、内心では、非常に困惑していた。

「コータロ君」

それまで黙っていた綾乃が口を開いた。

「気持ちちは分かるけど、今はそれぐらいにしておきなさい。藍田本家へ行けばゆっくりとお話出来るんだから、それまで我慢よ」

綾乃に窘められた航太郎は、不満げに口を尖らせながら、それでも、素直に彼女の言う事に従い、南條から視線を外した。

それを確認した綾乃は、今度は南條を振り返り、「ごめんなさいね」と首を竦めた。

「彼、南條さんと再会出来るのを楽しみにしていたから、すっかり舞い上がってしまったっているんです。聖地で初めて逢った後も、帰りに言ってたんですよ。――『理想の師だ』って」

褒められるのは、決して悪い気はしない。しかし、返答に困るほど複雑な思いになった事も確かだった。

気持ちを持て余し、忙しく顎を擦っていると、綾乃は小さく声を出して笑い、前に向き直ってエンジンをかけた。

車はゆっくりと動き出し、徐々に、藍田貴雄宅から離れて行った。

藍田本家は、相変わらず、陰湿な雰囲気醸し出していた。

綾乃の話によると、現在は、綾乃と藤崎、そして航太郎も、本家で居候生活をしているらしい。

藤崎はともかく、綾乃と航太郎は未成年のはずだから、彼らの両親は、他人の家へ入り浸る事に関して反対しなかったのか訊ねたが、反対どころか、寧ろ、本家へ行く事を推し進めていたほどだったらしい。

南條の母親である沙代子がかつて、息子の家出――正確には、能力者としての修業――を猛反対していた事を考えると、理解がある、と言うより、非常に無責任に思える。

（それとも、能力者の家系では俺の所が異端なのか？）

そんな事を考えながら、頼りない電灯の点いた廊下を、綾乃と航太郎の先導で歩いて行った。

しばらくすると、綾乃がピタリと足を止めた。

その、閉め切られた障子からは、仄かな明かりが漏れている。恐らく、ここに藍田がいるのだろう。

「失礼致します」

綾乃は、障子越しに断りを入れると、静かにそれを開けた。少しずつ、部屋の内部が見えてきた。

「ご指示通り、南條和海さんをお連れ致しました」

背を向けたままの本家当主——藍田史孝に、慇懃なまでに声をかける綾乃。

藍田は一瞬、こちらをチラリと一瞥したが、「ご苦勞」とだけ言い、再び、後頭部を見せた。

「彼と二人だけで話したい。君達は下がっていなさい。それと、藤崎君の事もしっかり見ておけ。——尤も今は、自らの意思で動けるような状態ではないがな」

「承知致しました。」

では南條さん、中へお入り下さい。——私達は、これで」

綾乃は、航太郎に向かって小さく頷くと、名残惜しそうな彼の背を押し、ゆっくりと障子を閉めた。

二人の足音は、徐々に遠のいてゆく。

「座りなさい」

先ほどと変わらぬ姿勢のまま、藍田は南條に促してきた。

南條は顔を顰めつつ、それでも相手に従い、その場に正座した。

「こんな時間に呼び出して、一体どういうつもりだ？」

藍田を、敬意を表す相手ではないと心底思っている南條は、露骨に語気を荒らげて訊ねる。

彼の声音に、藍田は反応を示した。今度は身体ごと向き直り、その男独特の鋭い眼光を南條に突き刺してきた。

一瞬、怯みかけた。しかし、南條は辛うじて平静を保ち、続けた。

「それにさつき、神山綾乃に言ったのはどういう事だ？ 『自らの意思で動けるような状態ではない』だと？」

「その通りだよ」

南條の問いに対し、藍田は、悪びれる様子もなく語った。

「彼はどうも、目に余る行動が多過ぎたからね。しばらく大人しくさせておこうと、ちよつとばかり術をかけてやった。お陰で今は平穩だ。私の術中にいる彼は、主人に忠実な犬も同然。今までが扱いに苦慮していただけに、心底助かっているよ」

「——そして、俺が神山の指示に従わなければ、その忠犬に美咲を

襲わせ、抹殺する気だった、というわけか？」

「ふん。顔に似合わず、随分と過激な事を言うな、君は」

「あんたのような下衆に言われたくはない」

精一杯、感情を抑えていたつもりだが、全身は、言いようのない怒りで震えていた。

それを藍田は、さも愉快そうに眺めている。

「本当に、君は美咲が絡むと見境がなくなるようだね。」

確かに、我が姪ながらあれは上玉だ。桜姫の魂を受け継いだ、絶対至上の姫。あれを我が下に置けば、私は、この日本を——いや、この世界全てを掌中に治められよう」

「——貴様……」

南條の眉が、ピクリと痙攣した。

「あんた、自分が何を言ったか分かっているのか？ 美咲をあんたの下に置く？ そんなのは不可能だ。」

そもそも、桜姫はあんたの手に負えるような相手じゃない。仮に、桜姫をあんたの自由に出来たとしても、今度は鬼王が前に立ちはかかる。鬼王の靈力に敵う者は、今は誰もいない。

鬼王に諍った者の末路——それは、子供でも分かる事だ」

「だからこそ、君を呼んだのだよ」

苛立ちに支配されている南條とは対照的に、藍田は、どこまでも冷静だった。

そして更に、藍田は、南條に思いもよらぬ事を言ってきた。

「君が美咲に依存しているように、美咲もまた、君を心から慕っている。その愛する者がここにいないと知れば、美咲は、自ずから出て来る。わざわざこちらが動かずとも、な」

「——俺を利用する気か？」

「獲物を仕留めるには、最上級の餌だな」

南條の全身が、煮え滾るほど熱さを増した。気が付くと、己の感情の赴くままに、藍田の胸倉を掴んでいた。

「私を殴るかい？」

南條に激しく睨まれても、藍田は怯むどころか、ニヤリと口許を歪める。

南條は空いている手で拳を作ったが、宙に浮かせた状態のまま固まった。

少しずつ、冷静さを取り戻してくると、目の前の男を殴るのが馬鹿馬鹿しく思えてきた。それに、一度手を上げてしまったら歯止めが利かなくなる事を、南條は自覚していた。

南條の手が、ゆっくりと藍田から放れた。

「――俺は、あんたの指図は一切受けない」
腹の底から、絞り出すように口を開いた。

「俺はただ、美咲を守り、幸せにしてやりたいだけだ。あいつの幸せのためなら、どんな事でもしてやると心に決めている。ましてや、あんたの私利私欲のために美咲は渡せない。

あんたはもう、人間の心を忘れた亡者も同然だ。鬼王と同じ――いや、鬼王以下のな」

ここまで言うと、藍田から笑みが消えた。

「――やはり君も同じか」

目を伏せながら、ゆっくりと首を振ると、再び、南條に視線を注いだ。先ほどとは比較にならないほど、その双眸は妖しい炎を宿していた。

南條の身体が栗立った。危険を嗅ぎ取り、咄嗟に目を逸らそうとしたが、金縛りにあったかのように自由が全く利かない。

次第に、息苦しさを感じた。額からは脂汗が滲み出し、立ち続ける事も間々なくなくなり、畳の上に膝から崩れ落ちた。

「出来る事なら、手荒な真似はしたくなかったのだがね」

声すら出せなくなっている南條に、藍田は、喉の奥で笑いながら続けた。

「あまり私に逆らわない方が賢明だよ、和海君。君の父親と同じく、死に急いでしまいかねない」

藍田の言葉は、鋭利な刃となって南條の身体を突き刺してゆく。

父——博和を亡き者にした首謀が藍田だという事は分かっていたはずだが、それでも、当人の口から改めて聞くと、新たな衝撃が全身を駆け巡る。

（クソッ……！）

対妖鬼には高い戦闘能力を誇る南條も、藍田の奇術の前では赤子同然だった。

かつて、珠璃にも同じような術をかけられ、闇に落とされかけた事があったが、目の前の男の方が更に厄介だと南條は思った。

藍田の家系は謎が多過ぎる。一つ、明らかにになったかと思えば、また新たな謎が生まれる。

「さて、そろそろ仕上げといこうか」

これが合図となったかのように、藍田の両の目がカツと見開かれた。

南條の心臓が、ドクンと脈打った。全身に戦慄が走ったかと思つた瞬間、少しずつ、意識が遠のいていった。

第十四章 第三節

静寂の中にいたはずなのに、俄にざわめきを耳にした。

眼前に広がるのは、以前に夢の中で見た光景と同じものだ。

「桜姫……？」

これを見せているのが桜姫だと即座に察した美咲は、彼女に呼びかけてみる。しかし、何故か何も返ってこない。

もしかしたら、桜姫の魂は眠った状態なのだろうかとも思ったが、もし、意識がないのであれば、こんな夢を見せられるはずもない。そうになると、敢えて沈黙を守っている、という結論に至る。

（でも、こうして過去の光景を見せるって事は、何か伝えたい事があるのかも知れない……）

美咲はそう思い、歩を進めた。まるで、桜姫に導かれるかのように。

ざわめきの聴こえた場所は、神の宿り場、そして、佐久良之姫が幽閉されている社の前だった。そこには、数人の男が群がっており、よくよく見ると、中には、南條に似た、佐久良之姫の兄の姿もあつた。

美咲に戦慄が走った。この殺気は、現の世界でも、これまでに何度も体感している。同時に、何故、桜姫が沈黙を守っているかも理解した。

これは紛れもなく、佐久良之姫——いや、既に ヒト ではなく なった桜姫を亡き者にしようとしている瞬間だ。

美咲はふと、兄の手元に視線を落とし、やっぱり、と愕然となった。そこには、仄かに光彩を放つ太刀が握られている。南條の靈力から生み出される日本刀とは、形こそ違えども、放たれる強力な気は全く同じものだった。

（この人確か、佐久良之姫をととても大切にしていたはず……）

美咲は、以前に桜姫の夢の中で見た兄を想い返す。

南條と同じで、自分にも他人にも厳しく、けれども、とても優しい一面を持つ兄。もちろん、直接対話したわけではないから、殆どが美咲の抱くイメージではあるが、それでも、兄の深い愛情は、心の奥底まで沁み渡るほどに伝わってきた。

しかし、今、目の前にいる兄からは、周りの男達と同様、桜姫に対する敵意しか感じられない。

「どうして……？」

思わず、声が漏れた。もちろん、この世界での美咲には実体がないから、男達には、声すら耳に届くはずもない。

「いいかね？」

男達の中の一人が、兄に向けて訊ねた。

美咲は、その男を目の当たりにした瞬間、瞠目したまま硬直した。叶うならば、二度と目にしたくなかった顔。むろん、現の世界では自分の伯父なのだから、関わらないわけにもいかない。しかし、夢の中でまで見たくなかった。

（けど、ここで目を背けてしまったら……）

逃げ出してしまいたい衝動に駆られている自分自身を叱咤し、美咲は、固唾を呑んで、男達の行動を凝視した。

「やれ」

この短い合図で、他の男達がわらわらと蠢き出す。蹴散らす勢いで社の戸は開かれ、一人ずつ、中へと足を踏み入れて行く。

美咲も男達の後を追った。額には、ジツトリと嫌な汗が噴き出しているが、拭う気にもなれない。尤も、低い天井に気を遣いながら歩かねばならないから、そんな余裕もなかったのだが。

ゆつくりと、だが確実に、桜姫の元へと近付いている。美咲の緊張も徐々に高まり、それに合わせて、胸の鼓動も早くなってきた。

そのうち、男達が足を止めた。

「――神域に土足で踏み込むなど、良い度胸をしておるな、愚かな人間共よ」

格子越しに、いつも耳にしてきた、感情の籠もらない声が聴こえてきた。

美咲は、男達の身体を退け——正確には、透過させながら——、桜姫へ近寄った。

やはり、以前の夢で見た佐久良之姫とは全く違っていた。

小柄で、愛らしい外見はそのままだが、男達を見つめる双眸は冷ややかで、全身からも負の気が漂い続けている。

これは紛れもなく、桜姫の原型 だった。

「——変わったな、佐久良」

口を開いたのは、兄だった。

「少し前のお前は、もつと穏やかで優しい目をしていた。しかし今は違う。——あの、『鬼王』と名乗っていた男の手先になり下がり、ヒトとしての心までをも失ってしまったか……」

「何を言うか」

桜姫は、兄に鋭い視線を投げかけた。

「私をここまで貶めたのは、誰でもないそなた達だ。表面上では私を祀り上げながら、実際はただ、この暗くて何も無い籠の中に閉じ込めていただけではないか。

そなた達には分かるまい。私が、どれほど心細い想いをし続けていたかなど……。

だが、あの方は——鬼王だけは違った。私を心から愛し、救いの手を差し伸べてくれた。

ヒトとして、ここで一生を全うするぐらいなら、ヒトである己を棄て、あの方の側に添い続ける方が最高の幸せだ」

桜姫の、心の叫びにも似た声に、美咲の胸は強く締め付けられた。桜姫の気持ちはよく分かる。美咲も、桜姫の立場であったとしたら、きつと同じ事を考えたに違いない。しかし、魂が滅びてしまつたら、ヒトではない桜姫は、二度と転生は叶わない。

桜姫はきつと、全てを承知の上で、鬼王に全てを捧げると誓ったのだ。自分を愛し、また、自分が愛する人のためならば命など惜し

くない、そう心から想ったのかも知れない。

（けど、それはあまりにも哀し過ぎる……）

美咲の視界が、ぼんやりと霞んできた。鼻の奥にツンとした痛みを伴い、瞳からは、幾筋もの涙が零れ落ちる。

（こんな所で泣いても仕方ない……）

美咲は鼻を擦ると、両手の指先で瞼を覆い、涙を抑えた。まだ、瞳は濡れている感覚はあるが、再び目の前がはつきりとしてきた。

「何を言っても無駄だ」

鋭く突き刺さる声が、社の中に重く響いた。それは、伯父の藍田に似た男のものだった。

「そなたもよく分かったであろう？ これは既に ヒト ではない。亡者に心売った 生きる屍 だ」

顔だけではなく、中身までもが藍田と同じだ。美咲は、吐き気を催すほどの不快感を覚え、眉を顰めて男を睨んだ。

ふと、男が美咲の方に視線を向けた。予想外の事に、美咲の鼓動は早鐘を打つ。気配を感じ取られたのかとヒヤリとさせられたが、やがて、すぐに兄に向き直った。

「これを始末出来るのはそなただけだ。この国を安泰に導くために、この場で消滅させ給え」

男の言葉に、兄はわずかに躊躇っていたようだ。思考を巡らせるように、少しばかり瞑目していたが、そのうち、意を決したかのようにつつくりと瞼を上げた。

太刀を握る両手に、力が入った。

「所詮、兄上も父上と同じだったという事か」

桜姫は口の端を上げ、兄を侮蔑の眼差しで見遣った。

「自らの身を守るためなら、ヒトも平気で殺めてしまう。——姉姫も、結局は危険分子と見做されて黄泉に送られてしまったとは……」

兄の表情に、驚愕の色が浮かんた。

「——何故……、何故お前がそれを知ってる……？」

「『何故』？ そんなもの、考えるまでもなかるう？」

桜姫は一呼吸置いた後、吐き捨てるように言い放った。

「私と姉姫は二つで一つ。どんなに互いを疎んじ合っていても、切っても切れぬ関係だ。」

どんなに離れていても、姉姫の想いは私に伝わるし、私の想いも姉姫に伝わる。

双子 とはよく出来た物だ。私が徒人ならぬ霊力を持っていたかと思えば、姉は徒人——いや、実際は、私の霊力を増幅させる力を秘めていたというのだからな。

しかし姉姫は、最期の瞬間まで、自分が黄泉に送られてしまう理由を知らずに逝ってしまった。私は敢えて、姉姫には、 真実 は一切告げずにいたから……」

桜姫は、ホウと息を吐くと、兄と、『父上』と呼ばれた男、そして、二人を取り巻く男達を一頻り流し見て、再び兄に視線を戻した。「姉姫は、兄上を心から慕っていた。叶わぬ想いだと知りながらも、それでも兄上を愛おしく想っていたのだ。そこまで恋焦がれていた者に手をかけられた姉姫の無念は、私にも痛いほど伝わった。」

先ほど、父上は私に向けて 生きる屍 などと吐き付けてきたが、私からしたら、そなた達こそ 生きる屍 だ！ そなた達こそ、ヒトとしての心を失ってしまったのではないかつ？」

桜姫が張り上げた声は、社の中で跳ね返るように響き渡った。

同腹の姉姫を妬んでいただけかと思っただが、桜姫の悲痛なまでの叫びを耳にした瞬間、誰よりも姉姫を案じ、また、姉姫の叶わぬ恋に胸を痛めていた事に、美咲は今更のように気付いた。

（もし、アサちゃんも同じような目に遭ったとしたら、私も絶対に史孝伯父さん達を徹底的に追い詰める）

そう思わずにはいられなかった。

「——言いたい事はそれだけか？」

啖呵を切った桜姫とは対照的に、兄は、静かに口を開いた。

「確かにお前の言う通り、先達で、あれを黄泉に送り届けた。可哀想な事をしたと思うが、これもあれの宿命だったのだ」

兄は、格子の隙間から、太刀の切っ先を桜姫の首元に突き付けた。
「次はお前だ。佐久良——いや、亡者の姫——桜姫！」

兄の太刀が、桜姫の喉を一息に貫いた。

美咲は目を逸らそうとした。しかし、恐怖心からか、身体が全く利かない。

「お願い……！ 止めて……！ これ以上憎しみを増やさないで……！」

声を上げて訴えるも、実体のない美咲の声は、誰の耳にも届くはずもなかった。否、届いていたとしても、誰も兄を止める事はしなかっただろう。

「……っ……くっ……！」

太刀で貫かれている桜姫の表情は、苦渋に歪み、わずかに呻きが漏れる。

心なしか、美咲の喉元も、焼けるように熱い。

美咲は両手で首を押さえたまま、ガクリと膝から床に崩れ落ちた。
（お願い……！ 桜姫を助けてあげて……！）

届かないと分かっているながらも、祈るような気持ちで強く思った。

瞼の奥に、一筋の光を感じた。

美咲は勢いよく起き上がると、辺りをグルリと見回した。

仄暗い社とは対照的な、明るい空間。紛れもなく、ここは美咲の部屋だった。

「——戻って、来たの……？」

誰にともなく呟いてから、深呼吸を数回繰り返す。

全身からは滝のように汗が湧き出ており、寝間着はぐっしりと濡れていた。

それにしても、今回の夢はあまりにも壮絶だった。桜姫が、金属性の能力者に封じられた話は知っていたが、まさか、その張本人が、南條にそっくりなあの兄だとは予想だにもしなかった。

更に、黒幕とも呼ぶべき存在の、藍田に似た佐久良之姫達の父親。

姿形だけではない。自分の理に叶う事しか考えないしたたかさも、どこか嫌らしさを感じさせる双眸も、想い出すだけで気分が悪くなつた。

（私が何故、ナンジヨウに敵意を向けたか分かったであろう？）
不意に、頭の中に少女の声が聴こえてきた。夢の中にいる間、ずっと沈黙を守っていた桜姫だった。

美咲は驚く事もなく、「うん」と小さく答えた。

「金属性の能力者だからだけじゃない。南條さんは、あなたのお兄さんにあまりにも似過ぎていた。私だって、初めてお兄さんを見た時は、南條さん本人かと勘違いしてしまうほどだったもん」

（私もだ）

美咲の言葉に、桜姫も同意してきた。

（ミサキとアサカの場合、私や姉姫の魂が宿っただけだが、今のナンジヨウ、そしてアイダは、まさに転生した姿だ。私からしたら、前世の彼奴らは大罪人と何ら変わりないが、人間にとっては、私や鬼王が 悪 だから、私達を封じた彼奴らは 正義 に当たる）

「あんなのが 正義 なの？ 私には理解出来ない」

（美咲もそう思うか？）

「当たり前でしょ。こんな事はあまり言いたくないけど……、あなたのお父さんも、お兄さんも、自分達の非は認めず、保身のためだけに大切な生命を犠牲にした。

本音を言えば、私には何が 正義 で何が 悪 かなんて分らない。けど、これだけは言える。遥かな昔から 呪いの連鎖 などを作った元凶……、それは紛れもない、あなたのお父さんとお兄さんだ。ううん、一番はお父さんかも知れないね」

（そうだな。兄上も結局は、父上に唆されたようなものだった。尤も、あっさりと父上の手の上に堕ちてしまったという事は、心のどこかで私を疎ましく思っていたからであろうが）

自嘲気味に語る桜姫に、美咲は異を唱える事が出来なかった。

もし、兄が本気で桜姫を思い遣る気持ちが備わっていたのであれば

ば、彼女に刃を向けたりなどしなかったであろう。寧ろ、父親を厳しく諫める事だっただけ出来たはずだ。

（ミサキ）

少しばかり、思案に暮れた美咲に、桜姫が静かに呼びかけてきた。（ナンジヨウは、兄と似ているようで違う。そなたを愛おしく想う気持ちにも、偽りなど一切ない。だから……、どんな事があつたとしても、あの者を信じてくれぬか……？）

美咲は思わず目を見開いた。

これまで、美咲を貶める言動をする事は度々あつたものの、懇願してくるのは初めてだったからだ。しかも、南條を信じてくれ、とは。

「桜姫、一体どうしたの？ 何か、らしくないっていうか……」

（そうかも知れぬな）

怪訝さを露わにした美咲に、桜姫が、笑いを含んだ声で続けた。

（だが、私も最近では、そなた達が共に生きる姿を見てみたくなった。私には、愛する人の子を生ずという、女としての最高の幸せは手に入れられなかった。これから決して叶わぬ。しかし、ヒトであるそなた達なら、その幸せを叶えられよう）

「でも、そんな事、鬼王が承知するはずないじゃない。鬼王は、あんたが側にいてくれる事を望んでるんだから……」

美咲は桜姫の言葉を待ったが、もう、何も言っただけでなかった。

再び静まり返った部屋に、窓を通して雀の囀りが聴こえてくる。

不意に、美咲から嗚咽が漏れ出した。

あれほど傲慢に振る舞っていた桜姫が、今度は、自ら消える事を望んでいる。美咲と南條の幸せを願わんがために。

（誰かを不幸にして自分が幸せになんて……。どうしてこんな残酷な……）

生きたい。しかし、桜姫を犠牲にしたくない。何とかして、鬼王と桜姫を幸せに導きたい。

（私に、力があれば……）

無力過ぎる自分に憤りを覚え、美咲は、両拳を強く握り締めた。

第十五章 第一節

閉じられた瞳の奥に眩さを覚え、青年はゆっくりと瞼を上げた。ぼんやりとした頭で辺りを見回してみると、そこは、八畳ほどの畳敷きの部屋。彼は、部屋の中心に敷かれた布団の上にいた。

「ここは……？」

記憶を辿ろうとするも、まるで、全てを掻き消されたのようになり、頭の中は真っ白で何も浮かばない。しかも、あるう事が、自分が何者かさえ分からなくなっていた。これは、記憶喪失というものだろうか。

（だが、何故……？）

そう思った時、誰かがこちらに近付いて来る気配がした。

青年は息を呑み、障子張りの戸をジッと睨む。

「失礼します」

気配の主である人物は、障子越しに穏やかな口調で告げると、静かに戸を開いた。

「あら、既にお目覚めでしたか」

障子を開けたのと同時に、声の主の少女は、青年を見つめながら微笑する。よく見ると、その両手には、白飯と味噌汁、干物の焼き魚と漬け物が載った盆が握られていた。

「身体の調子は如何ですか？ お食事をお持ちしたのですけど、食べられます？」

少女の問いに、青年は言葉を発する事もなく、ただ、ぼんやりと少女を見上げる。

「どうしたのですか？」

あまりにも凝視されるので、少女もさすがに困ったのか、眉根を寄せて微苦笑を浮かべた。

そこで、青年はやっと、初めて口を開いた。

「ここは、どこだ？ 俺は……、一体……？」

ようやく絞り出された声に、少女は笑みを消し、少しばかり考えるような仕草をした。そして、青年の側に正座すると、食事の載った盆を畳の上に置いて、真っ直ぐに青年を見据えた。

「あなたは、我々にとって非常に貴重な存在なのです」

「貴重な、存在……？」

眉間に皺を寄せながら、少女の言葉をおつむがえ鸚鵡返しすると、少女は、「ええ」と頷いた。

「あなたには、あなたにしか出来ない使命があります。—— シロガネの魂を強く受け継ぐあなたでなければ、成し遂げられない使命が」

「シロガネ……？ 俺はつまり、その転生した姿、ということか？」

「そうです」

少女は首を縦に振った後、食事の載った盆を青年に渡した。

青年は、殆ど無意識に手を出し、それを受け取る。

「まずは食べる事が先です。詳しい事はまた改めて、我々の主がお話して下さいます」

少女はそう言つと、ゆっくりと立ち上がり、静かな足取りで部屋を出て行った。

残された青年は、口を結んだまま、盆の上を凝視する。

シロガネとは、一体何なのか。少女が言っていた主とは何者なのか——

いや、それよりも、青年は、もっと大切な何かを忘れている。それが何なのかは分からない。しかし、想い出そうとすると、胸の奥が引き裂かれんばかりに苦しくなる。

（きつと、主とやらに訊けば、全てが分かるはずだ）

心の中の自分に言い聞かせると、青年は箸を手取る。食欲はあまりなかったが、折角の好意を無下にするのも申し訳なく思い、黙々と食事を進めた。

食事が済むと、少女は、まるで見計らったかのように、再び部屋に姿を現した。今度は、少女と殆ど身長の変わらない少年も一緒だった。

「彼が、主の元へ案内してくれます」

空の食器が載った盆を手につくと、少女は、小さく会釈して先に部屋を出た。

一緒にいた少年は、少女がいた時も、気配がなくなってからもなお、興味深々と言わんばかりに青年を見つめる。

青年は眉を顰めた。しかし、少年は怖気付く様子もなく、寧ろ、嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

「やっぱ本物は違うなあ」

何が 違う のか、青年には、皆目見当も付かない。かと言ってわざわざ訊ねる気にもなれなかった。

「じゃあ、そろそろ行きましようか？ ここの主はちょっと変わってますから、最初はビックリするかも知れませんが」

少年は小さく肩を竦めると、青年の先に立って歩き出した。

部屋を出ると、すぐそこは縁側になっており、広々とした庭が真っ先に目に飛び込む。ただ、花があまり植えられていないからだろうか。非常に殺風景で、夏なのに、晩秋か冬のような物悲しさを感じさせる。

庭を流し見ているうちに、青年と少年は、主が待っているという部屋に着いた。

「史孝さん、航太郎です。ナン……、じゃなかった。シロガネ様をお連れしました」

どうやら、主の名前は 史孝 というらしい。どこかで耳にしたような気もするが、あまり重要な事ではないと思い直した。

「通しなさい」

障子の向こう側から、くぐもった男の声が返答した。

少年——航太郎は、「失礼します」と、障子をゆっくりと開け、青年に入るように促した。

青年は、航太郎を一瞥した後、部屋に足を踏み入れた。

中に入ると、日中とは思えぬほど薄暗い。先ほど見た庭と違い、この主には、美的感覚といったものは備わっていないのであるのか、と青年は思った。

史孝と思われる人物は、中央に置かれた座卓の一番奥に座していた。背筋を伸ばし、真っ直ぐにこちらを見据える。

「楽にしなさい」

史孝の言葉に、青年は黙って、史孝と向かい合うように正座した。座高の高さからしても、青年よりも身長が低いはずなのに、史孝から発せられる威圧感は凄まじい。眼力も鋭く、直視するのが躊躇われるほどだった。

「身体の調子はどうかね？」

青年が座るのを確認してから、史孝が訊ねてきた。

青年は、出来る限り史孝と視線を合わせないようにしつつ、「特には」と答えた。

「ただ、目覚めた途端に何もかも忘れてしまったのは……。俺は何故、ここに来たのか……。もしくは、連れて来られたのか……」

「特に問題がないなら結構」

どうやら、青年の疑問に答える気は更々ないらしい。何事もなかったように流し、「早速だが」と続けた。

「君には、やって貰わねばならない事がある」

「そう言えば、今朝、食事を持ってきた娘も似たような事を言っていたが……。シロガネの魂を強く受け継ぐ俺じゃないと出来ない使命がある、とか」

「やれやれ……。綾乃はそこまで喋ってしまったか……」

呆れたように呟くも、別段、気分を害している様子もなさそうだった。わずかに口の端を上げると、史孝は、青年に視線を注いだまままで訥々と語り出した。

「綾乃——食事を運んだ娘だが——の言った通り、君は、古代の最強能力者——シロガネの再来だ。と言っても、はっきりとした

確信を持てたのは、本当につい最近の事なのだがね。

現在、この日本には、鬼王 と呼ばれる亡者の長が生み出した妖鬼を消滅させられる能力者が幾人か存在するが、その中でも、金属性の能力者の霊力は最強だ。そして、その金属性でも最高位の霊力を誇っていたのが シロガネ 。鬼王に魂を売り、鬼女と成り下がった愚かな娘――桜姫のかつての兄でもあり、桜姫を封じられる唯一の存在でもある」

シロガネ はともかく、金属性、鬼王、桜姫という言葉は、記憶のどこかに残っている。ただ、やはり、想い出そうとすると、頭の中に靄がかかったように掻き消されてゆく。

「他の金属性の能力者では、駄目なのか？」

物が痞えた感覚を覚えつつも、青年はまず、真っ先に疑問に思っ
た事を口にした。

「無理だな」

史孝は、はつきりと答えた。

「確かに、君以外にも金属性の能力を持つ青年を知っているから、試しに彼にやらせてみようと思った事もあったのだが。しかしやはり、彼が最大限の力を出したとしても、永い眠りに就かせるのは困難だろう。自らの力を制御出来ないのも難点だ。

だが、君は違う。以前に一度、君は桜姫を封じかけたが、あの時は相当な手加減をしていたから、桜姫に痛手を負わせられなかっただけだ」

「俺が……、桜姫を……？」

「それも忘れてしまったか」

ため息交じりに言うも、しかし、忘れている事を残念がっているようにとはとても見えない。

不意に、青年の胸が疼いた。それは、先ほど、大切な 何かを
想い出そうとした時と同じような感覚だった。

「俺は、桜姫を封じればいいのか……？」

口に出した途端、何故か、後悔の念に囚われた。決して言葉にし

てはいけない事を言ってしまった。しかし、一度出てしまった言霊は、消し去る事など出来るはずもない。

複雑な心境に陥っている青年とは対照的に、史孝は、水を得た魚のように口元を歪めた。

「さすがに君は察しが早い。自分の事は忘れてしまっても、過去世からの能力者としての血は、決して衰えていないと見える」

史孝は笑みを消し、射るような眼差しを青年に向けた。

「妖鬼は雑魚だから、大して手こずる事はない。厄介なのは、封印を完全に解かれていない鬼王の手足となって動いている鬼姫だ。鬼姫は、鬼王や桜姫ほどではないにしても、鬼王から相応の力を分け与えられている」

「では先に、鬼姫を斃せばいいというわけか？」

「そうだ」

史孝は、大仰に首を縦に振った。

「鬼姫を消滅させるだけで、鬼王と桜姫の封印はだいぶ楽になる。本当は、どちらも完全消滅させられれば良いのだが、こればかりは、我々人間の力ではどうにもならん」

そこまで言うと、史孝は、どこからともなく長方形の封筒を出し、座卓の上に滑らせた。

「——これは？」

「開けてみたまえ」

言われるがまま、青年は封筒を手に取り、中を改めた。そこには、一枚の紙らしきものが入っている。これは何だ、と思いつつ、親指と人差し指で摘まんて慎重に引っ張る。

出てきたのは、所々が破けかけ、赤茶色に変色した紙——札のようなものだった。

「私の姪が、幼い頃に剥がした封印だよ」

感情の籠もらない声で、史孝が言った。

「姪は、桜姫の魂を宿して産まれ落ちたからね。封印を剥がしたのも、鬼王と桜姫、両方の干渉があったからだった。」

私とて、姪が可愛くないわけがない。しかし、桜姫が存在する以上、あれを生かし続けるわけにはいかない。

桜姫が完全復活を遂げられるのは、あれが生まれた十一月十一日。それまでに君が桜姫を封印し、続けて、能力者達の霊力を寄り集めた封印を新たに作り、鬼王も、永き眠りに就かせる。」

青年は口を固く結び、古い封印を睨んだまま、史孝の言葉に耳を傾けていた。

桜姫と同じように、自らも、桜姫を封印するために、最強能力者の魂を受け継いだ。それが、彼に定められた宿命だとも。しかし、それでもなお、まだ、何か が心の奥底に引っかかる。

（いや、俺は桜姫を封じる）

心の中の 何か を振り切るように、青年は強く思った。

邪念に囚われてはならない。鬼王を、桜姫を復活させる事は、この世の中を殲滅させてしまう事に他ならないのだ。

「あなたの意に添えるよう、最大限に力を尽くそう」

そう告げると、史孝は、ゆっくりと首を縦に動かした。

南條の姿がなくなっているのに気付いたのは、午前七時を回った頃だった。昨晚の酒盛りもあって、それぞれの起床時間はまちまちだったが、さすがに、寝起きのいい南條君が起きてないのは変だわと、理美と一緒に朝食を準備していた江梨子が口にした。

それを聴いた美咲は、客間まで行って南條を起こしに行った。が、そこには誰もいないし、部屋を使った形跡も全くなかった。

「樋口さんと雅通は、ずっとリビングで寝てたんですか？」

リビングに戻るなり、美咲は、江梨子に叩き起こされた樋口と雅通に訊ねてみた。

「ああ、酔い潰れてそのまま寝ちまった。で、江梨子に起こされて、朝になってたのにやっと気付いたって感じ」

「俺もだ。昨晚、あんだだけ吞ませられりゃ、部屋まで行く前にその

辺でぶっ倒れてるわ」

二人の言葉に偽りはなさそうだ。尤も、わざわざ嘘を吐く理由なんてあるはずもないのだが。

「美咲、ほんとに和海君はいなかったの？」

理美に問われ、美咲は、眉根を寄せながら頷く。

「ほんとにいなかったんだってば。——でも変だよ。南條さんが黙っていなくなっちゃうなんて……」

そう言いながら、美咲はふと、夢から目覚めた後の桜姫の言葉を想い出した。

『どんな事があつたとしても、あの者を信じてくれぬか……？』

もしかしたら、桜姫は何かを知っているか、知らずとも、南條が消えた理由に気付いていたのであろうか。

突如、良からぬ予感が全身を駆け巡った。寒くもないはずなのに、体温が急激に下がり、震えが止まらない。朝霞が藍田に拉致された時と、いや、それ以上に恐怖心を覚えた。

「——美咲……？」

異変に気付いた理美は、心配そうに美咲の顔を覗き込む。

既に食事を始めていた南條を除く男達も、江梨子と朝霞も、一斉にこちらに視線を向けていた。

「——南條さんを信じなきゃ……。信じなきゃ駄目……」

自分でも、何を言っているのか分からない。しかし、そう言い聞かせないと、南條に疑心を抱いてしまいそうで、怖かった。

「とにかく、あんたは休んだ方がいいわ。顔色も凄く悪いわよ？」

美咲も、理美の言葉に素直に従った方が良いと判断した。ゆつくりと頷くと、覚束ない足取りでリビングを出ようとした。

「待つて。私も一緒に行きます」

その時、いつもは大人しい朝霞がすかさず立ち上がった。美咲の元へと近付き、今にも倒れそうな美咲を、肩を包むように抱き込む。

「アサちゃん、お願いね」

意識がふわふわとしている中で、理美の声が聴こえてくる。

「はい」

朝霞は二つ返事で答えると、美咲に、「行きましょう」と、静かに促した。

自室に戻ると、美咲は、そのまま倒れ込むようにベッドに横になった。

朝霞は、美咲の上に布団を被せ、自らは床の上に直に正座した。

「——アサちゃん……、ごめんね……」

横になるなり、美咲は朝霞に謝罪する。

朝霞は、ゆっくりと首を横に振った。表情は、あまり変わっていないように見えるが、美咲を心配している気持ちは伝わってきた。

「気にする事はないわ。困った時はお互い様だもの」

朝霞は一呼吸置いた後、「それよりも」と続けた。

「——南條さん、決して良い状況ではないかも知れない……」

朝霞の言葉に、美咲は、心臓が鷲掴みされるような衝撃を覚えた。

「まさか……、アサちゃん……、何か知ってる、の……？」

仰向けの状態のまま、首だけを朝霞に向けて凝視した。

朝霞は、美咲の視線を逃れるように目を伏せがちにしていたが、やがて、思い切ったように口に出した。

「——父は……、南條さんの力を異常なまでに欲しがっていたから……。南條さんの力は、能力が高いと謳われる金属性の中でも、最も最強……」

南條さんは……、桜姫を封じた能力者の……、再来だから……」
そこまで言うと、朝霞は、自らの唇を強く噛み締めて俯いた。多分、言いたくなかったのだらう。それは、藍田家の秘密を守るため、というよりも、美咲を傷付けたくないが故に。

だが、美咲は、自分でも驚くほどに冷静に受け止めていた。シヨツクじゃないと言えば嘘になる。しかし、昨晚の夢の中で、南條に

そっくりな佐久良之姫の兄は、確かに桜姫となつた彼女を封じている。冷静に考えてみたら、兄が現世に転生していても、決しておかしい話ではない。

「——ごめんなさい……」

朝霞は、俯いたまま謝罪を口にした。心なしか、身体も小さく震えている。繊細な朝霞の事だ。きっと、美咲以上に傷付いているに違いない。

美咲は手を伸ばし、そつと朝霞の頬に触れた。

自分と同じ顔をした、けれども、性格は全く違う二歳上の従姉。ずつと嫌いだったのに、今は、堪らなく愛おしい。

「アサちゃんが謝る事なんてない」

美咲は口元に笑みを湛えた。

「それよりも、アサちゃんの方が辛かったでしょ……？ アサちゃんはずつと、史孝伯父さんに従わざるを得ない状況だったんだから……。」

ちよつと前の私だったら、全てを知つて何も言わなかったアサちゃんを詰っていたかも知れない。けど今は……、毎日、一緒に楽しく過ごすうちに、アサちゃんの本質もちゃんと分かったし、こうしていられるのが嬉しいって、心から思えるようになってたから……」

「みいちゃん……」

朝霞は美咲の愛称を口にとすると、真つ直ぐに美咲を見つめた。表情は相変わらず変化がない。しかし、何となく、笑おうとして口が小さく動いたような、そんな気がした。

「——どうする？」

朝霞は美咲を見据えたまま、訊ねた。

「さつきも言つたけど、現状は決して良くない。最悪の状況だと言っても過言ではないわ。」

父は、みいちゃんが思つてる以上に恐ろしい人よ。あの人は、ヒトの記憶を操作する厄介な力を持つてるから、どんなに戦闘能力が

強い南條さんでも敵わず……、大切なもの——みいちゃんを想う気持ちも消されてしまっている可能性も十分にある……」

朝霞の話に耳を傾けながら、美咲は、ああ、と納得した。

恐らく、桜姫も藍田の力の事は分かっていたのだ。桜姫が見せた、過去の南條の再来の兄もまた、藍田の再来と思われるあの父親によつて、佐久良之姫を想う邪魔な記憶を消されてしまったに違いない。

再び、美咲の全身に戦慄が走った。

桜姫の魂を持つ美咲を亡き者にするためなら、手段など一切選ばない伯父。雅通に後で聴いた話だと、実の娘である朝霞すら手にかけようとしていたというのだから、やはり、狂っているとしか言いようがない。

自分を守ってくれるはずの南條は、今は藍田の手に落ちている事だろう。だとしたら、独りで戦うしかない。今度は、自分が南條を救わないといけない。

「——行かなきゃ……」

美咲は、未だに重みを感じる身体を無理矢理起こした。

「どんな事をしてでも、南條さんを助けなきゃ……。私独りでも絶対行かなきゃ……」

「みいちゃん、何言って……」

朝霞が言いかけた、まさにその時だった。

部屋のドアが、乱暴に開かれた。

「お前、ばっかじゃねえの！」

ドアを開け、そう言い放ってきたのは、雅通だった。

「格好付けんのは勝手だけどよ、お前、あのオッサンの真の恐ろしさを知らねえだろ？ 朝霞が危うくオッサンの手に落ちる寸前だった姿、俺はこの目でしっかり見てたから分かるけどよ」

「そ、そんなの私だって分かってる……！ こっちも、桜姫に過去を見せて貰ってたから！」

「だったら尚更、勝手に無茶しようなんて考えるんじゃないよ」

美咲はグツと言葉を呑み込んだ。悔しいが、雅通の言っている事は尤もだ。

雅通は、美咲と朝霞を交互に見比べてから、先ほどとは打って変わり、「とにかく」と、穏やかな口調で続けた。

「美咲は独りじゃねえんだって事を自覚しろ。お前を守るのは、何も南條さんだけじゃない。俺も、樋口さんも、江梨子さんも、貴雄さんも、理美さんも、もちろん、朝霞だっている。

いざとなれば、こっちの方が断然結束が固いんだ。あのオッサンがどんなきたねえ手を使ってこようと、俺達が全力で美咲をサポートしてやるよ」

美咲は瞠目したまま、雅通に視線を注いだ。顔を合わせれば、事ある毎に取っ組み合い寸前にまでなる雅通だが、だからこそ、今の雅通の言葉は心強いと思った。

（そうだ。雅通だって、心の底では悔しくて仕方ないんだ）

雅通にとって、南條は兄弟子であり、尊敬に値する存在だ。それほどまでに大きな存在の南條が藍田に落ちたなど、本当は考えもしたくないだろう。

そして、冷静さを取り戻すうちに、美咲は傲慢とも言える自分の考えを恥じた。独りで乗り込んだって、結局は、周りの足を引っ張る事にならない。いや、寧ろ、そっちの方が余計な心配をかけてしまふに違いない。

「雅通」

美咲は口の端を上げた。

「ほんとにしっかりサポートしてよ」

「お前に言われるまでもねえよ。俺の方が、お前よりもよっぽど腕力あるんだぜ？」

そう言つと、雅通は美咲に対抗するように、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

第十五章 第二節

藍田本家へは、貴雄と樋口の車とで向かう事となった。

樋口の車には運転手である樋口と江梨子、貴雄の車には、雅通と美咲、そして朝霞が乗り合わせている。持ち主の貴雄は、さすがに仕事は休めないからと、今回は雅通に車のキーを渡し、自らは徒歩と電車で出勤した。

「まさか、同じお父さんの車で、今度は南條さんを奪還しに行くなんて……」

すっかり落ち着いた美咲は、助手席で苦笑した。

「でも、いつの間に南條さんは出て行っただろう？ それぞれの部屋で寝ていた私とアサちゃんとはともかく、雅通も樋口さんもほんとに気付かなかつたの？」

「——だから、完全に潰れてたんだってば……」

「情けない……。あれだけドンチャン騒ぎした揚げ句に潰れちゃうって……」

「おまつ……、酒も呑めねえガキのくせに、分かり切ったような口利いてんじゃねえ」

「ガ、ガキって……。精神年齢幼稚園児並みのあんたに言われる筋合いないっ！」

「このやろ……。言いやがったな！」

「止めて下さい」

美咲と雅通の口喧嘩がヒートアップしそうになった寸前、後部座席の朝霞が、遠慮がちに、しかしきっぱりと、二人の会話に割って入った。

「二人とも、今は暢気に喧嘩している場合じゃないでしょう？ 何より瀧村さん、あなたは運転中なんですから集中して下さい。こんな所で事故になんて遭ったら、元も子もないですよ？」

朝霞の正論に、当然、美咲も雅通も返す言葉など見付かるはずも

ない。心から気まずさを覚え、それぞれ、口を噤んで前に向き直った。

朝霞は、フウ、と大きく息を吐き、二人を交互に見比べる。まるで、監視でもしているかのよう。

（アサちゃん、何気に南條さんと似てるかも……）

そう思った途端、美咲の胸が酷く痛み出した。

時に厳しく、けれども、慈愛に満ち溢れていた南條。辛い時に自分を励まし、抱き締めてくれた存在が、今は遠く感じてしまう。

信じたい。しかし、変わってしまったであろう南條を目の当たりにしたら、心が揺らぎそうで怖い。

（でも、目を背けたりしちゃ駄目なんだ、絶対）

美咲は深呼吸を一つすると、ゆっくりと瞼を閉じる。

桜姫が美咲に告げてきた言葉が、頭の中で何度もリプレイされた。

藍田本家の敷地内に車を停めてから、美咲達はそろそろと降りた。樋口夫妻の車もまた、後にくよくよに停止し、樋口と江梨子がほぼ同時に降りて来る。

「何だか嫌な場所ねえ……」

本家に初めて来た江梨子は、決して寒いはずはないのに、顔を顰めながら自らの身体を抱き締める。

樋口もまた、苦虫を噛み潰したように、不快感を露わにしていた。

「父が言うには、この一帯は、神々の庇護を受けた神聖なる地らしいです」

この家で生まれ育った朝霞は、露骨な態度を取る二人に対して気分を害した様子もなく、淡々と語った。

「ですが、私にとっては、神のご加護を受けているどころか、屍の巣窟 だと思えません。

桜姫の魂を受け継いだ娘達はもちろん、私や珠璃と同じ力を持っていた媒、そして、彼女達を庇い立てた者達も、まさにこの地で、藍田の血を継ぐ者によって消されてしまったのですから……」

朝霞の言う、『庇い立てした者』の中には、きっと、南條の父親も含まれているのであろう。

南條の父親は、藍田本家の間違った遣り方を正そうとした結果、藍田の手に落ち、そのまま亡き者にされてしまった。殺してしまったという事は、つまり、藍田は南條の父親を非常に恐れていた。そういう事にならないだろうか。

（弱い人間ほど脅威的な存在だ……）

不意に美咲は思った。

「とにかく急ごう。まあ、あのオッサンの事だ。俺達が乗り込んで来る事ぐらいは計算尽くかも知れねえけど」

雅通は片頬を引き攣らせながら、うんざりとばかりに溜め息を吐く。藍田とは幾度となく関わってきた雅通だから、あの男の性質は、嫌と言うほど分かってしまっている。

「——やっぱり、戦わんといけないのかねえ……」

意気込み十分な雅通とは対照的に、南條と雅通の師であるはずの樋口が、外見に似合わず、情けない事を口にした。

そんな樋口に、妻の江梨子は、「当たり前でしょ」とピシャリと言いつつ放った。

「たまにはあなたも表舞台に立って役に立ちなさい。それに、相手は妖鬼に取り憑かれてるわけじゃないんだから、幾分かはマシですよ？」

「いや……、そっちの方がかえって厄介……」

「つべこべ言わない！ さ、みんなもサッサと行くわよっ？」

自分よりも遥かに体格のある樋口の腕を、江梨子は、しっかりと掴んで引く張る。

「——凄い人ですね、江梨子さんって……」

ポツリと漏らした朝霞の言葉に、美咲と雅通は、同時に大きく頷いた。

（ある意味、江梨子さんがいるのは心強いかも……）
心底思ったのは、美咲だけじゃなかっただろう。

玄関前まで来ると、朝霞が先に立って戸を開いた。インターホンでも鳴らすのかと思ったのだが、よくよく考えてみたら、本家は朝霞の実家なのだから、何も遠慮する必要はないのだ。

「取り敢えず、父の部屋に行ってみましょう」

それぞれ、靴を脱いで家にながってから、朝霞の後に着いて行く。中には人がいるはずなのに、気配が全くと言っていいほど感じられない。

さすがの江梨子も緊張してきたのか、先ほどのように言葉を発しない。静まりかえった中で、ギシギシと床の軋む音が耳に煩く響き続けた。

と、朝霞の足がピタリと止まった。

その理由は、各々が考えるまでもなかった。

「あら、どこの鼠が入り込んだかと思ったら」

行く手を阻むように立ち塞がり、口の端を上げながら横柄に言い放ったのは、綾乃だった。

ふと、美咲は殆ど無意識に江梨子を顧みる。案の定、江梨子にとつては綾乃は 天敵 と呼んでも過言ではないから、眉を吊り上げ、不快感を露わにしている。

一方、綾乃は江梨子の事は眼中にないらしく、ただ、美咲だけを冷ややかに見据える。

「再びようこそ、桜姫。尤も、私は歓迎する気なんて更々ないけど、史孝様だけは、あなたが訪れるのを心待ちにしていच्छやっただよ
うだから」

「伯父さんが……、私を……？」

言ってる意味が分からない、と思いつながら、美咲は綾乃を睨んだ。そんな美咲を、綾乃は、さも面白そうに眺める。

「とにかく、私に着いていच्छしいな」

それぞれの了承を得る事なく、綾乃は踵を返し、ゆったりとした足取りで先を進む。

「どうします？」

綾乃を気にしつつも、美咲は全員に訊ねた。

「どうするも何も……。取り敢えず、あいつに着いて行った方がいいんじゃないの？」

雅通の答えに、他の三人も同時に頷いた。

「じゃあ、行きましようか」

綾乃と距離が出来てしまったので、美咲達は、少しばかり足を速めた。

しばらくして、藍田が待っているという部屋に着いた。途端に、

先ほどまで忘れていた寒気が全身を襲った。

（私は逃げない。どんな事があっても……）

美咲は深呼吸を繰り返して、綾乃が障子を開けてから、真っ直ぐに前を見据えた。

待っていたのは、藍田と藤崎。もしかしたら、南條も一緒にいるのではと思っていただけに、何となく安堵した。

「これはこれは、新たな面子がまた増えたな」

開口一番、藍田はそう言うなり、新たな面子である樋口と江梨子を一瞥する。しかし、二人に対する興味はさほどなかったらしく、すぐに、美咲と娘の朝霞に視線を移した。

「全く、折角朝霞を解放してやったと言うのに、また乗り込んで来るとは……。よっぽどの物好きか、それとも——自信の力を過信し過ぎていいのか……」

口先では同情めいた事を言っているが、心からの言葉ではないのは、美咲には嫌というほど伝わった。そもそも、この男には、

ヒトとしての心など持ち合わせていない。夢の中の桜姫の台詞をそのまま借りるなら、まさに、生きた屍だ。

「別に、過信しているつもりは毛頭ないです」

藍田に苛立ちを覚えつつ、それでも、努めて冷静を装いながら美咲が口を開いた。

「私達はただ、南條さんを返して欲しいと思ってるだけです。南條さんは、私にとっても、みんなにとっても大切な存在なんです。ですから、どんな事を企んでいようとも、南條さんをあなたの好きになんてさせませんから」

そこまで言うのと、美咲は藍田を見据えた。

伯父の眼力は、同じ兄弟であるはずの父——貴雄とは比べ物にならないほどの鋭さがある。しかし、怖いからといって目を逸らしてしまったら負けだ。美咲はそう思い、背中に流れる冷ややかな汗を感じながら、ジッと睨み続ける。

そのうち、藍田の口角が攣り上がった。

「何が可笑しいんですか？」

あからさまに人を嘲る藍田に、美咲の不快感が増した。

眉を顰める美咲に、藍田は、やはり意に介した様子もなく言い放った。

「いつもながら、お前達の仲間ごっこにはほんとと呆れる。独りでは何も出来ず、ゾロゾロと余計な者達を引き連れて私の元へ現れるのだからな」

藍田から、スッと笑みが消えた。入れ替わりに、射抜くような視線で美咲を凝視した。

「私は同じ事を何度も言うのは好かん。しかし、敢えてもう一度だけ言う。」

美咲、お前の運命は生まれ落ちた時から決まっている。——お前は、そして朝霞も、この世に存在し続けてはいけないのだよ」

静かだが、ピンと空気が張りつめる声音に、美咲だけではなく、朝霞を始めとする他の仲間達も、一斉に息を呑んだ。

と、それまで、藍田の側で黙って座っていた藤崎が、ユラリと立ち上がった。今頃になって気付いたが、藤崎は、まるで人形のように表情が全くなく、ただ、深い漆黒の双眸だけが、不気味なほどにギラリとした光を放っている。

咄嗟に、美咲は我が身の危険を察知した。ゆっくりと後ずさると、

雅通が美咲を自分の背に押し退け、藤崎から守る格好となった。

藤崎の手元から、眩い光彩が放たれた。それは、次第に地へ向かって伸びてゆき、日本刀へと変貌を遂げた。

「これ以上近付くんじゃねえっ！」

両手で刀を構えながらにじり寄る藤崎の脇腹を、雅通は、渾身の力を籠めて蹴り上げる。

しかし、藤崎は痛みを全く感じていないのか、少しばかりよろけただけで、すぐに体勢を整え直し、雅通を、畳の上に叩き落とす勢いで押し退けた。

ドサリと音を立てて、雅通の身体は倒された。

雅通という楯を失った美咲は、再び、刀を手にした藤崎の標的となった。

以前のように、桜姫を出現させようか。美咲は考えた。だが、身の危険を承知のはずなのに、今回は桜姫からの呼びかけが全くない。

（桜姫！ 桜姫聴いてるんでしょっ？ 出て来てよ！）

あれほど疎んじていたはずなのに、今は桜姫に頼り切っている。

自分には、桜姫のような、いや、藤崎達のような能力者ほどの霊力もない。当然、肉弾戦で敵うはずもない。

「逃げなさい！」

美咲に向けて叫んだのは、江梨子だった。気付くと、雅通に代わって江梨子が前に立ちはだかっていた。

「で、でも……」

躊躇う美咲を、江梨子は肩越しに見遣り、ニツコリと笑んだ。

「大丈夫よ。妖鬼じゃどうにもならないけど、人間相手だったら私も十分戦えるの、よっ！」

江梨子は、雅通と同様に、藤崎の脇に蹴りを入れた。しかも、それは相当な威力があったらしく、雅通の時はビクともしなかった藤崎が、「グッ」と小さく呻いた。

信じられない光景に、美咲は呆気にとられた。

朝霞も、表情こそ変わらなかったものの、瞠目したまま、口を小

さく開けて立ち尽くしていたので、驚いていたのは確かだった。

「江梨子はあの通りだから心配ない」

肩を叩かれたので振り返ると、苦笑いする樋口と目が合った。

「俺も付いているし大丈夫だ。無茶はさせない。——瀧村、いつまでも転がってないで二人を連れて行け」

切羽詰まった状況でも、樋口の口調はのんびりとしている。

「言われなくなって行きますよ！」

樋口とは対照的に、雅通は少々、ムキになって返した。藤崎から受けた衝撃がよほどのものだったのか、顔を顰めながら身を起こし、身体を擦っていた。

「ほら！ お前らとつと来い！」

自分の事を棚に上げて、偉そうに振る舞う雅通。

美咲は呆れつつ、しかし、身を挺して自分を守ろうとしてくれたのは事実だから、憎まれ口は一切叩かなかった。

ふと、殆ど無意識に藍田を顧みる。

藍田は無言のままだったが、心なしか、何か言いたげだった。

「——愚かな……」

そんな呟きが、部屋を出る寸前に耳を掠めた。

第十五章 第三節

「ねえ雅通」

藍田の部屋を出てから、美咲は、先を歩く雅通に声をかけた。

「南條さん、どこにいるんだろ？」

「知るかよ。寧ろ、俺がどこにいるか知りてえぐらいだ」

「——だよ」

「おまつ……。分かってんなら最初から訊くんじゃねえ」

「ちよつと！ あんたはどうしてそう一言多いわけ？ こっちは、ちよつとでも話してた方が気が紛れるんじゃないかって思っただけなのに」

「俺に余計な事を言わせるのはお前だろうが？ お前こそもうちよつと黙つとけ！」

「またあなた達は……」

緊張感の欠片もなくなった美咲と雅通に、車に乗っていた時と同じく、朝霞からの、静かだが鋭い突っ込みが入った。

「今の状況を忘れられたら困ります。父と藤崎さんは樋口さんと江梨子さんにお任せしたのですから、私達は私達でやるべき事をしませんと。——何だか、南條さんの気苦労が分かったような気がしま……」

ここまで言いかけて、朝霞はピタリと言葉を切った。

それが合図となったように、美咲と雅通も足を止めた。

三人に向かつて、ゆつたりとした足取りで、長身の男が近付いて来る。癖の殆どない漆黒の髪と、鶯色の双眸を持つ美青年。それはまさに、三人が、殊に美咲が求めていた者の姿そのものだった。

「——南條、さん……」

青年——南條が立ち止まってから、美咲は、愛おしいその名を口にした。しかし、南條に駆け寄る事は出来なかった。

南條は、名を呼ばれても、訝しげに眉を顰めながら、目の前にい

る三人をそれぞれ流し見るのみだった。

「あら、史孝様の所にまだいるかと思っただら……」

南條より少し遅れて、綾乃が三人の前に姿を現した。

「怖気付いて逃げて来たのかしら？ 気持ちは分からなくはないけど、折角歓迎して下さった方に対して、随分と失礼じゃない？」

綾乃の言い回しは、一々美咲の勘に障る。苛立ちを露わにしつつ、吐き付ける勢いで言い放った。

「あれが歓迎？ ふざけんのも大概にして欲しいわ。こっちは藤崎に狙われかけたのよ。あの男も、あれでも一応は金属性の能力者だから、かなりの痛手を負わせられるわけでしょ？ 私だって命は惜しい。あんたらの意のままにされるなんて、真つ平ごめんだ！」

張りつめた空気の中で、美咲の声が凜と響き渡る。

美咲と綾乃は、暫しの間、互いを睨み合っていた。二人に限らず、他の三人も一言も発する事がなかった。

と、綾乃が突然、クスクスと忍び笑いを漏らした。

美咲は眉を顰め、不快感を露わにした。

「何笑ってんの？」

藍田に向けたのと全く同じ問いを、綾乃にもぶつけた

案の定、と言うべきか、綾乃は口元を歪めたまま、しかし、双眸は鋭い光を帯びさせながら、ゆったりと口にした。

「だって、これが笑わずにいられる？ 命が惜しい？ あなた、自分の立場を分かっているの？ 史孝様にも散々言われてきたでしょう？ あなたが存在し続けていたら、この世は破滅を迎えてしまう。」

朝霞さんもそう。所詮は桜姫の 道具 に過ぎなくとも、危険分子である事に変わりはないわ。

現世はともかく、あなた達は過去世では双子だった。運命を共にする事は、遥か太古の昔から定められていた事なのよ。」

綾乃が言い終えるか終えないかのうちに、美咲は、綾乃の前に歩み寄った。そして、力を溜め、美咲の右手で彼女の頬を張った。パン、と、小気味良い音が鳴り響いた。

平手打ちされた綾乃は、一瞬、茫然としていたが、すぐに状況を察し、叩かれた左頬を自らの左手で押さえ、キツと美咲を睨んだ。伯父ほどではないが、非常に凄味があった。しかし、美咲は綾乃に怯まなかった。

「あんたこそ、ふざけた事をほざいてんじゃないわよ！ アサちゃんを……、何だと思ってるの？ 桜姫の 道具 だなんて、とんでもない言い草だわ！

確かにアサちゃんは、桜姫の媒——双子の姉姫の魂を受け継いでいる。けどね、アサちゃんはアサちゃんであって、過去世の姉姫とは違う一人の人間なんだ。

それなのに何なの？ あんた達こそ人道から外れてる事をしてるって、何故気付かないの？」

「黙れ！」

美咲に叩かれた事がよほど気に入らなかったのか、綾乃は、これまでの化けの皮を完全に剥がし、荒々しい口調で続けた。

「私達こそ絶対的な 正義 だ！ 亡者の王——鬼王を封じ、桜姫を斃す事こそ、我ら能力者に課せられてきた宿命だ！ 鬼王と桜姫が存命する限り、この世に平穏が訪れるはずもない！」

ここまで言うと、綾乃は、「シロガネ様！」と、南條に向けて呼んだ。

すると、自分の真名を呼ばれても無反応だった南條が、綾乃をチラリと一瞥した。

「今こそ、あなたの力が必要です！ この生意気な小娘を、あなたの持つ霊力で、闇に葬り去ってしまいなさい！」

南條は、相変わらず無言のままだったが、しかし、綾乃の言わんとした事を理解したらしく、美咲に視線を注ぐ。その右手からは、強烈な光が放たれ、少しずつ、日本刀へと姿を変えてゆく。銀色に光るそれは、美しく、そして、禍々しささえ感じさせる。

美咲は、藤崎の時以上に警戒した。金属性能力者は、全ての能力者の中でも最強、更に南條は、金属性の中でも遥かに凌駕している。

南條は、彼の原型とも呼ぶべき桜姫の兄が転生した姿なのだから、本気を出せば、桜姫諸共封じられてしまうのは、火を見るよりも明らかだ。

逃げないと思う。だが、意識とは裏腹に、身体が硬直してしまつたように全く自由が利かない。しかも、この非常時にあつても、桜姫の意識が全く出てこない。以前の桜姫であれば、こちらが頼まなくても、いや、拒絶しても無理矢理出現していたのに。

（この危機を、自分で乗り越えろ、って言いたいわけ？）

桜姫に問うも、やはり、返答はない。返事が戻らない——つまり、肯定を意味するのか。

「美咲馬鹿！ ボケツとすんな！ 逃げろっ！」

南條の様子から、説得は無理だと悟つたのか、雅通が、刀を握り締めた南條を押さえようとする。しかし、南條はそれを撥ね退け、撥ね退けられた雅通が、這い蹲らん勢いで、南條の足下に、自らの両腕を絡めた。

微動だにしなかつた南條の表情が、わずかに痙攣した。チツと小さく舌打ちすると、雅通を足蹴にし、そのまま、縁側へと落とした。残された美咲と朝霞は、どちらからともなく、互いの腕を絡め合つた。

朝霞も美咲と同様、完全に足が竦んでしまつていようで、身動きする様子が全くない。

「南條さん……、こんなの駄目です……」

訴えるも、やはり、今の南條には美咲の声が届いていない。

これで、何もかも終わってしまうのか。美咲は半ば、諦めかけた。と、その時だった。

美咲の前に立つなり、刀を持つ反対側の左手で、南條は美咲の頬に触れてきた。表情は全くないが、どこか優しさに溢れた触れ方に、警戒心が薄らいでゆくのを感じた。

美咲も、南條に応えるように、右手で南條の手を包み込む。もしかしたら、このまま正氣に戻ってくれるかも知れない。そんな淡い

期待を寄せていたのだが――

「シロガネ様！」

空気を引き裂かんばかりの綾乃の呼び声に、全てが打ち砕かれた。南條は、我に返ったように美咲の手を振り払い、刀を再び構え直した。

「闇に還れ。――亡者の姫よ！」

ようやく聴けた南條の声は、美咲に残酷な現実を突き付けた。

心の底から傷付いた美咲の事など知る由もない南條は、ただ、綾乃に言われるがまま、美咲を刀で貫く。

「い……、いやあああ……っ！」

内臓が抉られ、焼かれるような感覚に、美咲は堪らず悲鳴を上げた。

南條は、断末魔の叫びにも近い美咲の声を耳にしても、表情一つ変えない。桜姫に支配された時は、苦痛に顔を歪ませていたのに、やはり、目の前にいる南條は、自分の知っている南條ではないと思わざるを得なかった。

「南條さん、お願いです。こんな事をしたら、本当にみいちゃんが死んでしまう……」

朝霞の声は、美咲の悲鳴に掻き消されるほどか細いものだった。しかし、それでも朝霞は、「止めて下さい」と、何度も懇願する。すると、その様子を眺めていた綾乃が近付いて来た。

「あなた邪魔よ」

綾乃は、朝霞の長い黒髪を鷲掴みにし、無理矢理、美咲から引き離した。

「あんた達を見てるとね、本気で反吐が出るほど腹立たしいのよ！ぬくぬくとした環境で育ってきて、苦労なんてこれっぽちも知らない！ちよつとぐらい苦しみを味わうがいいのよっ！」

朦朧とする意識の中で、苛立つ綾乃の声を耳にした。苦痛に耐えながら、綾乃を顧みると、その表情は、どこか哀しげに歪んでいるように映った。

（可哀想な人なんだ……）

美咲はふと思った。人の幸福を妬み、不幸のみを己の生きる糧とする淋しい存在。

綾乃が、一体どんな人生を歩んできたかは知らないが、少なくとも、美咲達を妬む台詞を吐き出した事で、あまり幸福に恵まれていなかった事だけは理解した。

その時、刃を貫く南條に力が入った。

傷付けられるのは、器である美咲よりも、中にいるもう一人の存在——桜姫。表面上は、血液一つ零れ落ちていなかったが、苦痛だけは互いに共有している。だが、もしかしたら、美咲以上に桜姫の方が苦しみに耐え続けているに違いない。

「……なん……じょ……さ……」

内臓を抉られながらも、美咲は、途切れ途切れに声を発した。

「……わ……たしっ……しん……じてる……な……んじょ……さんが……もど……って……くる……こと……っ……」

ゆっくりと瞼を閉じると、南條に抱き締められ、口付けを交わした事が走馬灯のように駆け巡る。

『お前の幸せのためなら、どんな事でもしてやる』

南條への想いが膨らみ始めていた頃に囁かれた言葉が、どれほど嬉しく、美咲の励みになった事だろう。

変わり果てた南條を目の当たりにした瞬間、美咲の全てが暗雲に包まれた。しかし、桜姫の言う通り、南條が自分達の元へ戻り、共に戦ってくれる事を信じたかったのも本心だ。

「……たしは……まけな……から……なんじょ……さ……んも……」
伝えたい事を全て言い切る間もなく、美咲は、徐々に意識を手放していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7364q/>

夢現に舞う

2011年11月27日20時57分発行